

Degicross シリーズ

SpicyLibra®

2024 for InDesign on Windows

操作マニュアル（再訂第 19 版）



更 新 履 歴

版 歴	発 行 年 月 日	改 定 内 容
初版	2004 年 2 月 1 日	InDesign2.0J 対応
第 2 版	2004 年 9 月 1 日	InDesign2.1J 版対応
改訂第 1 版	2004 年 12 月 1 日	InDesignCS(3.0J/3.01J) 対応 入力ファイル形式の拡張 出力ファイル形式の拡張
第 2 版	2005 年 3 月 9 日	QR コードの 2 値画像対応
第 3 版	2005 年 9 月 5 日	フレーム制御対応
第 4 版	2005 年 12 月 10 日	機能拡張（以下、順不同） パラメータ設定ダイアログ JAN8/13,Code39,NW7 バーコード グラフィックラインへの適用 パステキスト挿入・文字差し替え 貼込み済み画像・テキストフレーム制御 テキストフレームアンダーフロー対応 表項目への文字列挿入・テキストファイル挿入 段落スタイル適用、文字スタイル適用 人名処理のルビ対応 マスター適用、開始ノンブル指定 見開き処理、ページ分割、ブック作成 串刺し面付け、串刺し番号発生 JPEG ファイル出力
第 5 版	2006 年 2 月 25 日	機能拡張 CODE128(A,B,C, コンビニエンスストア標準料金収納対応 EAN128C)
第 6 版	2006 年 7 月 25 日	InDesignCS2(4.0J) 対応、機能拡張 オブジェクトスタイル対応 画像の「フレームに均等」フィット対応 ドロップシャドウのプロパティ対応の拡張 未データ時のテキストフレーム削除 Spicy タグによるデータ入力（文字列挿入、テキスト ファイル流し込み、表データ挿入）
第 7 版	2008 年 5 月 1 日	InDesignCS3(5.0J) 対応 GoLive 書き出しを XHTML 書き出しに変更 Excel2007,Access2007 フォーマット対応
第 8 版	2009 年 2 月 1 日	InDesignCS4(6.0J) 対応 フレームラベル設定プラグイン （・ラベル名表示色、表示位置の属性設定を追加 ・スクリプトラベルより、ラベル名を取得可能） カスタム人名字取り、異体字（人名）対応 改頁処理の拡張と改頁での複数マスター切り替え対応 表機能拡張（表スタイル、セルスタイル設定） SpicyTag 拡張（段落・文字のグループスタイル対応） あふれ処理拡張（次ページフレームへの追い出し機能）

		基本処理データの UNICODE エンコード対応 画像（ファイル自動拡張子補完機能、PDF ファイル連続頁貼り込み機能、 フレームサイズ拡張・縮小機能） 基本フォルダー作成機能（作成、移行） SVG ファイル書出しを SWF ファイル書出しに変更 ライセンス方式をソフトからハードへ変更
第 9 版	2009 年 5 月 10 日	機能変更 フレーム名称付で枝番付加後に番号を自動増加。
第 10 版	2010 年 1 月 15 日	InDesignCS4.1 Ver6.0.4 対応 表に積み木表（ダルマ落とし）と連続表・マトリックス表機能追加 処理データの加工を行う前処理のユーティリティ機能追加 SpicyTag の処理ロジックの全面リニューアル及びタグの追加と 実態参照テーブルのサポート ホットフォルダー機能強化 文字挿入・表などの項目結合機能適用範囲の拡大 郵便枠指定での個別郵便枠フレーム指定をサポート 人名字取での姓名別項目入力および カスタム人名字取でのグループビのサポート 串刺し（面付け・番号）機能での 2 頁ごとでの数値増加機能追加 あふれ処理最大縮小率を 30% まで拡張 頁分割の最小を 2 頁、最大を 1000 ページに拡大 段落追い込み、画像フレーム代替テキスト挿入 画像配置に「フレームに均等配置し、センターに移動」モードを追加 処理データに mdf(SQL Server) を追加 簡単な SQL 文のサポート（複数テーブルからのレコード選択） 基本フォルダー作成の作成フォルダー追加
再訂第 1 版	2010 年 7 月 10 日	InDesignCS5 Ve7 対応 マニュアル全面改訂 PDF 貼り込み時のレイヤー選択サポート
再訂第 2 版	2010 年 11 月 1 日	イメージバリアブル機能追加 インタラクティブ PDF 出力追加 Dreamweaver/DigitalEdition 書き出し機能追加 InDesign ドキュメントへの WaterMark 挿入機能追加 JPEG 等ファイル書き出し詳細オプション設定 PDF バリアブル機能追加 PDF ファイルへの WaterMark 挿入機能追加
再訂第 3 版	2011 年 2 月 1 日	バリアブルグラフ機能追加 TEX データ EPS 変換貼り込み機能追加 アンカータグ追加 DXF 変換を Visio から Illustrator に変更
再訂第 4 版	2011 年 4 月 11 日	カスタム人名字取で、姓名の「よみ」を別項目で入力する場合、親文字に 対応するように。よみの間を半角スラッシュ「/」で区切り、モノ ルビに対応を行いました（従来、モノルビの場合には、親文字と 同じ項目で入力する必要がありました）。
再訂第 5 版	2011 年 4 月 16 日	SpicyTag に人名字取「<jinmei>」を追加しました。カスタム人名字取の機 能に準拠し。カスタム人名字取用のテーブルを使用してテキスト 中にて字取を行います。ただし、カスタム人名字取で使用可能な

		インデントは、使用不可
再訂第 6 版	2011 年 5 月 8 日	SpicyTag に文字回転 <chrotate>、文字揃え <chalign> のタグと段落タグ <p> に揃え属性 (align) を追加
再訂第 7 版	2011 年 5 月 23 日	InDesignCS5.5 Ver7.5 対応 EPUB/HTML 出力変更
再訂第 8 版	2011 年 10 月 15 日	標準人名字取でのモノルビ対応 標準・カスタム人名字取にて、外字フォント自動切替え機能追加 SpicyTag 中のカスタム人名字取での外字フォント自動切替え対応 カスタム人名字取の異体字記号の拡張 UNICODE 変換のサロゲートペア対応 段落追い込みの機能強化（あふれ処理ではない通常モードでの実行） NW7 バーコード（フォント、画像）にて、スタート・ストップキャラクターの自動挿入モード追加 ユーティリティに外字処理を追加 ホットフォルダー機能における出力ファイルの保存フォルダーの変更指定を追加
再訂第 9 版	2011 年 12 月 1 日	ユーティリティの外字処理機能に、UNICODE 私用領域文字コードの変換テーブルによるコード変換機能追加 NW7 バーコードでのチェックデジット計算方法に、従来のモジュール 16 に加え、モジュール 11、モジュール 10、7 チェック、9 チェックを追加 2 次元バーコード MicroQR コード追加 ITF バーコード（フォント対応）追加。 ISBN 書籍・定期刊行物バーコード（画像対応）追加 GS1-128 バーコード（画像対応）追加 GS1 DataBar バーコード（画像対応：Standard、Truncated、Stacked、Stacked Omnidirectional、Limited、Expanded、Expanded Stacked 及び CompositeCode 付）追加
再訂第 10 版	2012 年 11 月 15 日	InDesignCS6_J 対応 ページ毎の PDF 書出し機能追加
再訂第 11 版	2013 年 1 月 25 日	連続表・積み木表のデータ中の改行に関して説明を追加。
再訂第 12 版	2018 年 12 月 15 日	InDesignCC2019 対応 64 ビット OS 対応に移行 SQLServer データファイル .mdf のサポート取止め QR・MicroQR、GS1 データバー処理モジュール変更
再訂第 13 版	2019 年 10 月 25 日	テキストフレーム・連続表・積み木表文字列挿入のオプションにて、E メール挿入モードを追加。 積み木表にて文字差し替え機能を追加。 数字フラグにて、別項目データ挿入機能を追加。
再訂第 14 版	2020 年 1 月 8 日	処理データ項目を最大 5 項目まで複製する機能を追加
再訂第 15 班	2020 年 1 月 29 日	ホットフォルダー機能プレビュー出力に JPEG 出力追加
再訂第 16 班	2020 年 3 月 12 日	ホットフォルダー機能にレイヤー非表示機能追加
再訂第 17 班	2020 年 4 月 5 日	InDesign 2020 対応、SWF 書き出し、ならびにムービー・サウンドファイル挿入機能廃止（InDesign2020 より、Flash Player 開発中止による Adobe 社のサポート中止のため）

再訂第 18 班 2022 年 5 月 23 日

InDesign 2022 対応。

ラベル名設定プラグインの EVE(Adobe Express View Engine) 対応。

テキスト単純挿入時にデータ先頭文字削除機能を追加。

再訂第 19 班 2025 年 11 月 30 日

InDesign 2024 対応。

マニュアルとチュートリアル、サポートなど

InDesignCS2 対応 SpicyLibrCS Ver2.0 から、チュートリアルとサンプルデータを付属いたしましたので、機能説明に陥りがちな本マニュアルを、実際に作成するという観点からの補助としてお使いいただければ幸いです。

また、SpicyLibra の基本的な考え方であるフレームセットを介した処理データとインデザインフレームとの関係につきまして、「[SpicyLibra の秘密](#)」という章を設けましたので、是非、ご一読していただきますよう、お願い申し上げます。

サポートに関しましては、弊社の人的要因から、操作方法や具体的なお仕事への取り組み方などは、弊社ホームページでのユーザー様主体の掲示板による、インターネット上でのサポートとなります。

なお、不具合な部分を修正したアップデートに関する情報なども逐一ホームページ上にて発表させていただきますので、弊社ホームページを適宜チェックしてくださるようお願いいたします。

修正版などは、勝手ながら、個別に送付するということはいたしませんので、ホームページのトップページ並びにダウンロードページ等より、ユーザー様が個別にダウンロードしていただきますよう、お願いいたします。

弊社ホームページ：<https://www.spicy-inc.jp>

ハードウェアキーの保証について

ハードウェアキー等の無償保証期間は、ご購入後 30 日となっております。無償保証期間過後において、ハードウェアキーを、お使いのコンピューターが認識しなくなったり、未フォーマット状態になったりといったハードウェアキーのシステム的あるいは物理的破損が生じた場合には、有償での交換とさせていただきますので、ご注意ください。

また、[本プログラムを使用される前に、必ず、「使用許諾書」に目を通してください。](#)

バーコードに関しまして

カスタマバーコード、Code39、NW7、ITF の 4 種類のバーコードに関しては、フォントにて描画させることができます（Code39、NW7 に関しては、画像処理を行い画像として貼り込むことも可能）。

すでに、これらのフォントをご使用の場合、ご使用フォントがお使いいただけるかは、確認した上でご使用ください。

バーコードフォントが用意されていない場合、SpicyLibra では、無償再配布を許可しております、Pbfont.ttf、Code39.ttf、NW7.ttf、ITF.otf フォントを添付していますので、解凍の上、コンピューターにインストールのうえ、ご利用ください。

なお、これらの添付のフォントをご使用にあたりましては、添付の「お読みください」を必ずご覧の上、フォント提供者の使用条件を確認してください（C:Windows\Fonts フォルダーにインストールします。ご不明の場合には、コンピューター付属の説明書をご覧ください）。

また、これらの無償配布を許可されているバーコードフォントに関しての、ご質問等は受けかねます。

オンマニュアル内の説明画像に関しまして

SpicyLibra2024 にあっては、従来バージョンと機能がほぼ同一であり、本文中の説明に使用している画面画像などは、SpicyLibra にて変更のあった一部を除き、従来バージョンの画像を流用いたしております。あらかじめ、ご承知おきください。

※ SpicyLibra にて使用しておりましたバーコードライブラリーを SpicyLibraCC2019 にて変更を行いました。影響があるのは、[QR コード、マイクロ QR コード及び GS1 DataBar コード](#)です。これらの機能をご利用中の場合には、設定の見直しと成果物のチェックを願い致します。特に、QR コードにおきましては、作成バーコード画像の四方のスペースがありませんので、画像を配置するフレームサイズの調整をお願いいたします。

※本プログラムで処理した結果のバーコードが、すべてのバーコードリーダーにて読み取れることを保証するものではありませんので、予めご承知おきください。バーコードリーダーとの相性などのご確認は、勝手ながら、お客様のご負担にてお願いいたします。弊社での確認はいたしかねます。

SpicyLibra 2024 Ver12

はじめに

バリアブルプリント・オンデマンドプリント向けアプリケーションとして開発、販売をいたしてまいりました **SpicyLibra** も、バリアブルプリントという枠組みを超えて、定型レイアウト出版物の InDesign 自動化処理プログラムという幅広い分野に適合させてまいりました。この度、InDesign 名称変更対応のため SpicyLibra と名称を変更、SpicyLibraCC2019 同様、64 ビット専用プログラムとしてご提供いたしております。互換性を維持するため、ほぼ同一機能をご提供させていただきましたが、一部、Indesign 側の機能変更等のため、若干の機能変更・廃止があります。

汎用的入力フォーマットであるカンマ区切り (CSV)、タブ区切り、EXCEL シート (拡張子 xls, xlsx, xlsm, xslb)、XML、Access (拡張子 MDB, ACCDB) といった入力 (処理) ファイル形式の豊富さ、InDesign が扱える画像形式に加え CAD の標準的な交換フォーマットである DXF ファイル形式などの取り扱いといった画像フォーマットの豊富さ、ならびに、InDesign ドキュメントは当然のこととして、PDF・EPS・JPEG・HTML・XM・EPUBL といった多くの出力ファイル形式への対応は、クロスメディア時代には、なくてはならない機能といえます。

一たび、その内部処理を見れば、「文字列挿入」、「テキストファイル挿入」、「文字差し替え処理」は勿論のこと「あふれ処理」、「アンダーフロー処理」、「画像フィット処理」、「フレーム制御処理」、「番号自動生成」など数多くの場面にあわせた機能を使用することが可能となっています。

また、バーコードも JAN8/13、Code39、NW7、CODE128(A/B/C)、ITF、郵便カスタマーバーコード、QR・MicroQR コード、ISBN 書籍・定期刊行物、さらには、物流に関する新たな標準バーコードといえる GS1-128、GS1 DataBar といった必須のバーコード作成機能を有しています。

さらに、より高度な定型レイアウト自動処理ならびにレイアウト表現を可能とすべく「段落スタイル」、「文字スタイル」の適用機能、PDF・画像ファイルの簡易面付け、ホットフォルダーでの自動実行といった従来機能に加え、串刺し面付け、ノンブル設定、見開き設定、ページ分割、ブック作成などの諸機能をサポートしています。

最後に、これらの多くは、その機能の詳細な処理設定をパラメータで指定しますが、パラメータ設定ダイアログを用意いたしましたので、どなたにでも簡単にパラメータの設定が可能となっています。

SpicyLibra も年々機能追加がされておりますが、インタラクティブ PDF 書き出し、電子書籍対応としての EPUB、HTML ファイル書き出しをはじめとするクロスメディア対応の強化がなされております。

近年、需要が増えてまいりましたイメージバリアブルに関しても、Photoshop/Illustrator の機能を活用することで、インデザインドキュメントにて実現することも可能となりました。また、Illustrator を利用し、棒グラフなど Illustrator の提供する 9 種類のグラフのバリアブルでの使用を可能といたしました。

さらに、数式・化学構造式などの処理に定評のある TEX 環境を取り込み、TEX データを EPS 画像に変換しながら貼り込むことを可能としました。本プログラムにて貼り込まれた TEX → EPS 画像は、ソースデータの TEX データを関連付けてドキュメント内に挿入しており、添付の専用 TEX エディタを使用して、TEX ソースデータにアクセスし修正したものを、再度貼り込むことができます。

さて、電子書籍普及の流れは大きくなるばかりですが、それに伴い DRM (Digital Right Management) の重要性も増しています。すなわち、電子書籍にのセキュリティが必須ということになります。**SpicyLibra** では、既存の PDF ファイルに対してバリアブルに (個別に) 権利標識としての透かし (WaterMark) の挿入やパスワードの設定が行えることを可能とする、簡易 DRM 付与の機能もユーティリティ機能として搭載いたしました。

ひとたび **SpicyLibra** をご利用いただいたお客様からは、容易に定型ものの自動化を InDesign で行え、アイデア次第では種々のドキュメント処理に対応できると喜びの声を頂戴しております。

どなたにでも、容易に、InDesign を自動化して使用できるようにしたいという、私たちの思いを、ぜひ実感してください。なお、本マニュアルは InDesign の基本的な操作を習得している人を対象にしております。

InDesign 自体の操作や設定については、**SpicyLibra** が関わる部分以外は述べておりませんので、詳細は InDesign のマニュアル及び解説書を参考にしてください。同様に、QR コード、DXF ファイル、ACCESS、EXCEL などに関しましても、詳細は、それぞれのベンダーが発行されているマニュアルやホームページなどをご参照ください。また、その他の各種データの作成や取り扱いに関しましても、**SpicyLibra** が関わる部分以外は述べておりませんので、それぞれの作成ソフトのマニュアルや解説書を参照してください。

なお、本マニュアル作成につきましては十分精査しておりますが、製品改良のための仕様変更あるいは入力ミス等により、実際のプログラムの動きと本マニュアルの説明とで異なる場合が生じた時には、実際のプログラムの動作をもって製品の機能とさせていただきます。

目 次

第1章 インストール / アンインストール 及び環境設定と COM エラー	12	5) 串刺し面付け (全ドキュメント連続)	39
第2章 取り扱えるファイル形式・ データ種及び注意事項	14	6) 串刺し面付け (個別ドキュメント適用)	39
第3章 作業の流れ	16	4. 「処理データ項目 - InDesign フレーム対応設定」作業	41
第4章 テンプレートの作成	17	① 番号	41
第5章 フレームラベル名の設定	19	② データ例	41
第6章 「SpicyLibra」画面での作業	22	③ データ種類と処理区分	41
1. テーブル編集	22	1) 不使用・改頁 (改頁マスター適用)	41
1) UNICODE 変換テーブル	22	2) 文字列	42
2) 私用領域コード変換テーブル	23	(a) 単純挿入	42
3) 住所縦組み文字テーブル	24	(ブロック文字スタイル適用)	
4) 個別郵便番号	24	(b) 人名 5 字取り	43
5) 属性変更テーブル	25	(c) 人名 7 字取り	43
6) 段落スタイルテーブル	27	(d) 人名 5 字取り 1	43
7) 面付け基本データ	29	(e) 人名 7 字取り 2	43
8) 実体参照文字テーブル	30	(f) 数字桁取り	43
9) カスタム人名字取りテーブル	30	(g) 数字フラグ	43
10) TEX 環境設定	33	(h) 柱 (先頭)	44
2. 基本パス設定	34	(i) 柱 (末尾)	44
1) InDesign テンプレート	34	(j) 柱 (先頭 - 末尾)	44
2) 基本処理ファイル (テーブル名・ブロック名)	35	(k) 柱 (全件結合)	44
3) UNICODE 変換テーブル	35	(l) 住所漢数字変換	44
4) 住所縦組文字変換テーブル	35	(m) 漢数字変換	44
5) 属性変更テーブル	35	(n) 漢数字桁取り変換	44
6) 段落スタイルテーブル	35	(o) 〒番号枠	44
7) ライブラリーファイル	35	(p) 〒番号枠 1	44
8) カスタム字取り設定ファイルパス	35	(q) Code39 バーコード (フォント)	44
9) InDesign ドキュメント出力	35	(r) NW7 バーコード (フォント)	45
10) 流込みテキストファイル	35	(s) カスタム人名字取り	45
11) 貼込み画像ファイル	35	(t) ITF バーコード (フォント)	46
■ フォルダー操作	36	3) 文字差込	47
<< mdf データベースファイルの複数テーブル への問い合わせとデータ取得 >>	38	4) テキストファイル	47
3. テーブル作成	39	5) 画像ファイル	47
1) 1 ページ連続 (毎頁同一 フレーム配置)	39	(a) 比例縮小	48
2) 2 ページ連続 (両頁で 異フレーム配置)	39	(b) センター	48
3) 2 ページ連続 (1 レコードを 2 頁に配置)	39	(c) フレームにフィット	48
4) 簡易 PDF 面付け	39	(d) 画像にフィット	48
		(e) 比例縮小後センター	48
		(f) フレームに均等	48
		(g) QR イメージ	48
		(h) 配置済み画像フレーム表示制御	48
		(i) JAN バーコード	49
		(ISBN 書籍・定期刊行物バーコードを含む)	
		(j) Code39 バーコード	50

(k) NW7 バーコード	50	(d) 付加文字	87
(l) CODE128 バーコード	50	(e) 背標	87
(m) ムービー・サウンド	55	(f) 面付けデータ保存	87
(n) TEX	55	(g) 既存面付けデータ読込	87
(o) GS1 バーコード	56	② PDF ファイル・EPS 等画像ファイル	
6) 文字差込ファイル	60	面付け時のメイン画面設定	88
7) 日付発生	60	(a) 基本パス設定	88
8) 番号発生	60	1) InDesign テンプレート	88
9) 串刺し番号	60	2) 基本処理ファイル	88
10) 表	61	3) InDesign ドキュメント出力	88
④ フレーム名称指定	63	4) 貼込み画像ファイル	88
5. 郵便カスタマーバーコード作成	64	(b) パラメータ	89
6. 設定保存	64	(c) ファイル名	89
7. 設定読込	64	(d) 背丁	89
8. 設定クリア	64	(e) 折丁番号	89
9. 出力用各種処理の設定	65	(f) 背標	89
① 出力指定	65	(g) 備考 1・2	89
② 出力オプションの設定	65	(h) 頁 1 ～	89
(a) プリンタ・PDF	66	③ テンプレート作成時の注意	91
■ インタラクティブ PDF	67	④ パラメータ入力画面	94
(b) JPEG 書き出し	69	第 8 章 串刺し面付け	95
(c) EPS 書き出し	70	① テンプレートの作成 (固定要素)	95
(d) HTML 書き出し	72	② テンプレートの作成 (可変要素)	96
(e) EPUB 書き出し	75	③ 合成	96
(e) 一括処理	80	④ 基本パスの設定	97
(g) WaterMark 挿入	81	⑤ マッピングの設定	97
10. あふれ処理	83	⑥ 出力の指示	98
① 縮小ステップ	83	⑦ 串刺しパラメータ設定	98
② 最大縮小率	83	<< 2 頁毎でのページ数増加と	
11. ページ分割	83	表裏別マスターの設定 >>	99
12. マスター適用	83	第 9 章 パラメータ設定	100
13. 見開き綴じ方向	84	① 単純挿入 (文字列)	100
<< ドキュメント先頭の		1) 先頭挿入文字列	101
見開きページの設定 >>	84	2) 末尾挿入文字列	101
14. 開始頁ノンブル	84	3) 項目内改行	101
15. 処理レコード番号・件数 / 頁	84	4) 特殊改行処理	101
① 処理レコード番号	84	(前置連結項目番号・後置連結項目番号)	
② 処理件数 / 頁	84	5) 属性変更指定	103
③ 処理レコード総数	84	6) Spicy タグ	104
16. 出力ファイル名	85	(テキストフレーム、表セル、パステキスト)	
17. PDF 貼込:		7) 未データ時フレーム削除	124
境界線ボックスの場合のレイヤー選択	85	8) 改頁処理	124
18. 処理ファイル選択	85	9) 追出だし処理	124
19. 処理実行	85	10) 空白行削除	124
20. 処理中止	85	11) あふれ処理 (段落追い込み)	124
21. 進行状況・処理結果	85	12) 数字変換方法	125
① 進行状況	85	● パステキストの場合	126
② 処理結果	85	1) 挿入文字列がないときに	
第 7 章 PDF・画像ファイル面付け	86	オブジェクトを削除する	126
① 面付け基本データ作成	86	2) 画像のフィット方法	126
(a) 面付けページ数の選択	86	3) 画像の取り込み方法	126
(b) 背丁	86	4) 背景を透明にする	127
(c) 折丁番号の数字書体	86		

5) PDF ファイルの貼り込み頁 (開始頁) …	127	2) 敬称挿入……………	215
6) PDF ファイルのステップページ増加数…	127	3) 検索文字列挿入……………	216
7) データファイルに拡張子が 設定されていない場合に付加する拡張子 …	127	4) 正規表現文字列挿入・抽出……………	217
8) 文字列の違いによる改頁処理を行う場合 のマスター名記述項目番号……………	127	5) 単純文字列挿入置換……………	219
9) 項目結合……………	127	6) 項目処理……………	220
10) 文字列を SpicyTag として使用 ……	127	7) 行処理……………	222
②人名字取り……………	128	8) 並び替え……………	223
③数字桁取り (文字列) ……	129	9) 通常ファイル処理……………	225
④数字フラグ (文字列) ……	130	10) PDF ファイル処理 ……	228
⑤柱 (文字列) ……	131	11) ファイル形式変換 ……	230
⑥住所漢数字変換 (文字列) ……	131	12) ファイル名処理 ……	231
⑦漢数字桁取り (文字列) ……	131	13) PDF ウォーターマーク ……	234
⑧〒番号枠, 〒番号枠 1 (文字列) ……	132	14) PDF 画像変換 ……	237
⑨ Code39 (フォント利用) ……	133	15) 外字処理 ……	242
⑩ NW7 (フォント利用) ……	135	第 12 章 ツール……………	248
⑪カスタム人名字取り……………	138	1. 個別郵便番号テーブル作成……………	248
⑫ ITF バーコード (フォント) ……	141	① 非公開個別郵便番号 ファイルの設定……………	248
⑬カスタマーバーコード……………	143	② SpicyLibra 用個別 郵便番号ファイルの作成……………	249
1) 町域名区切り……………	143	2. フォルダー監視設定および実行……………	249
2) 住所項目……………	143	① 監視フォルダー……………	249
⑭番号発生……………	144	② 保存フォルダー……………	250
⑮文字差し替え……………	145	③ 処理定義ファイルフォルダー……………	250
<<パステキストの場合>>……………	148	④ 監視実行……………	250
⑯ QR イメージ……………	149	⑤ 「自動処理コマンドファイル作成 (MakeCommandFile.exe)」……………	251
⑰配置済みフレーム制御……………	150	(a) ツール……………	251
⑱テキストファイル……………	151	(b) 定義ファイル名……………	251
⑲画像ファイル (単純挿入) ……	152	(c) 処理ファイル名……………	252
⑲ -1 画像ファイル (JAN バーコード) ……	155	(d) 出力ファイル名・プレビュー情報……………	252
(ISBN 書籍バーコード) ……	157	(e) 開始番号・終了番号・マスター名・ 画像フォルダーパス・ テキストフォルダーパス……………	252
(定期刊行物バーコード) ……	160	(f) 開く・保存……………	252
⑲ -2 画像ファイル (Code39、NW7 バーコード) ……	165	(g) 処理命令ファイルの詳細……………	252
⑲ -3 画像ファイル (CODE128 バーコード) ……	167	(h) ローカルコピー……………	252
⑲ -4 画像ファイル (イメージバリアブル・グラフ) ……	169	(i) FTP 送信……………	252
⑲ -5 画像ファイル (TEX) ……	173	3. TEX エディタ (SpicyEPSEdit.exe) ……	254
⑲ -6 画像ファイル (GS1 バーコード) ……	174	付 録……………	260
⑳串刺し番号……………	178	1) インデザインリカバリーデータの削除…	260
㉑表 (単純挿入、ファイル) ……	179	2) フレーム名称の挿入および削除……………	261
<<表に対する、テーブルスタイル、 セルスタイルの設定方法>> ……	182	3) 排他制御……………	262
㉑ -1 表 (連続表頁の通常表) ……	183	別 冊 (SpicyLibra の秘密) ……	263
㉑ -2 表 (連続表頁のマトリックス表) ……	192	ライセンス……………	269
<<連続表の親フレーム処理>> ……	196	SpicyLibra 使用許諾契約書 ……	270
㉑ -3 表 (積み木挿入・ダルマ落とし) ……	198	奥 付……………	271
第 10 章 ホットフォルダー機能 (フォルダー監視) ……	204		
第 11 章 ユーティリティ ……	211		
1) 数字・半角カナ揃え……………	212		

空 白

第1章 インストール/アンインストール及び動作環境設定

[動作環境]

SpicyLibra 2024 をインストールする前に、次のことをお確かめください。

- OS は [Windows10 /11 64 ビット版](#) の環境が必要です。
(32 ビット OS 上では稼働しません。Windows7/8/8.1 での稼働は保証いたしません。)
- InDesign(日本語版) のバージョン…[2024 \(Ver.19.5\)](#) ([これ以外のバージョンには対応していません](#))
- .NET Framework のバージョン……[.NET Framework Version 4.8](#)
(CD 添付、もしくは Microsoft のサイトからダウンロードできます。)
- Adobe Photoshop2022
(Photoshop を使用したイメージバリエーション処理を行う場合には必須となります。)
- Adobe Illustrator2024
(Illustrator を使用したイメージバリエーション処理または DXF ファイル配置を行う場合には必須となります。)
- Access Database Engine 64 ビット版 (Access Database Engine 2010)
(CD 添付。Access Database Engine 2016 がインストールされている場合には、インストールしないでください。)
- TEX 環境 (dviout,gohstscript,gsview すべて 64 ビット仕様)
TEX データより EPS 画像ファイルを作成する場合には、TEX を EPS 画像に変換するプログラム類が必要となります。

SpicyLibra Ver5.2 以降では、「あべのりさん (<http://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~abenori/mycreate/abtexinst.html>) の公開配布されている”TEX インストーラ 3”」を利用し、TEX 処理に必要な「[dviout,gohstscript,gsview](#)」のソフトをインストールし変換に用いております(インストールの容易さを考慮し)。

また、XXX.tex ファイルから XXX.eps ファイルを作成する TEX プログラムをご使用のユーザーの皆様は、新たに上記インストールを行うことなく、ご使用の TEX 処理環境を本プログラムでの TEX 処理に使用することが可能です。

化学構造式など、上記インストール環境に XyMTeX「[湘南情報数理科学研究所 \(http://xymtex.com\)](http://xymtex.com)」を追加したり、MathTex (http://izumi-math.jp/H_Hata/MathTex/MathTex.htm) などのような TEX を利用した数学教材データ作成ツールを利用したりして、TEX データを EPS 画像に変換して貼り込むことが可能です。

- USB ポート
USB3.0/3.1 互換。ライセンス用のメモリーキーを使用するのに必要となります。
- Adobe Acrobat
(Adobe のサイトからダウンロードできます。)
- MicrosoftEdge、Chrome、その他 Web ブラウザー
(Microsoft のサイトからダウンロードできます。)

(●は必須。○はオプションで特定の処理には必要。)

[インストール]

本インストールを開始する前には、InDesign2024 をあらかじめインストールしておいてください。

以上のことが確認できましたら、SpicyLibra のインストール作業に入ります。

インストール CD をドライブに挿入するとインストーラーが立ち上がりますので、それに従ってインストールをしてください。(インストーラーが立ち上がらない場合は、CD を開き、「kick.exe」を起動し、それに従ってインストールをしてください。)

InDesign 用の PlugIn「[SpicyLibra.pln](#), [FrameLabel.pln](#)」は、InDesign の Plug-Ins フォルダに自動的にインストールされます。なお、SpicyLibra/CS/CS2/CS3/CS4/CS5/CS5.5/CS6/CC2019/2020/2024 用の SpicyLibra.pln 及び FrameLabel.pln は使用できませんので、必ず本製品に添付される SpicyLibra2024 用をお使いください。

また、SpicyLibra 自体のインストール先ディレクトリーは、プラグインとは別にしてください。

[SpicyLibra プログラム及びプラグイン以外で、インストール時に同時に自動的にインストールされるものには以下のものがあります。](#)

- SpicyLibra.exe と同一フォルダー
 - ・カスタム字取設定値.txt (デフォルト値ファイル)
 - ・実体参照.txt (デフォルト値ファイル)
 - ・正規表現登録リスト.txt (デフォルト値ファイル)

この他、インストール CD アクセス表示用のテキストファイル類

- SpicyLibra.exe と同一フォルダー直下の「ツール」フォルダー
 - ・ SpicyEPSEdit.exe/SpicyEPSEdit.exe.config (TEX エディタ)
 - ・ MakeCommandFile.exe (コマンド送信プログラムサンプル) ・ SpecialBarZip.exe (特別郵便番号作成)
- SpicyLibra.exe と同一フォルダー直下の「ドキュメント」フォルダー
 - ・ SpicyLibra 注文書.doc ・ およみください.rtf ・ SpicyLibra インストール時の注意.pdf
 - ・ 使用許諾書.rtf ・ 評価版をご使用の注意点.doc
- SpicyLibra.exe と同一フォルダー直下の「マニュアル」フォルダー
 - ・ SpicyLibra2020 マニュアル.pdf (このマニュアル)
- SpicyLibra.exe と同一フォルダー直下の「カスタム人名字取り設定ドキュメント」フォルダー
 - ・ 横組字取設定.indd ・ 縦組字取設定.indd
- SpicyLibra.exe と同一フォルダー直下の「InDesign-PlugIn」フォルダー
 - InDesign プラグインフォルダーにコピーするプラグインが保存されます。

[アンインストール]

本製品をアンインストールする場合には、設定のアプリケーションタブ内の「インストールされているアプリケーション」を使用してアンインストールしてください。アンインストールしても、弊社の他のプログラムで使用されている可能性のある、InDesign の Plug-Ins ディレクトリー内に作成した「Spicy」フォルダーは削除しません。

なお、「Plug-Ins」-「Spicy」フォルダー内のプラグインが削除されない場合があります。その場合には、手動にて「Spicy」フォルダー内の SpicyLibra.pln、FrameLabel.pln 及び (FrameLabel Resources)、(SpicyLibra Resources) を削除してください。

【COM エラー】

本プログラムならびに InDesign2024 のインストールは、管理者としてインストールしてください。特に、InDesign の場合、正常に COM 情報をレジストリーに書き込まないことがあり、SpicyLibra からの InDesign アクセスがエラーとなることがあるためです。

また、必要であれば、UAC (ユーザーアクセスコントロール) を無効にしたうえで、管理者としてインストールをしてください。

InDesign の場合、COM 登録が正常でなくとも、InDesign 自体は正常に稼働しますので、エラーがわかりにくいということがあり、これまでユーザーの皆様から正常に動かないという場合の多くが、このことに起因して発生しております。従いまして、SpicyLibra で COM エラーが出るときは、COM が正常にレジストリーに登録されていない可能性があります。

その場合には、InDesign の COM 登録を再実行する必要があります。

InDesign2024 の COM 登録を再実行するには、InDesign をアンインストールし、再インストール、あるいは、
 C:\ProgramData\Adobe\InDesign\Version 19.0-J\ja_JP\Scripting Support\19.5\Resources for Visual Basic.tlb
 C:\Users\(\ユーザー名)\AppData\Local\Adobe\InDesign\Version19.0-J\ja_JP\Caches\Scripting Support\19.5\Resources for Visual Basic.tlb

という 2 つのファイルを削除し InDesign を管理者として再起動する、のいずれかの処置を行ってください。

なお、パス中の数値部分はご使用の InDesign2024 のバージョンに合わせてお読み替えの上対応願います。

※ 評価版における注意

評価版は、基本的な機能の制限はありませんが、処理データレコードが 20 レコードまで。または、出力ページ数が 4 ページまでの制限がございます。

評価版は、製品版と機能上の差はございませんので、本製品をご購入し、弊社より送付されます USB メモリーキーをコンピュータの USB 差し込み口に挿入していただくことで、再インストールすることなく、そのまま製品版としてお使い続けることが出来ます。なお、ご評価をいただきました結果、残念ながら、ご使用に至らない場合には、インストールしたコンピュータより、本製品を削除してください。

【使用方法選択時のエラー】

ヘルプメニューより、SpicyLibra の使用方法を選択した際、Adobe 保護モードダイアログが表示される場合があります。これは、Adobe Acrobat にて採用された機能で、本製品のように、pdf ファイルをプロセス起動で開くなどした場合に出される警告です。ダイアログの「保護モードを無効にして開く」をチェックして操作マニュアルを開くか、恒久的にプロテクトモードを無効にする (Adobe Acrobat の環境設定にて保護モードを無効にする) ことで回避できます。

第2章 取り扱うファイル形式・データ種及び注意次項

SpicyLibra で扱うファイル形式は、以下の通りです。

●「基本処理ファイル」

●CSV 形式・タブ区切り形式のテキストファイル（100 項目まで設定できます）

カンマ区切り、タブ区切りの両方、が使用可能です。

ダブルクォート「"」で各項目の文字列を挟む形と挟まない形の選択など、流し込み開始前に選択します。

全レコードの区切り項目数が一致していないと、流し込み時にエラーを起こしますので、注意してください。

なお、本ファイル形式の場合、テキストエンコードは、Shift=JIS の外、UNICODE(utf-16) にも対応しています（ただし、UNICODE データは、BOM(Byte Order Mark) がファイル先頭に無ければなりません）。

●XML 形式

本プログラムでは、DTD などを利用しない、一番単純な形での XML ファイルを取り扱うことを前提としています。次のようなデータの列及び項目を表す TAG 構造を持つ WellFormed な XML ファイルでなければなりません（データ中での SpicyTag の使用は不可）。

```
<?xml version="1.0" encoding="Shift-JIS" standalone="yes"?>
<ドキュメント>
<列>
  <項目 1> 大山田 </項目 1>
  <項目 2> 権三郎 </項目 2>
  <項目 3>27</項目 3>
  <項目 4> 東京都品山区北本町 </項目 4>
  <項目 5> 1 丁目 6 番 9 号 </項目 5>
</列>
<列>
  .....
  .....
</列>
<列>
  .....
  .....
</列>
</ドキュメント>
```

ファイルの最初の、XML ドキュメント宣言である `<?xml version="1.0" encoding="Shift-JIS" standalone="yes"?>` は、省略可能です。

ドキュメントルート、列及び項目を表す、「ドキュメント」・「列」・「項目 1」などの要素名（TAG 名）は自由に設定できますが、省略は出来ません。ただし、`<項目 1 />` のように実データの無いヌル TAG は使用できます。しかし、TAG は、実データのあるなしに関わらず記述されていなければなりません。一番重要な事柄は、必ず、開始の TAG は終了の TAG と対になっていなければならないということ TAG 名にスペースは使用できないということです。

本プログラムでは、レコードという概念で処理をするため、この「列」を表す要素名を基本パス設定で指示する必要があります。

なお、データとして SpicyTag を用いる場合には、XML ファイルとして利用することはできません。SpicyTag の記述形式が XML 形式を踏襲しているため、項目を表すタグなのか SpicyTag でのタグなのか分別できないためです。従いまして、SpicyTag を使用する場合には、XML 形式以外の処理ファイル形式を使用してください。

●Excel シート形式

Microsoft 社の Excel のファイル形式です。

Excel のファイル形式は、Excel のバージョンで何種類かの異なった形式がありますが、本プログラムでは、

Excel97以降に採用された、Excelのファイルの内部形式を表す、BIFF8 (Binary Interchange File Format 8) 形式のファイル (97～2003形式) および、Excel2007よりサポートされた形式のファイルを扱います。ファイルの拡張子は、xls,xlsm,xlsx,xlsb です。

本プログラムでは、このデータを処理するために、Excelプログラムで処理対象となるシート全体を利用する場合にはシート名、あるいはシートの列と項目を範囲選択したブロックを利用範囲とする場合にはブロック名を、基本パス設定で指示する必要があります。

なお、シートは同時に複数シートは選択できません。1処理で1シートとなります。

●MDB,ACCDB (Access テーブル) 形式

Microsoft社のデータベースソフトであるAccessが使用するデータベースのファイル形式です。本プログラムでは、Access2000形式、およびAccess2007よりサポートされましたAccess2007形式のものを扱います。ファイルの拡張子は、mdb,accdb です。

データベースでは、複数のテーブルが登録でき、テーブル間にリレーションを張って、それぞれのテーブルから必要な項目を関係付けて抜き出しビューを作成できますが、本プログラムで利用できるのは、この一つ一つのテーブルとなります。ビューは扱いません。

データベース中のどのテーブルを処理するかを識別するため、本プログラムでは、テーブル名を基本パス設定で指示する必要があります。

※ SQL サーバー用データベースファイル .mdf につきましては、SpicyLibra2020よりサポートを廃止いたしました。

●「流し込みテキストファイル」…………… 通常のテキストファイル (～.txt) 「～.rtf」 「～.doc」 「～.docx」

形式のファイル

テキストは通常のテキストファイル、もしくは「タグ付きテキスト」でも可能です (タグ付きテキストの作成に関してはInDesignのマニュアル等を参照してください)。

「～.rtf」 「～.doc」 「～.docx」形式のファイルは、InDesignの読み込み範囲内で、書式を保持したまま取り込むことも可能です。ただし、取り込みの機能は、InDesignの提供する範囲内となります。

●「貼り込みイメージファイル」…………… InDesign で扱える画像ファイル

拡張子が「ai, jpg, gif, eps, pict, wmf, pcx, pdf, png, sct, tif, dcs, psd, bmp, dxf, indd」のもの。ただし、拡張子が正しくても、実際のファイルの構造により取り扱えない場合があります。

dxfファイルは、Adobe Illustrator を使用していったんJPEG画像にフォーマット変換し (変換画像はdxfファイルが存在する場所に作成されます) 貼り込みを行いますので、Adobe Illustrator が変換不可能なdxfファイルは取り扱えませんので、ご注意ください。

【注意事項】

- SpicyTagにて、文字や線分のカラー設定を行う場合、線分に関してカラー設定を指示した場合、指定が反映されないことがありますので予めご承知おきください。これは、COM経由でSwatchテーブルを取得する場合にエラーとなるためです。

- InDesignは、必ず、管理者権限にて使用してください。

実行ファイル InDesign.exe のプロパティにて、互換性タブの「管理者としてこのプログラムを使用する」にチェックを付けておく事をお勧めします。

管理者権限でなくInDesignを起動させた状態でSpicyLibraを運用すると、処理実行時にエラーとなりますのでご注意ください。

第3章 作業の流れ

SpicyLibra を使用するにあたっての作業の流れを以下に示します。

- ① InDesign 上に、データを流し込むテキストフレーム・フレームグリッド・画像フレーム等のフレームを作成する（処理対象外のフレームなどは、マスターに設定することが可能です。特別な方法を行うことで、Ver4.0 より、マスター上のフレームに対し、ラベル名設定が可能となりました）。

↓
- ② プラグインから「スパイシー」→「SpicyLibra[JP]」→「フレームラベル名設定」を選択し、「フレームラベル名の設定」画面を立ち上げ、各フレームにフレームラベル名と枝番を付ける。

↓
- ③ InDesign のテンプレートファイル（～.indt）として保存する。

↓
- ④ 「SpicyLibra」画面を立ち上げ、必要な設定をする。

↓
- ⑤ 「処理実行」ボタンをクリックし、流し込み作業を行う。

↓
- ⑥ 設定項目の保存が必要な場合は「設定保存」画面を開き、保存をする。

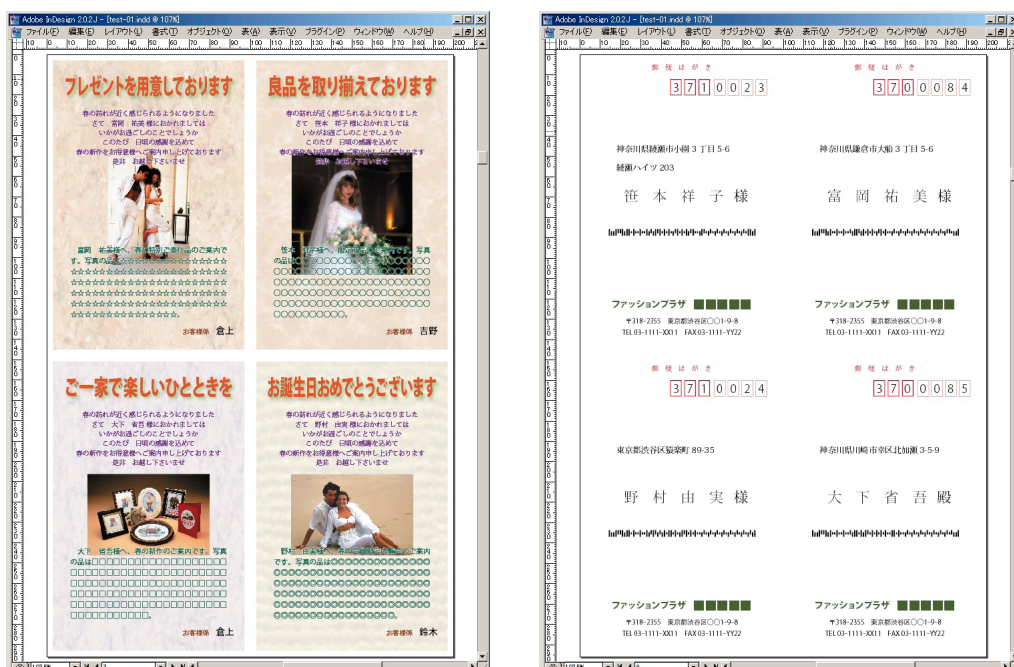
※ PDF ファイルの面付け流し込み、串刺し面付けに関しては、通常の作業方法とは異なりますので、別途説明します。

（VII. PDF 面付け－参照）

※各ページに差し込まれている図版は、下に示す 4 面付け両面設定のダイレクトメール作成を目的として設定されています。参考にしてください。

※インストール CD にあるチュートリアル、サンプルもぜひ参考にしてください。

※巻末掲載の「SpicyLibra の秘密」にて、処理記録とフレーム名称・枝番号の関係を説明していますので、是非、ご一読ください。



第4章 テンプレートの作成

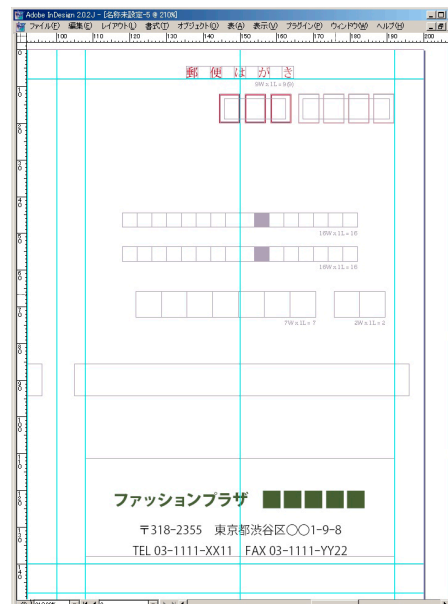
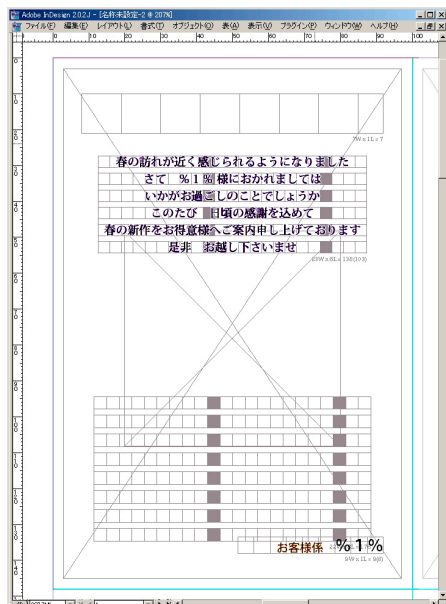
最初に、InDesign テンプレートを作成します。

テンプレートを作成する時は、以下のことに注意してください。

- 「ページ作成方法の選択」では、頁の処理方法の基本となりますので、希望に合致するものを選択してください。
単頁、2頁連続頁、PDF 面付、串刺し面付と4種類の処理方法では、テンプレートの作成方法が異なりますので、テンプレート作成に入る前に、どのようなドキュメントを作成するか検討しておく必要があります。
- 「見開き綴じ方向」のコンボボックスの選択は、必ず、処理する方法に合わせてください。
単ページ処理は、単頁を選択し、2頁連続処理では右綴じ・左綴じのいずれかを選択する。
ただし、串刺し面付けでの2頁連続処理は不可となっていますので、必ず単頁処理で実行してください。
- テンプレートの作成は、単頁処理として行う場合、**マスターページ上ではなく、ドキュメントページの1ページ目から作成**します（ただし、マスター上へ作成することも可能ですが、基本原則は、ドキュメントページに作成することなので、あくまでも、応用的手法となります→18ページ参照）。
2頁連続処理方法で、**両面を同時に作成する場合は、1ページ目に表面、2ページ目に裏面**、というようにテンプレートをページごとに分けて作成してください。**見開き形式にしたい場合も、左右ページを1ページ目・2ページ目**という形で作成してください。
Ver1.0.7 よりサポートいたしました。**見開き処理**を指定して見開きを作成する場合には、処理対象フレーム等はドキュメントページに作成し、固定ページ要素はマスターに作成します。
この時のページ番号は、綴じの方向によりますので、マスターにあわせて。ドキュメントページの右・左ページのページ順と左右ページの間隔を間違えないようにしてください。
- 本**処理の対象外のフレームなどのオブジェクトをマスターに設定することが可能**です（ノンブルフレームや串刺し面付け時の画像といったような固定的内容の処理対象外のオブジェクトなど）。
マスター名を、メイン画面の「**マスター適用**」で**設定**してください。また、マスターはひとつのみとなります（Ver4.0より、特定条件で、複数マスター及びマスターオブジェクトに対するフレーム名称設定が可能となりました→18ページ参照）。
- マスターを使用する場合、単頁処理、2頁連続処理のそれぞれに合致したマスターを作成しなければなりません。
また、マスターを作成した場合、ドキュメントページには、マスターを適用しない状態にしてください。デフォルトでは、適用となりますので、必ず、「なし」を適用しておいてください。
- 流し込みの対象となるフレームセット数は、**最大 99 フレームセット**です。
（フレームセットの意味に関しては、18ページを参照してください。）
- 不必要なページはあらかじめ削除**しておいてください（単頁処理では1頁、2頁連続処理では2頁となっており、最大でも2頁のページ設定）。
- 処理対象のオブジェクトのグループ化は解除してください。グループ化がしてあると、流し込み先のフレームが見つけられなくなります。
- レイヤーを使用して、流し込み用フレーム（ただし、レイヤー1）を作ることも可能です。

では、テンプレートを作成しましょう。

- ① InDesign を開いて、「ファイル」→「新規」→「ドキュメント」から、テンプレートとして必要な大きさを設定しながら、新しいドキュメントを作成してください。この時、2頁連続処理ではない場合「見開きページ」のチェックは必ずはずして作成してください。
- ② ドキュメントページの先頭を表示させ、流し込み用のフレームなどのオブジェクトを必要な位置に配置してください。文字枠はテキストフレーム・フレームグリッドのどちらでも設定できます。フレームグリッドの場合は、その設定値を有効にできます。



「郵便はがき」の赤文字、郵便番号用赤枠、下段の店名・住所・電話・FAX はマスターに置いてあります。

- ③ マスター上のフレームを通常の流し込み・貼り込み用フレームとして利用する場合。

Ver4.0 より、マスター上のフレームに対しても、フレーム名称を付け、データ処理の対象として利用できるようになりました。

ただし、SpicyLibra の実際の処理方法は、従来と変わらず、ドキュメントページに配したフレームのみを扱い、フレーム名称を検知し、データを流し込んだり・貼り込んだりします。従いまして、本機能を利用するには、いくつか注意しないといけない点があります。

- 処理対象のデータ項目とフレームを関連付ける（マッピング）のは、あくまでも、ドキュメントテンプレートのマスターページではなくドキュメントページ上のフレームであるため、マッピングテーブル作成時には、必要なフレームはドキュメントページになくしてはなりません。そのため、一旦、マッピングテーブルを作成した後で、再度、ドキュメントテンプレートを再構成するといったことが必要になる場合があります。

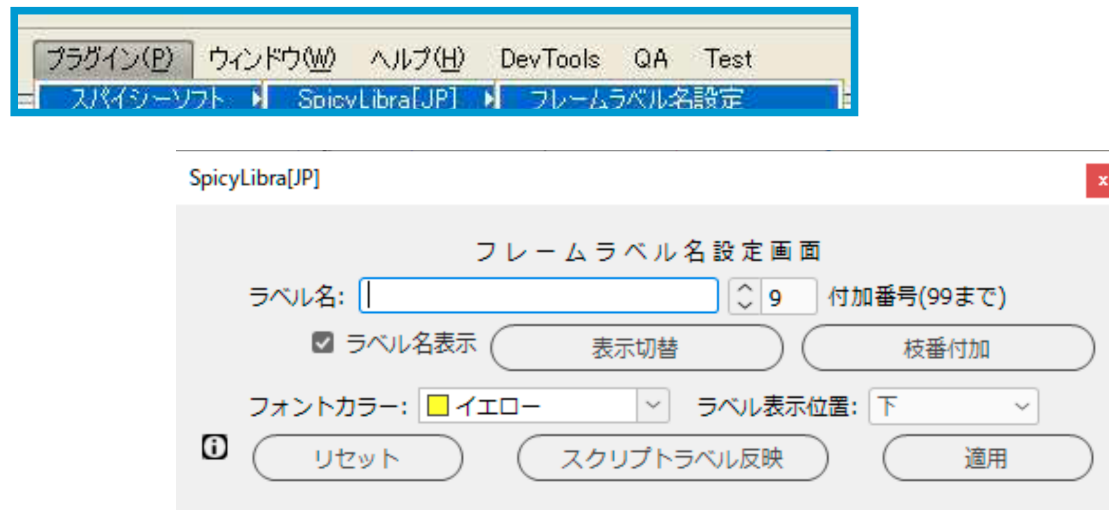
すなわち、マッピングテーブルを作成する前は、すべてのマスターページ上の必要（ラベル名を付け、処理の対象となるもの）なフレームが最小公倍数としてドキュメントページに配置されていなければなりません。

ただし、マッピングテーブル作成時には、フレーム名称の枝番が「1」を対象とするだけであり、また、フレームの属性（サイズなど）に関しては見ておりません。

- マスターで先に必要なフレームを作成しラベル名を付けたものを、ドキュメントページに適用する方法をとった場合、「すべてのページアイテムをオーバーライド」します。また、同一ページに複数のマスターを同時に適用することはできませんので注意してください。
- ドキュメントページに必要なフレームをすべて作成しラベル名を付けたのち、「マスターページとして保存」する方法をとった場合、ドキュメントページに不要なフレームが残らないように注意ください（この方法は、チュートリアル「カタログ」サンプルに作成方法の説明がありますので参考にしてください）。

第5章 フレームラベル名の設定

流し込み用フレームの配置・設定が終了したら、次に「**フレームラベルの設定**」画面を開き、それぞれのフレームに名称を付け、流し込み順の枝番を割り振ります。「フレームラベルの設定」画面を開くには、「プラグインメニュー」の中から「スパイスソフト」→「SpicyLibra [JP]」→「フレームラベル名設定」を選択してください。



ここで、フレーム名称を構成する「フレーム名」及び「枝番号」と処理データとの関係を知ることは作業上。大きなヒントになりますので、先に、この関係を述べておきます。

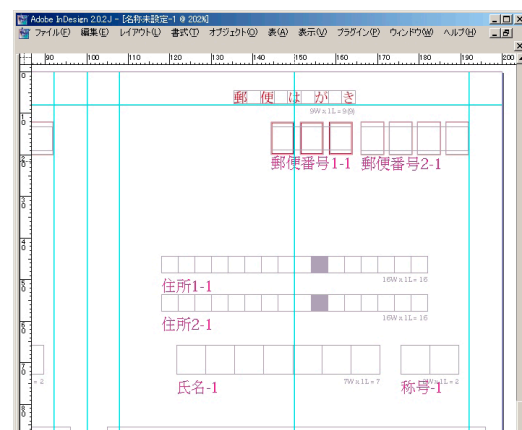
「**フレーム名 = 処理レコードのデータ項目、枝番号 = ページ内の処理レコード番号**」の関係があります。

すなはち、フレーム名は、データ項目とのマッピング処理で関連付けられたデータ項目を表し、枝番号は、頁処理で、ページ毎に読み込まれたデータレコードの何番目のレコードかを表すことになります。

- ① まず最初に、元となるフレームの各々に**名称を付けて**ください。名称を付けないフレームは流し込み用のフレームとして認識されません。

通常、1 ページに複数のレコードデータを流し込む場合がありますので、最初の1レコード分のデータを流し込む（貼り込む）フレーム群を描画し、1フレーム毎にフレーム名を付けていきます。このフレーム群を**フレームセット**と呼びます。すなはち、**1フレームセットが元データの1行分（1レコード）に対応する**ということになります。

F14	A	B	C	D	E	F
管理番号	顧客名	葉書宛名	称号	案内文挿入氏名	案内文	キャッチ
1	秋山 一郎	秋山 一郎	1	秋山 一郎	案内02.txt	春の新作がそろ
2	横田 佐知子	横田 佐知子	1	ご夫妻	案内01.txt	ご結婚記念日お
3	長谷川 豊	長谷川 豊	2	長谷川 豊	案内03.txt	お子様と一緒に
4	富岡 祐美	富岡 祐美	1	富岡 祐美	案内04.txt	プレゼントを用意
5	笹本 祥子	笹本 祥子	1	笹本 祥子	案内05.txt	良品を取り揃え
6	大下 省吾	大下 省吾	2	ご家族	案内01.txt	ご一家で楽しい
7	野村 由美	野村 由美	1	野村 由美	案内05.txt	お誕生日おめで
8	中村 タ子	中村 タ子	1	中村 タ子	案内04.txt	プレゼントを用意
9	田代 幸恵	田代 幸恵	1	田代 幸恵	案内03.txt	春の新作を貴女
10	秋山 一郎	秋山 一郎	2	奥	案内01.txt	奥様と一緒に
11	横田 佐知子	横田 佐知子	1	横田 佐知子	案内02.txt	ご結婚記念日お
12	長谷川 豊	長谷川 豊	2	長谷川 豊	案内03.txt	お子様と一緒に
13	富岡 祐美	富岡 祐美	1	富岡 祐美	案内04.txt	プレゼントを用意
14	笹本 祥子	笹本 祥子	1	笹本 祥子	案内02.txt	良品を取り揃え
15	大下 省吾	大下 省吾	2	大下 省吾	案内01.txt	ご一家で楽しい
16	野村 由美	野村 由美	1	野村 由美	案内05.txt	お誕生日おめで
17	中村 タ子	中村 タ子	1	中村 タ子	案内04.txt	プレゼントを用意
18	田代 幸恵	田代 幸恵	1	田代 幸恵	案内03.txt	春の新作を貴女
19	秋山 一郎	秋山 一郎	2	秋山 一郎	案内01.txt	奥様と一緒に
20	横田 佐知子	横田 佐知子	1	横田 佐知子	案内02.txt	ご結婚記念日お
21	長谷川 豊	長谷川 豊	2	長谷川 豊	案内03.txt	お子様と一緒に
22	富岡 祐美	富岡 祐美	1	富岡 祐美	案内04.txt	プレゼントを用意
23	笹本 祥子	笹本 祥子	1	笹本 祥子	案内02.txt	良品を取り揃え
24	大下 省吾	大下 省吾	2	大下 省吾	案内01.txt	ご一家で楽しい
25	野村 由美	野村 由美	1	野村 由美	案内05.txt	お誕生日おめで
26	中村 タ子	中村 タ子	1	中村 タ子	案内04.txt	プレゼントを用意
27	田代 幸恵	田代 幸恵	1	田代 幸恵	案内03.txt	春の新作を貴女
28	秋山 一郎	秋山 一郎	2	秋山 一郎	案内01.txt	奥様と一緒に
29	横田 佐知子	横田 佐知子	1	横田 佐知子	案内02.txt	ご結婚記念日お
30	長谷川 豊	長谷川 豊	2	長谷川 豊	案内03.txt	お子様と一緒に
31	富岡 祐美	富岡 祐美	1	富岡 祐美	案内04.txt	プレゼントを用意



一つのフレームにラベル名を付けるには、ラベル名を付けるフレームを選択し、「フレームラベルの設定」画面の「ラベル名」欄に適切な名称を入力します。

次に、「適用」ボタンをクリックする前に、フレームラベル表示文字のフォントカラー（赤、オレンジ、ブルーなど）と表示位置（フレームの上、下、左、右）を設定し、ラベル表示チェックボックスにチェックを入れます。

ここで、「適用」ボタンをクリックしてください。選択したフレームに名称が付きます。

- ② 同一頁内に複数のフレームセットが必要な場合には、フレームセットのフレームをすべて選択し、コピーします。そして、必要な位置にそれらをペーストしていきます。「グループ化」をしてコピー・ペーストを行った場合は、③の**枝番付加作業の前に「グループ化を全て解除」**してください。

1 ページに複数のフレームセット（複数のレコードを流し込む）を必要とする場合、一つのフレームセットを描画し、ラベル名証を付加した段階で、必要な数のフレームセットをコピーアンドペーストする方法が、間違いがなく、便利です。

- ③ 次に、たとえば、1 ページに複数のフレームセットがある場合、プログラム上、同じフレーム名称のフレームが複数存在することとなり、処理データとして読み込まれたレコードのどのレコードのデータを用いるのかわかりません。

そこで、フレームセットごとにどのレコードを利用するかの番号（枝番）を付けて、枝番をつける前のフレーム名が同じものであっても、枝番号を付けることで異なるフレームであると区別すると同時に（逆を言うと、同一のフレーム名のフレームは、InDesign にとっては ID が異なるため別々のユニークな存在として扱われますが、SpicyKibra では、フレーム名のみを対象にフレームを識別していますので、同じフレーム名があった場合、それらのフレームには、同一のデータ項目処理が行われることになります）、頁処理ごとに読み込まれたレコードの何番目のレコードを利用するのかを設定します。

そのため、フレームセットごとに、そのフレームセットに所属するすべてのフレームを一括選択し、必要な枝番号を「付加番号」欄に入力（数値アップダウンコントロールをクリック）した後、「枝番付加」ボタンをクリックしてください。同じフレームセットに所属するフレーム名に、同じ枝番号が付きます。

このようにして、**使用する全てのフレームに枝番を付けて**ください。

【注意】 1 頁 1 フレームセットの場合でも、必ず、枝番号を付けてください。枝番は「1」から開始し、フレームセット毎に、1 ずつ連続している必要があります。また、データ項目と処理フレームとの関連づけ（マッピング）処理をする際には、枝番号「1」がなく「2」があるといったようなフレームが存在するとエラーになります。

ただし、実際の流し込み処理を行うときには、**フレーム名および枝番のないフレームは流し込みの対象になりません。**

- ④ 全てが終了したら、「**テンプレート（～.indt）**」として保存してください。

ただし、流し込み用のフレームが「グループ化」されている場合は、「**グループ化**」を必ず解除しておいてください。また、流し込みに必要のないページも全て削除しておいてください。

- ※「**枝番付加**」ボタン→ 選択されているフレームのフレーム名に枝番号を付加しますが、他のラベル属性は変更しません

枝番付加を実行すると、枝番付加番号が自動的に + 1 されて、連続した枝番付加の実行をスムーズに行えます。

自動インクリメントした値でなく、自由な番号を付けたい場合には、枝番号のアップダウンコントロールで希望する値に設定してください。

枝番号のアップダウンコントロールの値は、ラベル名が未設定のフレームや枝番号が未設定のフレームを選択した場合には変化がありませんが、すでに枝番号が付けられているフレームを選択した場合、そのフレームの枝番号に自動的に設定します。

ただし、複数のフレームを同時に選択した場合には、この限りではありません。

- ※「**表示切替**」ボタン→ ラベル名表示チェックボックスの設定に従い、ドキュメントページ上のラベル名の表示 / 非表示を実行します。このとき、他のラベル属性、フォントカラー、表示位置も、ダイアログで設定されている値を適用しますので、注意してください。

- ※「**スクリプトラベル反映**」ボタン→ このボタンは通常使用しません。

機能としては、InDesign の「スクリプトラベル」として、フレームに設定してある内容を、ラベル名として利用できるようにします。ただし、場合によっては機能しない場合があります。

どのようなケースを想定して実装してあるかという点、InDesign 以前の InDesign のバージョンで作成したテンプレートを InDesign に移行しようとする場合、多くは、InDesign でオープンし保存すれば、InDesign 対応のテンプレートファイルに変換できるのですが、何らかの理由で、オープンできないため、InDesign 対応テンプレート

トファイルに変換できない場合があります。

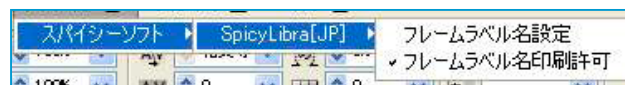
このような場合、作成したバージョンの InDesign で当該テンプレートをオープンし、INX ファイルとして保存したものを、InDesign でオープンでき、利用することが可能です。ところが、この手法で変換した場合、スクリプトラベルはそのままドキュメントデータとして移行しますが、ラベル名は移行できない蓋然性が高いため、SpicyLibra で、そのまま利用するには不便なものとなってしまいます。

このような時に、「**スクリプトラベル反映**」を実行することで、スクリプトラベルより自動的にラベル名を取得し設定するため、ラベル名の再設定の手間が省けます。

※流し込みを行った時、フレームが消失してしまうような現象が起こる場合が、万が一起こったときには、テンプレート上のフレームにロックを掛けて防ぐことが有効な場合があります。

※フレームラベルの印刷

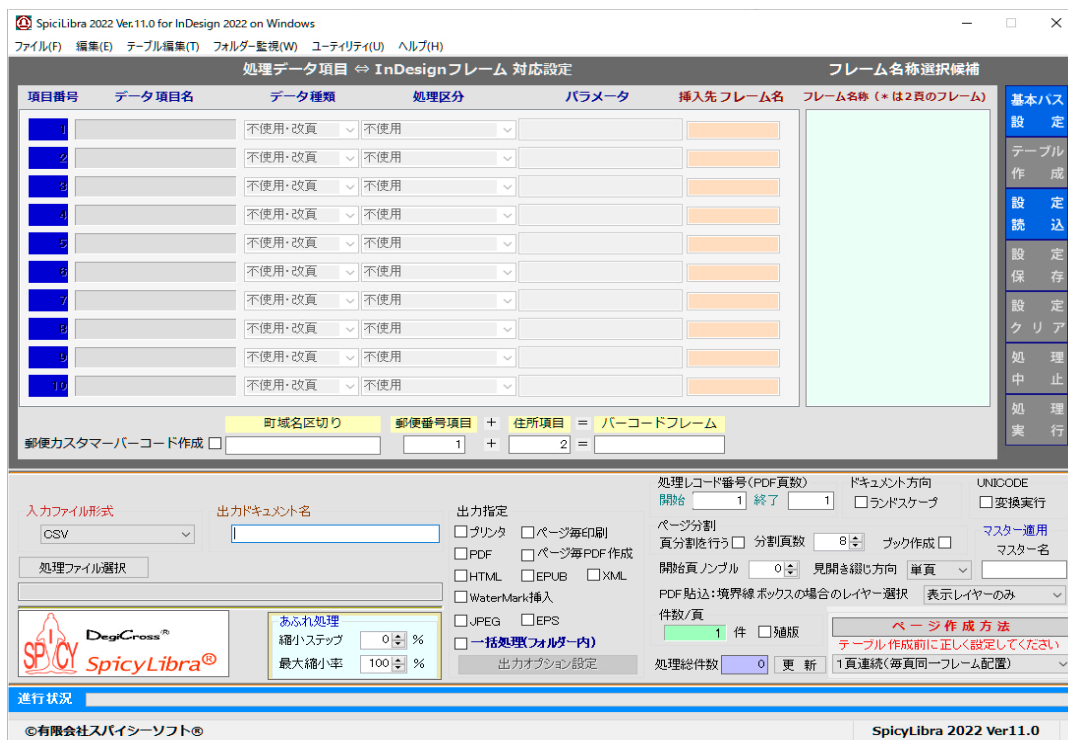
フレームラベルは、テンプレートのドキュメントページ上での表示設定の如何にかかわらず、Ver3.0 までは、印刷物として印字することはできませんでした。Ver4.0 より、プラグインメニューの設定により、印刷時に、フレームラベル名を印字 / 非印字の選択ができるようになりました。



「フレームラベル名印刷許可」サブメニューにチェックがあれば、フレーム名も印刷対象となり、チェックがなければ、印刷対象となりません。PDF ファイルを同時に書き出す場合にも、本サブメニューにチェックがあると PDF 上に反映されますので注意してください。

第6章「SpicyLibra」画面での作業

「フレームラベル名」と「枝番号」の設定が終了後、「SpicyLibra」を立ち上げます。ここでは、まず、流し込む時に必要な、フレームラベル名を付けた各フレームと処理データのデータ項目との関連付け（マッピング）を行い、流し込み（貼り込み）処理に必要な各設定を行います。



1. テーブル編集

ここでは、流し込みを実行するときに、入力文字列を別文字列に変換したり、人名字取りの字送り量を制御する場合などに必要な各種変換・支援テーブルを作成・編集します。

「UNICODE 変換テーブル」「住所縦組み文字テーブル」「特別代表郵便番号」「属性変更テーブル」「段落スタイルテーブル」「面付け基本データ」「カスタム人名字取り」を利用したい場合は、「基本パス設定」の作業に入る前に、メニューの「テーブル編集」から必要に応じて設定をしてください。

1) UNICODE 変換テーブル

処理するファイルの文字コードが Shift-JIS の場合、Shift-JIS にはない OpenType フォントの記号類 (UNICODE 番号が割り振られているもの) 等を利用したい場合、2 種類の設定方法があります。

① InDesign で適当なテキストフレームを作成し、下記の形式で変換元の ShiftJIS の文字と変換先の UNICODE の文字の対応テーブルを作成します。ただし、UNICODE 文字の選択には、OpenType フォントの字形を扱う「字形」パレットを用い、

入力文字 TAB 番号 TAB UNICODE 文字
(TAB は実際の「TAB キー」を押してください)

例 丸 TAB 1 TAB ①
丸 TAB 2 TAB ②

のように作成し、これを UNICODE のテキストファイルとしてエクスポートし、拡張子を「.txt」から「.itb」に変更してください。

番号というのは、作業用に自由に付ける番号のことです。

たとえば、丸付き白抜き数字を利用したい場合は、①を1番、②を2番に設定します。

データ中で「¥< 丸 1 ¥>」とすれば「①」が、「¥< 丸 2 ¥>」とすれば「②」が表示されます。



¥<¥> は半角（1 バイト）文字で指定してください

②従来は、InDesign 経由の①のみがテーブル作成方法でしたが、MS-IME が機能アップされサロゲートペア文字を扱えるようになりましたので、MS-IME を用いた入力方法もサポート可能となりました。MS-IME の IME パッドにて、使用するフォントを選択し、UNICODE 文字欄に文字を入力します。この場合、テーブルでの表示に使用するフォントがサロゲートペア文字をサポートしていない場合、サロゲートペア文字は表示されませんので、「UNICODE 文字表示変更」ボタンをクリックし、正しいフォントを選択してください。

※ UNICODE 文字欄には、1 文字のみ入力可能で、utf-16 の2バイトもしくは、4 バイトのサロゲートペア文字が設定可能です。ただし、サロゲートペア文字を設定する場合には、使用するフォントによって、サポートする文字が異なる場合がありますので、InDesign にて使用するフォントを確認してください。

※ ファイル流し込みには対応していません。あくまでも、データ項目の文字列挿入に対してのみとなります。

※ OpenType フォントの異体字 (UNICODE 割り当てのないグリフ文字) には対応していません。

※ この UNICODE 変換テーブルを適応させながら流し込みを行いたい場合は、必ずメイン画面「UNICODE」欄の変換チェックボックスにチェックを入れてください。

2) 私用領域コード変換テーブル

UNICODE の私用領域 (U+E000 ~ U+F8FF) の文字データを、同一領域内の文字コードに変換するための対応テーブルを作成します。

このテーブルは、SpicyLibra のユーティリティ機能の「外字処理」メニューにある「私用領域文字コードテーブル変換」を実行する時に使用します。

①新規にテーブルを作成する場合

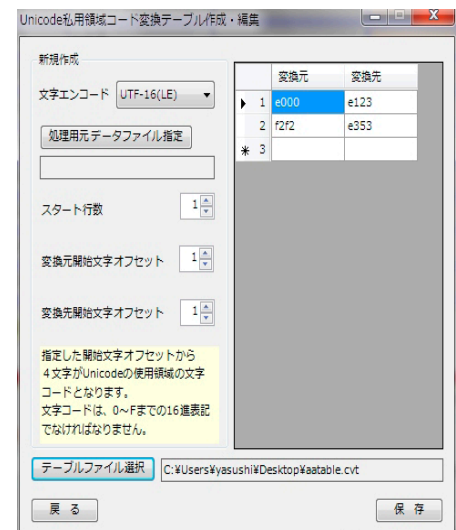
新規に変換テーブルを作成する場合、何らかの変換用の対応テーブルを元に作成する方法と、直接テーブルエディタのグリッドビューに入力する方法とがあります。

●何らかの既存の対応テーブルファイルを利用する場合には、当該ファイルがプレーンなテキストファイルであり、1 行ごとに、変換元の文字コードと変換先の文字コードが記述されている必要があります。

また、文字エンコードは、Shift-JIS,UTF-16(LE),UTF-8 のいずれかでなければなりません。

文字コードは 4 桁の 16 進数を半角英数で表記され、次のような形式で記述されているものとします。

番号：変換元	変換先
1: EOF0	F1A2
2: E356	E129
3: F6FF	F3F5



実際の対応が記述されている行までは、使用しませんので、コメントなど自由に記述してかまいません。ただし、対応が記述されている行が開始された以降は、連続して対応が記述されている行でなければなりません。

対応が記述されている行は、変換先の文字コード及び変換先の文字コードの開始文字数が、すべての行において同じであり、4 桁記述されていれば、開始する文字までの間には、何が記述されていてもかまいません。

このファイルを読み込むには、画面設定で、文字コードのエンコーディングの種類、文字コードの対応が開始される行のファイル先頭行を 1 とした行番号と、対応が記述された行での、変換元、変換先の文字コード開始文字数を先頭文字を 1 とした文字番号を設定します。

読み取り設定が終了したのち、ファイルを選択して読み取りを実行します。

読み取った内容は、画面右側のぐりっビューに表示されますので、必要な修正を施したのち、SpicyLibra 用の文字変換テーブル形式で保存します。

変換テーブルファイル名は、自由に設定可能となっております。

●何らのファイルも利用しないで作成する場合には、画面のグリッドビューに直接対応文字コードを記述して行き、記述終了後に、テーブルファイルに保存します。

②以前に作成したテーブルファイルを修正する場合

テーブルファイル選択ボタンをクリックし、修正するテーブルファイルを選択します。 選択されたテーブルファイルの内容がグリッドビューに表示されますので、必要な修正を加えたのち、再度保存します。

3) 住所縦組み文字テーブル

元データが算用数字や「- (ハイフン)」で表記されているものを流し込む時に**縦組みの漢数字や特定文字・記号等にしたい場合、ここでその対応表を作成します。**

算用数字（全角文字・半角文字どちらでも）は自動的に漢数字に置き換わりますので、テーブルで設定するものは「- (ハイフン)」等の**数字以外のInDesignで自動変換対応していない置換文字を設定**してください。

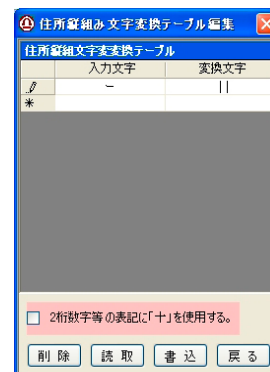
「20」を「二十」「二〇」などように、「2桁数字等の表記に「十」を使用する」欄をチェックすることにより、どちらにするか選択もできます（**2桁数字のみ**）。

2桁数字の変換は次のようになります。

- 10 → 通常は、一〇と変換。
チェック時は、十と変換。
- 20,30,40,・・・ → 通常は、二〇,三〇,四〇,・・・と変換。
チェック時は、二十,三十,四十,・・・と変換。
- 11～19 → 通常は、一一,一二,一三,・・・と変換。
チェック時は、十一,十二,十三,・・・と変換。
- 21～29 (31~39 など) → 通常は、二一,二二,二三,・・・と変換。
チェック時は、二十一,二十二,二十三,・・・と変換。

なお、このテーブルを使用する場合は、後述する「データ種類と処理区分」の項で設定する「データ種類」を「文字列」に、「処理区分」を「住所漢数字変換」に設定してください。

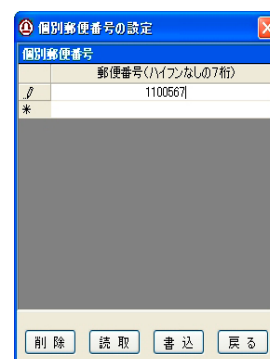
テーブルは仕事に合わせて保存・読み込みができます。



4) 個別郵便番号

大口事業所のように、**個別に郵便番号を日本郵便より取得しているものについては、処理が通常のものとは異なりますので、個別郵便番号テーブルに登録**してください。なお、個別郵便番号は、数千件と多いため、日本郵便より個別郵便番号のデータファイルを手し、利用していただくのが便利です。また、入手したデータファイルを個別郵便番号テーブルへ変換するには、変換ツール「SpecialBarZip.exe」を用意してありますので、ご利用ください。（「X. ツール (21 ページ)」参照）

個別郵便番号のテーブル名称は固定 (zipspecial.xml) です。名称変更すると機能しなくなります。



5) 属性変更テーブル

通常、フレームに文字列挿入を行い自動組版を行うプログラムでは、フレームに挿入される文字列の属性やフレーム自体の設定を、ケース by ケースで可変的に変更を行うというのは難しいものですが、本プログラムでは、

- ① 属性設定毎のリスト番号（0,1,2,3---）を、挿入文字列データ項目とは別の制御用データ項目に設けることで、テーブルに設定した内容に対応した属性値を挿入文字列・フレーム枠・フレームバックグラウンドに設定します。
- ② 対象フレームの全てに、指定された属性値を挿入文字列・フレーム枠・フレームバックグラウンドに設定します。変更刺する文字数が固定となります。
この全適用は、「100円」などのように、文字列中の一部分を InDesign テンプレート上のフレームで設定した値以外に変更する場合に使用します。
- ③ ①と②が、変更範囲を固定で設定するのに対し、変更範囲を項目データの前後に付加する文字数で変化させて、挿入文字列・フレーム枠・フレームバックグラウンドに設定します。
これは、「**特価** 4,000 円」「**本日目玉** 599 円」のように、変更する文字数が可変する場合に使用します。

の3種類の方法で、属性を変更させることが出来ます。

注) 属性変更テーブルを開くときは、仕事中のファイルを保存してからにしてください。新規に InDesign にアクセスする関係上、開いているファイルはそのまま閉じられてしまいます。

この属性変更テーブルは、属性の組み合わせの値をリストとして作成します。

リスト番号の0番から、属性の値を設定します。

- ① テーブルを作成・編集するためには、まず、**テーブルを適用する InDesign ドキュメントから、使われているドキュメントのカラー・フォント・線種一覧を取得**する必要があります。

フォントに関しては、アプリケーションレベル（InDesign で使用できる全フォント）で設定してあるものか、ドキュメントレベル（指定されたドキュメント上で使用されているフォント）で設定してあるものか、どちらから読み取るかを予め、「フォントリストの読み取り先指定」チェックボックスでチェックしておきます。

アプリケーションレベルでフォントリストを取得する場合、コンピュータに登録してあるフォント数が多いと、取得するのに時間がかかる（数分）場合がありますので気をつけてください。

カスタムカラー・線種に関しては本テーブル上で作成できませんので、読み込み対象となるテンプレート上で必要なカラー・線種をあらかじめ登録しておいてください。

- ② アプリケーション・ドキュメントから、カラー、フォント、線種のリストが取得されると、取得を終了した旨のダイアログ画面が表示され、このダイアログを閉じると、読み取ったカラーとフォントおよび線種が、それぞれの選択コンボボックスに反映されます。

リストに設定できる項目は、次の通りです。

〔フォント〕

書体名

大きさ（1.0 ポイント以上）

〔文字修飾〕

カラー（InDesign ドキュメントで使用されている色名）

濃度（0% ～ 100%）

文字線幅（0.0 以上、単位は「線幅単位」による）

文字線カラー（InDesign ドキュメントで使用されている色名）

文字線色濃度（0% ～ 100%）

スキュー（－ 85.0 度から 85.0 度）

打ち消し線

下線

ベースラインシフト（ポイント）

〔フレームバックグラウンド〕

カラー（InDesign ドキュメントで使用されている色名）

濃度（0% ～ 100%）

〔フレーム枠〕

カラー（InDesign ドキュメントで使用されている色名）

濃度（0% ～ 100%）

線幅（0.0 以上、単位は「線幅単位」による）

線種 ベタ・太いー細いー太い・細いー太いー細い

太いー太い・太いー細い・細いー太い・三重線・二重線

ホワイトダイヤモンド・左斜線ハッシュ・右斜線ハッシュ・直線ハッシュ

波状・句点・点・点線（3 & 2）・点線（4 & 4）・点線（以上 InDesign デフォルト）

※既存のフレームに後から線幅を設定すると、InDesign の仕様上、フレームの大きさは変わらず、指定した線幅の 1/2 の値分フレームの大きさを変化させてしまいます（線幅の原点をセンターにとった場合）。フレームに線幅を持たせて流し込みを行いたい場合は、予めその点を考慮してフレームの大きさを設計しておいてください。

〔設定範囲〕

先頭からの文字数

末尾からの文字数

先頭からの文字数と末尾からの文字数を除いた中間を使用（上記先頭文字数と 末尾文字数との間を変更対象とします。この設定が有効なのは、変更種類①と②の場合です。）

〔線幅単位〕

線幅属性の指定の単位を「ミリ」・「Q（級数）」・「ポイント」から選択できます。デフォルトは「ミリ」です。

ポイント→ミリ換算値としては、1 ポイント 0.3514 ミリの JIS ポイントを使用します。

「登録」ボタン

メモリーの登録をします。登録ボタンを押さないと、新規設定項目は登録されません。

「更新」ボタン

メモリーの当該番号の属性を変更します。変更後は必ず更新ボタンを押してください。

「削除」ボタン

メモリーの当該番号の属性を削除します。

「コピー」ボタン

似たような属性値を作成する場合に、次のテキストボックスに記入された番号の属性値をコピーして表示します。

「テーブル読込」ボタン

既存のテーブルを編集する場合に、クリックしてテーブルを指定します。

「戻る」ボタン

この画面を閉じて、メイン画面に戻ります。

「一覧表示」ボタン

テーブルに登録された属性値のリストは、「一覧表示」のボタンをクリックすることにより、一覧として見やすく表示されますので、容易に確認することが可能です。

上記の属性変更を行う設定変更を行わない項目に関しては、値を未入力にすればテンプレートにて事前に設定された値が有効となります。つまり、変更する項目部分のみを入力することになります。

番号	属性名	大きさ	文字色	文字濃度	パス幅	パス色	パス濃度	背景色	背景濃度	枠線色	枠線濃度	枠線種類	枠線幅	取	下
0	小塚明子 Pro-L	12			2.0					C=100 M=90 Y=...	65				

また、この画面で作成・編集した内容は、あくまでもメモリー上での一時的なものとなりますので、「**テーブル保存**」ボタンをクリックし、**ファイルに保存**しなければ利用できません。

さらに、ここで**作成保存したテーブルを基本パス設定の画面で指定**して、はじめて使用することができますので注意してください。

なお、カスタムカラー・線種を InDesign で変更・削除・新規登録した場合、各テーブルは、その値をリストの先頭からのオフセット値で保存していますので、属性変更テーブルもあわせて修正変更してください。

パラメータの設定に関しては、「第9章 パラメータ設定」参照。

6) 段落スタイルテーブル

テキストフレームの複数の段落 (改行まで) を、段落毎にスタイルを変えたい場合があります。

SpicyLibra では、段落スタイルの適用を2種類の方法で実現しています。この段落スタイルの適用を実行する時に使用する段落スタイルを設定するテーブルを作成・編集します。

ただし、段落スタイルの変更は、「文字列」の「単純挿入」、「テキストファイルの挿入」の場合にのみ有効となります。

メニューを選択すると、次の画面が表示されます。

段落スタイル設定

段落スタイル | 先頭文字 | 交換アセット | ベースライン | 文字削除 | パラグラフ番号 | 先頭文字スタイル | ここまで文字 | ここまで字数 | インデント

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

スタイル適用方法
段落スタイルを先頭文字で判別、文字スタイルここまで文字で適用

スタイル取得 | 開く | 戻る | 保存

- ① 設定する段落スタイル・文字スタイルは、処理をするのに使用するドキュメントテンプレートより取得します。「スタイル取得」ボタンをクリックし、ドキュメントテンプレートを指定し、スタイルの読み込みを行います。読み込んだスタイルが、コンボボックスに反映されて選択できるようになります。

既に、作成済みのテーブルを修正する場合には、「開く」ボタンをクリックしテーブルデータを読み込みます。

- ② スタイル適用方法のコンボボックスで、スタイルを適用する方法を、大きく分けて、「先頭文字」、「パラ

グラフ番号}の2つの方法から選択します。

さらに、適用した段落の先頭から、特定の文字または文字数まで、文字スタイルを適用する場合を考えて、6種類のスタイル適用方法から選択します。

- ③ 流し込む1つのフレームに対して最大5個までの異なる段落スタイルの適用が設定できます。

基本的な設定の考え方は、

- ・適用する「段落スタイル」を選択します（「適用しない」は、適用しません）。

段落スタイル適用を「段落スタイルを先頭文字で判別」する場合には、

- ・適用する段落の判別に先頭文字を指定した場合、その段落を識別する「識別文字」を1文字記入します。
- ・段落スタイルを適用後、識別のために指定した「先頭文字」をライブラリーに登録してあるアセットで置き換える場合には、「交換アセット」にアセット名を記入します。
- ・アセットで先頭文字を交換した時に、アセットで指定したオブジェクトのベースラインをシフトさせたい倍意には、「ベースラインシフト」にシフト量を記入します。シフト量の単位はポイントで、-の値、小数点も有効となっています。
- ・段落スタイル適用後、先頭文字を削除したい場合には、「文字削除」をチェックします。
(交換アセットと文字削除は併用できませんのでいずれかとなりますが、両方を指定した場合には、文字削除が優先的に有効となります。また、使用するアセットを含むライブラリーは、後述する「基本パス設定」で指定されたライブラリーとなります。)

を設定します。

段落スタイル適用を「パラグラフ番号で判別」する場合には、

- ・パラグラフ番号の「開始～終了」で、先頭からのパラグラフ番号（行番号）を指定します。各段落スタイルで指定する番号は、入れ子は指定できません。指定できる番号は、1～100までとなります。ただし、「終了」に「0」を指定すると、最後の番号のパラグラフまでとなり、段落スタイルが選択されている場合には、開始番号の「0」は、先頭の「1」番と同じことを意味します。

最後に、**段落スタイルを適用した段落の先頭文字列に、何らかの文字スタイルを適用したい場合に、**

- ・適用する「先頭文字スタイル」を選択します（適用なしは、「なし」です）。

適用する文字スタイルの範囲を、特定の文字までにしたい時には、

- ・「ここまで文字」に1文字記入します。この指定した文字が、段落中に複数出現する場合、文字スタイル

が適用されるのは、先頭に一番近い文字となります。

適用する文字スタイルの範囲を回数で指定したい時には、

- ・「ここまで文字」に先頭からの文字数を選択します。指定できる文字数は、1～100 までとなります。

文字スタイルを適用した場合、**適用した文字スタイルの次に InDesign の特殊文字「ここまでインデント」を挿入したい場合には、**

- ・「インデント」にチェックを入れます。

(文字スタイルを「ここまで文字」で指定する場合、文字スタイルは、「ここまで文字」を含んで適用されます。)

たとえば、段落スタイルテーブルが次ページの図のような設定となっていた場合、1 行目は、

段落の先頭文字が「日」ではじまる段落に、「作戦」の段落スタイルを適用し、スタイル適用後、「日」を「日の丸」と名づけられたアセットに置き換えます。置き換えられたアセットは、1 ポイントだけベースラインシフトします。

その後、先頭から 3 文字まで、文字スタイル「先頭 1」を適用します。

そして、「インデント」にチェックがありますので、先頭より 3 文字目の後ろに「ここまでインデント」文字を挿入します。

という意味となります。

設定した段落スタイルをファイルに保存する時には、「保存」ボタンをクリックして、ファイル名を適宜入力し、保存してください。その後、「戻る」をクリックして、段落スタイルテーブルの編集を終了します。

保存しないで終わる場合には、そのまま「戻る」ボタンをクリックしてください。

〔処理データの改行について〕

「単純挿入」の場合には、半角「|」を改行コードに変換します。

「テキストファイル挿入」の場合には、CR/LF を改行コードとみなします。

〔1 処理で適用できる段落スタイルテーブルの数について〕

段落テーブルは、1 つの処理で、異なる 10 テーブルを使用することが出来ます。すなわち、異なるフレームへの文字列の挿入に、別々の段落スタイルを適用できることになります。この場合の段落スタイルテーブルを保存するファイル名は、基本のファイル名のものと、基本のファイル名に半角数字の 1-9 までを付加したファイル名とにしておく必要があります (ABCD.slt, ABCD-1.slt, ABCD-2.slt, のように、**基本名-数字**)。数字は連続して振られていなければなりません。また、これらは、同じフォルダーに存在しなければなりません。

7) 面付け基本データ

簡易 PDF 面付け機能を使用するときの面付け設定データを作成する画面です。

- ① 何面付けのデータを作成するかを選択します。

選択できるのは、4 面 (表 2 × 裏 2)、8 面 (表 4 × 裏 4)、16 面 (表 8 × 裏 8)、32 面 (表 16 × 裏 16)、64 面 (表 32 × 裏 32) の 5 種類となります。

- ② 「背丁」の欄には、背丁として印字するテキストを入力します。

- ③ 「折丁番号の数字書体」の欄では、折番号の書体を選択します。

書体は、次の 6 パターンを選択できます、

漢数字・半角算用数字・全角算用数字

漢数字 + ページ番号・半角算用数字 + ページ番号・全角算用数字 + ページ番号

ページ番号は、(P.1～P.16) のように、当該折に含まれるページ数を表します。ただし、ページ数は、半角の算用数字のみとなります。

- ④ 「付加文字」の欄では、折番号に続く文字を入力します。たとえば、「折」など。

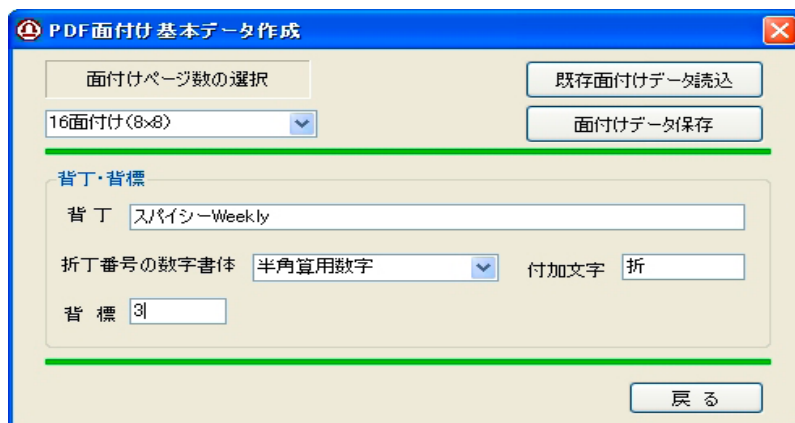
- ⑤ 「背票」の欄では、背票を何折ごとに繰り返すかを数字で設定します。

たとえば、5 と入力すれば、1, 2, ... と背票として設定してあるフレーム番号を移動しますが、6 折目からは 1 折目と同じ位置のフレームにもどり、繰り返すということを意味します。

- ⑥ 「面付けデータ保存」ボタンは、設定した内容を CSV ファイルとして保存します。

- ⑦ 既存の面付け基本データファイルを修正、あるいは、一部変更して別の面付け基本データとして利用する場合には、「既存面付けデータ読込」ボタンをクリックして、ファイルを選択してください。ファイルの内容が読み込まれ画面に表示されます。

「面付け基本データ」ならびに、「PDF・画像ファイル面付け」の詳細に関しては、別項の「Ⅶ. PDF・画像ファイル面付け」を参照してください。



8) 実体参照文字テーブル

SpicyTag にタグ付けしたデータを利用する場合、データが XML 書式になっており、タグを示す「<」や「>」など、XML 処理で特別な意味をもつ文字に関してエスケープを行う必要があります。このような、特別な書式に従う文字をテーブルとして編集登録し、「実体参照テーブル」ファイルとして保存利用します。

ファイルに保存してあるテーブルを編集する場合には、「読込」ボタンをクリックしテーブルデータを読み込み表示させます。

テーブルは、グリッドビューの左項目が「文字参照」で、右項目が「文字実体」となっていますので、参照文字に関しては、「&」と「;」であらわされる実体参照文字形式に従い入力し、「実体文字」欄に、対応する文字を入力してください。XML 規約にて事前に宣言されている「&」など 5 文字（<、>、&、"、'）に関しては、定義する必要はありません。初期インストール時に設定されている実体参照は、記入例ですので削除してもかまいません。

編集が終了し、「保存」ボタンをクリックすると、内容がテーブルファイルに保存されます。「**実体参照テーブル.txt**」というファイル名で、SpicyLibra の実行プログラムが存在するフォルダーに保存されます。

9) カスタム人名字取りテーブル

従来、人名字取りを設定した場合、プログラム内部にて規定した字送り方法で字取りを行っていたため、ユーザー 1 億時の送り量を制御することができませんでした。

SpicyLibra Ver4.0 以降、ユーザー独自の字送り量を設定できる様に機能を追加しました。

基本的な考え方は、提供いたします字取り設定用の InDesign ドキュメントファイルにおいて、**5, 7, 8, 9 字取り**の組版を行っていただき、そのファイル読み取り、各字取りでの姓と名の組み合わせによる字送り量テーブルを作成し、実際の処理に際し、そのテーブルを利用して字送り制御を行います。

この字送りテーブルは、デフォルトテーブルとして、プログラムの実行ファイルがあるフォルダーに用意しておくほか、JOB 毎に作成し、デフォルトテーブルに優先して利用することができます。

デフォルトの字送り量テーブルは、プログラムインストール時に、自動的にプログラムファイルがあるフォルダーに保存されます。

このデフォルトのテーブルを含め、ユーザーにより変更することが可能となっております。

字送り量テーブルを作成するには、

- 字送りテーブル用 InDesign ドキュメントの作成・編集。
- SpicyLibra の機能を利用したテーブル化。

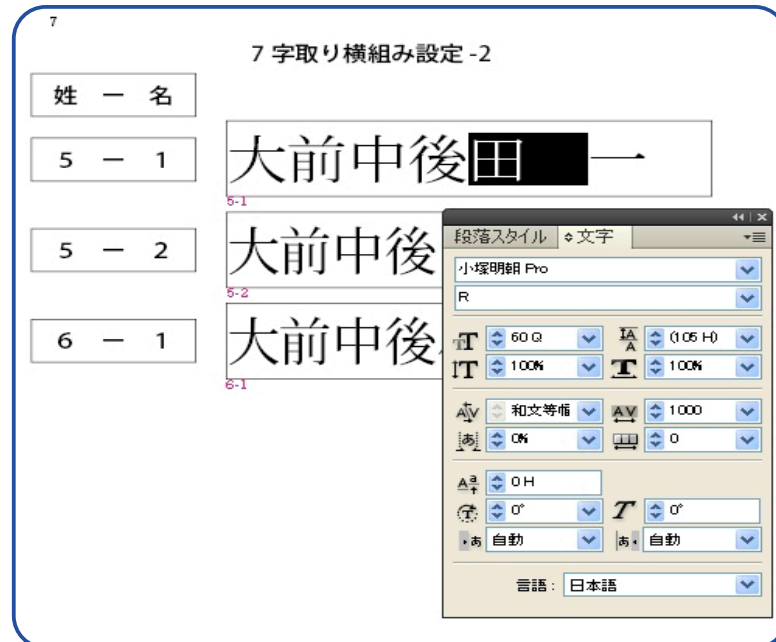
の、2 ステップが必要となります。

① 字送りテーブル用 InDesign ドキュメントの作成・編集

字送り量テーブル作成用の InDesign ドキュメントは、標準で 2 ファイルあり、縦組み用（**縦組字取設**

定.indd)、横組み用(横組字取設定.indd)となっています。

両方のファイルに5、7、8、9字取りのそれぞれの姓名文字列の組み合わせが、ひとつずつテキストフレームに組まれていますので、各テキストフレームに配置されている姓名文字列を、InDesignの機能である「左インデント(テキストフレーム左端と姓名文字列先頭文字との空き指定の場合)」、「字送り(もしくは後方への字空き)」、「横文字スケール」、「縦文字スケール」を用いて調整します(他の機能で組んでも有効となりません)。



上図に、横組み7字取りの一部分を掲載しますが、この中で使用されている姓名には、意味がありませんので、自由な文字に変更できます。重要なのは、文字数と各文字に設定された、字送り量、縦・横スケール、および、その段落に設定された左インデントのみです。

ご覧になってお分かりいただけるように、姓名の空きは、スペースではなく、必ず「字送り(1000emが全角)」で実現している点に注意してください。

テキストフレームに付いているラベル名が、各字取りの姓名文字数の組み合わせを表しています。このラベル名とテキストフレーム内の各文字に設定された上記の値をSpicyLibraの機能で読み取って、字取りテーブルを作成することになります。

字取りテーブル作成用のドキュメントファイル名は固定となっていますので、複数の字取りテーブルを作成する場合には、分かりやすいようにファイル名を変えておくなどして管理する必要があります。

【カスタム人名字取り用インデザインドキュメントのページ構成】

各ページには、そのページが何文字取りの定義を行っているのかを指定するテキストフレームを必ず1個配置します。そのテキストフレームには、「jisuu」(小文字)のフレーム名を付加します(枝番号は不要です)。

そして、このテキストフレーム内に半角数字で字取数を記述します(5~9まで)。

字取数の定義は、1頁に異なる字取数を設定することはできません。字取数が変わる場合には、新しいページからスタートします。

各々の字取数を設定するテキストフレームには、「姓文字数-名文字数」のフレーム名称を付けなければなりません。例えば、姓2文字で名1文字の場合には、「2-1」となります。このフレーム名称設定は、すべて半角数字と半角ハイフンで指定します。

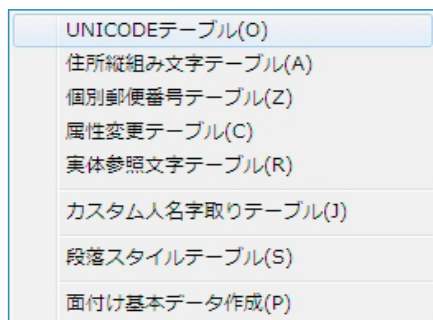
また、字取数の定義は、各字取で取りうるすべてを記述します。

すなわち、5字取であれば、姓と名の数の合計数が5以下になるすべての組み合わせということで、「1-1」、「1-2」、「1-3」、「1-4」、「2-1」、「2-2」、「2-3」、「2-4」、「3-1」、「3-2」、「4-1」ということになります。

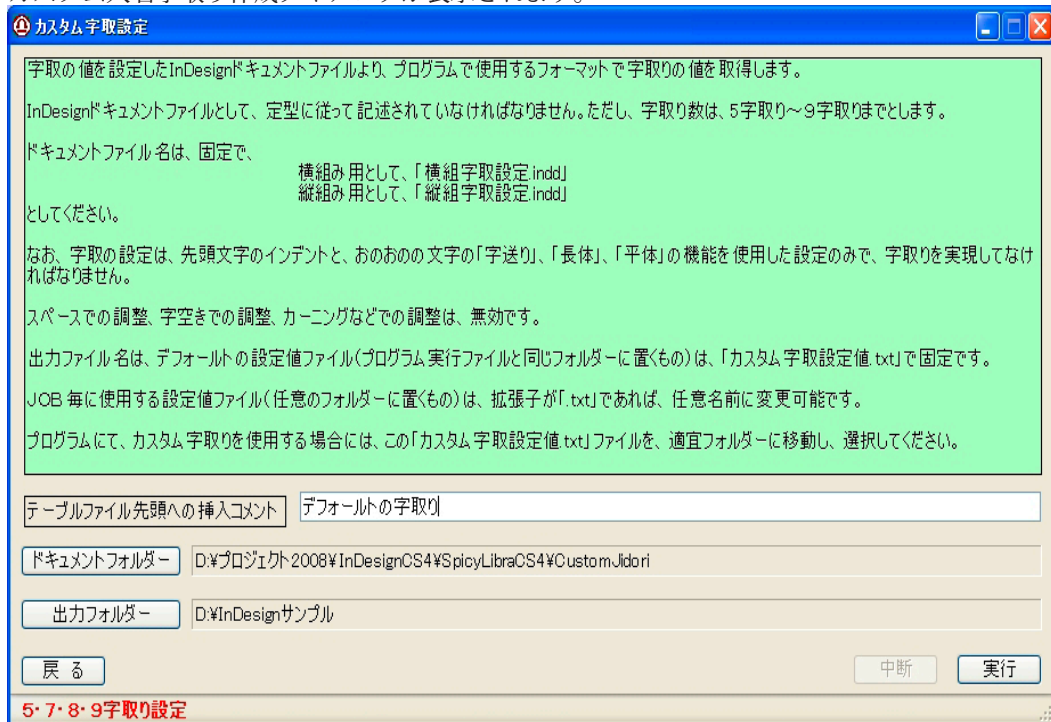
② SpicyLibraの機能を利用したテーブル化。

次に、①で作成した字取り用ドキュメントファイルから、プログラムで利用できる形式に設置した値を取り出しテーブル化することになります。

メニュー「テーブル編集」を選択し、プルダウンメニューから、「カスタム人名字取りテーブル」を選択します。



カスタム人名字取り作成ダイアログが表示されます。



- 「テーブルファイル先頭への挿入コメント」テキストボックスは、処理には関係しませんので、省略ができます。
複数のテーブルを用意する場合、テーブルの説明をするのに記入しておいたほうが間違いが起きにくいと思われます。
- 「ドキュメントフォルダー」ボタンをクリックし、「縦組字取設定 .indd」、「横組字取設定 .indd」が保存されているフォルダーを選択します。
- 「出力フォルダー」ボタンをクリックし、処理した字取り設定値ファイル（カスタム字取り設定値.txt）を保存するフォルダーを設定します。
- 「実行」ボタンをクリックし、字取りの値を抽出します。実行ボタンをクリックすると、2つのファイルを逐次オープンし、字取り設定値を読み取ります。
ファイル名「カスタム字取り設定値」は、デフォルト設定地としてプログラム実行ファイルのフォルダーに置く場合には、名称を変更することはできませんが、JOB 毎に使用する設定値ファイルとしては、適宜、自由なファイル名に変更することができます。

縦横+字取数+姓文字数+名文字数+文字番号, インデント, 字送り量, 水平スケール, 垂直スケール
T5111,0,3000,100,100

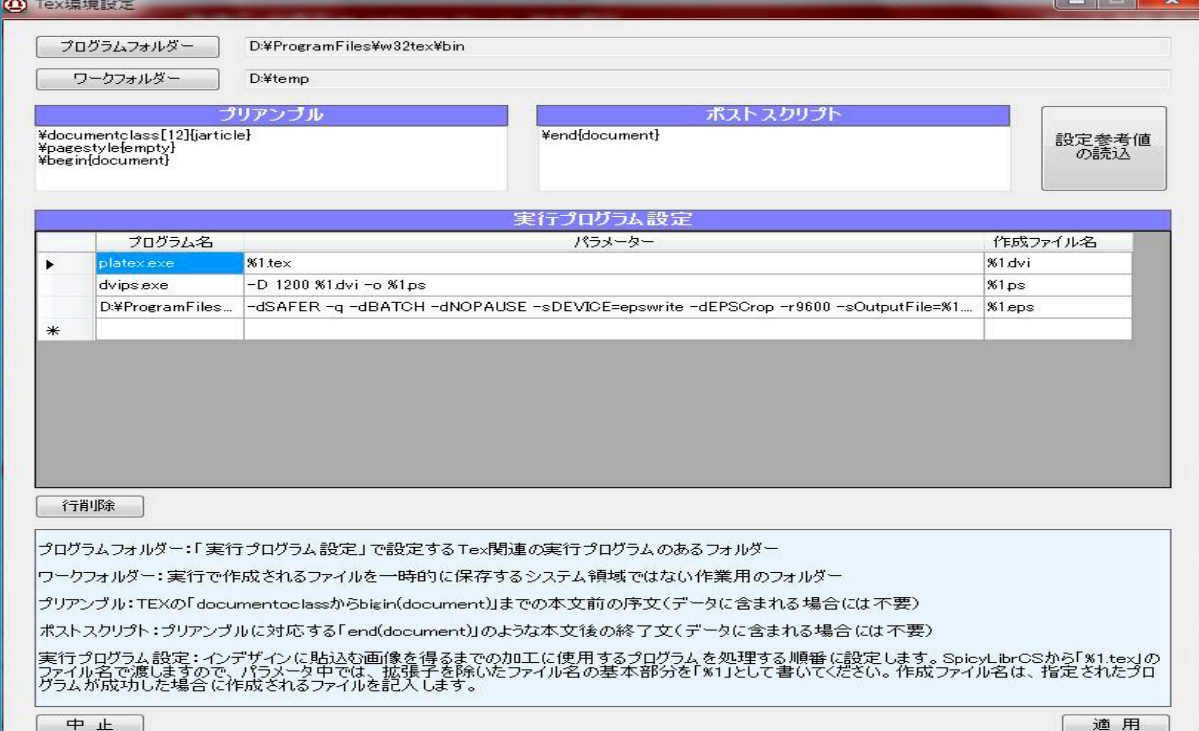
のような形式で設定値を保存します。

10) TEX 環境設定

グラフィックフレームへの TEX データ→EPS 変換画像の貼り込みや、テキストフレーム内での SpicyTag 「tex」を使用したアンカーオブジェクトとしての画像の貼り込みを行う場合、処理元の TEX データを EPS 画像に変換する必要があります。

SpicyLibra では、オン・ザ・フライにてこの変換を行うために、画像変換処理に必要な TEX 環境を予め登録しておく必要があります。

メインメニューの「テーブル編集 → TEX 環境設定」を選択すると、次の設定画面が表示されます。



Tex環境設定

プログラムフォルダー: D:\ProgramFiles\w32tex\bin
 ワークフォルダー: D:\temp

プリアンブル
`%documentclass[12]{article}`
`%paeestyleempty`
`%begin{document}`

ポストスクリプト
`%end{document}`

実行プログラム設定

プログラム名	パラメーター	作成ファイル名
▶ platex.exe	%1.tex	%1.dvi
dvips.exe	-D 1200 %1.dvi -o %1.ps	%1.ps
D:\ProgramFiles...	-dSAFER -q -dBATCHE -dNOPAUSE -sDEVICE=epswrite -dEPSCrop -r9600 -sOutputFile=%1...	%1.eps

実行プログラム設定: インデザインに貼込む画像を得るまでの加工に使用するプログラムを処理する順番に設定します。SpicyLibraから「%1.tex」のファイル名で渡しますので、パラメータ中では、拡張子を除いたファイル名の基本部分を「%1」として書いてください。作成ファイル名は、指定されたプログラムが成功した場合に作成されるファイルを記入します。

設定参考値の読み込み

実行プログラム設定表部分の行削除を行います。マウスで削除行を選択し、このボタンをクリックします。

中止 適用

- ・プログラムフォルダー → TEX 関連のプログラムが格納されているフォルダーを選択します。
- ・ワークフォルダー → TEX 関連プログラムがファイルの入出力に使用するフォルダーを選択します。
- ・プリアンブル / ポストスクリプト → 処理元の TEX データにプリアンブルやポストスクリプトが記述されていない場合に、アプリケーションのデフォルトとして TEX データに付加する文字列を設定します。
- ・実行プログラム設定 → 「TEX データ → EPS 画像」の変換処理をバッチファイルに記述する要領で、処理順に記述します。

●プログラム名には、実行するプログラム名を拡張子を含めて記述します。上記のプログラムフォルダーに格納されているプログラムを設定する場合には、プログラム名のみで構いませんが、別のフォルダーにある場合には、絶対パスで記述します。

●パラメータには、当該の実行プログラムに必要なコマンドパラメータを記述します。

これらの実行プログラムには、入出力をファイル単位で指定しますので、媒介するファイル名の基本部分（拡張子を除いた部分）を、半角英数字「%1」という変数名で記述します。

この変数名には、SpicyLibra が呼び出すときに、具体的なファイル名に置き換えられます。

●作成ファイル名には、当該プログラムを実行したときに出力されるファイル名を拡張子を含めて記述します（ファイル名の基本部分は必ず変数 %1 とします）。

設定された作成ファイル名が SpicyLibra にて呼び出し実行された後に、実際作成されたか否かをチェックして、当該プログラムの実行が正常に終了したかを判断します。

- ・「設定参考値」ボタン → 本画面の記述方法がわからない場合に、SpicyLibra 内部に記述されている参考の値を画面の設定部に取り込みます。それを参考に正しい記述を行う場合に使用します。
- ・「行削除」ボタン → 実行プログラム設定表部分の行削除を行います。マウスで削除行を選択し、このボタンをクリックします。
- ・「中止」ボタン → 設定した値を適用せずに呼び出し画面に戻ります。
- ・「適用」ボタン → 設定した値を登録して呼び出し画面に戻ります。

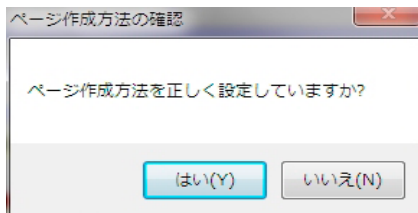
※ platex.gswin64c などのように、関連するプログラムは全て 64 ビット版を使用してください。

2. 基本パス設定

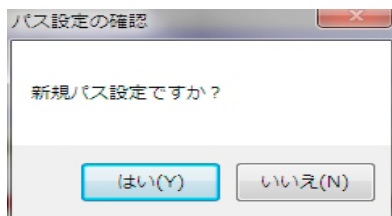
「基本パス設定」ボタンをクリックし、「基本ファイル・ディレクトリのパス設定」画面を開きます。各設定ボタンをクリックすると、選択用画面が開くので、そこで必要なファイルやディレクトリを選択・指示してください。

ただし、基本パス設定の画面に移る前に、「入力ファイル形式」欄で取り込む対象となる**基本処理ファイルの形式**と「ページ作成方法」でページの処理方法をあらかじめ選択指定しておいてください。ミス防止のため、選択されたファイル形式に該当する拡張子の処理ファイルしか選択できなくなります。ボタンをクリックすると、下図の確認ダイアログ画面が表示されます。

再度、入力ファイル形式とページ作成方法が正しいか確認し、正しければ「はい」を設定のし直しをする場合には「いいえ」を選択してください。

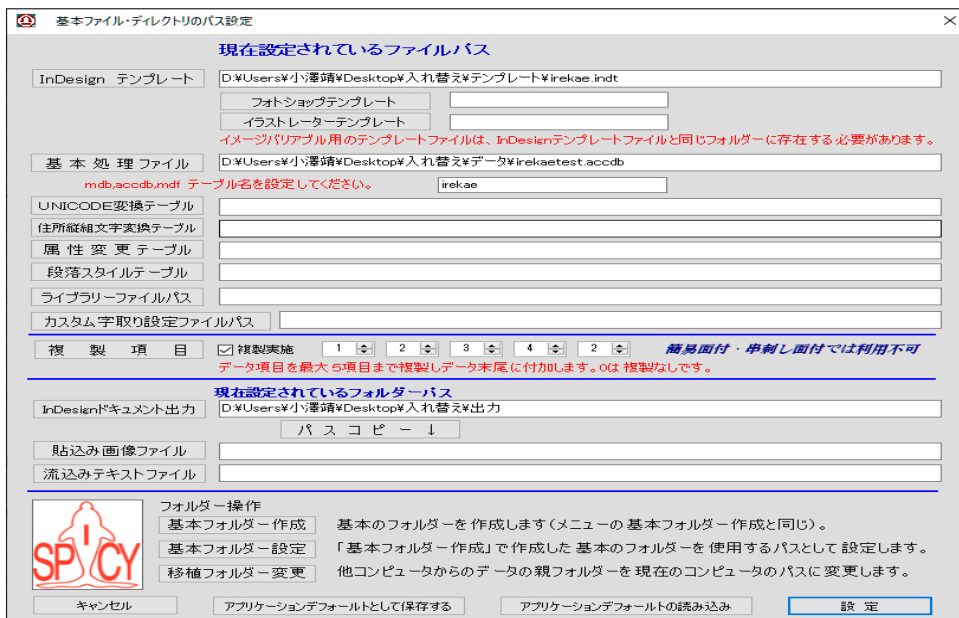


ここで「はい」を選択すると、下図の確認ダイアログ画面が表示されます。



新規にパス設定を行う場合には「はい」を、すでに読み込まれている・設定されている内容を変更する場合には「いいえ」を選択してください。

基本パス設定ダイアログ画面が表示されます。



1) InDesign テンプレート (必須)

……使用する **InDesign テンプレート**を指示してください。

●フォトショップテンプレート

……フォトショップでイメージバリアブル処理をする際のテンプレートファイル名

●イラストレータテンプレート

……イラストレータでイメージバリアブル処理をする際のテンプレートファイル名

2) 基本処理ファイル (必須)

……流し込みの基本となるデータファイルを指示してください。

基本処理ファイル名で XML・Excel・Access のファイルを指定した場合は、必ず、テーブル名やシート名などを指定してください。

① XML レコードタグのタグ名を設定してください。

XML → 「XML レコードタグ名」を入力してください。

② Excel シート名または範囲ブロック名を設定してください。

Excel → 「Excel シート名」または「Excel シート取得範囲名」を入力してください。

設定した文字列がシート名の場合には、「シート名」チェックボックスにチェックを入れてください。

また、一行目をヘッダーとしてデータレコードとみなさない場合には、「1 行目をヘッダーとする」チェックボックスにチェックを入れてください。

③ mdb,accdb,mdf テーブル名を設定してください。

Access → 「MDB、ACCDB テーブル名」を入力してください。

3) UNICODE 変換テーブル

……流し込み時に使用する UNICODE 変換テーブルを入力してください。

4) 住所縦組文字変換テーブル

……流し込み時に使用する住所縦組文字変換テーブルを入力してください。

5) 属性変更テーブル

……挿入された文字列の文字属性を部分的に変更したり、流し込まれるテキストフレームの属性を部分的に変更したりする時に使用する属性変更テーブルを入力してください。

6) 段落スタイルテーブル

……挿入された文字列の段落に段落スタイルスタイルを適用する場合の、条件の設定を行ったテーブルファイルを指定してください。

ここで指定するのは、基本のファイル名です。使用する段落スタイルテーブルが複数ある場合でも、設定するのは基本のファイルのみです。

7) ライブラリーファイル

……段落スタイルを適用する場合などに、段落判別の文字として使用した文字・記号類をアセットに置き換える時に使用するライブラリーファイルを指定してください。

8) カスタム字取り設定ファイルパス

……デフォルトではなく、この処理に固有の設定ファイルを使用する場合に、指定してください。

9) InDesign ドキュメント出力 (必須)

……「ファイル出力」を行う場合の出力先ディレクトリを入力してください。

10) 流し込みテキストファイル

……「流し込み用テキスト」が保存してあるディレクトリを入力してください。

11) 貼込み画像ファイル

……「貼り込み用画像」が保存してあるディレクトリを入力してください。

12) 複製項目

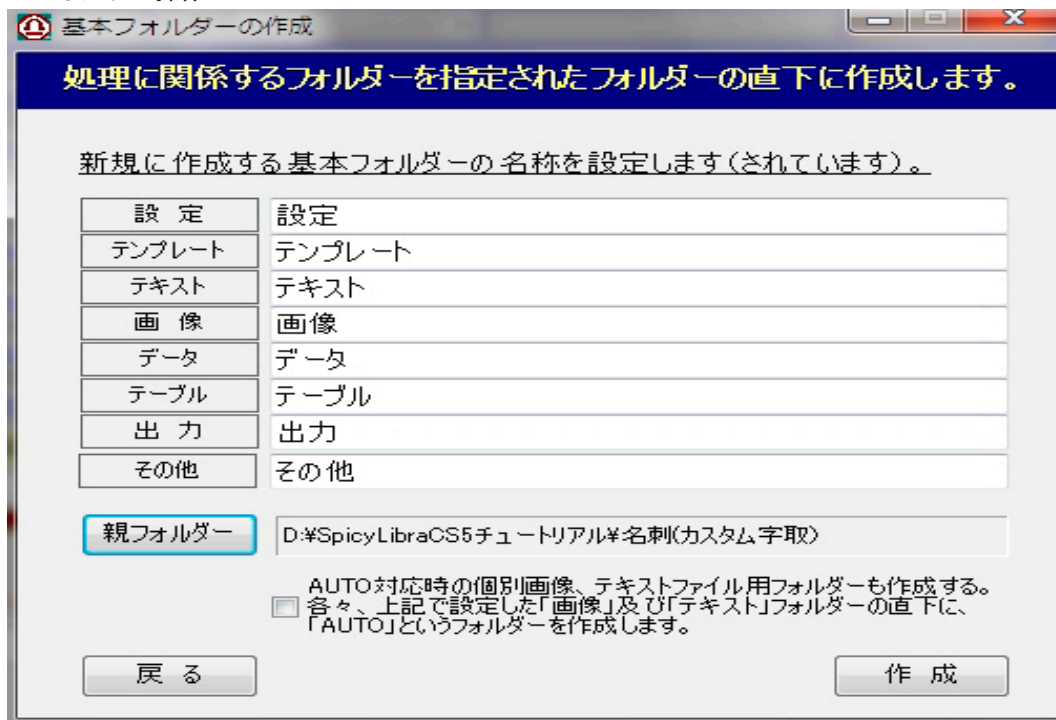
……処理データの項目を最大 5 項目まで複製し処理データの末尾に付加します。複製された項目は、元の処理データ項目と同じとして扱われます。これまで、同一の項目を複数のフレームに挿入したといったような場合には、処理データにおいて項目を複製したものを用意する必要がありましたが、これを最大 5 項目（複製後の処理データの差大宇目数は 100 項目以下）まで、付加することが可能です。

……項目複製を行うには、「複製実施」チェックボックスをチェックし、数値アップダウンコントロールに複製する処理データ項目の項目番号（先頭横目を 1 番とする）を、数値アップダウンコントロールの左サイドより順番に設定していきます。同一項目を複数回設定することも可能です。最大 5 項目（複製後の処理データの差大宇目数は 100 項目以下）まで付加することが可能です。数値アップダウンコントロールの値が 0 のものは、複製しないことを表します。また、設定する項目番号は、元の処理データの最大目番号内でなければなりません。

複製項目を自死した場合には、必ず「テーブル作成」を行ってください。

簡易面付・串刺し面付では利用できませんので注意してください。

■フォルダー操作



フォルダー操作は、1回の処理に必要なフォルダーの設定を基本的な構造として規格化し新規の処理関連の設定(JOB 設定と呼びます)や他のコンピューターから処理に必要な一連のデータを移行してきた時に、簡単かつ間違いない方法で実行できるようにするものです。

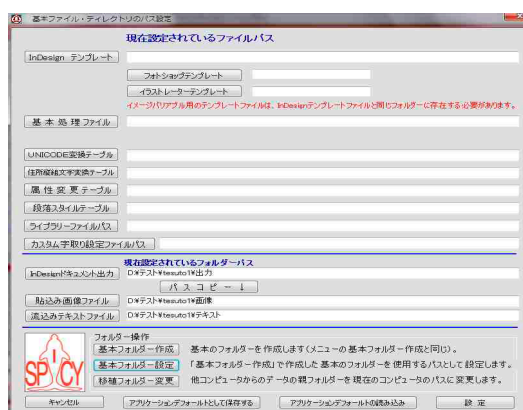
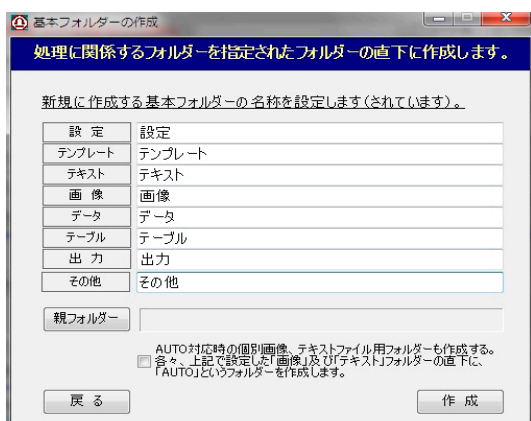
基本的には、一連のデータやフォルダーを一つにまとめるフォルダー(親フォルダーまたはルートフォルダーと呼びます)を一つ設定し、その直下に、それぞれ意味のあるまとまりでフォルダーを配し、そのフォルダーの中に、関連するファイルを入れて行くという、いわゆる木(ツリー)構造形式でのJOB管理を行うものです(この一連のフォルダーのことをJOB フォルダーと呼びます)。

フォルダー操作には、「基本フォルダー作成」、「基本フォルダー設定」、「移植フォルダー変更」の3種類の機能があります。

「**基本フォルダー作成**」は、新規にJOB フォルダーを作成構築するもので、「基本フォルダー作成」ボタンをクリックすると、親フォルダーに配置するすべてのフォルダーの名称が定義でき、常に、新規JOB フォルダーを作成する時に自動的に適用されるようになります。

この「基本フォルダー作成」機能は、メイン画面のファイルメニューで「基本フォルダーの作成」サブメニューを選択した時と同じ処理となります。

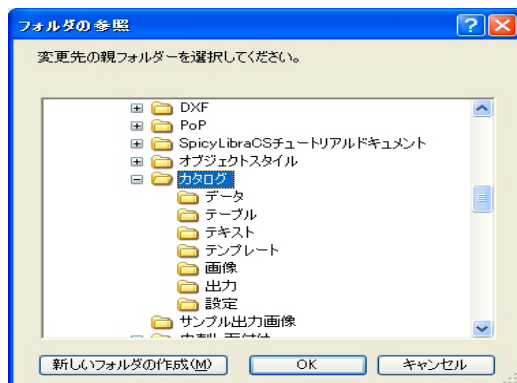
基本フォルダー作成ダイアログの画面(上図)で、基本パス設定に利用されるフォルダー一覧に対して、現在登録されているフォルダー名称が、エディットテキストボックスに表示されていますので、名称を変更したい場合には、テキストボックスの文字列を変更します。



親フォルダーを選択したのち、「作成」ボタンをクリックすると、「親フォルダー」の直下に、上記フォルダー一覧のフォルダーが作成されます。

前頁図の設定で作成すると、以下のような JOB フォルダーが作成されることになります。

名刺 (カスタム字取) ----- 「設定
トテンプレート
トテキスト
ト画像
トデータ
トテーブル
ト出力
トその他



作成を実行することで、上記のフォルダー名称を変更した場合には、デフォルトのフォルダー名称として保存され、次回からは、基本フォルダー作成ダイアログを表示する際、エディットテキストボックスに表示されるようになります。なお、画面中のチェックボックスは、ホットフォルダー機能を使用する場合、その時だけ使用する画像ファイルやテキストファイルを格納するために「AUTO」というフォルダーを画像・テキストフォルダー直下に作成する時にチェックを入れます。

「基本フォルダー作成」を行っただけでは、基本パス設定の画面には、結果が反映されませんので、次の「基本フォルダー設定」にて設定した親フォルダーを選択し、基本パス設定に反映されるようにします。

「**基本フォルダー設定**」は、新規に JOB フォルダーを基本パス設定に利用しようとする時に、JOB 親フォルダーを選択することで、関連のフォルダーを定義できるようにします。

「**基本フォルダー設定**」ダイアログで、JOB フォルダーの親フォルダーを選択し、「設定」ボタンをクリックすると、右上図のように、ディレクトリーを選択する部分には、フォルダーパスが表示されますが、その他の部分は表示されません、

表示されない部分は、ファイルパスが要求される部分であり、設定した親フォルダーは、各々のファイル選択ダイアログを表示するときに初期フォルダーとして利用されます。また、この設定を行うと、もし基本パス設定がされていた場合、それらは削除されますので注意してください。

「**移植フォルダー変更**」は、他のコンピュータから JOB フォルダーを持ってきた時に、保存先の親フォルダーを選択することで、JOB フォルダー関連のパスを一括で変更するものです。

「**パスコピー**」ボタンをクリックすると、「流込みテキストファイル」欄と「貼込み画像ファイル」欄に、「InDesign ドキュメント出力」欄と同じパス名がコピーされます。階層の深い同列のフォルダを指定する場合などに使用します。

特定の「[基本ファイル・ディレクトリのパス設定](#)」をデフォルト値として設定したい場合には、「[アプリケーションデフォルトとして保存する](#)」ボタンをクリックすると、現在設定されている各項目がデフォルト値として保存されます。呼び出したい場合は、「[アプリケーションデフォルトの読み込み](#)」ボタンをクリックしてください。

※フレーム数の増減、フレーム名の変更を伴うテンプレート変更の場合は、「テーブルの作成」からやり直してください。

- ② 必要なファイルとディレクトリの[指示を終了したら](#)、「[設定](#)」ボタンをクリックして、「SpicyLibra」のメイン画面に戻ってください。ここで設定した基本パスは、メイン画面で定義ファイルとして保存しない限り、一時的な設定ということになります。

<< mdفデータベースファイルの複数テーブルへの問い合わせとデータ取得>> ← SpicyLibraCC2019 より機能が廃止されました。

SQL Server にて使用されるデータベースファイル (mdf ファイル) を SQL Server Express Edition がインストールされている場合、mdf ファイルをデータベースエンジンにアタッチして利用します。

この場合、SpicyLibra のメイン機能にて使用する時にもユーティリティ機能でのファイルフォーマット変換の場合でも同じなのですが、使用する mdf ファイル名は当然ながら指定し、同時に、「テーブル名」も指定する必要があります。

通常は、このテーブル名をプログラム内で使用し、内部的に SQL 文を組み立ててデータベースに問い合わせを行っております。

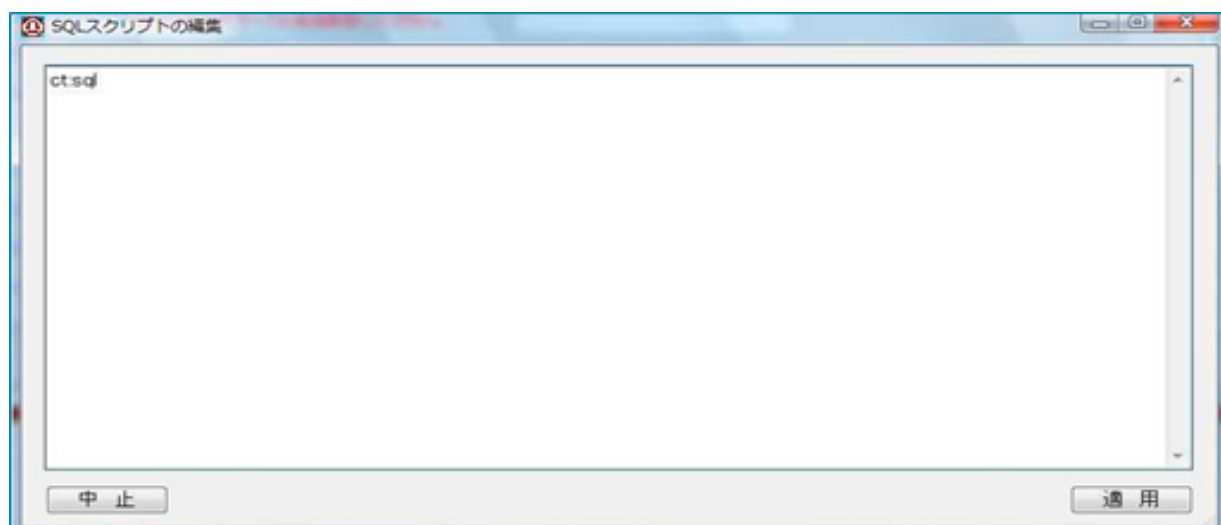
そこで、このテーブル名を記入するテキストボックスにおいて、テーブル名の代わりに、SQL 文を直接記入し、そのままデータベースエンジンに問い合わせることができるようにしました。

このモードを利用する場合、SpicyLibra では、何ら SQL 文の構文チェックなどを行っておりません。必ず、SQL 文が正しく機能することを確認のうえ、ご利用ください。また、この機能を利用する場合には、SQL 文の頭に「ct:」の文字 (いずれも半角) を付けて設定してください。

```
ct:select LastName, FirstName from Employees left join Categories on Employees.ReportsTo = Categories.
CategoryID
```

のように、ct; (ct + 半角セミコロン「;」) が必要です。

テーブル名を記述するテキストボックスにてダブルクリックすると、テーブル名記述用エディットウィンドウが表示されます。



3. テーブル作成

前項の「基本パス設定」で指示した処理ファイルやテンプレートファイルを読み取り、処理データ項目とテンプレート中のフレームとの対応テーブル（マッピング）を作成します。

- ① 「基本パス設定」を終了し、メイン画面に戻ったら、「ページ作成方法」の中から、ページ展開したい方式の項を**チェック**してください。

1頁連続(毎頁同一フレーム配置)
2頁連続(両頁で異フレーム配置)
2頁連続(1レコードを2頁に配置)
簡易PDF面付け
くし刺し面付け(全ドキュメント連続)
くし刺し面付け(個別ドキュメント適用)

1) 1ページ連続 (毎頁同一フレーム配置)

…… テンプレートの**定型1ページ**のレイアウトが**連続**する場合

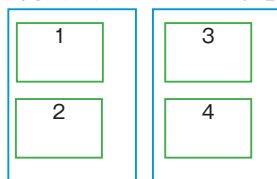
2) 2ページ連続 (両頁で異フレーム配置)

…… テンプレートの**1ページ目**と**2ページ目**レイアウトが異なり、表・裏・表・裏……のように、レコードがページ毎に異なる**定型2ページ**に流し込まれ**連続**する場合。

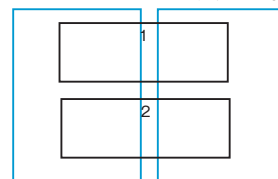
3) 2ページ連続 (1レコードを2頁に配置)

…… テンプレートの**1ページ目**と**2ページ目**を見開きページのように**連続発生**する場合
データの1レコードが2頁にわたって流し込まれるという場合です。

「両頁で異フレーム配置」



「1レコードを2頁に配置」



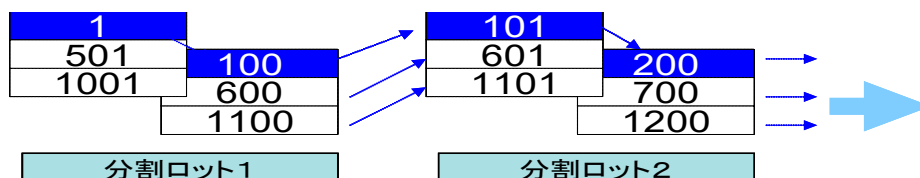
(上図は、2ページ連続の概念図です。また、図内の数字はレコード番号です。)

4) 簡易 PDF 面付け

…… 「PDF 面付け基本データ」を利用して **PDF データの面付け処理**をする場合

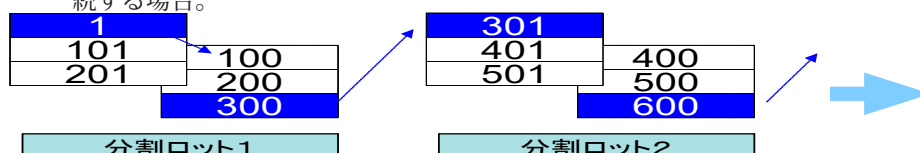
5) 串刺し面付け (全ドキュメント連続)

…… チケットの番号のように、**図柄が同じで番号部分のみが規則的に変化する**面付け処理をする場合で、分割ドキュメントを指定したときに、番号が、**全ドキュメント**を通じて、**1面付けの位置で連続**する場合。



6) 串刺し面付け (個別ドキュメント適用)

…… チケットの番号のように、**図柄が同じで番号部分のみが規則的に変化する**面付け処理をする場合で、分割ドキュメントを指定したときに、番号が、**個別のドキュメントの面付けで連続**し、最後のページの最後の面付けの番号が、分割された次ドキュメントの1ページ目先頭の面付けの番号に**連続**する場合。



② 次に、「テーブル作成」ボタンをクリックしてください。

SpicyLibra 2022 Ver.11.0 for InDesign 2022 on Windows

ファイル(F) 編集(E) テーブル編集(T) フォルダー監視(W) ユーティリティ(U) ヘルプ(H)

処理データ項目 ⇄ InDesignフレーム 対応設定 フレーム名称選択候補

項目番号	データ項目名	データ種類	処理区分	パラメータ	挿入先 フレーム名	フレーム名称 (*は2頁のフレーム)
1		不使用・改頁	不使用			
2		不使用・改頁	不使用			
3		不使用・改頁	不使用			
4		不使用・改頁	不使用			
5		不使用・改頁	不使用			
6		不使用・改頁	不使用			
7		不使用・改頁	不使用			
8		不使用・改頁	不使用			
9		不使用・改頁	不使用			
10		不使用・改頁	不使用			

郵便力カスタマーバーコード作成 ☐ 町域名区切り 郵便番号項目 + 住所項目 = バーコードフレーム

入力ファイル形式 CSV 出力ドキュメント名 出力指定

処理ファイル選択 D:\Temp\国際電話データ\国際電話データ.csv

あふれ処理 縮小ステップ 0 % 最大縮小率 100 %

処理レコード番号(PDF頁数) 開始 1 終了 1 ドキュメント方向 開始 1 終了 1

ページ分割 真分割を行う 分割頁数 8 ブック作成 開始頁/ノンブル 0 見開き綴じ方向 単頁

PDF貼込:境界線ボックスの場合のレイヤー選択 表示レイヤーのみ

件数/頁 1 件 処理総件数 0 更新

ページ作成方法 テーブル作成前に正しく設定してください

進行状況

©有限会社スパイシーソフト® バス設定を終了しました。 SpicyLibra 2022 Ver.11.0

データファイルの一行目の読み込みと InDesign テンプレートファイルからフレーム名称を読み取ります。

その結果、「データ例」欄に、CSV・タブ区切りデータの場合には先頭レコードの各項目内用が、そのほかのデータの場合には各データの列名・項目名が示されます。

「フレーム名称」欄にはテンプレート上で設定した各フレームの名称が示されます。

SpicyLibra 2022 Ver.11.0 for InDesign 2022 on Windows

ファイル(F) 編集(E) テーブル編集(T) フォルダー監視(W) ユーティリティ(U) ヘルプ(H)

処理データ項目 ⇄ InDesignフレーム 対応設定 フレーム名称選択候補

項目番号	データ項目名	データ種類	処理区分	パラメータ	挿入先 フレーム名	フレーム名称 (*は2頁のフレーム)
1	山田太郎	不使用・改頁	不使用			国際電話
2	東京都品川区南大井	不使用・改頁	不使用			国内電話
3	03-3654-8872	不使用・改頁	不使用			住所
4	03-3654-8872	不使用・改頁	不使用			姓名
5		不使用・改頁	不使用			
6		不使用・改頁	不使用			
7		不使用・改頁	不使用			
8		不使用・改頁	不使用			
9		不使用・改頁	不使用			
10		不使用・改頁	不使用			

郵便力カスタマーバーコード作成 ☐ 町域名区切り 郵便番号項目 + 住所項目 = バーコードフレーム

入力ファイル形式 CSV 出力ドキュメント名 出力指定

処理ファイル選択 D:\Temp\国際電話データ\国際電話データ.csv

あふれ処理 縮小ステップ 0 % 最大縮小率 100 %

処理レコード番号(PDF頁数) 開始 1 終了 2 ドキュメント方向 開始 1 終了 1

ページ分割 真分割を行う 分割頁数 8 ブック作成 開始頁/ノンブル 0 見開き綴じ方向 単頁

PDF貼込:境界線ボックスの場合のレイヤー選択 表示レイヤーのみ

件数/頁 2 件 処理総件数 2 更新

ページ作成方法 テーブル作成前に正しく設定してください

進行状況

©有限会社スパイシーソフト® テーブル編集用データの読み込みを終わりました。 SpicyLibra 2022 Ver.11.0

フレーム名称欄で、「*」が頭に付いて示されているフレーム名が表示される場合には、テンプレートの2ページ目に作成されているフレームを意味します。

4. 「処理データ項目－InDesign フレーム対応設定」作業

前項の「テーブル作成」で呼び出された各要素を元に、「対応設定」欄で、流し込みの条件を設定します。

対応設定 (マッピング) は、データ項目に対して、データの種類と処理方法を明示し、それに対して「流し込むフレームをあてはめる」という考え方になります。逆ではないので注意してください。

① 番号

1レコード中の項目番号を表示します。データ中にはないものですが、パラメータなどで、項目番号を利用する場合の目安となります。1から始まります。

② データ例

読み込んだ基本処理ファイルが、CSV ファイル・タブ区切りテキストの場合は先頭行の全項目が表示され、XML・Excel シート・Access テーブル形式の場合は各要素名・列名・項目名が表示されます。11 項目以上のファイルを読み込むと、「対応設定」枠の右側にスクロールバーが表示されます。

ここでは項目名や各項目の内容は変更できません。変更をしたい時は、元ファイルに戻って変更し、再度「テーブル作成」を行ってください。

③ データ種類と処理区分

「データ例」で示された各項目のデータの種類とその処理方法を指定します。一覧の中から選択して流し込みの条件を指定してください。

1) 不使用・改頁

表示された項目を使用しない時に「不使用」を選択します。「不使用」に設定された項目は処理対象外項目となります。

「改頁」は「処理区分」で条件を選択します。

「(文字列不一致)」を選択した場合は、指定された項目の文字列が直前に流し込んだ同じ項目の文字列と異なる場合、改頁処理を行います。

「(数字桁数不一致)」は、指定された項目の数字 (2 - 5 桁) の桁の数値が直前に流し込んだ同じ項目の桁の数値と異なる場合、改頁処理を行います。(デフォルトは2桁目です)

「改頁」の場合、流し込むフレームが設定されていなければ、単に、改頁の判定に用いるだけとなりますが、フレームが設定されている場合には、改頁判定と同時に、文字列の単純挿入として、フレームに流し込まれます。改頁の拡張機能、複数マスターの適用は次のようになります。

改頁は従来、2つのレコードの特定項目のデータを比較し、一致しない場合に改頁を行うということをしていました。

一つが文字列の比較で、たとえば、2項目目の内容が

データ種類	処理区分	パラメータ	フレーム名称指定
文字列	単純挿入		番号
文字列	単純挿入	A,Z...1..B,0,0	名前
文字列	数字フラグ	様/殿/ちゃん	
文字差込ファイル	非GF-書式保持		アドレス
文字差込ファイル	%1%		アドレス

XXXXXX, 東京都、BBBBBB、CCCCC

YYYYYY, 京都府、GGGGGG、CCCCC

となっていれば、2項目目の内容が2つのレコードで異なるので、「YYYYYY」で始まるレコードは次ページに送ります。

もう一つが、数値としての比較で、特定桁で比較して、たとえば、2項目目の数字を3桁目の数値を比較す

るとすれば、

XXXXX, 11345、BBBBBB、CCCCC

YYYYY, 11556、GGGGGG、CCCCC

というレコードで見ると、「11345 と 11556」の3桁目の値が異なるので、「YYYYY」で始まるレコードは次ページに送ります。

Ver4.0 より、レコード同士の比較だけではなく、**パラメータ欄に設定した文字列と指定項目を比較**して改頁を行う方法も加えました。**比較の仕方を「全部一致」、「一部一致」のいずれかでいい**、改頁を行います。

たとえば、パラメータ欄に「東京」と設定してあり、

XXXXX, 東京都、BBBBBB、CCCCC

YYYYY, 京都府、GGGGGG、CCCCC

というレコードがあり、2項目目でチェックするとすると、「全部一致」条件では、

「東京都」 != 「東京」

となりますので、改頁は起こりません。

しかし、「一部一致」条件では、

「東京都」 ⊃ 「東京」

となりますので、改頁が行われます。

改頁が実行されるとき、改頁された以降の頁に対し、マスターを任意に適用できます。マスターは、次の改頁処理が行われ、適用マスターの変更があるまで、指定されたマスターが適用されます。

マスターページにあるラベル名を付加されたフレームオブジェクトは、ドキュメントページにおいてオーバーライド可に属性変更され、マスター上のフレームが、ドキュメントページ上で可変データの書き込みができることとなります。すなわち、**SpicyLibra** の処理対象フレームとして扱えることとなります。

改頁が行われる時に、どのマスターを適用するかは、パラメータで設定した、データレコードの項目に記述されているものとします。

また、**ドキュメントページの最初に適用するマスターは、SpicyLibra のメイン画面でマスターの設定があれば、そのマスターを、ない場合には、データ中で設定されたマスターが適用**されます。いずれの設定もなければ、マスターは適用されませんので注意してください。

2) 文字列

CSV・タブ区切りテキストファイル、XML、Excel シート、Access テーブルファイルの各項目の文字を、文字列としてそのまま流し込む時に「文字列」を選択します。流し込まれる条件はフレームの設定条件に依存します。

流し込みの対象となるフレームは、「テキストフレーム」もしくはテキストフレーム以外(ペンツール、線ツール、長方形ツール、楕円形ツール、多角形ツールにて作成されたオブジェクトで、フレーム内にテキストが配置されていないオブジェクト)の**「パステキスト」**となります。

ただし、**「パステキスト」に対して行える処理は、「単純挿入」と「文字差し替え」のみ**となり、「単純挿入」では複数パラグラフは扱えません。また、「文字差し替え」では、% 1 %のみのプレースホルダーとなります。

処理方法には次のものがあり、パラメータをとるものもあります。各項目のパラメータ設定の詳細に関しては、**「第 7 章 パラメータ設定」を参照**してください。

(a) 単純挿入

データの文字列を**単純な文字列として流し込み**ます。

ただし、文字列中に、(シフト JIS コード = 0x7C・UNICODE = 0x007C - 1 バイト文字)の**「|」を挿入しておく**と、そこで**「改行」が発生**します。特定の文字で改行をしたい場合は、パラメータ欄にその文字を入力しておく、その文字が改行コードに変換されます。

パラメータの設定で、部分文字列の属性の変更、段落スタイルの適用、ブロック文字列への文字スタイルの適用が可能となっています。

「パステキスト」では、複数パラグラフの挿入はサポートされません。また、各種属性変更もサポート外となります。

ここで、**ブロック文字列のスタイル適用方法は次のような考え方となります。**

単純挿入の文字列にブロックで、異なる文字スタイルを適用する時に、たとえば、あるフレームに、最大

3個のブロックの文字列が来ると仮定した場合。

文字スタイルとして必要がある、

3ブロックの分として

ブロック 31, ブロック 32, ブロック 33

2ブロックの分として

ブロック 21, ブロック 22

1ブロックの分として

ブロック 11

を作成しなければなりません。

また、別フレームには、別の文字スタイルを適用したいとすると、スタイル開始番号を上記の「0」とは異なる値、たとえば、文字スタイル開始番号を「1」として、

3ブロックの分としては

ブロック 131, ブロック 132, ブロック 133

2ブロックの分としては

ブロック 121, ブロック 122

1ブロックの分としては

ブロック 111

を作成しなければなりません。

すなはち、文字スタイル名は、

ブロック + 文字スタイル開始番号 + ブロック数 + ブロックインデックス番号

という構成になります。(文字スタイル開始番号は、0の場合省略)

なお、適用したくない部分があるとすれば、当該文字スタイルをテンプレートに準備しないことで、実現できます。たとえば、1ブロックのみの時には、適用しないとすれば、2、3ブロックの文字スタイルを作成しておけばよいことになります。

(b) 人名5字取り（活版方式）

姓と名の間に「□（全角スペース）」を入れておくと、**5字取り処理**を行います(姓と名の別項目入力も可能。姓名別項目入力およびモノ・グループルビ対応、使用領域文字フォント変換、以下人名字取は同じ)。

(c) 人名7字取り（活版方式）

姓と名の間に「□（全角スペース）」を入れておくと、**7字取り処理**を行います。

(d) 人名5字取り1（写植方式）

姓と名の間に「□（全角スペース）」を入れておくと、**全角スペースと半角スペースを組み合わせる挿入しながら5字取り処理**を行います。

(e) 人名7字取り2（写植方式）

姓と名の間に「□（全角スペース）」を入れておくと、**全角スペースと半角スペースを組み合わせる挿入しながら7字取り処理**を行います。

(注) 上記人名字取処理では、1バイトコード及び改行コードが含まれている場合は、人名字取り処理は行われません。

(f) 数字桁取り

文字列が連続した数字の時、**3桁ごとに「,（半角カンマ）」を挿入**します。

(g) 数字フラグ

指定した**数字（1バイトー半角の数字で、必ず0から割り当てる）**に、対応させた文字を自動的に挿入する時などに使用します。「様／殿／御中」と「,（1バイトー半角のスラッシュ）」で区切った文字をパラメータ欄に入力しておくと、入力データが「0」の時は「様」が、文字列が「1」の時は「殿」が、文字列が「2」の時は「御中」が、自動的に割り当てられ挿入されます。「0」に割り当てがない時でも、「／殿／御中」と

区切りの「/」は必ず入れてください。「0」から「9」まで割り当てることができます。また、数値を文字列ではなく、データレコードの項目番号、オブジェクトスタイル、アセットに対応させることも可能です。

(h) 柱（先頭）

「柱」とは、1 ページに流れるレコード数が複数の時、その中の最初のレコードや最後のレコードから必要な文字列を抜き取って、該当フレームの枝番が1 のフレームに表示させる項目のことを意味します。

パラメータにて抽出文字数を指定することにより、1 ページ中の先頭レコードの指定された文字列の行頭から抽出文字数分の文字が流し込まれます。

抽出文字数の指定がない場合、もしくは、文字列の長さが指定された抽出文字数に満たない場合には、全ての文字列が流し込まれます（以下、柱に関してはすべて同じです）。

(i) 柱（末尾）

パラメータにて抽出文字数を指定することにより、1 ページ中の最終レコードの指定された項目の文字列の行頭から抽出文字数分の文字が流し込まれます。

(j) 柱（先頭 - 末尾）

（先頭）と（末尾）を組み合わせて処理したい場合（「あいうえーさし」のように）に使用します。

(k) 柱（全件結合）

先頭と末尾のレコードからだけではなく、1 ページ中の全レコードから必要な文字数を抽出したい時に使用します。結びたい文字列がある時は、（先頭 - 末尾）と同様に、数字の後に必要な文字を入れてください。

(l) 住所漢数字変換

元ファイルの住所項目が算用数字で表記されているものを、縦組みの漢数字に変換しながら流し込む時に選択します。指定された「住所縦組文字変換テーブル」にのっとり、文字変換が行われます。ただし、算用数字に関しては、このテーブルとは無関係に漢数字に変換します。

(m) 漢数字変換

単純に算用数字を漢数字に変換したい時に選択します。「10」は「十」とはならず「一〇」となります。

(n) 漢数字桁取り変換

単純に算用数字を漢数字に変換しながら、桁取りとして「、」を挿入したい時に選択します。

(o) 〒番号枠

算用数字（半角・全角）を半角数字に統一すると同時に、「〒」マークや「-」などの余分なものを省いて数字だけにし、前半3文字と後半4文字に分け、あるいは1文字ずつに分け、おのおののフレームに流し込みます。

前3桁と後4桁を2つのフレームに分けて流し込みたい場合には、前3桁用のフレーム名を郵便番号項目と連動させ、パラメータ欄に後4桁を流すフレーム名を直接入力してください。

また、7桁の数字を全て別個のテキストフレームに流し込む場合には、パラメータ欄に半角スラッシュで区切って、先頭数字を除いた6ケタの数字を挿入するテキストフレーム名を6個指定してください。

パラメータ欄が空白の場合は、指定した1つのフレームの中に、7桁の数字部分が全て流し込まれます。

(p) 〒番号枠1

漢数字を半角算用数字に直して、「〒番号枠」と同様な処理をします。漢数字の十があった場合には、単に0と置き換えます。基本的には、十はないものとします。

(q) Code39 バーコード（フォント）

Code39 は、英数字 43 キャラクター（0～9、A～Z、-、.,、\$、/、+、%、*）を表現でき、1つの文字を9本のバー、スペースで表しますが、この9本のうち、3本が太いということから、CODE39 の名前がついているといわれています。

Code39 は、スタート・ストップキャラクターとして、*を使用してデータを囲い表現します。

Code39 は、アルファベットも利用できることから、主に、工業用として利用され、（社）日本電子機械

工業会（EIAJ）でも、規格化し利用しています。

SpicyLibra では、Code39 バーコードを、フォントを利用して表示する方法と、画像を描画作成して表示する方法の 2 種類の方法から選択して利用することを可能としています。

(r) NW7 バーコード（フォント）

NW7 は、数字（0～9）、英字（A～D）、記号（-, :, \$, /, ., +）を表現でき、1 つの文字を 7 本のバー、スペースで表しますが、Narrow（狭い）、Wide（広い）の 2 種類のバー・スペースで作られることから NW-7 と日本では呼ばれ、アメリカでは CODABAR と呼ばれています。

NW7 は、スタート・ストップキャラクターとして、A～D の英字を 1 文字ずつデータの先頭と末尾に配してデータを囲い表現します（A----D あるいは C----B の様に）。

NW7 は比較的単純な構成であり、高い印刷精度が要求されないことから、バーコードの初期のころから使用され、血液銀行、宅配便の集配管理（送り状）、図書館の貸し出し管理、各種会員カードなどといった分野で特に利用されています。

SpicyLibra では、NW7 バーコードを、フォントを利用して表示する方法と、画像を描画作成して表示する方法の 2 種類の方法から選択して利用することを可能としています。

また、NW7 にはチェックデジットをデータ末尾に付加しますが、そのチェックデジットの計算方法に複数の種類があるため、SpicyLibra では、標準的なモジュラス 16 の他に、モジュラス 11、モジュラス 10、7 チェック、9 チェックなどの計算方法を選択できるようになっています。

(s) カスタム人名字取り

カスタム人名字取りは、カスタム字取りテーブルに設定されている、姓名各文字の字送り（字空き）量に基づいて、字取り組み版を行うものです。

5, 7, 8, 9 人名字取りについて、字取りの値を、InDesign ドキュメントで作成し、その値をテーブル値として使用することにより、ユーザー、あるいは JOB 固有の字取り組みを行うわけです。

縦組み、横組み、それぞれ別個の字取り値を設定できますので、**1/1000em** 単位という細かな字取り制御をおこなうことが可能です。また、使用領域文字フォント変換も設定可能です。

人名字取りテーブル用の InDesign ドキュメントの設定では、文字間の空きの制御を「字送り」機能で行っていましたが、実際の組版に際しては、「字送り」で行うか、「字空き（後）」で行うかを選択できます。

「字送り」で行うか、「字空き（後）」で行うかは一長一短があります。

- ・「字送り」で行う場合、モノルビを付けた場合、「字送り」であいた空白部分も含めて一文字として認識するため、ルビの揃えが思ったようにならないという問題が発生します。

- ・「字空き（後）」で行う場合、プログラム上では、全角空き以上の設定ができるのですが、InDesign の編集画面では、全角以上の空きの設定ができないという問題があります。

姓と名は、全角スペースで区切り 1 項目データとして扱う方法と、姓と名を別項目データとして扱う方法とがあります。ただし、同一データ中に扱いが異なる入力方法をとることはできません。

実際の人名組では、カスタム字取り設定テーブルに記述された、段落に対する左インデント、各文字の字送り値と縦・横スケールの値を使用して組んでいきます。この点が、全角・半角スペースだけを用いて組んでいる標準の人名組とは大きく異なる点です。このほか、カスタム人名字取りでは、異体字をサポートしています。異体字には 3 通りの指定の仕方があります。

これらのデータ入力形式は、次の通りです。

●モノルビ

姓または名のルビ文字列を、親文字列と一緒に項目に入力し、親文字 1 文字ずつにルビ文字列を付けるモノルビと姓または名の文字列全体に対してルビを付けるグループルビを設定することが可能です。

モノルビの場合、ルビを付ける文字 1 文字（親文字）ごとの後ろに、半角パーレンで囲んでルビ文字列を挿入します。（例） 山(やま)田(た)一(いち)朗(ろう)

▼よみ項目を親文字と別項目として入力する場合には、親文字の 1 文字 1 文字に対応する「よみ」を半角スラッシュ「/」で区切って入力することにより、モノルビ処理を行います（ただし、「信一郎」で、「一」にルビを振らない場合には、「しん//ろう」と何も入力せずに、区切りの「/」のみを入力します。）

(例) 姓よみ項目 → やま/だ : 名よみ項目 → た/ろう

姓親項目 → 山田 : 名親項目 → 太郎

●グループルビ

グループルビの場合には、姓または名の文字列全体をひと固まりとみなしますので、姓または名の文字列（親文字列）の後ろに、半角パーレンで囲んでルビ文字列を挿入します。

ただし、ルビ文字列がグループルビであることを指示するために、**入りのパーレンの直後に、半角欧文の g を挿入**します。（例） 山田 (g やまだ) 一朗 (g いちろう)

▼よみ項目を親文字と別項目として入力する場合には、よみに区切りがない場合には、グループルビとみなされます。

※ 注意するのは、姓または名の文字列の中で、モノルビとグループルビは混在できないということです。

（不可例）山 (やま) 田 (g やまだ)

のような混在は不可となります。ただし、姓と名を別個に指定することは可能です。

（可能例）山田 (g やまだ) 一 (いち) 朗 (ろう)

※よみ項目を親文字と別項目として入力する場合、親文字 1 文字に対するルビの取り扱い、SpicyLibra では、最初に処理するページの当該データを先読みし、「よみ」項目に「/」が一つでもあれば、そのドキュメントでは、すべてモノルビ処理を行うことになります。

●異体字

[入力データ形式]

- ・親文字<異体字タイプ: オフセット値> → 異体字タイプは aalt,nalt の 2 種類。

[入力例]: 「辺」を 4 番目の異体字に変換

渡辺 <aalt:4> 宏一

- ・親文字<異体字タイプ: CID コード> → 異体字タイプは cid のみ。

[入力例]: 「4」を XII に変換

紀元前 4<cid:8226> 世紀

- ・親文字<異体字タイプ> → 異体字タイプは trad, expt, nick, jp70, jp78, jp83j, jp04.

[入力例]: 「穂」をエキスパート書体に変換

林 康穂 <expt>

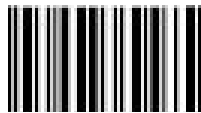
- ・親文字<サロゲート文字コード> → 文字コードは 10000 ~ 10FFFF まで。

[入力例]: 「吉」をサロゲートペア文字の、いわゆる「土吉」に変換

吉 <20BB7> 田 明

上記いずれも、**半角山パーレ<>（または半角ブラケット「[]」、xml データ中であれば、< 及び > の実体参照文字あるいは全角「<>」も可能）**で囲んで、対象となる文字の直後で指定します。t(r) NW7 バーコード

(t) ITF バーコード（フォント）



ITF バーコードは、Interleaved Two of Five の頭文字をとったもので、5 本のバー・スペースで 1 文字を表し、そのうち 2 本が太いので、2 of 5 と呼ばれている Code 2 of 5 の 1 種（他に、Indsutrial 2 of 5, Matrix 2 of 5 などがあります）です。

バーおよびスペースの両方に情報を持たせているため、他のバーコードに比べ、短い幅のバーで、多くの情報を表示することが可能となっています。

ITF の利用形態としては、標準物流コードとして、段ボールなどの包装箱のマーキングに利用されており、標準バージョンとしては、14 桁の ITF-14 が使用されます。

扱えるキャラクターは、0 ~ 9 までの数字のみとなります（その他、スタート・ストップキャラクターが自動挿入されます）。

SpicyLibra では、添付の ITF.otf フォントを利用し、ITF を表示しますが、2 文字で 1 個のバーを表すために、OTF フォント機能のリガチャー機能を使用しています。ITF.otf フォントは、スタート・ストップキャラクターとして、半角パーレン「(」「)」を使用しますので、添付の ITF.otf フォント以外の ITF 用フォントを使用する

場合には、リガチャー機能が使え、OTF フォントであることと、スタート・ストップキャラクターに用いている文字に注意をして使用する必要があります。

ITF バーコードは、SpicyLibra においては、フォントのみでの対応となります。画像での対応はしていません。

なお、ITF コードにはチェックデジットが付くこと、及び、2 文字で 1 個のバーを表しますので、チェックデジットを入れないデータは奇数桁（チェックデジットを入れたデータでは偶数桁）になるように、データの桁数が不足する場合には、SpicyLibra により、前ゼロが付加されます。

3) 文字差込

テンプレート上に「拝啓 % 1 %様におかれましては～」というように、「% 1 %」の入ったテキストフレームを用意しておくと、「% 1 %」の部分に「文字差込」として選択された項目の文字列を差し込みながら、流し込みが行われます。

定型文章の中の一部の差し替えが必要な時などに利用します。

各項目を差し込み先の、どの代替文字列（プレースホルダー）に差し込むかは、「処理区分」から選択します。テンプレート上の差し込みを受ける側のプレースホルダーは「処理区分」と同じ文字列を代入しておいてください。

テンプレート内の「% 1 %」などは全て全角（2 バイト）文字で指示してください。「% 1 %」から「% 3 0 %」まで、1 フレームの中に 30 個の異なるプレースホルダーを指定できます。また、同一プレースホルダーは、同一フレームに複数か所設定できます。

「パステキスト」では、% 1 %のみ有効となります。

4) テキストファイル

テキストファイルをフレームに流し込みたい時に、「テキストファイル」を選択します。指示されたフレームの中に、選択されたファイル内のテキストが流し込まれます。ただし、フレームをあふれる文字列は、表示されません。あふれ処理の対象となります。

流し込みを指定できるフレームは、「テキストフレーム」となります。

「処理区分」の「GF」「非 GF」は、テンプレート上で「グリッドフレーム」として設定されたフレームに流し込む時、そのグリッドフレームのグリッドに吸着して流し込むかどうかを設定します。吸着する場合には、「EM センター揃え」で揃えます。

「書式保持」「書式非保持」は、読み込まれるテキストが InDesignTAG ファイルのように、書式が設定している場合、その書式を保持しながら流し込むか、書式は破棄してテンプレート中のフレーム設定の書式に合わせて流し込むか、を選択します。

「非 GF → 書式保持 → GF」は InDesign の流し込みの方法を「グリッド吸着をしない、テキストファイルの書式を保持を行う」という設定にして流し込みをし、終了後、「テキストフレームのグリッド吸着を行う」に再設定します。

基本処理ファイルデータには、流し込むテキストファイル名だけを入力してください。対象となるテキストファイルが含まれるフォルダ名は、基本パス設定の「流込みテキストファイル」で指示しておきます。

以上は、テンプレート中のテキストフレームに流し込むことを行っていました。が、「配置済みテキスト表示制御」では、ドキュメントテンプレート中で予めテキストを配置したテキストフレームでのテキスト表示方法を、項目データの値をフラグとして判断して変更するものでデータは挿入されません。

フラグとして扱える数値は、半角数字でパラメータ欄にて指定します。

フラグ数値で、次のようなフレームの属性を変更することが可能です。

- 0：何もしない。
- 1：フレーム削除。
- 2：ドロップシャドウ（ただし、値はブレンドモード以外 InDesign の初期値となります）。
- 3：回転。
- 4 以上：何もしない。

5) 画像ファイル

画像として貼り込むファイルを指定する時に、「画像ファイル」を選択します。データには、貼り込む画像のファイル名を拡張子付きで入力してください（バーコードを扱う場合には、ファイル名ではなく、それぞれのバーコードで扱えるデータを入力してください）。画像ファイルがない場合に、代替テキストを挿入するこ

とも可能です。画像ファイルの種類は、InDesign で扱える全ての種類および CAD データファイルの DXF ファイルを扱えます。ただし、DXF ファイルは 2 次元のみとし、DXF → JPEG 変換には、Illustrator を用いますので、使用する前にインストールしておいてください。この場合、Illustrator が変換できない DXF ファイルは扱えません。また、変換品質も Illustrator のデフォルトとなりますので、確認のうえ使用してください。

貼り込みの対象となるフレームは、Rectangle、Ova、Polygon(以下、画像フレーム)の3種類となります。ただし、バーコード及びムービー・サウンドは Rectangle のみです。

画像ファイルが置かれるフォルダは、「基本パス設定」の中の「貼込み画像ファイル」で指定しておきます。また、テンプレートの画像フレームに固定配置されているフレームの表示の制御を行うことが出来ます。

(a) 比例縮小

画像の長辺がフレームに合致するよう縦横等倍で縮小させながら、フレームの左上を原点として配置します。

(b) センター

画像の大きさは変化させずに、指定されたフレームの中央に配置します。

(c) フレームにフィット

縦横変倍をかけながら、フレームにフィットするよう配置します。

(d) 画像にフィット

画像の大きさに合わせて、フレームをフィットさせます。

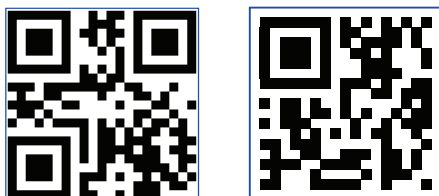
(e) 比例縮小後センター

(a)と同じように、フレームにフィットするよう縦横等倍に縮小させながら、フレームの中央に配置します。

(f) フレームに均等

フレームに均等になるように、画像を配置させます。パラメータにて、均等に配置後センターに移動させることもできます。

(g) QR イメージ



2 次元コードの QR コード及び MicroQR コードを、指定された項目データからビットマップイメージを作成して貼り込みます。対応する QR コードは標準 QR コード (モデル 2)、MicroQR コードです。

フレームへのフィット方法はパラメータで設定します。デフォルトはフレームにフィットです。なお、レクタングル以外のフレームでは対応いたしません。

また、作成したビットマップ画像ファイルは消去され埋め込み画像となります。

携帯電話読み取り用の QR コードを作成する場合、各種の特別文字 (TEL、URL など) は自動発生いたしませんので、これらの文字を使用する場合には、データ中に埋め込んでおいてください。

これらの特別文字は、各携帯キャリアで異なるので、それぞれの資料を参照してください。

文字列中で改行する場合には、「\n」 (MicroQR で改行は不可) を使用してください。

なお、標準 QR コードでは、漢字は最大 1,817 文字に比べ、MicroQR コードでは、最大 9 文字となっているように、MicroQR コードでの文字収容数は、極めて小さくなっていますので、注意してください。

上のサンプル画像は、左が標準 QR コード、右が MicroQR コードです。

(h) 配置済み画像フレーム表示制御

データをフラグの数値とみなして、予めテンプレートに配置された画像フレームの表示方法の制御を行います。

データの数値 (半角) により、

- 0：何もしない。
 - 1：フレーム削除。
 - 2：ドロップシャドウ（ただし、値はブレンドモード以外 InDesign の初期値となります）。
 - 3：回転。
 - 4以上：何もしない。
- となります。

(i) JAN バースコード



データを JAN8/13 バースコード用のデータとして画像ファイルを作成し、フレームに貼り込みます。

データの数字の桁数によって、次の処理を行います。

- 7 桁 → チェックサムを計算し付加して 8 桁にした後に処理を行います。
- 8 桁 → チェックサムつきの値としてそのまま処理します。
- 12 桁 → チェックサムを計算し付加して 13 桁にした後に処理を行います。
- 13 桁 → チェックサムつきの値としてそのまま処理します。

ナローバンド幅を、スケールが 1 倍の時、約 0.33mm でバーを描画します。

なお、JAN バースコードを利用した、ISBN 書籍バースコード及び定期刊行物バースコードも作成することができます。

① ISBN 書籍バースコード

ISBN478-4-7741-3088-5

C3055#02980E



単行本の裏などに印字されている書籍用のバースコードで、JAN13 バースコードを上段と下段の 2 段に配置し、上段では、書籍の ISBN コードを、下段では書籍の図書分類と価格を表示しています。

上段のバースコードは、

978-4-8356-3548-8

の様に、5 個の項目で構成されています。

978 は、ISBN コードであることを示すフラグで、978（または 979）が設定されます。

4 は、国・グループ別記号で、日本は「4」となります（国によって、3 桁もあります）。

8356 は、出版者記号と呼ばれ、出版者に割り当てられるコードで、2 桁～6 桁まであります。

3548 は、書名記号と呼ばれ、同じく、2 桁～6 桁まであります。

8 は、前項目までの値を計算したチェックデジット 1 桁となります。

通常、日本においては、出版者記号と書名記号を合わせた桁数は、8 桁固定となります。国・グループ別記号の桁数などが国によって異なりますので、他の国では、この桁数が異なることがあります。国・グループ別記号と合わせて 9 桁固定ともいいますが、日本では、国・グループ別記号は「4」の 1 桁固定ですので、残りの 8 桁も固定となります。

下段のバースコードは、図書分類記号（「C」に続き 4 桁の数字で表現され、1 桁目は「読者対象」、2 桁目は「発行形態」、3 桁目（大分類）と 4 桁目（中分類）は「分野と内容」を表します）と本体の税抜き価格を 1 円単位で表示しています。

下段のバースコード形式は、日本独自の形式となっています。

978 プレフィックス	l1 l2 l3 l4 l5 l6 l7 l8 l9 ISBN (国記号 + 出版者記号 + 書名記号)	C/D チェックデジット
192 書籍 JAN の 2 段目を表す プレフィックス(国内用)	C1 C2 C3 C4 図書分類	P1 P2 P3 P4 P5 税抜本体価格 (1 円単位)
		C/D チェックデジット

②定期刊行物バーコード

雑誌 26615-11/8



4910266151117
00350

書籍コードが主に単行本に使用されるのに対し、定期刊行物バーコードは、月刊誌や週刊誌といった、定期的に発行される書籍に対して用いられるもので、従来、雑誌バーコードと呼ばれていたものです。

定期刊行物バーコードは、ISBN バーコードではありませんので、注意してください。

定期刊行物バーコードは、雑誌コードと発行号数を表す JAN13 を利用したバーコードを左に、価格のバーコードを 5 桁のアドオンとして右側に配置する形態となっています。

左側のバーコードでは、雑誌コードと発行号数を、右側では本体価格を 1 円単位で税抜きで表します。

左側バーコード (13 桁) = 491 + 0 + 5 桁雑誌コード + 2 桁月号 + 1 桁年号 + 1 桁チェックデジット

右側バーコード (5 桁) = 0 + 4 桁本体価格

491 及び 0 は固定数値です。

(j) Code39 バーコード



* 4 9 7 0 5 0 1 Q *

データを Code39 バーコード用のデータとして画像ファイルを作成し、フレームに貼り込みます。

Code39 バーコードは、先頭・末尾にスタート・ストップコードとして「*」が付きますが、データ中にアスタリスクがない場合には、自動的に付加します。

ナローバンド幅を、スケールが 1 倍の時、約 0.3mm、ワイドバンド幅約 0.9mm でバーを描画します。ただし、フォントを使用してバーコードを作成した場合には、この限りではありません。

(K) NW7 バーコード



C 3 4 5 6 9 D

データを NW7 バーコード用のデータとして画像ファイルを作成し、フレームに貼り込みます。

NW7 には、スタート・ストップコードとして、先頭・末尾に「A-D」のアルファベットの組み合わせが必要となりますので、データ中に適正なスタート・ストップコードがない場合には、エラーとして処理を行いません。

ナローバンド幅を、スケールが 1 倍の時、約 0.3mm、ワイドバンド幅約 0.9mm でバーを描画します。ただし、フォントを使用してバーコードを作成した場合には、この限りではありません。

(l) CODE128 バーコード



9164238617853917850

CODE128A



CODE128C



91134238617853917850

CODE128B



91134238617853917853917850

EAN128C

データを CODE128 バーコード用のデータとして画像ファイルを作成し、フレームに貼り込みます。

本プログラムで扱う CODE128 バーコードは、**CODE128A**、**CODE128B**、**CODE128C**、及び **CODE128C** を元に規定された **EAN128C** を使用した「コンビニエンスストア標準料金代理収納用バーコード（以下、単に EAN128C という）」の 4 種類となります。

CODE128 のチェックデジットは、本プログラムにより計算され自動付加されます。ただし、EAN128C の場合のデータ内容に関するチェックデジットは、パラメータによって、本プログラムにより計算し付加する場合と、データとして与えられる場合とがあります。また、スタートコード、ストップコードなどは、本プログラムで自動挿入されます。

なお、バーコードの前後に必要なクワイエットゾーンに関しましては、本プログラムでは挿入しませんので、レイアウト時に考慮してください。

① データ長の制限

EAN128C の場合には、データ長に制限があり、

- ・チェックデジットがデータとして与えられる場合は 44 文字。
- ・本プログラムでチェックデジットを計算する場合 43 文字。

となります。その他の場合には、制限はありません。

② データキャラクタの制限

CODE128C 及び EAN128C の場合に扱えるデータキャラクタは数字のみとなります。

③ バーコード長

EAN128C の場合、クワイエットゾーンを含んだバーコードの長さが 60mm を超えないという制限があります。このため、バーコード用のフレームを作成する時には、フレームの幅が重要となります。ここで、各バーコードの実測値を記載しますので参考にしてください。

CODE128A	20 文字	46mm
CODE128B	20 文字	46mm
CODE128C	20 文字	26mm
EAN128C	44 文字	52mm

② フッターの表示

フッターを表示する場合、他のバーコードにて使用する OCRB フォントではなく、「MS Sana Serif」の 8.25Pt をデフォルトで使用しますので、注意してください。また、EAN128C の場合には、フッターは、2 行の左揃えのみとなります。フォントやデータ長さにより、バーコード長とフッター文字列長が大きく異なる場合があり、適切なフレームサイズを設定しないと、フレームオーバーとなり、全ての文字が印字できない可能性がありますので注意してください。

(i) ～ (l) のバーコードに関しましては、ドキュメントページの左右方向をバーコードの左右方向として画像を作成しますので、バーコードの方向が天地方向の場合には、一度左右方向に入る画像フレームを作成した後に、当該画像フレームをテンプレート上で回転し、天地方向にしてください。天地方向の画像フレームにそのまま張り込むことは出来ませんので注意してください。また、フッターの文字は、CODE128 は Microsoft Sans Serif 8.25Pt を、他のものは OCRB フォント 10Pt を使用します。

なお、上記バーコードの精度につきましては、印刷用紙、バーコードリーダーなどの諸条件で読み取れない場合が発生する可能性がありますので、確認の上ご利用ください。

(m) イメージバリアブル・グラフ

イメージバリアブルは、インデザインドキュメントに貼り込む画像について、テンプレート画像中のテキストの挿入や画像の挿入、そして各種画像効果をオンザフライで処理をし、静的な画像を貼り込むだけでなく、動的な画像加工を施したものを貼り込むことができるようにするものです。

SpicyLibra では、貼り込む画像の元となるテンプレートファイルに対して、ダイナミックな自動画像編集を施し、その結果をファイルとして書き出したものを、従来の静的な画像貼り込みと同様にしてインデザインオブジェクト (Rectangle, Oval, Polygon) に貼り込むことを行います。

SpicyLibra では、ダイナミックに自動画像編集を行うツールとして Adobe 社の Photoshop ならびに Illustrator を利用します。したがって、この機能を利用するには、予め、これらのソフトウェアがインス

ツールされていなければなりません（ただし、実行する処理に用いるもののみで可ですが、バージョンに注意が必要です。基本的に、InDesign の名称中の年記号と同じとします。例えば、InDesign2024 でしたら、Illustrator2022,Photoshop2022 といった具合です）。

これらのソフトウェアにて加工された画像ファイルは、SpicyLibra のパス定義で出力フォルダーに設定されているフォルダー以下に、各々、「**フォトショップバリアブル画像**」、「**イラストレーターバリアブル画像**」というフォルダーが自動的に作成され、その中にフォトショップの場合には、「PhotoshopVariable-1.ai」で始まる連続番号のファイル名で、イラストレーターの場合には、「IllustratorVariable-1.ai」で始まる連続番号のファイル名で書き出され保存されます。自動画像編集されたファイルは、それぞれの**ネイティブな画像フォーマットファイルとして作成保存**されます。フォトショップなら PSD ファイル、イラストレーターなら AI ファイルとなり、そのファイルフォーマットのまま、インデザインドキュメントに貼り込まれます（作成画像を JPEG に設定することも可能です）。

なお、これらの機能を利用する場合には、加工元となるテンプレートファイル中のオブジェクトと差し替える場合に使用する画像などは、次のフォルダーに格納されていなければなりません。

- テンプレートファイル → インデザインテンプレートファイルと同一のフォルダー。
- 差し替え画像など → 画像フォルダー

ダイナミックな画像加工で可能となることは、どちらを利用する場合でも、基本のテンプレートファイル中の、画像の挿入、テキストの挿入、レイヤーの表示 / 非表示切り替えということ、さらにフォトショップでは、テンプレートテキストの文字列置換が行え、イラストレーターでは**グラフの作成**が行えます。そしてテンプレート中に設定されているアクションの実行となります。

ただしアクションは、処理途中でユーザーにダイアログで設定指示を促すようなものやファイルに書き出すものは使用できませんので注意してください。

SpicyLibra でのフォトショップを利用したイメージバリアブルとイラストレーターを利用したイメージバリアブルの処理方法の違いは、前者が**フォトショップのレイヤーを直接 SpicyLibra で直接制御**して実現するのに対し、**イラストレーターでは、バリアブル機能を利用し、間接的にイラストレータに配置されているオブジェクトを制御**して実現するという点にあります。

イメージバリアブルを使用する手順は、次ページにて説明します。（イメージバリアブルの詳細な処理の設定方法については、パラメータ設定のページを参照してください。）

まず、初めに、テンプレートファイルを用意します。

①フォトショップ（Photoshop）でテンプレートを作成

フォトショップで InDesign に配置するためのフォトショップテンプレートドキュメントを作るわけですが、テンプレートドキュメントでは、SpicyLibra で可変データとして置き換えられる画像やテキスト、表示のオン・オフが設定されるオブジェクトについて、一つ一つ独立したレイヤーに配置し、それぞれのレイヤーには、レイヤー名をレイヤーパレットにて命名して置く必要があります。

SpicyLibra にてダイナミックに変更されないオブジェクトに関しては、レイヤー名の設定は任意となります。

また、レイヤーに効果を適用する場合には、レイヤーパレットにおいて適切なレイヤー効果を設定しておきます。



上図では、レイヤー名「Accent」が画面上部の音符の画像を表し、この画像オブジェクトにはレイヤー効果を設けず、SpicyLibra でレイヤーの表示・非表示の切り替えを行うことを想定しています。

レイヤー名「CaptionText」は、画面中央部の【あしたがある】の文字列をさし、文字列にはワープ設定を施し、レイヤー効果で「光彩」設定がしてあります。

最後に、レイヤー名「MainImage」は背景の時計の画像をさし、レイヤー効果が複数設定されています。

このように、SpicyLibra で操作されるオブジェクトはレイヤー名を付け、予め必要な画像効果を設定しておきます。設定できるレイヤーの数は、SpicyLibra のデータ項目数と同じで、現状では最大 100 個までとなります。

さらに、アクションを利用し、高度な画像処理をドキュメントに施すことが可能です。



アクションには適切な名前と所属するアクションセット名が、SpicyLibra での設定に必要となります。

SpicyLibra で利用可能なアクションは、処理途中でダイアログを表示させたりしてユーザーの入力を要求するものやファイルに書き出すものは設定しないようにしてください。

それらは、SpicyLibra の自動処理を阻害する要因となりますので、確実に、非インタラクティブな処理、かつファイルの入出力を伴わないことを確認してください。

これらのレイヤー名と処理データ項目との対応や使用するアクション名・アクションセット名の設定は、パラメータ設定ダイアログ（後述）で行います。

②イラストレーター（Illustrator）でテンプレートを作成

イラストレータでテンプレートドキュメントを作る場合、テンプレートドキュメントでは、フォトショップの場合と同様、SpicyLibra で可変データとして置き換えられる画像やテキスト、表示をオン・オフ設定されるオブジェクトについて、一つ一つ独立した変数として登録し、データセットにキャプチャーしておく必要があります。

変数の設定の方法及びデータセットの作成につきましては、イラストレータのマニュアルを参照のうえ作成してください。なお、変数のうち、グラフ変数はサポートしておりません。

SpicyLibra では、プログラムにおいて可変の変数ファイルを作成しテンプレートに設定したデータセットとして読み込みイメージバリアブル処理を実行します。従いまして、テンプレートに設定するデータセットは、1つのみとし複数のデータセットを設定しないでください。読み込み時にエラーとなります。



上図では、変数名「背景」が画面背景に設定された音符の画像を表し、この画像オブジェクトにはSpicyLibra でオブジェクトの表示・非表示の切り替えを行うことを想定しています。

変数名「タイトル」は、画面上部の【組織図】の文字列を指し、SpicyLibra での文字列置換の対象とされます。

最後に、変数名「皿」はこのドキュメントのメインとなる皿の画像を指し、同じく、SpicyLibra での置換の対象となります。

以上3個の変数は、それぞれオブジェクトの種類が<画像>、<テキスト>（組織図）、<リンクファイル>、となっているのがお分かりいただけると思います。さらにグラフもあり、棒グラフ、横向き棒グラフ、積み上げグラフ、横向き積み上げグラフ、折れ線グラフ、階層グラフ、散布図、円グラフ、レーダーチャートなどを貼り込むことが可能です。

各々のドキュメントオブジェクトに変数名を付けたのち、データキャプチャーを行い、データセットとして



登録しておかなければなりません。デフォルトで、「データセット1」という名前のデータセット名で登録されますので、あえて名前を変更する必要がなければ、このデフォルトの名前のままで構いません。

変数の与え方とデータセットの作り方、及びレイヤーとの関係については、イラストレータのマニュアルを参照してください。設定できる変数の数は、SpicyLibra の処理項目数と同じく 100 個までとなります。

さらに、フォトショップの場合と同様にイラストレータにおいても、アクションを利用し、高度な画像処理をドキュメントに施すことが可能です。アクション利用の場合の注意点は、フォトショップの場合と同じです。

フォトショップまたはイラストレーターにてイメージバリアブルに使用するテンプレートファイルの作成が終了しましたら、所定のフォルダーに保存します。また、画像の差し替えを伴う場合には、それらの画像を設定された「画像フォルダー」に格納しておきます。

次に、後述するパラメータ設定ダイアログにて、フォトショップの場合には登録したレイヤーと、イラストレーターの場合には、登録した変数と処理データ項目とのマッピングを行います。

(n) TEX

グラフィックフレームに対して、TEX データを登録された TEX 環境で EPS フォーマットに変換した画像を貼り込みます。

テキストフレーム中での <tex> タグによるアンカーオブジェクトとしての TEX → EPS 変換画像挿入と基本的には同じで、挿入対象フレームがグラフィックフレームとなります。

処理データには、直接 TEX データを記述することもできますし、外部 TEX ファイルの挿入という間接的な方法も可能です（パラメータでの切り替え）。

また、TEX データに必須のプリアンブルなどは、データ中に記述せず、登録されたプリアンブルデータを使用することもできます。

オプションパラメータに関しては、パラメータ説明ページを参照してください。

TEX データから EPS 画像を作成するには、TEX データを EPS 画像に変換するプログラムを必要とします。

SpicyLibra では、この変換処理に、無償で提供されている TEX 環境のご使用を推奨しております。

すなわち、ソースデータの TEX データを EPS 画像に変換するには、よく知られている方法としては、

- ① platex.exe にて tex → dvi に変換
- ② dvips.exe にて dvi → ps に変換
- ③ gswin.64Cexe にて ps → eps に変換

の 3 つのプログラム（いずれも 64 ビット対応版のご利用を推奨します）にてデータフォーマット変換を行い tex テキストから eps 画像を取得する方法があります。

SpicyLibra では、ユーザー様が使用されている tex データを eps データに変換するプログラムがあれば、上記方法に限らず、その変換環境設定を登録していただき、利用することができます。

新規に、TEX 環境を設定する場合には、「**TEX インストーラー 3**(<http://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~abenori/mycreate/abtexinst.html>)」という無償の TEX 環境インストールプログラムをダウンロードし、インストールすることをお勧めします。

この「**TEX インストーラー 3**」をインストールした場合を前提に、**SpicyLibra** への TEX 環境設定登録を行う場合には、まず、プログラム群を利用したバッチプログラムを ****.bat を作成することを考えて登録設定を行うのが理解しやすいと思われます。

この考え方によれば、使用するプログラム中でのファイル名には、いろいろなファイルをコマンドで「****.bat TEX ファイル A」のように指定できることを考慮し、bat ファイル内のファイル名には変数名を使用します。英数半角で「%1」としてファイル名の基本部を指定するようにします。

すると、tex データから eps 画像に変換する ***.bat ファイルの中身は、プログラムごとのパラメータ設定を考えると、次のように書くことが可能です（パラメータ値などは一例）。

```
platex.exe %1.tex
dvips.exe -D 1200 %1.dvi -o %1.ps
gswin64c.exe -dSAFER -q -dBATCH -dNOPAUSE -sDEVICE=eps2write -dEPCrop
-r9600 -sOutputFile=%1.eps %1.ps
```

TEX 環境設定では、このバッチファイルを作成する時の要領で記述された各プログラム行を、TEX 環境設定ダイアログで設定することになります。

この TEX 環境で設定されたプログラムで作成された EPS 画像は、**SpicyLibra** のパス設定で設定されている「出力」フォルダーに「TexImage」というフォルダーを作成し、そのフォルダーに出力されます。

また、TEX データを外部ファイルとして使用する場合には、同様に、**SpicyLibra** のパス設定で設定されて

いる「テキスト」フォルダーに、予め格納しておかなければなりません。

なお、貼り込まれた EPS 画像には TEX ソースデータが非表示で挿入されて保存されますので、SpicyLibra に付属する専用の TEX エディター（SpicyEPSEdit.exe）にて、TEX データを取得編集し、修正した EPS 画像に交換することが可能です。

変換結果の一例は以下の通りです。

$$\frac{1}{1 + \frac{1}{1+x}} = \frac{1+x}{2+x}$$

(o) GS1 バーコード

2005 年に、バーコードの標準機各団体である国際 EAN 協会とアメリカの UCC とが、一元化が求められる時代に答え、国際的な統一組織として、GS1：（Global Standard One）という組織を立ち上げました。

日本でも、(財) 流通開発システムセンターが代表機関となり、GS1 規格のバーコードの普及を進めています。

同センターの WEB サイトでは、「流通システム分野の国際的な標準化機関である GS1(ジーエスワン)では、一般消費財分野において従来の JAN シンボルに加えて、定置式の POS システムでも読取が可能な 4 種類の GS1 データバーを 2014 年から、世界でオープンに使えるような状態にすることを目指しています。」と、目標を掲げています。

SpicyLibra では、従来、EAN-128 と呼ばれ、**GS1-128** と名称が変更されたバーコード及び新たに GS1 において規格化された **GS1 DataBar** バーコードを画像生成方式でサポートいたしました。

GS1-128 は、SpicyLibra でも、Code128 の処理方式の一つとして、「コンビニエンスストア料金収納代行」で利用できるようにしていましたが、汎用的な利用方法として、GS1-128 バーコードを作成できるようにしています。

これに加え、先にも述べました、GS1 DataBar バーコード 7 種と合成シンボル（Composite Component）付 7 種の計 14 種のバーコードを作成可能といたしました。

GS1-128 バーコードは、**AI**(Application Identifier) と呼ばれるデータ項目を識別するフラグをタグとしてデータ中に取り入れることで、様々な情報をバーコードに含めることを可能にしています。

例えば、

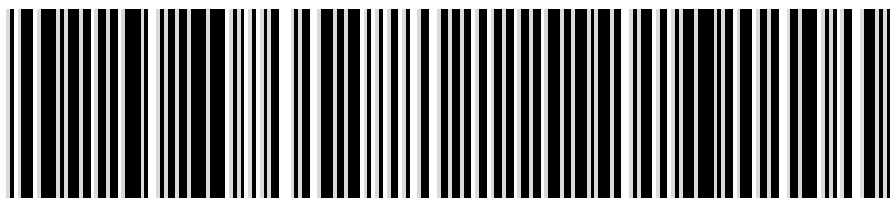
AI:00 は Serial Shipping Container Code (SSCC) で 18 桁固定、

AI:01 は Global Trade Item Number (GTIN) で 14 桁固定、

AI:10 は Batch/Lot Number で最大 20 桁まで可変、

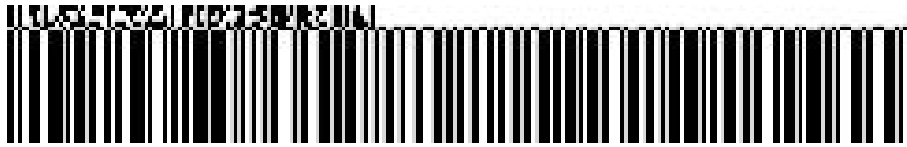
などの様に、各種の AI が規定されています。

① GS1-128



(01)98898765432106(3202)012345(15)991231

② GS1-128 With Composite Component



(01)98898765432106(3202)012345(15)991231

GS1 DataBar は、1 次元バーコードでありながら、特別データ圧縮方法により、短いバーコードにおいても情報量を多く含ませることができること、および、特別なチェックデジット検証により、EAN/JAN バーコードの様に必要な左右の空白（クワイエットゾーン）を不要としたことで、添付面積の小さな商品への利用を可能としています。

GS1 DataBar には、Omnidirectional 系（4 種）、Limited 系（1 種）、Expanded 系（2 種）の 3 系統あり、定置式の POS で読み取れる

GS1 DataBar Omnidirectional

GS1 DataBar Stacked Omnidirectional

GS1 DataBar Expanded

GS1 DataBar Expanded Stacked

の 4 種類が標準シンボルとされています。

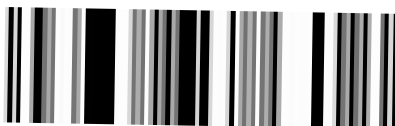
このうち、Expanded 系は、GS1-128 と同様に、AI を用いたデータ表現を行えるもので、他の 2 系統は、GTIN(14 桁) を表すものとなっています。

GTIN は、これまで EAN/JAN-13、EAN-12、など複数の規格があって混乱していた流通商品コードを 14 桁に統一し、国際商品コードとしたもので、先頭桁は、パッケージインジケータを表す数字が入るが、従来の EAN/JAN-13 データの先頭に「0」を付加することで 14 桁とすることが許されています。

SpicyLibra では、標準シンボルを含め 7 種類すべてと合成シンボルを付加した多段式の 7 種類をサポートしています。

③ GS1 DataBar Omnidirectional(Standard)

もっとも基本的なバーコードです。



(01)20012345678909

④ GS1 DataBar Omnidirectional With Composite Component



(01)20012345678909

⑤ GS1 DataBar Truncated

バーコード高さを基本モジュールの 13 倍に固定したものです。



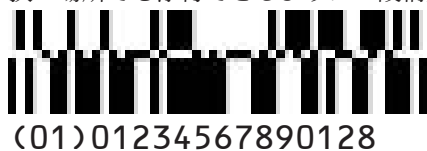
(01)20012345678909

⑥ GS1 DataBar Truncated With Composite Component

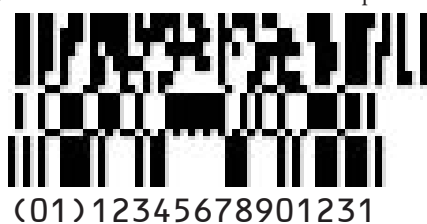


⑦ GS1 DataBar Stacked

狭い場所でも添付できるように 2 段構成にしたものです。



⑧ GS1 DataBar Stacked With Composite Component



⑨ GS1 DataBar Stacked Omnidirectional

GS1 DataBar Stacked を、双方向 (omnidirectional) からスキャンできるようにしたものです。



⑩ GS1 DataBar Stacked Omnidirectional With Composite Component



⑪ GS1 DataBar Limited

データの先頭桁の数字を 0 または 1 に固定したものです。



⑫ GS1 DataBar Limited With Composite Component



⑬ GS1 DataBar Expanded

GS1-128 の様に、AI をデータ中に埋め込むことで、情報量を多く必要とするものに対応したものです。



⑭ GS1 DataBar Expanded With Composite Component

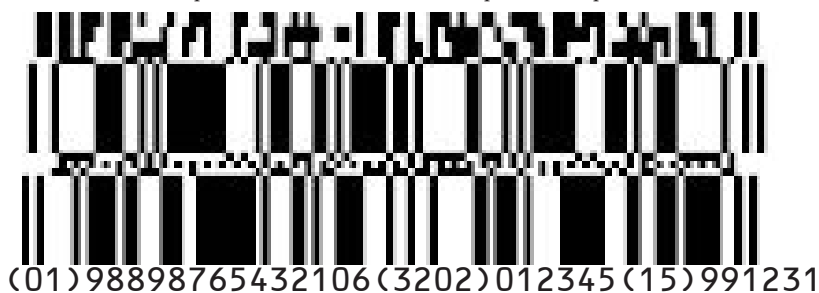


⑬ GS1 DataBar Expanded Stacked

GS1 DataBar Expanded を多段構成にしたものです。



⑭ GS1 DataBar Expanded Stacked With Composite Component



※サンプルの GS1 バーコード画像は、説明のためにサイズ等調整したもので、実寸のものではありません。

※なお、これらのバーコードを使用する場合には、必ず、利用するバーコードスキャナーにて読み取れることを確認のうえ、ご使用ください。

弊社では、SpicyLibra にて作成したバーコードが、すべてのバーコードリーダーにて読み取れることを保証するものではありませんので、ご利用に際しましては、予め、ご了承のほどお願いいたします。

6) 文字差込ファイル

テキストファイルの流し込みと文字の差し込みを同時に行いたい場合に使用します。流し込むテキストファイルの中に「% 1 %」と差し込まれる文字を設定しておく、差し込み用の文字として指定した文字列を「% 1 %」に代入しながら、テキスト全体を流し込みます。

設定としては、流し込むテキストファイル名列と差し込み用のデータ列の双方のデータ種類項目を「文字差込ファイル」に設定し、テキストファイル名列の方は「処理区分」から「GF・非 GF」と「書式保持・非保持」などの流し込み方法を選択し、差し込み用のデータ列の方では、「処理区分」として「% 1 %～% 3 0 %」の中から代入させる該当文字を選択します。

プレースホルダーは 30 個指定でき、条件は、「文字差し込み」と同じです。

7) 日付発生

処理データは無視し、プログラム実行日の日付時刻を、次に示す「処理区分」で指定されたフォーマットで文字列を作成し、フレームに挿入します。

- ① 日付（短形式）…………… 2005/12/1
- ② 日付（短形式・漢数字）…………… 二〇〇五・一二・一
- ③ 日付（長形式）…………… 2005 年 12 月 1 日
- ④ 日付（長形式・漢数字）…………… 二〇〇五年一二月一日
- ⑤ 日付（和暦）…………… 平成 17 年 12 月 1 日（月曜日）
- ⑥ 日付（和暦・漢数字）…………… 平成一七年一二月一日（月曜日）
- ⑦ 日付（長形式日付・時間）…………… 2005 年 4 月 25 日 13:34:56
- ⑧ 日付（折番・日付・時間）…………… 1 折裏 2005 年 4 月 25 日 13:34:56

ただし、8 番目のフォーマットは、PDF 面付けの場合にのみ有効となります。

8) 番号発生

処理データは無視し、「パラメータ」で指定された数字発生方法で数字を発生させ、次に述べる「処理区分」のフォーマットで文字列を作成してフレームに挿入します。

- ① 前ゼロなし（半角）…………… 120
- ② 前ゼロあり（半角）…………… 00120
- ③ 前ゼロなし（全角）…………… 1 2 0
- ④ 前ゼロあり（全角）…………… 0 0 1 2 0
- ⑤ 前ゼロなし（漢数字）…………… 一二三
- ⑥ 前ゼロあり（漢数字）…………… 〇〇一二三

パラメータに関しましては、「パラメーター一覧」を参照してください。

9) 串刺し番号

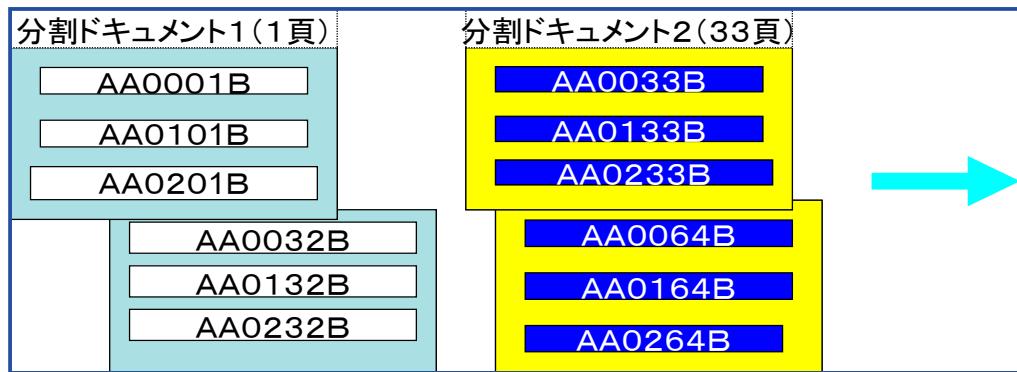
「串刺し面付け」は、別掲で述べるように通常の方法とは異なる方法で処理の指定を行いますが、その番号の生成の仕方のみを踏襲して、通常のテキストフレームに番号を発生させてテキストフレームに挿入します。上記（8）番号発生の変種といえます。

挿入させる数字のフォーマットは、次の 6 種類から選択できます。

- ① 前ゼロなし（半角）…………… 120
- ② 前ゼロあり（半角）…………… 00120
- ③ 前ゼロなし（全角）…………… 1 2 0
- ④ 前ゼロあり（全角）…………… 0 0 1 2 0
- ⑤ 前ゼロなし（漢数字）…………… 一二三
- ⑥ 前ゼロあり（漢数字）…………… 〇〇一二三

発生させる番号は、「串刺し面付け」の場合には、テンプレートページの各面付け要素が単独で基点となる初期値を設定するのに対して、「串刺し番号」は、テンプレートページのレコード 1（枝番 1 のフレーム）だけが唯一初期値の設定が出来るという点が、もっとも異なります。

次ページの図で説明するような番号付けの方法となります。



枝番 1 のフレームに、4 桁前ゼロありで開始番号を 1、レコードごとの増加数を 100、ページ毎の増加数を 1、ドキュメント毎の増加数を 0 とすれば、上図のように、1 ページに 3 フレーム対象となるフレームが存在するとして、分割頁数を 32 ページとすると、

1 ページ目枝番 1 のフレームは、	0001
1 ページ目枝番 2 のフレームは、 1 レコード増加するので	0101
1 ページ目枝番 3 のフレームは、 2 レコード増加するので	0201
2 ページ目枝番 1 のフレームは、 1 ページ増加するので	0002
2 ページ目枝番 2 のフレームは、 1 ページと 1 レコード増加するので	0102
2 ページ目枝番 3 のフレームは、 1 ページと 2 レコード増加するので	0202

33 ページ目枝番 1 のフレームは、 1 ドキュメントと 1 頁増加するので	0033
33 ページ目枝番 2 のフレームは、 1 ドキュメントと 1 ページと 1 レコード増加するので	0133
33 ページ目枝番 3 のフレームは、 1 ドキュメントと 1 ページと 2 レコード増加するので	0233

となります。

求める番号 = 初期値 + ドキュメント増加数 x (ドキュメント番号 - 1) + ページ増加数 x (ページ番号 - 1) + レコード増加数 x (ページ内レコード番号 - 1)

ということです。

なお、パラメータ設定により、1 頁ごとの増加ではなく、2 頁ごとに増加させることも可能です。

10) 表

テンプレート上のテキストフレームにあらかじめ表を作成しておき、指定した行・カラム位置からデータを挿入します。

テキストフレームには、表は 1 つのみ貼り付けられます。このテキストフレームには、他に本プログラムで処理を要するオブジェクトは貼り付けられません（表に流し込み、同時に表外にテキストを流し込むということ）。ただし、処理と関係のない、文字や、画像は同一テキストフレーム上に貼り付けておくことは可能です。

なお、処理に必要なフレーム名称は、表オブジェクトにつけるのではなく、当該表オブジェクトを含んだテキストフレームにつけます。

8)-1 処理は、「単純挿入」と「テキストファイル挿入」を指定することが出来ます。

あふれ処理も行いますが、通常のテキストフレームへの文字挿入・テキストファイル挿入で行うあふれ処理とは異なる、表独自のあふれ処理となります。

テキストファイルを挿入する場合、データは拡張子まで含んだファイル名を記述します。

扱えるファイル形式は、プレーンなテキストファイル (Shift-JIS) のみとなります。

なお、複数段落の挿入はできません。表の 1 行の区切りは、文字列の単純な挿入の場合には、半角の「|」で入力をし、テキストファイル中では、標準の改行コード 0x0d0f (CR/LF) とします。

カラムの区切りは、全角のスペースとなります。

「単純挿入」の場合には、データの項目に

半島名 面積 緯度 | 紀伊半島 25,000 35 | 伊豆半島 38,000 36

などと入力します。

「テキストファイル挿入」では、データは、*****.txt のように指定し、ファイル中では、

半島名 面積 緯度

紀伊半島 25,000 35

伊豆半島 38,000 36

のような形式となります。

※ カラム内の改行は、上矢印記号「↑」とします。

※ 配置されている表の行数、カラム数より大きな行、カラムデータは無視されます。

8)-2 挿入できるものは、下記のいずれかとなり、混在は出来ません。

●文字列 → あふれ処理設定可能（表独自のあふれ処理となりますので、メイン画面のあふれ指定ではありません。）

・通常の文字列

・数値文字列（パラメータの設定により、位取りカンマの自動挿入も可能）

●画像ファイル

拡張子を設定することで、画像ファイルを読み込みます。

●ライブラリーアセット名

先頭に全角「@」のある文字列をアセット名と判断し、アセットを貼り込みます。

（例）表に流し込むデータの1行が、たとえば、

「日本晴れの富士山 mtfuji.jpg @太郎↑花子」のようになっていれば、

「日本晴れの富士山」は、文字列として、表の1つのセルに流し込まれます。

「mtfuji.jpg」は、jpg が画像拡張子として設定してあれば、これを画像ファイルと判断して、基本パス設定で指定した画像保存フォルダーより読み込み、1つのセルに貼り付けます。jpg が画像拡張子として設定されていない場合、通常の文字列扱いとなります。

「@太郎↑花子」は、先頭に@マークがあるので、アセット名と判断し、基本パス設定で指定したライブラリーより、「太郎」と「花子」を順番に、「↑」の改行マークがあるので改行をして1つのセルに貼り込みます。

※ 文字列のセルは、あふれ処理の対象となりますが、画像、アセットのセルは対象となりません。

※ 画像、アセットのセルは、セルへの、上下、左右の揃えをテンプレートでの設定とは別個に設定できませんが、文字列のセルは、テンプレートにて設定されたものが、使用されます。

「データの無い項目」

データがない項目は、項目区切りを連続して入力し、項目区切りを省くことは出来ません。

たとえば、aaaaa （全角スペース）bbbb,（全角スペース）cccccc

とあり、bbbb を省略する場合、区切りの（全角スペース）は省略しないで、

aaaaa （全角スペース）（全角スペース）cccccc

とするということになります。

データの無い項目については、パラメータの設定により、斜線を3種類（左上 - 右下、右上 - 左下、バツテン）の中から選択して引くことも出来ます。

⑤ フレーム名称指定

「フレーム名称選択候補」欄に示されたフレーム名の中から、どの項目に対応させるか選択・指示します。

フレーム名をマウスの左ボタンで選択し、そのままボタンを放さずに、対応させる「フレーム名称指定」の欄上までドラッグしてきて左ボタンを離します。「フレーム名称指定」欄に選択したフレーム名が表示されます。

削除したい場合は、上記とは逆に、「フレーム名称指定」欄から削除したいフレーム名を選択（マウスでクリック）し、「フレーム名称選択候補」欄までドラッグしてください。

1つの「データ例」欄に対して、複数の「フレーム名称」を対応させることは、流し込みの条件設定やパラメータ設定が異なる場合を考慮して、指定できないようになっています。例えば、1つの氏名を2つのフレームで使いたい場合は、「○○用氏名」「××用氏名」のように、事前に処理ファイル上で2列別々の情報を作成しておいてください。

また、文字差込、文字差込ファイルの場合を除き、複数のデータ項目に、同一フレームを設定することはしないでください。予期しない結果となります。1つのフレームに複数の項目を結合して流し込みたい場合には、パラメータを利用してください。

基本的には、データ項目とフレームは1対1の対応となりますが、処理種類によっては、複数の項目データを結合して使用したり、逆に、1項目データを複数フレームに分割して使用したりできる場合もあります。

5. 郵便カスタマーバーコード作成

郵便番号用のカスタマーバーコードを発生させることができます。バーコードの表示には、ご使用するバーコードフォントを、予めインストールしておいてください（フリーウェア版の PBBarcode フォントがインストール CD にバンドルしてありますので、解凍し利用可能です）。

「郵便番号項目」のパラメータ欄に郵便番号の項目番号を、「住所項目」のパラメータ欄に住所の項目番号を、半角数字で指定してください。

住所項目が「番地住所（例：〇〇市〇〇町 1-2）」と「建物住所（例：〇〇ハイツ 102）」に分かれているデータの場合には、「住所項目」欄に、「番地住所項目番号」と「建物住所項目番号」の2つを、「6,7」のように、半角カンマで区切って入力してください。**注意しなければならぬことは、バーコード作成に必要な番号を町域名での区切りを見つけ出し抽出しておりますので、区切りとなる町域名の区切り文字がない場合には、正しいバーコードデータが作成できません（下記※参照）。**

		町域名区切り	郵便番号項目	+	住所項目	=	バーコードフレーム
郵便カスタムバーコード 作成 <input checked="" type="checkbox"/>	町/-/字/線		1	+	2,3	=	番号

「バーコードフレーム」の「フレーム名称指定」欄には、対象となるフレーム名を「フレーム名称」欄から選択して、他の「フレーム名称指定」と同様にマウスでドラッグして指定してください。

バーコードを発生させるフレームのフォントには、バーコード用フォントをあらかじめ指定しておいてください。

※ 郵便カスタマーバーコードは、日本郵便（<http://www.post.japanpost.jp/zipcode/zipmanual/p10.html>）が開いている作成基準に準拠しています。ただし、町域名までのデータベースを持っていませんので、丁目以降のデータを取り出すのに、データにいくつかの制限があります。町域名区切りのデフォルト値として設定してある文字は「丁目・番地・地割・丁・線・番・号・地・-（半角マイナス）・-（全角マイナス）・-（全角ダーシ）・-（半角ダーシ）」です。（仕様に関して、郵便局員でも詳しく知らない場合がありますので、事前に読破を）

また、代表郵便番号（例 100-0000 枝番が**00のような下2桁が00で終わるもの）のように、郵便カスタマーバーコードが必要ないもの（郵政公社において認められないもの）には、バーコードを発生させません（カスタマーバーコード添付は割引対象の制度であるため、事業会社によって添付不要とされているバーコードは発生させません）。

大口事業者のように個別で郵便番号を取得されている場合の個別郵便番号を処理する場合、**テーブル名称は固定（zipspecial.xml）**です。

個別郵便番号に関しては、12 頁の個別郵便番号を参考にしてください。

※ 郵便カスタマーバーコードに関しましては、使用できるか否か、必ずお近くの郵政公社（本局程度の規模）にてご確認ください。また、必要な数字が選択されているかどうかを確認したい場合は、フォント指定をバーコード用フォントから通常の欧文フォント等へ切り替えてみてください。

※ 郵便カスタマーバーコードは、他のバーコードと異なり、文字列扱いでテキストフレームに挿入されます。

※ PBBarcode フォントをご使用になる場合には、添付の使用条件をご確認ください。

6. 設定保存

「SpicyLibra」画面で設定した条件は、「設定保存」ボタンをクリックして表示される「設定ファイルの保存」画面から、保存（～.sld）しておくことができます。必要な名前を付けて保存してください。

7. 設定読込

「設定保存」しておいた設定用ファイル（～.sld）は、「設定読込」ボタンをクリックして表示される「設定ファイルの選択」画面から、呼び出すことができます。新しく読み込みをする場合は、先に「設定クリア」を押して、設定項目を空にしておいてください。

従来の、SpicyLibra 以前に作成保存した設定ファイルは、CC 版では、機能拡張を行ったため使用できません。誠に申し訳ございませんが、再度作成してください。

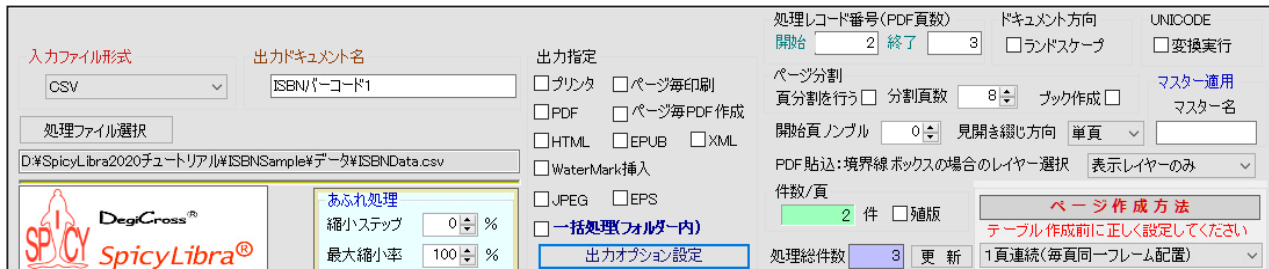
8. 設定クリア

「設定クリア」ボタンをクリックすると、「SpicyLibra」画面上で設定されている条件が全てクリアされ、何も設定されていない初期入力画面に戻ります。設定条件を保存しておきたい場合は、先に「設定保存」しておいてから、「設定クリア」ボタンをクリックしてください。

フレーム数の変更やフレーム名の変更を伴う形で、**テンプレートを変更した場合は、「設定クリア」ボタンを押して、各定義を最初から設定し直してください。**テンプレート名は同じでも、また、「基本パス設定」画面でテンプレートのパスだけを変更しても、古いテンプレートの設定条件が SpicyLibraCS 上に残っている場合は、正常に作動しません。

9. 出力用各種処理の設定

「処理データ項目対応設定」で扱うデータの設定が終了したら、次に、同じ SpicyLibra 画面の下段にある、出力用の各設定を行います。



① 出力指定

- (a) プリンタ …………… 流し込み処理終了後一括プリンタ出力を行う
 - (a-1) ページ単位印刷 …… 1 ページ毎に処理終了後プリンタ出力を行う
 - (a-2) PDF …………… PDF ファイルを作成
 - (a-3) ページ毎 PDF 作成…1 頁毎 PDF 作成
 - (b) JPEG …………… JPEG ファイルを作成
 - (d) HTML…………… HTML 書き出し
 - (c) EPS …………… EPS ファイルを作成
 - (e) EPUB …………… EPUB 3.0 書き出し
 - (f) 一括処理（フォルダー内） …… 指定したフォルダー内の全てを連続処理します。
 - (g) WaterMark …………… WaterMark（透かし）を挿入
 - (h) XML …………… XML ファイルを作成
- （あらかじめテンプレートのフレームに XML タグを設定しておきます。UTF-8 エンコード）

「プリンタ」で一括出力したい場合は「プリンタ」にチェックを入れてください。

ページ毎にプリントアウトする場合には、「ページ毎印刷」にチェックを入れてください。「ページ毎印刷」にチェックがある場合、「プリンタ」にチェックがあっても、1 ページ毎にしかプリントアウトしません。出力するプリンタは、次に述べるプリンタプリセットが設定され、「次のプリセットを使用する」チェックボックスにチェックがある場合には、選択されたプリセットを使用して出力します。

各種「ファイル」を作成したい場合は作成したい「ファイル形式名」にチェックを入れてください。2 つ以上を同時に行いたい場合には、必要なチェックボックスにチェックを入れてください。ただし、同一のファイル名のものを書き出す場合がありますので、組合せには注意をしてください。InDesign のドキュメントファイルは、無条件で作成されます。

また、PDF の出力に関しては、デフォルトで、「最小ファイルサイズ」のモードでの出力となります。ただし、次に述べる PDF プリセットが設定されている場合には、選択された PDF プリセットを使用して出力します。

出力にチェックした各ドキュメント作成のオプションパラメータの設定は、「出力オプションの設定」ボタンをクリックして、各ドキュメントフォーマットに該当する設定画面に、適宜、値を設定してください。本設定ダイアログ画面で設定できる内容は、ほぼインデザインにて手動で書き出す場合に表示されるダイアログで設定できる項目と同じとなっております。

ただし、WaterMark は手動にてはサポートされておりませんので、SpicyLibra 独自のオプションとなります。

また、EPUB に関しましては、Book での書き出しは行いませんので、インデザインドキュメント毎の書き出しとなります。

一括処理は、フォルダー内にある同形式データファイルを逐次自動読み込みを行い処理をするものです。

② 出力オプションの設定

出力チェックをしたドキュメントの書き出しに際し、各種のオプション指定を行います。

各ドキュメント書き出しのオプションの設定内容は、インデザインから手動にてドキュメントを書き出す場合に表示されるオプション設定ダイアログで設定できる内容とほぼ同じものとなっておりますので、このマニュアルにて書かれていない詳細に関しましては、インデザインのマニュアルを参照していただくようお願いします。

「出力オプション設定」ボタンをクリックし、表示される設定画面（タブコントロール）の該当するタブを選択し必要な値を設定します。XML 出力にはオプション設定はありません。

（※）ドキュメント書き出しオプション設定は、インデザインが公開しておりますメソッドを利用しオプションとして設定していますが、様々な条件で、指定した通りの処理とならない場合も起こりえますので、すべてのオプション設定が有効に機能することを保証するものではないことを、予めご承知おきください。

※ PDF/EPUB のブック書き出しには対応しておりません。

※ EPUB 等の書き出しでは、ドキュメントの設定方法などで、プログラムが異常終了する場合があります。InDesign の説明書及び Adobe 社のサイトなどを参考に対処してください。

(a ～ a-3) プリンタ・PDF ……………印刷時及び PDF 出力時のオプション設定



プリンタでの出力は、処理実行が行われる InDesign で設定されている条件で出力されますので、出力条件はあらかじめ設定しておいてください。指定がない場合は、作成されたドキュメントのデフォルト印刷設定値でプリントされます。

常に一定の条件で出力したい場合は、InDesign 上のプリントプリセット定義で「プリセットの保存」をしておいてください。

プリンタ設定欄の「プリンタプリセットを使用」にチェックを入れ、「プリンタ・PDF プリセット値の取得」ボタンをクリックすると、保存してあるプリセットの一覧が表示されますので、適切な次のプリセット定義を選択してください。

また、PDF 出力の場合にも、InDesign で設定された条件で出力されますので、出力条件は、あらかじめ設定しておいてください。指定がない場合には、デフォルトを「最小ファイルサイズ」として出力します。

デフォルト以外の PDF プリセットを使用する場合には、「プリンタ・PDF プリセット値の取得」ボタンをクリックして表示された PDF プリセット一覧から選択してください。選択した PDF プリセットが PDF 設定欄の PDF プリセットテキストボックスに表示されます。

いったん PDF プリセットを選択後、やはりデフォルトで出力したいという場合には、このテキストボックスをクリアしてください。

PDF 作成に際して、PDF ファイルを InDesign ドキュメントファイルの設定出力フォルダーとは異なるフォルダーに作成したい場合には、「PDF フォルダー」ボタンをクリックし、作成先のフォルダーを設定してください。

ページ数の多いドキュメントを分割処理する時など、全ドキュメントの処理が終了してから作成した PDF ファイルを、例えばプリンターのホットフォルダーに投入するのではなく、分割したドキュメントの PDF ファイルを、当該プリンターのホットフォルダーに直接出力することで、SpicyLibra のドキュメント処理と PDF ファイルのプリンタ出力処理を並行して行いたい場合などに使用することができます。

「ページ毎 PDF 作成」にチェックがある場合、1 ページ毎に PDF ファイルを作成します。基本名に「_ ページ番号」を付加した PDF ファイルを作成します。

「ページ毎 PDF 作成」のチェックがある場合、ドキュメント全体での PDF 書き出しは行いませんので、注意してください。パラメータにおける書き出しフォルダーの変更は「ページ毎 PDF 作成」においても有効となります。

■インタラクティブ PDF

PDF 設定欄で「インタラクティブ PDF として出力」にチェックを入れると、PDF はインタラクティブ PDF

として書き出されます。この場合、PDF プリセットが設定されていてもプリセットは無効となります。

次のようにインタラクティブ PDF 書き出し時の処理パラメータ設定画面が表示されるので、画面項目の値を設定します。なお、再生には FlashPlayer が必要となります。



● ページサムネールを埋め込み

書き出しページごとに 1 枚のサムネールプレビューを作成するか、「見開き印刷」オプションを選択している場合は、見開きページごとに 1 つのサムネールを作成します。サムネールは InDesign の開くダイアログボックスまたは配置ダイアログボックスに表示されます。サムネールを追加するとファイルサイズが増大します。

● Acrobat レイヤーを作成

InDesign レイヤーは PDF 内で Acrobat レイヤーとして保存されます。書き出したレイヤーは自由に操作でき、Acrobat 6.0 以降のユーザーであれば、1 つの PDF から複数のファイルバージョンを作成することができます。

● タグ付き PDF を作成

書き出し中に、InDesign でサポートしている Acrobat タグのサブセットに基づいて、ストーリーの要素に自動的にタグが付けられます。このサブセットには、段落、基本的なテキストの書式、箇条書き、表が含まれます (PDF に書き出す前に、ドキュメントでこれらのタグを挿入したり修正したりすることができます。詳しくは、PDF への構造の追加を参照してください)。

● 表示

PDF が開かれるときの初期状態の表示設定を指定します。

「デフォルト / 100% 表示 / ページに合わせる / 幅に合わせる / 高さに合わせる / 可視全体 / 25% / 50% / 75% / 100%」から選択します。

● レイアウト

PDF が開かれるときの初期状態のレイアウトを指定します。

「デフォルト / 単一ページ / 単一ページ連続 / 2 面 (見開き) / 2 面の連続 (見開き) / 2 面 (カバーページ)

/ 2 面の連続（カバーページ）」から選択します。

●プレゼンテーション

「フルスクリーンモードで開く」を選択すると、Adobe Acrobat または Adobe Reader 上で、メニューやパネルを隠した状態で PDF が表示されます。ページ送りが自動的に行われるようにするには、「次の間隔でページを反転」を選択し、切り替えの間隔を秒単位で指定します。

●ページ効果

書き出し時にすべてのページに適用される次のページ効果のうち一つを指定します。

「なし / ブラインド / ボックス / くし形 / スライドイン / ディザ合成 / フェード / プッシュ / 分割 / スライドアウト / ワイプ / ズームイン / ズームアウト」

SpicyLibra では、選択されたページ効果を全スプレッドに適用したのち、ドキュメントからページ効果を適用する方法で処理を行います。

選択したページ効果においては、ページのどの方向から効果が表れるかを設定したりする必要がありますが、そのようなオプションを伴うページ効果の場合には、方向コンボボックスが選択可能となり、方向を選択できるようになります。

また、速度に関しては、「低速 / 標準 / 高速」から選択可能であり、透明統合は、透明処理を「なし / デフォルト / カスタム」から選択します。

●ボタンおよびメディア

書き出す PDF ファイル内のムービー、サウンド、ボタンをインタラクティブにするには、「すべて含める」を選択します。ボタンやビデオポスターの通常ステートを静的な要素として含めるには、「外観のみ」を選択します。

●圧縮

「JPEG（劣化あり）/ JPEG2000（劣化なし）/ 自動」から圧縮の方法を選択します。

「JPEG（劣化あり）」を選択すると画像のデータが失われ、場合によっては画質が低下しますが、情報量に最小限の損失が生じる代わりにファイルサイズが小さくなります。「JPEG 2000（劣化なし）」を選択すると、非可逆圧縮を行わずにファイルが書き出されます。「自動」を選択すると、カラー画像やグレースケール画像に最適な品質が設定されます。

●JPEG 画質

書き出す画像の細部のレベルを指定します。画質が高いほど、ファイルサイズが大きくなります。「圧縮」で「JPEG 2000（劣化なし）」を選択した場合、このオプションはグレー表示になります。

●解像度

書き出す PDF 画像に含めるビットマップ画像の解像度（72~300dpi）を指定します。書き出す PDF に含まれるピクセルベースのコンテンツを拡大表示できるようにする場合は、高解像度を選択することが非常に重要です。ただし、高解像度を選択するとファイルサイズが大幅に増大することがあります。

（※）出力オプション設定の説明は、インデザインのヘルプを元にご覧いただけますので、一部、引用をしております。あらかじめご了承ください。なお、詳細に関しましては、InDesignCC2019 のマニュアルを参照してください。

(b) JPEG …………… JPEG ファイルを作成

●スプレッド

見開きページを単一の JPEG ファイルに書き出します。このオプションを選択していない場合は、スプレッドの各ページはそれぞれ別の JPEG ファイルに書き出されます。

●品質

ファイルの圧縮率（ファイルサイズをより小さくします）と画質の品質を設定するオプションを選択します。「最高画質（低圧縮率）」は、高解像度の画像データを可能な限りファイルに書き出しますが、最も多くのデ



スクスペースを必要とします。ファイルを高解像度出力デバイスで出力する場合は、このオプションを選択します。

「低画質（高圧縮率）」は、配置されているビットマップ画像のモニター表示用の解像度（72 dpi）でファイルに書き出します。ファイルをモニター表示にのみ使用する場合、このオプションを選択します。

「高画質」および「標準」は、「低画質（高圧縮率）」より多くの画像データを含みますが、圧縮率のレベルを変更することによって、ファイルサイズが小さくなります。

●フォーマット

画像の表示方法のフォーマットを選択します。

「プログレッシブ」は、JPEG 画像を Web ブラウザーにダウンロードしながら、徐々に詳細を表示していきます。

「ベースライン」は、JPEG 画像を完全にダウンロードしてから表示します。

●解像度

「1 ～ 2400」（ppi）で書き出す JPEG 画像の解像度を指定します。

。

●カラースペース

RGB、CMYK またはグレイでの書き出しを選択できます。

●カラープロファイルを埋め込む

書き出される JPEG ファイルにドキュメントのカラープロファイルが埋め込まれます。

JPEG ファイルを書き出す前に、編集／プロファイルを割り当てを選択すると、当該ドキュメントに必要なプロパティファイルを選択できます。

カラースペースメニューで「グレイ」を選択した場合は、「カラープロファイルを埋め込み」オプションは無効になります。

●アンチエイリアス

アンチエイリアス処理によって、テキストやビットマップ画像のギザギザした境界線が滑らかになります。

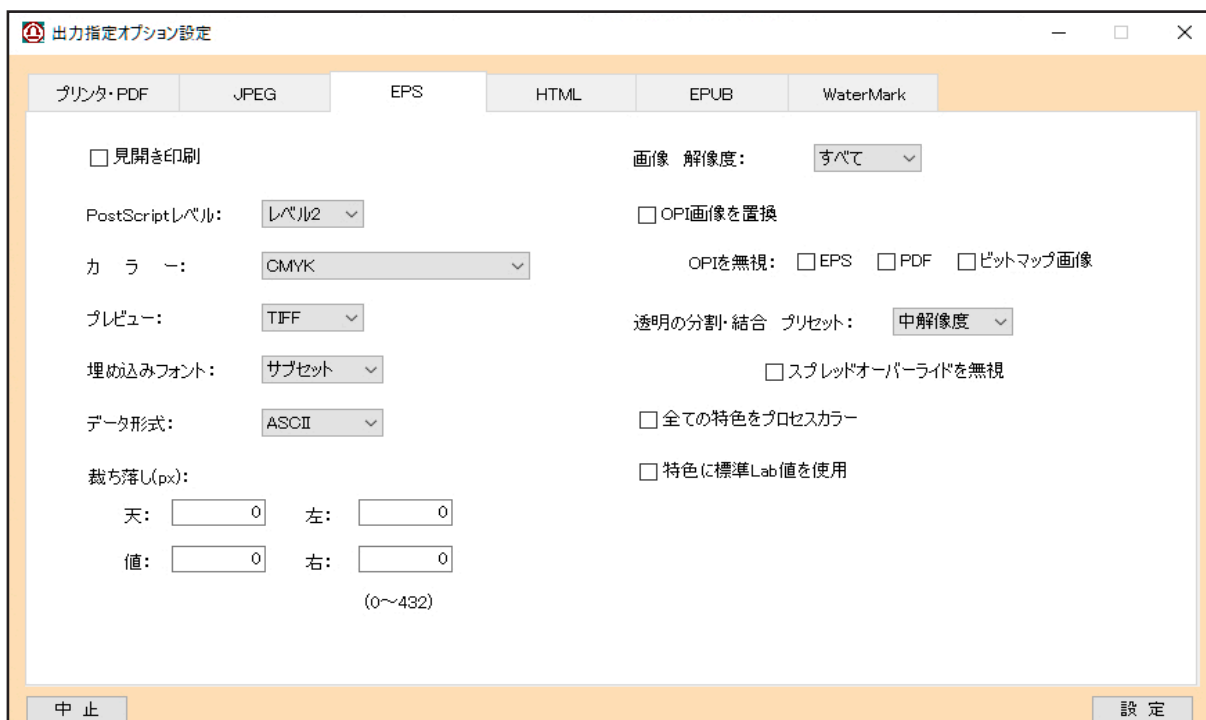
●ドキュメントの裁ち落とし

「ドキュメント設定」で指定した裁ち落とし領域が、書き出された JPEG 画像に表示されます。「選択部分」オプションが選択されている場合、このオプションは無効になります。

●オーバープリント処理

InDesign で書き出される JPEG ファイルにおいて、特色を印刷用のプロセスカラーに変換することによって、ND 値の異なる特色インキのオーバープリントの効果がシミュレートされます。

(c)EPS …………… EPS ファイルを作成



●見開き

スプレッドを 1 つの EPS ファイルとして書き出す場合に選択します。

●PostScript レベル

PostScript 出力デバイスのインタープリターとの互換性レベルを指定します。ファイルを PostScript レベル 2 以降の出力デバイスでのみ出力する場合は、「レベル 2」を選択すると、グラフィックの印刷速度と出力品質が改善されることがあります。

「レベル 3」を選択すると、最適のスピードと出力品質が提供されますが、PostScript 3 の出力デバイスが必要です。

●カラー

書き出されたファイルでカラーを表示する方法を「変更しない/CMYK/ グレー /RGB/PostScript カラーマネージメント」から選択します。

〔変更しない〕 各画像が元のカラースペースのままになります。例えば、ドキュメントに 3 つの RGB 画像と 4 つの CMYK 画像がある場合、書き出される EPS ファイルには、同じ RGB 画像と CMYK 画像が含まれます。

〔CMYK〕 すべてのカラーをシアン (C)、マゼンタ (M)、イエロー (Y)、墨 (K) のプロセスカラーインキを使用して再現する色分解可能なファイルを作成します。

〔グレー〕 すべてのカラー値を高品質なモノクロ画像に変換します。変換されたオブジェクトのグレー階調 (シェード) は、元のオブジェクトの輝度を表します。

[RGB] すべてのカラーを赤 (R)、緑 (G)、青 (B) のカラースペースで再現します。RGB カラー定義のある EPS ファイルは、画面表示に適しています。

[PostScript] カラーマネジメントオリジナルのカラースペースのキャリブレーションしたバージョンで、ドキュメントのカラーデータを使用します。

●プレビュー

ファイルに保存されるプレビュー画像の種類を「なし / TIFF」から選択します。プレビュー画像は、EPS 画像を直接表示できないアプリケーションで使用されます。プレビュー画像を作成しない場合は、「なし」を選択します。

●埋め込みフォント

書き出すページで使用するフォントを組み込む方法を「なし / 完全 / サブセット」から選択します。

[なし] PostScript ファイルにフォントの参照情報を追加します。この PostScript ファイルによって、RIP またはポストプロセッサにフォントの使用場所が示されます。

[完全] プリントジョブの最初に、ドキュメントに必要なすべてのフォントがダウンロードされます。ドキュメントに出現しないものも含めて、フォントのすべての字形と文字がダウンロードされます。環境設定ダイアログボックスで指定されている字形 (文字) の最大数より多いフォントが InDesign で自動的にサブセットされます。

[サブセット] ドキュメントで使用されている文字 (字形) だけがダウンロードされます。

●データ形式

コンピューターからプリンターに送信される画像データのエンコード方式を、「ASCII / バイナリ」から選択します。

●裁ち落とし

ページまたはトリミングの領域外に配置されているグラフィックを書き出すためのスペースを指定する値を 0 ~ 432px の間で入力します。

●画像

書き出されたファイルに組みこむ、配置されたビットマップ画像の画像データ量を「すべて / プロキシ」から選択します。

[すべて] 高解像度の画像データをすべてファイルに書き出します。最も多くのディスク容量を必要とします。ファイルを高解像度出力デバイスで出力する場合は、このオプションを選択します。

[プロキシ] 配置されたビットマップ画像の画面表示用の低解像度バージョン (72dpi) だけをファイルに書き出します。

●OPI 画像を置換

オプションを選択した場合、または出力される PDF ファイルを画面上で見ると、このオプションを選択します。

[OPI 画像を置換] 出力時に低解像度の EPS プロキシ画像を高解像度画像に置き換えます。

[OPI を無視] 画像データをプリンターやファイルに送る際に、OPI サーバーで後処理用に OPI リンク (コメント) だけを残し、書き出した画像を無視することができます。

●透明の分割・統合

「低解像度 / 中解像度 / 高解像度」から透明の分割・統合プリセットを選択して、書き出されたファイルで透明のオブジェクトをどのように表示するかを指定します。SpicyLibra では、デフォルトのプリセットのみ選択可能です。

[スプレッドオーバーライドを無視] 透明の分割・統合でのスプレッドのオーバーライドを無視します。

●インキ管理のうち「全ての特色をプロセスカラー、特色に標準 Lab 値を使用」の 2 点について、ドキュメントのデザインを変更しないで、インキ設定を修正することができます。

(d) HTML ……………HTML ファイルを作成

HTML ファイルに書き出される InDesign のオブジェクトには、書き出されないオブジェクトがありますの



で、書き出されるもの、書き出されないものなどをインデザインのマニュアルで確認してください。

例えば、ユーザーが描画したオブジェクト（長方形、楕円形、多角形など）は書き出されません。

また、ストーリー、リンクと埋め込み画像などが書き出されます。ただし、オーバーライドされていないマスターページアイテムと隠れたレイヤー上のページアイテムは書き出されません。XML タグ、ブック、ブックマークも無視されます。本画面で設定できる内容は、InDesign の書き出しダイアログに準拠しています。

コンテンツを再配置およびフォーマットするには、Dreamweaver 等を使用して行えます。

●コンテンツの順序

ページレイアウト / XML 構造 / アーティクルパネルから、ページオブジェクトの読み上げ順序を指定します。

「ページレイアウトを基準にする」を選択した場合、ページオブジェクトの読み上げ順序は、ドキュメントの綴じ方（左から右または右から左）に従って決定されます。場合によっては（特に、複雑な複数段組ドキュメントの場合は）、書き出されたデザイン要素が目的の読み上げ順序に表示されないことがあります。

「XML 構造と同じ」を選択した場合、XML 構造パネルによって、書き出されるコンテンツの順序および書き出されるコンテンツが制御されます。コンテンツに既にタグが設定されている場合、XML 構造パネルでタグをドラッグするだけで、XHTML の書き出しの順序を設定できます。コンテンツにタグが設定されていない場合、XML 構造パネルメニューから「タグ付けされていないアイテムを追加」を選択して、順序の変更が可能なタグを生成できます。アイテムを書き出しに含めたくない場合は、XML 構造パネルでタグを削除するだけで済みます（タグを削除しても、INDD ファイルからコンテンツが削除されるわけではありません）。

「アーティクルパネルと同じ」を選択した場合、アーティクルパネルの要素の順序に従って読み取り順序が決定されます。チェック済みのアーティクルのみが書き出されます。

●マージン

~~天地左右のマージンを em またはピクセルで指定します。em でマージンを指定する方がマルチスクリーンとの互換性に適しています。~~

【フォーマットオプション】

●記号

- ・番号なしリストにマップ

記号の段落をリストアイテムに変換します。リストアイテムは HTML で タグを使用してフォーマットされます。

- 。テキストに変換

<p> タグを使用して箇条書き記号をテキストとしてフォーマットします。

●番号

- ・番号付きリストにマップ

自動番号リストをリストアイテムに変換します。リストアイテムは HTML で タグを使用してフォーマットされます。

- ・静的番号付きリストにマップ

自動番号リストをリストアイテムに変換しますが、InDesign で段落に現在付けられている番号に基づいて <value> 属性を割り当てます。

- ・テキストに変換

自動番号リストを、テキストとして段落の現在の番号で始まる段落に変換します。

【CSS オプション】

- HTML にクラスを含めない または ● HTML にクラスを含める

クラスを含める場合には、次の 2 つのオプションを設定できます。

- ☐ CSS を作成する。
- ☐ ローカルオーバーライドを保持する。

●その他 CSS

既存の CSS スタイルシートの URL を指定します。ファイルを絶対パスで指定します。InDesign では、CSS の存在や有効性は検証されないため、Dreamweaver を使用して外部 CSS の設定を確認する必要があります。

●JavaScript オプション

HTML ページが開かれたときに Java スクリプトを実行させるには、外部 Java スクリプトへリンクさせます。Java スクリプトへの URL を指定します。絶対パスにて設定します。InDesign では Java スクリプトの存在や有効性は検証されません。script ファイルは絶対パスで指定します。

【画像オプション】

●画像コピー

「オリジナル/最適化/サーバーパスにリンク」から HTML ファイルに画像を書き出す時の方法を選択します。

「オリジナル」は、オリジナル画像を web images サブフォルダーに書き出します。このオプションを選択すると、他のすべてのオプションが選択不可になります。

「サーバーパスにリンク」は、サブフォルダーへ画像を書き出すのではなく、画像ファイルの前に表示されるローカル URL（「images¥」など）を入力できます。

HTML コードでは、リンク属性により指定したパスと拡張子が表示されます。

「最適化」は、画像の書き出し方法の設定を次のパラメータで変更します。

●画像変換

ドキュメントの最適化画像を GIF/JPEG/PNG のどれに変換するかを選択します。各インスタンスでどちらを使用するか、InDesign で決定されるようにするには、「自動」を選択します。「PNG」を選択すると、画像圧縮設定が無効になります。

●レイアウトのアピランスを保持

画像オブジェクト属性がレイアウトから継承されます。

●解像度 (ppi)

画像の解像度を ppi で指定します。オペレーティングシステムは 72 ppi または 96 ppi で標準化されていますが、モバイルデバイスは 132 ppi (iPad) ~ 172 ppi (Sony リーダー)、300 ppi (iPhone 4) 以上と範囲が異なります。選択したオブジェクトごとに ppi 値を指定できます。値には、72、96、150（現在のすべての ebook デバイスの平均）、および 300 があります。

●画像サイズ

画像サイズを固定するか、ページを基準にして変更するかを指定します。「ページを基準とする相対指定」

を選択すると、InDesign ページ幅を基準として画像サイズに基づいて相対的なパーセント値が設定されます。読み取り領域の幅に基づいて縦横比率を維持したまま画像サイズが変更されます。

●画像の整列および間隔

画像の左揃え、中央揃え、右揃え、上および下の間隔を指定します。

●設定をアンカー付きオブジェクトに適用

これらの設定がアンカー付きオブジェクトに適用されます。

●オブジェクトの書き出し設定を無視

個々の画像に適用されたオブジェクト書き出しオプションを無視します。

【GIF オプション】

最適化 GIF ファイルを作成する場合の、InDesign でのカラーの処理を調整します。GIF 形式は、256 色以下のカラーパレットを使用しています。

●パレット

「使用中の色に合わせて割り付ける（ディザなし）」を選択すると、ディザ処理（色の小さな点を混ぜて存在しない色を表現する）をせずに、グラフィックで中心的に使われているカラーを抽出してパレットを作成します。

「Web」を選択すると、Web セーフカラーのパレットを作成します（Windows と Mac OS のシステムカラーのサブセットです）。

組み込みのカラーパレットを使用してパレットを作成するには、「システム（Windows）」または「システム（Mac OS）」を選択します。これにより、予想外の結果になることがあります。

●インターレース

インターレースモードとして出力します。

【JPEG オプション】

●画質

作成する JPEG 画像ごとの圧縮率（ファイルサイズをより小さくするため）および画質を決定します。低解像度の場合はファイルは最小になり、画質も最も低くなります。

●形式

HTML ページを開いてから、どれくらい速く JPEG 画像が表示されるかを指定します。

「プログレッシブ」を選択すると、JPEG 画像は Web ブラウザーにダウンロードされるにしたがって徐々に詳細が表示されます。このオプションを指定して作成されたファイルは、サイズがやや大きくなります。また、表示のためによりメモリが要求されます。

「ベースライン」を選択すると JPEG ファイルが完全にダウンロードされてから表示されます。ダウンロードが終了するまでは、JPEG ファイルの代わりにプレースホルダーが表示されます。

●PNG 圧縮レベル

PNG 圧縮レベルを 0～9 の範囲で指定します。デフォルトは 5 です。

（※）InDesign では、Java スクリプト、外部 CSS スタイル、または画像フォルダーに指定したパスは検証されないため、Dreamweaver を使用してパスを確認する必要があります。

(e) EPUB……… EPUB 用ファイルを作成

固定レイアウト形式の EPUB を書き出します。EPUB のバージョンは 3.0 となります。

インデザインから、DigitalEdition など書き出す場合、ドキュメントの設計そのもので注意しておかなければならない点がいくつかあります。

まず、EPUB 出力をはじめとし SWF や HTML などの出力では、段落スタイル、文字スタイル、ファイルへのリンクパス、出力ファイル名などは、すべて日本語を使わず、欧文で設定しておくことにより不要な動作を軽減します。

また、すべての段落に段落スタイルを適用しておくことが望めます。基本段落スタイルであっても、別途、欧文名での段落スタイルを用意し、その段落スタイルを適用しておくことがのぞまれます。

次に、DigitalEdition 書き出しにおいて目次をインデザインドキュメントの TOC データより取得する場合には、あらかじめテンプレートにて TOC 定義を設定しておく必要があります。

【InDesign テンプレートでの TOCS 定義作成】

インデザインのメニューより、「レイアウト」→「目次」を選択し、TOC 定義のダイアログを表示させます。

上図のように、タイトルには何も記入しません。また、タイトルスタイルは適当で構いません。

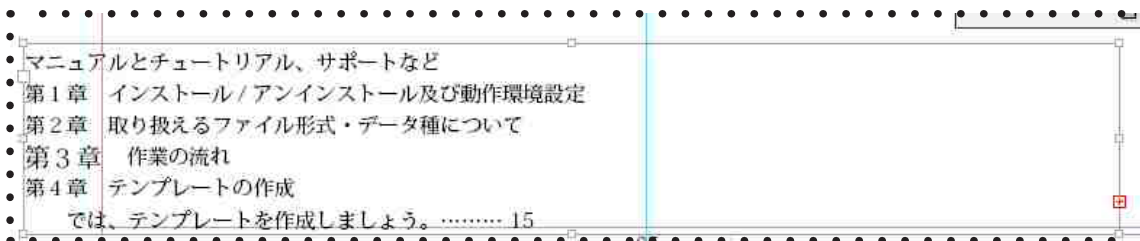
目次データとして使用する段落スタイルを選択し、各々の目次レベルなどを設定します。この時、ページ番号は無しを選択しておきます。

すべての目次候補の段落スタイル設定が終了しましたら、「OK」ボタンをクリックします。

The screenshot shows the '目次' (Table of Contents) dialog box. Key elements include:

- 目次スタイル(S):** Set to 'デフォルト' (Default).
- タイトル(T):** Empty text field.
- スタイル(D):** Set to '目次' (Table of Contents).
- 目次のスタイル** section:
 - 段落スタイルを含む(E):** A list containing '題目1', '題目14Q-同行', '題目-本文1字下', '題目-本文2字下', and '題目-本文3字下'. '題目1' is selected.
 - その他のスタイル(H):** A list containing '[段落スタイルなし]', 'Normal', '[基本段落]', '本文', and '本文1字下'.
 - Buttons: '<< 追加(A)' (Add) and '削除(R) >>' (Remove).
- スタイル: 題目1** section:
 - 項目スタイル(N):** Set to '目次'.
 - ページ番号(E):** Set to 'ページ番号なし' (No page number).
 - 項目と番号間(W):** Set to '1'.
 - 項目をアルファベット・50音順に並べる(O)**: Unchecked.
 - スタイル(Y):** Set to '[なし]' (None).
 - スタイル(E):** Set to '[なし]'.
 - レベル(L):** Set to '1'.
- オプション** section:
 - PDF ブックマークを作成(O)**: Checked.
 - 現在の目次を置換(X)**: Unchecked.
 - ブックのドキュメントを含む(K)**: Unchecked.
 - 1行にまとめる(U)**: Unchecked.
 - 非表示レイヤーのテキストを含む(D)**: Unchecked.
 - 段落の自動番号(Q):** Set to '番号を除外' (Exclude numbers).
 - フレームの方向(A):** Set to '構組み' (As-is).
- Buttons:** 'OK', 'キャンセル' (Cancel), 'スタイルを保存(V)...' (Save style...), and '基本設定(F)' (Basic settings).

すると、ドキュメント画面上にフローティングウィンドウで、目次データが表示されますので、ドキュメント上の適当な場所に配置します。

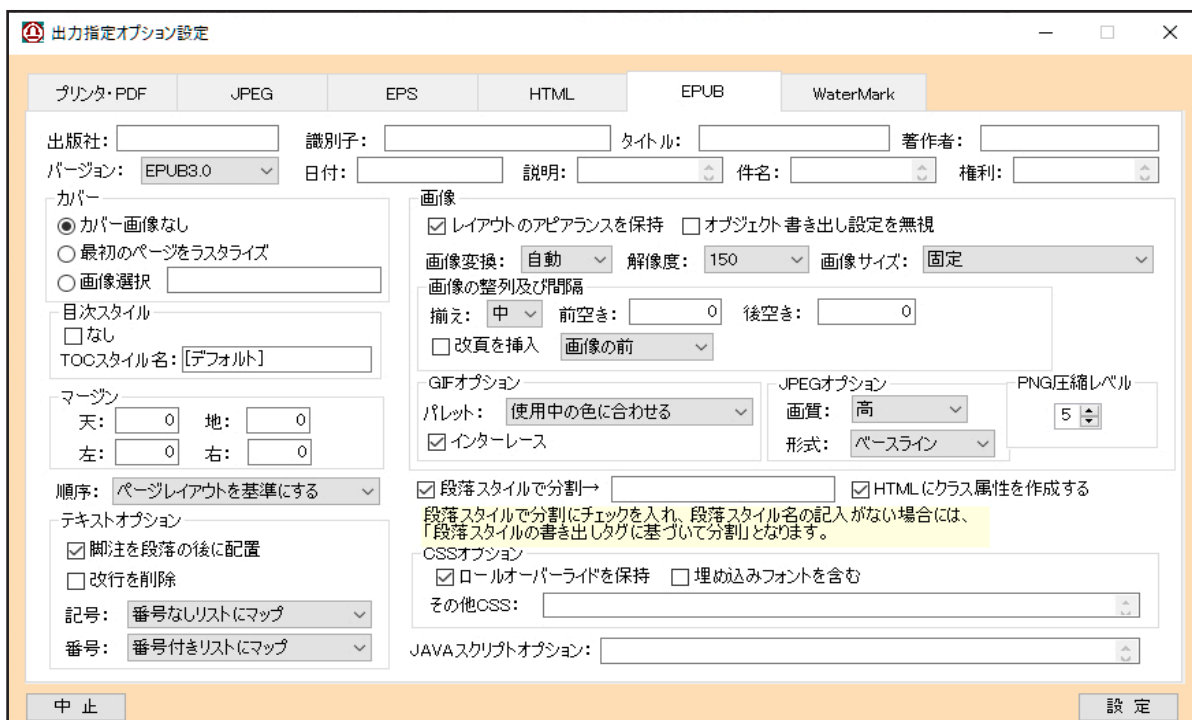


この目次データは使用しませんので、配置したフレームを選択し、削除しておきます。

以上で、インデザインテンプレートに TOC の定義が保持されます。

EPUB 書き出しを行うと、XHTML ベースのコンテンツを含む単一の .epub ファイルが作成されます。書き出されたファイルにカバー画像が含まれるように指定することもできます。カバー画像は、画像から作成されるか、指定したドキュメントの最初のページにある JPEG サムネール画像から作成されます。サムネール画像は、EPUB リーダーや Digital Editions リーダーのライブラリビューでブックを表すために使用されます。ファイルを表示するには、EPUB リーダーが必要です。代わりに Adobe Digital Editions ソフトウェアを使用することもできます。Digital Editions ソフトウェアはアドビ システムズ社の Web サイトから無償でダウンロードできます。

なお、epub ファイルは本質的には .zip ファイルです。.epub ファイルのコンテンツを表示および編集するには、拡張子を .epub から .zip に変更して、コンテンツを抽出します。これは CSS ファイルを編集する場合に特に便利です。



●出版社 (Publisher)

eBook メタデータに含める発行側の情報を指定します。eBook を受け取ったユーザーが発行者の Web サイトにアクセスできるように、発行者の URL を指定できます。

●識別子 (ID)

EPUB ドキュメントにはそれぞれ固有の識別子が必要です。固有の識別子の属性を指定できます。このフィールドを空白のままにすると、固有の識別子が自動的に作成されます。

●タイトル (Title) ●世作者 (Author) ●日付 (Date) ●説明 (Description) ●件名 (Subject)

●権利 (Right)

ドキュメントメタデータに記述し、EPUB メタデータに挿入します。

●カバー

eBook のカバー画像を指定します。次のいずれかの操作を行います。

- ・カバー画像なし
eBook にカバー画像が追加されません。
- ・最初のページをラスタライズ
eBook の最初のページから画像ファイルが作成されてカバーに使用されます。
- ・画像選択
カバーに使用する画像を指定できます。
使用するカバー用の画像ファイルは、ファイルの絶対パスで指定します。

●配列（コンテンツの順序）

ページエレメントの書き出し順を指定できます。

- ・ページレイアウトを基準にする
ページ上のアイテムの位置によって読み取り順序が決まります。InDesign では、左から右、上から下に読み取りが行われます。「ページレイアウトを基準にする」を選択した場合、ページオブジェクトの読み上げ順序は、ドキュメントの綴じ方（左から右または右から左）に従って決定されます。場合によっては（特に、複雑な複数段組ドキュメントの場合は）、書き出されたデザイン要素が目的の読み上げ順序に表示されないことがあります。コンテンツを再配置およびフォーマットするには、Dreamweaver を使用します。
- ・XML 構造と同じ
構造ビューでのタグの順序に従って読み取り順序が決定されます。
- ・アークティクルパネルと同じ
アークティクルパネルのエレメントの順序に従って読み取り順序が決定されます。チェック済みのアークティクルのみが書き出されます。

【テキストオプション】

●記号

箇条書きの段落をリストアイテムに変換するには「番号なしリストにマップ」を選択します。リストアイテムは HTML で タグを使用してフォーマットされます。<p> タグを使用して箇条書き記号をテキストとしてフォーマットするには「テキストに変換」を選択します。

●番号

「番号付きリストにマップ」を選択すると、自動番号リストをリストアイテムに変換します。リストアイテムは HTML で タグを使用してフォーマットされます。

「静的番号付きリストにマップ」を選択すると、自動番号リストをリストアイテムに変換しますが、InDesign で段落に現在付けられている番号に基づいて <value> 属性を割り当てます。

「テキストに変換」を選択すると、自動番号リストを、テキストとして段落の現在の番号で始まる段落に変換します。

●脚注を段落の後に配置

段落の後に脚注が配置されます。オフにすると、脚注は文末脚注に変換されます。

●強制改行を削除

書き出した eBook 内のソフトリターンがすべて削除されます。

●マージン

天地左右のマージンを ピクセルで指定します。

【目次】

●なし

チェックがある場合には、目次を作成しません。

チェックがされていない場合、テキストボックスに設定した TOC スタイルに基づいて目次が生成されます。

TOC スタイルメニューでは、eBook 内で目次を構築する際に使用する目次スタイルを指定します。デフォルトは「[デフォルト]」です。

【画像】

●レイアウトのアピランスを保持

画像オブジェクト属性がレイアウトから継承されます。

●オブジェクト書き出し設定を無視

個々の画像に適用されたオブジェクト書き出しオプションを無視します。

●画像変換

ドキュメントの最適化画像を GIF/JPEG/PNG のどれに変換するかを選択します。各画像でどちらを使用するか、InDesign で決定されるようにするには、「自動」を選択します。「PNG」を選択すると、画像圧縮設定が無効になります。

●解像度 (ppi)

画像の解像度を ppi で指定します。オペレーティングシステムは 72 ppi または 96 ppi で標準化されていますが、モバイルデバイスは 132 ppi (iPad) ~ 172 ppi (Sony リーダー)、300 ppi (iPhone 4) 以上と範囲が異なります。選択したオブジェクトごとに ppi 値を指定できます。値には、72、96、150 (現在のすべての eBook デバイスの平均)、および 300 があります。

●画像サイズ

画像サイズを固定するか、ページを基準にして変更するかを指定します。

「ページを基準とする相対指定」を選択すると、InDesign ページ幅を基準として画像サイズに基づいて相対的なパーセント値が設定されます。このオプションを使用すると、読み取り領域の幅に基づいて縦横比率を維持したまま画像サイズが変更されます。

【画像の整列および間隔】

●揃え

画像の左揃え、中央揃え、右揃え、上および下の間隔を指定します。

●前空き・後空き

画像の前後の空き量をピクセル単位で設定します。

●改ページを挿入

改ページが画像に挿入されます。改ページは、画像の前、画像の後、または画像の前後に挿入できます。

●設定をアンカー付きオブジェクトに適用

これらの設定がアンカー付きオブジェクトに適用されます。

●PNG 圧縮レベル

PNG 圧縮レベルを 0 ~ 9 の範囲で指定します。デフォルトは 5 です。

【GIF オプション】

●パレット

最適化 GIF ファイルを作成する場合の、InDesign でのカラーの処理を調整します。GIF 形式は、256 色以下のカラーパレットを使用しています。

「使用中の色に合わせて割り付ける (ディザなし)」を選択すると、ディザ処理 (色の小さな点を混ぜて存在しない色を表現する) をせずに、グラフィックで中心的に使われているカラーを抽出してパレットを作成します。

「Web」を選択すると、Web セーフカラーのパレットを作成します (Windows と Mac OS のシステムカラーのサブセットです)。

組み込みのカラーパレットを使用してパレットを作成するには、「システム (Windows)」または「システ

ム (Mac OS)」を選択します。これにより、予想外の結果になることがあります。

●インターレース

読み込み速度が遅い画像は、表示されていない行を埋めるようにして徐々に表示するモードに設定します。このオプションを選択していない場合、ぼやけて表示されていた画像が、元の解像度に近くなるにつれて徐々に明確になります。

【JPEG オプション】

●画質

作成する JPEG 画像ごとの圧縮率（ファイルサイズをより小さくするため）および画質を決定します。低解像度の場合はファイルは最小になり、画質も最も低くなります。

●形式

HTML ページを開いてから、どれくらい速く JPEG 画像が表示されるかを指定します。「プログレッシブ」を選択すると、JPEG 画像は Web ブラウザーにダウンロードされるにしたがって徐々に詳細が表示されます。このオプションを指定して作成されたファイルは、サイズがやや大きくなります。また、表示のためによりメモリが要求されます。「ベースライン」を選択すると JPEG ファイルが完全にダウンロードされてから表示されます。ダウンロードが終了するまでは、JPEG ファイルの代わりにプレースホルダーが表示されます。

●段落スタイルで分割

指定した段落スタイルの部分でドキュメントを分割します。チェックがあり、段落スタイル名が設定されていない場合には、「段落スタイルの書き出しタグに基づいて分割」されます。

【CSS オプション】

●スタイル定義を含む

EPUB 形式で書き出すときに、編集可能な CSS スタイルのリストを作成できます。

●ローカルオーバーライドを保持

このオプションを選択した場合、斜体や太字などのローカルの書式設定が含まれます。

●埋め込みフォントを含む

埋め込みを許可されているすべてのフォントを eBook に含めます。各フォントには、埋め込みが許可されているかどうかを示す埋め込みビットが含まれています。

●その他 CSS

外部 CSS スタイルシートの URL を設定します。InDesign では、CSS の存在や有効性は検証されないため、CSS の設定を確認する必要があります。

●JavaScript オプション

外部 Javascript ファイルの URL を設定します。

(f) 一括処理（フォルダー内）

【機能】

一括処理機能は、処理（入力）ファイルとして設定されたファイルが存在するフォルダーに格納されているファイルを、一括処理する機能です。

すなわち、同一定義ファイルを使用する複数の処理ファイルを、一回の出力指示で、フォルダー内のすべてのファイルのリストを作成し、当該ファイルリストに従い、ファイルリストの最後まで、逐次、ファイルを取り出し、指示された自動組版処理を行うことを繰り返して行います。

ホットフォルダーと異なり、処理命令ファイルは必要なく、1つの定義ファイルと1つの特定フォルダーに収められた複数の処理対象のファイルがあればよいということになります。逆に言えば、ホットフォルダーのように、異なる定義ファイルを使用する複数の処理ファイルを利用することはできません。

【使用方法】



- ① 通常通り、1 ファイルを対象とした各種設定を行い、定義ファイルを保存します。
- ② 一括処理をする場合には、まず、処理対象の複数のファイルを 1つのフォルダーに格納します。
- ③ ①にて作成した定義ファイルを読み込みます。
- ④ メイン画面にて、「処理ファイル選択ボタン」をクリックし、②にて格納したファイルを、どれでもよいので 1つ選択します（画面に表示されている処理ファイルパスが正確ならば、そのまま構いません）。
- ⑤ メイン画面にて、「一括処理」チェックボックスにチェックを入れます。
- ⑥ 「処理実行」ボタンをクリックします。
- ⑦ 処理ファイルが、処理ファイル総数と一致し、画面が編集モード（メイン画面下部の各種コントロールが灰色の非選択状態から通常の選択状態に戻っている）になるまで、自動処理を実行させます。
- ⑧ 処理後作成される InDesign ドキュメントは、処理ファイルの拡張子を除いた基本名に、拡張子「indd」をつけたファイル名で作成され、定義ファイルに設定された出力フォルダーに作成されます。
- ⑨ ログファイル
処理ファイル 1 個ずつのログに関しては、通常の処理の場合と同じです。
ただし、一括処理を行った場合には、フォルダー内に処理ファイルが存在しないなどといった共通のエラーは、定義ファイルで設定された出力フォルダー内に、「バッチ処理共通ログ.log」というファイル名で作成されます（何もエラーがない場合でも作成されます）。

【制約】

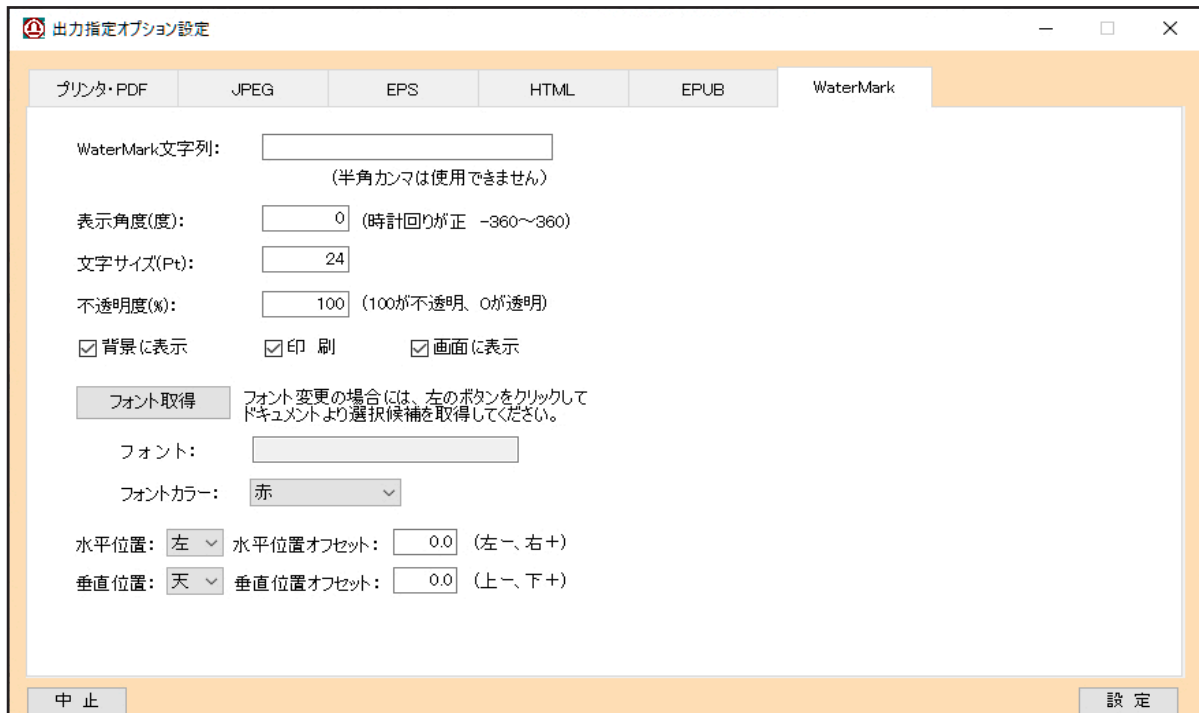
- ① ホットフォルダーの使用と一括処理の同時使用はできません。
- ② 処理ファイルは昇順に並び替えられてリストアップされ、先頭行から処理されます。
- ③ 処理ファイルは、SpicyLibraCC のメイン画面にて指示された入力ファイルが格納されているフォルダー内にすべて存在するものとします。フォルダー内にあるフォルダーは処理対象外となります。
- ④ 処理対象ファイルは、すべて拡張子と同じもので、定義で設定された拡張子のファイルとします。
- ⑤ 処理対象フォルダーには、処理対象となるファイル以外を格納してはいけません。ただし、フォルダーを説明する「フォルダー説明.txt」は除きます（格納されていても無視します）。
- ⑥ 各処理ファイルにて書き換えられるのは、処理ファイルのレコード総数と処理終了レコード番号のみとな

ります。処理開始番号は定義ファイルに設定した値が、すべての処理ファイルでの処理に適用されます。

- ⑦ 一括処理を指示するメイン画面のチェックボックスの設定は、定義ファイルに保存されませんので、その場限りの指示設定となります。
- ⑧ 一括処理実行後には、処理対象のフォルダーへのファイルの格納やファイルの取り出しはしないでください。思わぬエラーのもとになります。処理対象ファイルが格納されているフォルダーへのアクセスは、必ず、一括処理を中断するか、処理が終了後に行ってください。

(g) WaterMark…………… WaterMark の挿入

WaterMark（透かし）をインデザインドキュメントに挿入します。SpicyLibra のユーティリティ機能で PDF ファイルに WaterMark を挿入するのとは別で、インデザインドキュメントの WaterMark を挿入します。この場合には、挿入できる WaterMark はテキスト（文字列）のみとなります。



出力指定オプション設定

プリンタ・PDF JPEG EPS HTML EPUB **WaterMark**

WaterMark文字列:
(半角カンマは使用できません)

表示角度(度): (時計回りが正 -360~360)

文字サイズ(Pt):

不透明度(%): (100が不透明、0が透明)

☒ 背景に表示 ☒ 印刷 ☒ 画面に表示

フォント取得 フォント変更の場合には、左のボタンをクリックしてドキュメントより選択候補を取得してください。

フォント:

フォントカラー:

水平位置: 水平位置オフセット: (左-, 右+)

垂直位置: 垂直位置オフセット: (上-, 下+)

● WaterMark 文字列

挿入するテキストを設定します。ただし、半角カンマ (,) は使用できませんので、注意してください。また、複数行にわたるテキストを挿入する場合には、改行位置に半角縦棒 (|) を改行マークとして挿入してください。

● 表示角度

挿入テキストを回転させる場合に角度を設定します。時計回り方向が正となります。

● 文字サイズ

テキストの文字の大きさをポイントで指定します。

● 不透明度

テキストの不透明度を%で指示します。

● 背景に表示

テキストを背面に表示する場合にチェックを付けます。

● 印刷

テキストを印刷した時に表示する場合にチェックを付けます。

● 画面に表示

テキストをドキュメントの画面表示の時に表示する場合にチェックを付けます。

●フォント

テキストのフォントを設定します。

フォントを設定する場合には、「フォント取得」ボタンをクリックし、使用するテンプレートより使用可能フォントを取得してください。

●フォントカラー

あらかじめインデザインの UI カラーで登録されているカラーから文字色を選択します。

●水平位置

テキストを配置する原点の左右方向の位置を、「左、中央、右」から選択し設定します。

●垂直位置

テキストを配置する原点の上下方向の位置を。「天、中、下」から選択し設定します。

●水平位置オフセット

テキスト挿入原点から移動する水平方向のオフセットを設定します。

●垂直位置オフセット

テキスト挿入原点から移動する垂直方向のオフセットを設定します。

10. あふれ処理

文字がフレーム内に収まりきれない時、まず、**長・平体をかけ、フレーム内に収め**ようとしします。それでもあふれてしまう場合、**文字サイズと行間を調整しながら、フレーム内に収め**ようとしします。収まりきれないフレームに関しては、流し込み作業と一緒にログファイルが作成され、そこにページ数とフレーム名が表示されますので、処理終了後、ログファイルを参照しながら、該当フレームを手動にて調整してください。

あふれ処理は、なるべく文字スタイルを崩さないように、1文字1文字キャラクタを取得して属性を変更しています。従いまして、非常に大きな処理コストがかかりますので、無理な「あふれ処理」とならないようにしてください。たとえば、10行しか入らないのに、30行分のデータを用意するといったことをしないでください。また、縮小ステップを小さくすると処理時間がかかる点も考慮に入れて設定値をお考えください。

① 縮小ステップ

長・平体をかける場合のステップ数を指定します。「1」を選ぶと1%単位で調整します。**ステップ値は「1」から「10」まで1%刻み**で選択できます。**扁平率は最小30%まで**です。

フレーム内に長・平体の方法で収まりきれない時、文字サイズと行間を指定したステップ数値（1 - 10%）**刻みで、最小30%まで縮小**し、フレーム内に収まるように処理します。

縮小ステップが「0」の時は、あふれ処理を行いません。

② 最大縮小率

縮小の上限値で、最大に縮小した場合は30%となります。

最大縮小率が「100%」の時は、あふれ処理を行いません。

※このあふれ処理設定は、「人名」、「表」でのあふれ処理とは関係がありません。「人名」・「表」のあふれ処理は、それぞれ独自のあふれ処理の方法で実行されます。

※あふれ処理とは、逆に、挿入された文字列が、挿入できるスペースをテキストフレーム中に残した状態（**アンダーセット**）で終わった場合に、テキストフレームを縮小したり、挿入された文字列の天地（縦組：左右）の揃え方を変えるということが可能です。また、テキスト追い出し処理も可能です。詳細は「**パラメータの設定**」を参照してください。

11. ページ分割

InDesign は、ドキュメントのページ数が多くなればなるほど、処理に時間がかかるという傾向があります。これを避けるためには、処理するデータファイルを分割して処理サイズを小さくする必要があります。

しかし、小さくするとしても、処理ページ数をきちんと判断して分割することは至難のことでした。「ページ分割」の機能は、入力ファイルを分割することなく、出力ドキュメントを指定されたページ数で分割して出力します。

① ページ分割を行う

このチェックボックスをチェックすることで、ドキュメントのページ分割を実行します。

② 分割頁数

分割するドキュメントのページサイズです。2～1000 頁まで2 頁刻みで指定できます。

ただし、「串刺し面付け」の場合には、10～1000 まで10 ページ単位での頁数選択となります。

③ ブック作成

分割したドキュメントをブックを作成して登録します。ブック名は、ドキュメント名 +.indb となります。

12. マスター適用

ドキュメントページの先頭ページから、マスターを適用する場合にマスター名を記入します。

マスターの名称は、デフォルトでは、「A- マスター」となりますが、ここに設定していないとマスターの適用はしません。ただし、改頁処理でマスター適用が指示されている場合には、改頁後に指示したマスターが適用されますが、ドキュメント先頭頁からのマスターは、ここで設定されている場合には、ここで指定したマスターが適用されますが、設定されていない場合には、データ中で設定されたマスターが適用されます。

次の「見開き綴じ方向」を「単頁」とした場合には、1 頁のマスターを「右綴じ」あるいは「左綴じ」とした場合には、見開きマスターを作成する必要があります。

13. 見開き綴じ方向

ドキュメントを作成する時に、見開き処理を行うか、単ページ処理を行うのかを設定します。この設定は、InDesign の「ドキュメント設定」の「見開き」チェックボックス、「綴じ方」と同期されていなければなりません。

※ 「左綴じ」、「右綴じ」を正確に設定していないと、奇数ページ・偶数ページに適用されるマスターが逆になってしまう場合がありますので注意してください。また、見開きページの設定をした場合、テンプレートページの 1 頁、2 ページは、開始ノンブルの値が奇数か偶数かによって適用されるマスターページが異なりますので注意してください。

<<ドキュメント先頭の見開きページの設定>>

①偶数ページスタートの見開きページを設定する場合（見開き起し）

● InDesign テンプレートの設定

必ず、見開きドキュメントの設定にし、ページパレットより、スタートノンブルを偶数ページに設定（例えば 2 ページ）し、オートノンブルの設定にします。

● SpicyLibra の設定

綴じを「右、左」のどちらかに設定し、ノンブル開始ページを偶数ページにします。

②奇数ページスタートの見開きページを設定する場合（片起し）

● InDesign テンプレートの設定

必ず、見開きドキュメントの設定にし、ページパレットより、スタートノンブルを奇数ページに設定（例えば 1 ページ）し、オートノンブルの設定にします。

● SpicyLibra の設定

綴じを「右、左」のどちらかに設定し、ノンブル開始ページを奇数ページにします。

いずれも、ページの作成方法は、正しく、2 ページの処理を選択してください。

ただし、左右ページあるいは裏表ページのフレームの位置が同じ場合（ノド・小口の大きさが変わらないもの）、見開き処理が不要の場合は、従来どおり、綴じの設定をせずに、ノンブル開始ページを 0 としてもかまいません。

14. 開始頁ノンブル

ドキュメントページの最初のページに割り当ててのノンブルです。ただし、開始ページノンブルに「0」を設定した場合には、「1」ページ開始となります。

ノンブルは、テンプレートにて、自動ノンブルの設定がされていない場合には、ドキュメントページ上には表示されませんが、内部的には、処理設定されていますので、見開き処理などを行う場合には、明示的にノンブルを表示しない場合でも正しく設定してください。

15. 処理レコード番号・件数 / 頁

① 処理レコード番号

処理データの何番目のレコードから何番目のレコードまでを処理するのか、**処理する最初のレコード番号と最後のレコード番号**を設定してください。

② 処理件数 / 頁

テンプレート 1 頁あたりの処理件数が表示されます。枝番の最終番号と同じです。

同じものを 1 頁に設定された全てのフレームセットに流し込みたい場合には、「殖版」にチェックを入れていると、1 レコードを示された件数分（テンプレート上に設定してあるフレームセットの数）ずつ流し込みが行われます。

③ 処理レコード総数

読み込まれた**元ファイルの総レコード数が表示**されます。「更新」をクリックすると、「基本パス設定」もしくは「処理ファイル選択」で指示されているファイルを再読み込みし、総レコード数が「処理レコード番号」の「終了」欄に表示されます。実レコード数より「終了」欄に設定された数値が多い場合には、警告がでます。

16. 出力ファイル名

ここに InDesign ドキュメント保存用の「ファイル名（拡張子なし）」を入力しておいてください。空欄の時は、警告が出てファイルは作成されません。

出力先のフォルダに同名のファイルが存在する場合は、既存のファイル名の前に出力時間が足されたファイル名として保存されます。

InDesign ドキュメント外のファイルを作成する場合にも、このファイル名を使用します。

ファイル名には拡張子は不要です。自動的に適切な拡張子を付加します。

17. PDF 貼込：境界線ボックスの場合のレイヤー選択

PDF ファイルを貼り込む場合に、境界線ボックスでカットするを選択した場合に、レイヤーを表示されているレイヤーだけなのか、すべてのレイヤーなのかを設定します。

18. 処理ファイル選択

「基本パス設定」で設定した各基本設定はそのまま、CSV ファイル・タブ区切りテキストファイル（同じ条件で流す事が前提です）だけを変更したい場合、ここから新しいファイルを指定し直せます。XML・Excel シート・Access テーブルファイルも同様ですが、必ず基本処理ファイルと列名・テーブル名・処理ブロック名、シート名などは同一でなければなりません。

処理ファイルを変更した場合、必ず、「更新」ボタンを押して、レコード数などの正しい値を反映させるようにしてください。

テンプレート上のフレーム数の増減、フレーム名の変更等を伴う形で、テンプレートを変更した場合は、「テーブル作成」に戻り、各定義を最初から設定し直してください。基本パス設定画面でテンプレートのパス変更だけをして、古い設定条件が残っている場合は、正常に作動しません。

19. 処理実行

全ての設定が終了したら、「処理実行」ボタンをクリックしてください。処理が開始されます。

20. 処理中止

誤って処理作業を開始してしまって、ストップさせたい時は「作業中止」ボタンをクリックしてください。クリックされた時点で流し込み作業は中断されます。

なんらかの理由で、InDesign より SpicyLibra に応答がない場合、「処理中止」ボタンをクリックしても、処理が中断しない場合があります。このような場合には、「ファイル」メニューより、「終了」を選択して、SpicyLibra を終了させてください。

21. 進行状況・処理結果

画面最下段の「進行状況」欄に、作業の進行状況と処理結果が表示されます。

① 進行状況

仕事内容を文字で、1 ページ処理が進行するごとに進行状況がプログレスバーで示されます。

② 処理結果

作業終了時、最下段に、作業の結果が表示されます。

作業内容に関しては、基本パス設定の「InDesign ドキュメント出力」で指定したフォルダ内に、「出力ファイル名 + _log.txt」という作業結果を記述したログファイルが作成されます。

第7章 PDF・画像ファイル面付け

PDF ファイルもしくは EPS 等の画像ファイルの面付け流し込み作業は、通常の流し込み作業とは設定・作業方法が異なりますので、この項で一連の流れとして解説します。

ただし、この面付け機能は「中綴じ」には対応していません。

また、はがき 4 面付などといったページ面付けではない場合には、「2 頁連続」などの通常の作成方法にて処理をしてください。

① 面付け基本データ作成

メニューの「テーブル編集」から「面付け基本データ作成」を選択し、各設定を行います。

(a) 面付けページ数の選択

何面付けのデータを作成するかを選択します。

選択できるのは、4 面（表 2 x 裏 2）、8 面（表 4 x 裏 4）、16 面（表 8 x 裏 8）、32 面（表 16 x 裏 16）、64 面（表 32 x 裏 32）の 5 種類となります。

(b) 背丁

背丁として印字するテキストを入力します。

(c) 折丁番号の数字書体

折番号の書体を選択します。

書体は、次の 6 パターンを選択できます、

漢数字

半角算用数字

全角算用数字

漢数字 + ページ番号

半角算用数字 + ページ番号

全角算用数字 + ページ番号

ページ番号は、(P.1 ~ P.16) のように、当該折に含まれるページ数を表します。ただし、ページ数は、半角の算用数字となります。

(d) 付加文字

折番号に続く文字を入力します。たとえば、「折」などです。

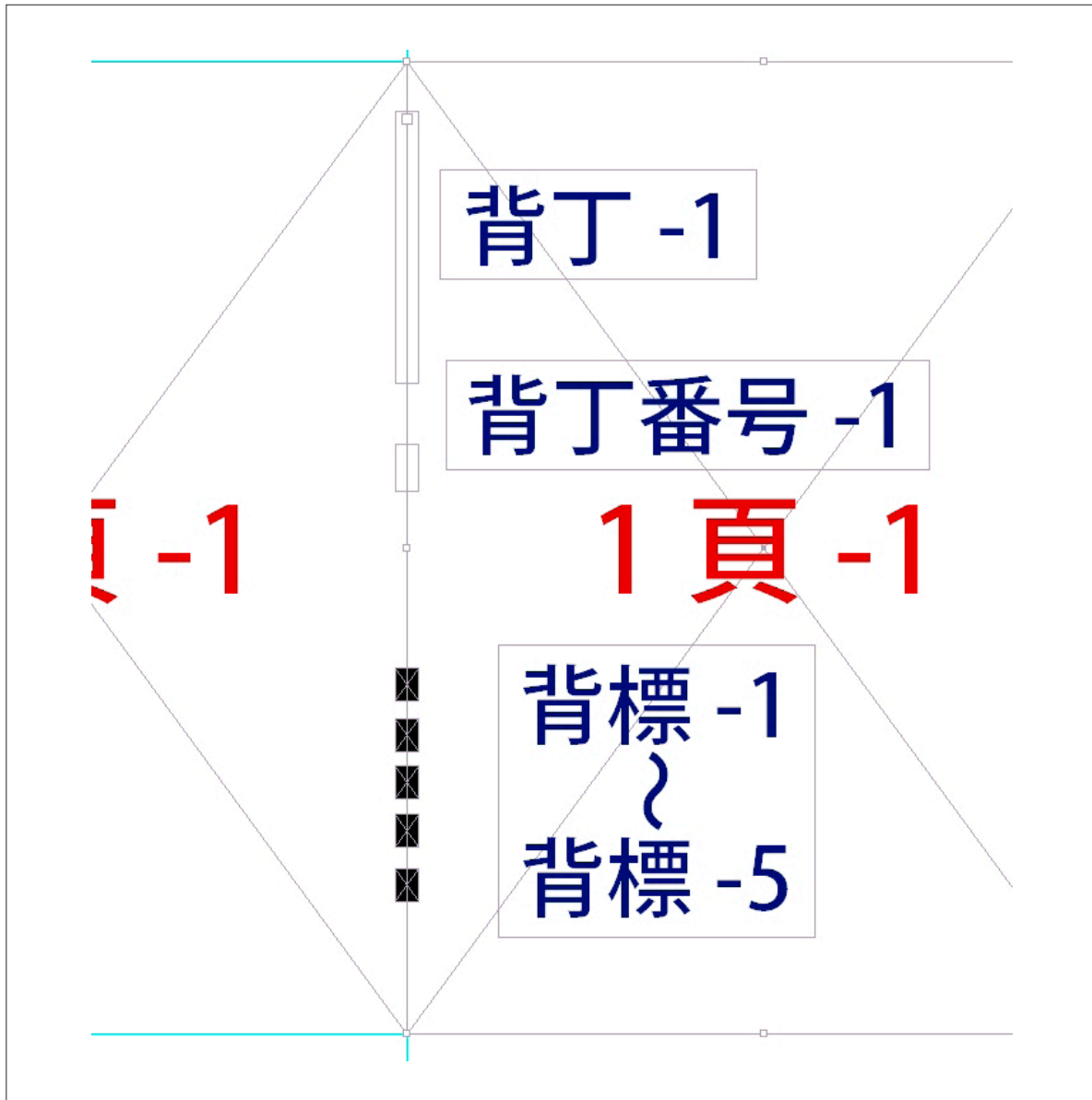
(e) 背標

背標を何折ごとに繰り返すかを数字で設定します。

たとえば、5 と入力すれば、1、2、・・・と背票として設定してあるフレーム番号を移動し、6 折目からは 1 折目と同じ位置のフレームにもどり、繰り返します。

テンプレート上には、5 段ずつ繰り返すのでしたら、5 個の背標用のグラフィック枠（線幅のない面種だけの枠）すべてをスミベタなどで色をつけ配置しておき、発生させる順番に枝番を 1 から付けておきます。

ページ処理ごとに必要な背票のフレームのみを表示させます。



(f) 面付けデータ保存

設定した内容を CSV ファイルとして保存します。このファイルを基本処理ファイルとしてパス設定しますので、必ず保存してください。

(g) 既存面付けデータ読込

作成してある面付けデータを再編集する場合に既存の面付け用データを読み込みます。

② PDF ファイル・EPS 等画像ファイル面付け時のメイン画面設定

項目番号	データ項目名	データ種類	処理区分	パラメータ	挿入先フレーム名	フレーム名称 (*は2頁のフレーム)
1	パラメータ	PDF面付	処理パラメータ			地右
2	ファイル名	PDF面付	ファイル名	SpicyLibraCCマニュアル.pdf		地左
3	背丁	PDF面付	背丁		背	天右
4	折丁番号	PDF面付	背丁			天左
5	背標	不使用・改頁	不使用			背
6	備考 1	不使用・改頁	不使用			*裏地右
7	備考 2	不使用・改頁	不使用			*裏地左
8	頁 1	PDF面付	正像頁		地右	*裏天右
9	頁 2	PDF面付	正像頁		*裏地左	*裏天左
10	頁 3	PDF面付	天地反転頁		*裏天左	

(a) 基本パス設定

1) InDesign テンプレート

面付け用のテンプレートを指定します。

2) 基本処理ファイル

面付け基本データ作成画面で作成した CSV ファイルを指定します。

3) InDesign ドキュメント出力

ドキュメントの出力先フォルダを指定します。

通常の流し込みと同じです。

4) 貼込み画像ファイル

面付けする PDF ファイルもしくは画像ファイルの入っている **フォルダ** を指定します。

PDF ファイルは連続ページの形の PDF ファイルでかまいませんが、EPS 等の画像ファイルは 1 ページ 1 ファイルごとの取り込みとなります。

PDF 以外の EPS などの画像ファイル名は以下の形で付けてください。

拡張子のドットの前に「_ ページ番号」で指示します。

たとえば、基本の EPS 画像ファイル名が「sample.eps」だとすると、

sample_1.eps

sample_2.eps

のように、画像ファイル名をつけます。そして、次項 (c) のファイル名としては、基本ファイル名を設定します。

(b) パラメータ

読み込み時のオプションを設定します。この設定がない場合には、デフォルトの設定で読み込まれます。「データ種類」は「PDF 面付け」。処理区分は「処理パラメータ」を選択。

オプションは4種類ありますが、デフォルト値は以下の通りです。

- ・ドキュメントパスワード…なし
- ・トリミング…「メディア」
- ・背景…透過

【パラメータ】

パスワード、トリミング、背景透過

設定しない項目（デフォルトでよい場合）は、何も記述せず区切りのカンマのみを入力。

1) パスワード：ドキュメントに設定されているパスワード

2) トリミング：下記の種類を半角の数字で記入（意味合いは、InDesign マニュアルを参照してください）

- 0…アート
- 1…断ち落とし
- 2…境界線ボックス
- 3…メディア
- 4…トンボ
- 5…トリミング

3) 背景透過

- 0：背景透過しない
- 1：背景透過する

(c) ファイル名

「データ種類」は「PDF 面付け」。処理区分は「ファイル名」を選択。

【パラメータ】

- ・面付けの対象となるファイル名をパラメータ欄に入力。
- ・PDF ファイル以外の EPS などの画像ファイルのように、対象となるファイルが複数の場合は、ページ番号を表す「_ ページ番号」のない基本ファイル名を入力。

【例】

① PDF ファイルの場合

***.pdf

② EPS ファイルの場合

_1.eps、_2.eps、***_3.eps、***_4.eps …とあれば、
***.eps とします。

(d) 背丁

「データ種類」は「PDF 面付け」。処理区分は「背丁」を選択。面付け基本データ作成画面で入力した「背丁」欄の文字を発生させます。

【パラメータ】パラメータ設定はありません。

(e) 折丁番号

「データ種類」は「PDF 面付け」。処理区分は「背丁」を選択。「フレーム名称指定」欄で指定したフレーム（テキストフレーム）に、前項「面付け基本データ作成 (c) 折丁番号の数字書体」で指定した、折丁番号数字と付加文字を発生させます。

【パラメータ】

開始折番号、開始ページ数

開始の折番号と開始のページ数が設定できます。ただし、この部分は、背丁の折番号を表示する部分と備考

で日付を表示する部分にしか有効ではありません。

実際に処理する画像のページ数は、PDF 頁数のテキストボックスに入力された開始ページ数となります。

これは、たとえば、PDF ファイルを分割して作成した時など、10 折目も PDF ファイルの 1 ページから始まる場合や、ノンブルのつけ方で、1 折が必ずしも「1」で開始されない場合があることを考慮したものです。

(f) 背標

「データ種類」は「PDF 面付け」。処理区分は「背標」を選択。テンプレートと「面付け基本データ作成」で入力した背標欄の数値に対応して、背標を発生させます。

【パラメータ】

パラメータ設定はありません。

(g) 備考 1・2

「データ種類」は、「番号発生」・「日付発生」・「PDF 面付け」をデータ種として選択することが可能です。

この「備考」に対応するフレームは、テンプレートの 1 ページ目と 2 ページ目に同一フレーム名称のテキストフレームを設定できます。この場合、「備考 1」「備考 2」を割り振る 2 ページ目のフレーム名称が、マッピングの画面に「*付き」で表示されますが、これは無視し、1 ページ目のテンプレートのテキストフレームを、「備考 1」「備考 2」に割り当ててください。

●日付発生

割り当てられたテキストフレームに

「1 折表 2005 年 4 月 25 日 13:34:56」

の様にデータが挿入されます。

表・裏両面に同じ名称のテキストフレームを設定した場合には、裏面では「1 折裏 2005 年 4 月 25 日 13:34:56」の様にデータが挿入されます。

【処理区分】

日付（短形式）…………… 2005/12/1
 日付（短形式・漢数字）…………… 二〇〇五・一二・一
 日付（長形式）…………… 2005 年 12 月 1 日
 日付（長形式・漢数字）…………… 二〇〇五年一二月一日
 日付（和暦）…………… 平成 17 年 12 月 1 日（月曜日）
 日付（和暦・漢数字）…………… 平成一七年一二月一日（月曜日）
 日付（長形式日付・時間）…………… 2005 年 4 月 25 日 13:34:56
 日付（折番・日付・時間）…………… 1 折裏 2005 年 4 月 25 日 13:34:56

【パラメータ】

パラメータ設定はありません。

●番号発生

この処理が設定してあるフレームは、入力データは無視され、パラメータに指定された方法で数値を発生させ、フレームに挿入します。

【処理区分】

前ゼロなし（半角）…………… 120
 前ゼロあり（半角）…………… 00120
 前ゼロなし（全角）…………… 1 2 0
 前ゼロあり（全角）…………… 0 0 1 2 0
 前ゼロなし（漢数字）…………… 一二三
 前ゼロあり（漢数字）…………… 〇〇一二三

【パラメータ】

開始番号, 増加数, 頁増加数, 最小桁数

開始番号：開始する番号（デフォルトは 1）

増 加 数：1 フレームごとに増加する数（デフォルトは 1）

頁増加数：頁が変わるごとに増加する数（デフォルトは 0）

最小桁数：印字する最小桁数（デフォルトは 4）

（注）1. 頁増加数を指定した場合、頁が変わるごとに、
 「開始番号 + 頁増加数 × (頁数 - 1)」の数から開始します。

2. 最小桁数は、前ゼロありの場合のみ有効です。

● PDF 面付け

「処理区分」の「備考」が選択された備考1、備考2は、パラメータ項目のデータが挿入されるのは変わりませんが、パラメータ項目を、半角カンマで区切って、表、裏面の各々のデータを設定します。

【パラメータ】

表面文字列, 裏面文字列

パラメータ欄に「内, 外」のように設定されていれば、1 面目の「備考」が割り当てられたテキストフレームに「内」が、2 面目には「外」が入るということになります。

(h) 頁1～

「データ種類」は「PDF 面付け」。処理区分は「正像頁」「天地反転頁」から選択（テンプレート上で流し込み枠の天地を逆にしておく必要はありません）。「面付け基本データ作成」の「面付けページ数の選択」欄で選択したページ分だけ「データ例」欄にページが示されますので、それぞれ対応するフレーム名称を「フレーム名称指定」欄で指定してください。

【パラメータ】

パラメータ設定はありません。

③ テンプレート作成時の注意

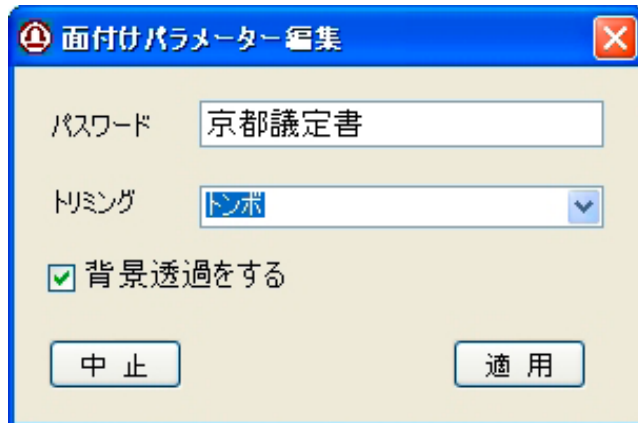
- ※ 同一位置に発生させたいトンボ・色玉・カラーバー等は、あらかじめテンプレート上に埋め込んでおいてください。
- ※ 天地が逆転するページは、あらかじめテンプレート上で設定しておく必要はありません。SpicyLibra の「処理区分」欄で設定します。ただし、フレームの基準点がセンターにあるものとして回転しますので、天地が反転するフレームの基準点はセンターに設定しておいてください。
- ※ ページが流れ込む個々のフレームは、グラフィックフレームで作成してください。フレーム名は、SpicyLibra の「データ例」に表示される流し込みの順番に対応させる時に認識しやすい名前を付けておいてください。枝番は表裏両面とも「1」を付けておいてください。
- ※ 背標用のフレームもグラフィックフレームで作成してください。背標は「面付け基本データ作成」画面の「背標」欄に入力した数値の個数分だけテンプレート上に、あらかじめ配置しておいてください。「フレームラベル名」は共通にして、枝番を「1」から個数分だけ順番に付けておいてください。
- ※ 背丁・背丁番号・備考1・備考2の各フレームは、テキストフレームもしくはフレームグリッドで作成してください。枝番は「1」を付けておいてください。
- ※ 備考1・備考2フレームに「日付発生」の「折番付き」のパラメータを選択したい場合でも、表裏両面に枝番「1」を付けた同一のフレームを配置しておいてください。

※ 「番号発生」の場合は、表裏両面に番号を入りたい時は両面にフレームを配置し、表面のみに番号を入りたい時は表面にフレームを配置してください。

備考-1				備考-1			
1-頁 5	1-頁 21	1-頁 6	1-頁 8	1-頁 7	1-頁 10	1-頁 11	1-頁 9
4 頁 -1	13 頁 -1	16 頁 -1	1 頁 -1	2 頁 -1	15 頁 -1	14 頁 -1	3 頁 -1
			背丁-1				
			背標-1				

④ パラメータ入力画面

・処理パラメータ



面付けパラメーター編集

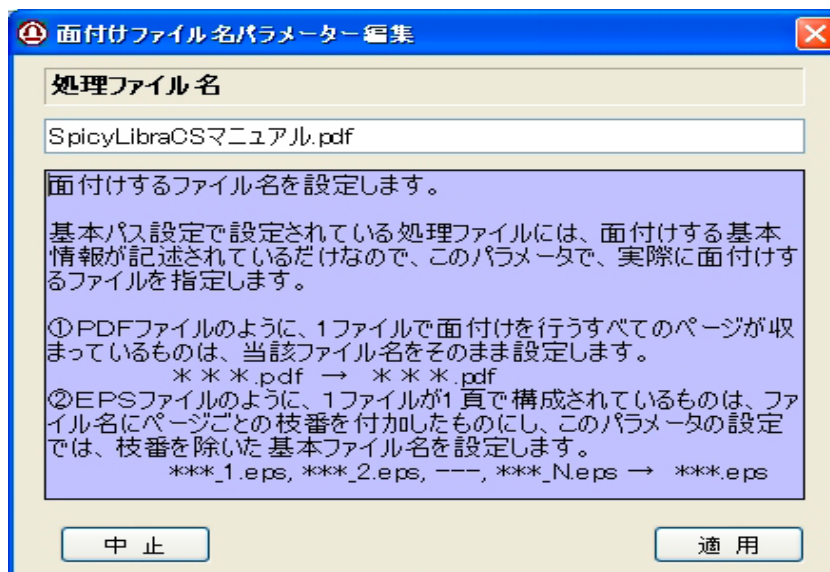
パスワード

トリミング ▼

☒ 背景透過をする

中止 適用

・ファイル名



面付けファイル名パラメーター編集

処理ファイル名

面付けするファイル名を設定します。

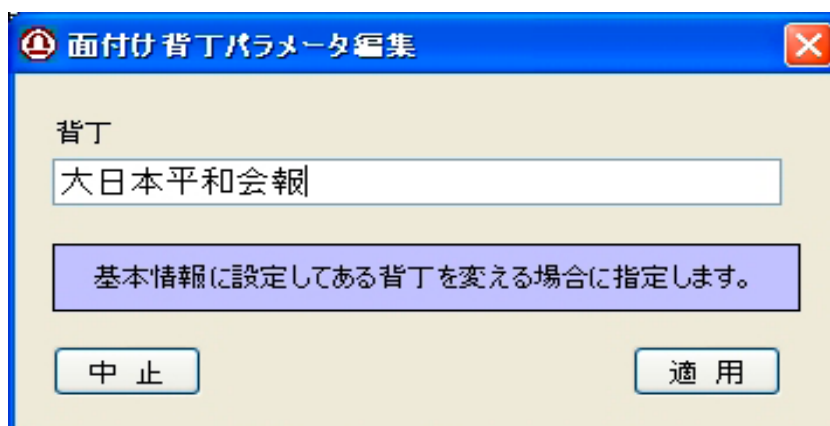
基本パス設定で設定されている処理ファイルには、面付けする基本情報が記述されているだけなので、このパラメータで、実際に面付けするファイルを指定します。

①PDFファイルのように、1ファイルで面付けを行うすべてのページが収まっているものは、当該ファイル名をそのまま設定します。
***.pdf → *.pdf

②EPSファイルのように、1ファイルが1頁で構成されているものは、ファイル名にページごとの枝番を付加したものにし、このパラメータの設定では、枝番を除いた基本ファイル名を設定します。
***_1.eps, ***_2.eps, ---, ***_N.eps → *.eps

中止 適用

・背丁



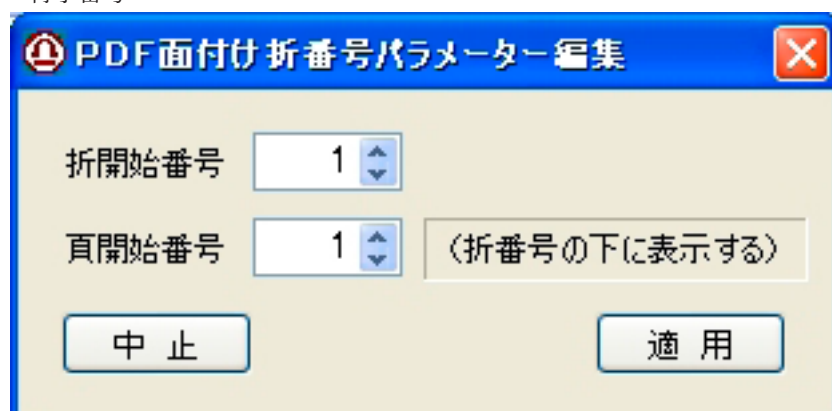
面付け背丁パラメータ編集

背丁

基本情報に設定してある背丁を変える場合に指定します。

中止 適用

・背丁番号

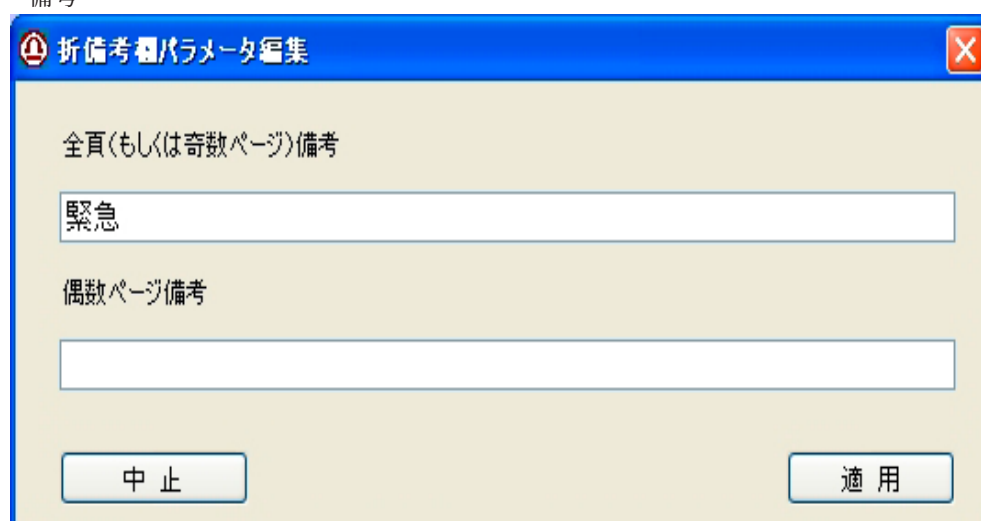


PDF面付け折番号パラメーター編集

折開始番号

頁開始番号 (折番号の下に表示する)

・備考

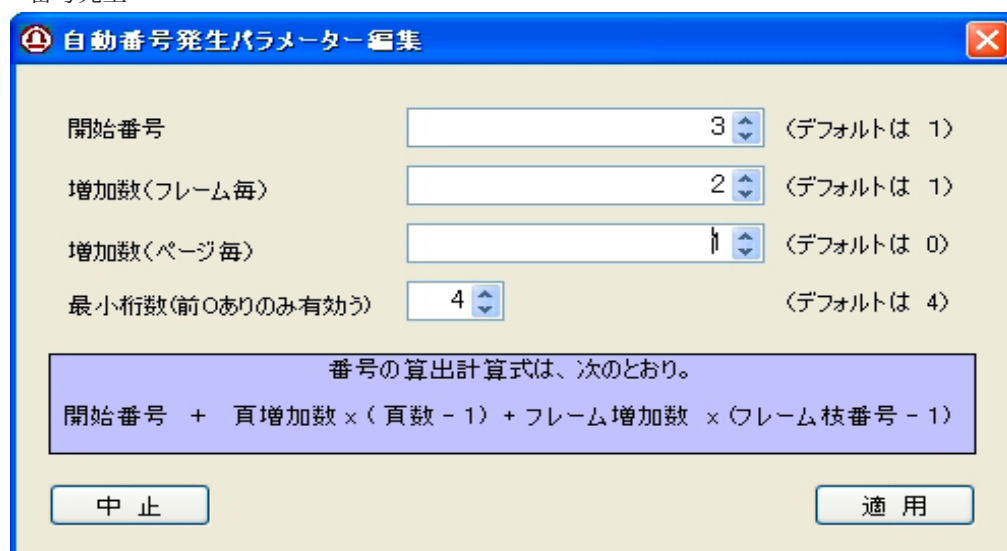


折備考欄パラメータ編集

全頁(もしくは奇数ページ)備考

偶数ページ備考

・番号発生



自動番号発生パラメーター編集

開始番号 (デフォルトは 1)

増加数(フレーム毎) (デフォルトは 1)

増加数(ページ毎) (デフォルトは 0)

最小桁数(前のありのみ有効) (デフォルトは 4)

番号の算出計算式は、次のとおり。

開始番号 + 頁増加数 × (頁数 - 1) + フレーム増加数 × (フレーム枝番号 - 1)

第8章 串刺し面付け

チケットなどのように、固定の絵柄の部分とデータと番号だけが可変の印刷物に対して、2種類の「くし刺し面付け」を処理することが可能です。

「くし刺し面付け」は、必ず「単頁」で作成し、面付けするデータをドキュメントテンプレートにレイアウトします。

可変部分は、各面付けする個別要素にテキストフレームを1つとします。

このテキストフレームに対して、通常通り、フレーム名称を付加し、枝番にそれぞれ「1」を付けておきます。

「串刺し面付け」の場合のみ、入力データファイルの設定は不要です。自動的に、面付けするオブジェクトの数分の項目データが「番号発生 1,--, ---」と作成します。

ドキュメントを分割する場合の分割頁数は、最大 1000 ページまで、10 ページステップで設定できます。通常の頁分割とは異なります。

① テンプレートの作成（固定要素）

テンプレートは、固定部分をマスターページに、可変部部分をドキュメントテンプレートに作成します。

マスター名は、マスター適用にて設定されたマスターを使用しますが、マスター名が設定されていない場合、デフォルトの「A- マスター」を使用して適用します。

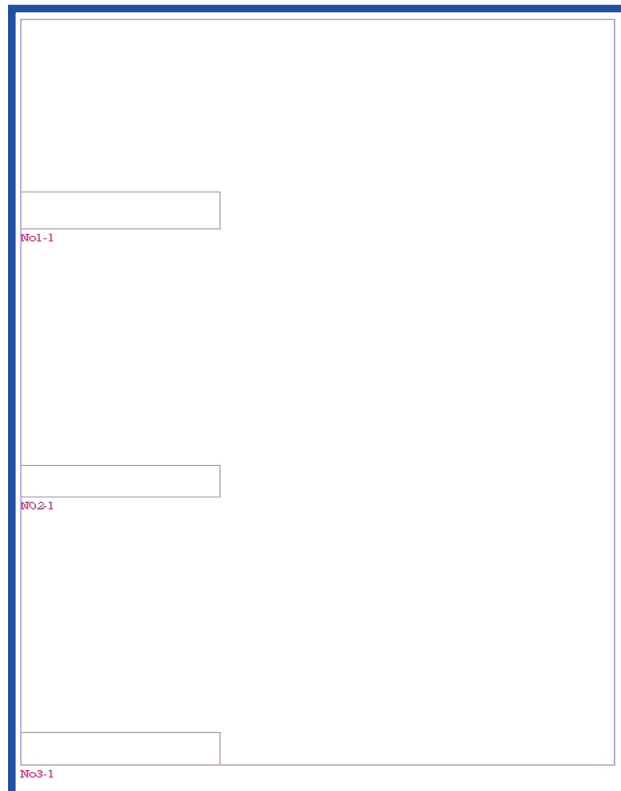
例では、同一画像を用いていますが、別々に設定出来ます。

設定できる面付け数は、100/ 頁までとなります



② テンプレートの作成（可変要素）

番号を発生させる可変要素のテキストフレームは、ドキュメントページのほうに設定します。
フレーム名称は通常のようにつけますが、**枝番は、必ず、すべて「1」に設定**してください。



③ 合成してみると、次のようになります（実際には、テンプレート上では、ページにマスターは適用しないでください）。



④ 基本パスの設定



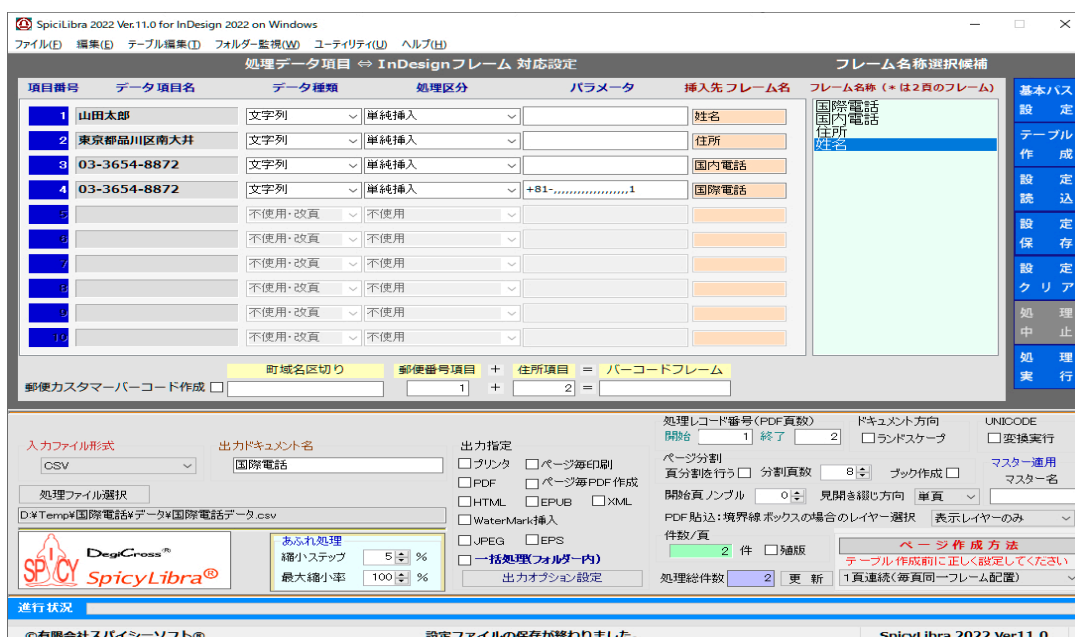
テンプレートの作成が終わりましたら、保存し、基本パスの設定を行います。

基本パスで設定するのは、使用する InDesign テンプレートファイルのパスと処理結果のドキュメントを保存するフォルダーのみとなります。**処理ファイル必要ではありません。**

「基本パス設定」のボタンをクリックする前に、メイン画面の「ページ作成方法」で「くし刺し面付け」を選択していることを確認してください。

⑤ マッピングの設定

つづいて、フレームとデータ項目とのマッピングを行います。



自動的に、各フレームに対応したデータ項目名が、「番号発生1」のように作成されますので、後は、通常通り、フレームを選択し、処理方法を設定します。

データ種は、「単刺し面付け」固定となります。

処理方法は、通常の番号発生と同じで、

- ① 前ゼロなし（半角）…… 120
- ② 前ゼロあり（半角）…… 00120
- ③ 前ゼロなし（全角）…… 1 2 0
- ④ 前ゼロあり（全角）…… 0 0 1 2 0
- ⑤ 前ゼロなし（漢数字）… 一二三
- ⑥ 前ゼロあり（漢数字）… 〇〇一二三

の6種類から選択します。

⑥ 出力の指示

処理記録番号の開始は、必ず「1」に設定してください。

処理記録番号の終了番号で、最終の頁数を設定します。

つまり、ページ増加数が1とし、

0001 ~ 0100 までの番号を発生させるには、

処理記録番号で開始、終了番号を1、100と設定すればよいということになります。

ページ毎増加数が5だとすれば、

処理記録番号で開始、終了番号を1、20と設定すればよいことになります。

その他の設定は、単ページの通常の処理と同じです。

⑦ 串刺しパラメーター設定

前置文字列: A

後置文字列: 子供席

開始番号: 1 (デフォルト 1)

増加数(ページ毎): 1 (デフォルト 1) ☒ 2ページごとに数字を増加させる

桁数: 3 (デフォルト 0)

増加数(フレーム毎): 0 (串刺し面付けでは無効。串刺し番号では、デフォルト 0)

増加数(ドキュメント毎): 0 (串刺し面付けでは、自動生成するので無効。串刺し番号では、デフォルト 0)

串刺し面付け(番号)は、通常の「番号発生」とは異なり、ページに割り付けられた各フレームが、各々単独にページの増加に伴って、その番号を増加させることが主要な機能となっています。
 従って、「開始番号」と「増加数(ページ毎)」のパラメータが基本となります。
 「増加数(フレーム毎)」は、「串刺し面付け」ではなく、通常の処理の場合に、フレームの増加で加算される値です。
 「串刺し面付け」では無視されます。
 「増加数(ドキュメント毎)」は、ページ分割処理を行う時に、各分割されたドキュメントで増加する値です。この値を、1分割で付けられる総番号にしておくと、分割したドキュメントの最初のフレームに挿入される番号が、前分割ドキュメントの最後のフレームに挿入された番号に連続します。このドキュメント毎の増加数が1の場合には、分割されたドキュメントの各フレームに挿入される番号は、前のドキュメントで該当するフレームに挿入された番号に連続します。

番号作成の計算式
 「串刺し面付け」

$$\text{開始番号} + \text{ページ毎増加数} \times (\text{ドキュメント相対頁数} + \text{ドキュメント毎増加数} \times \text{分割ドキュメント番号})$$

 ただし、ドキュメント毎増加数 = $\frac{\text{フレーム数}}{1 \text{ 頁}} \times \text{分割頁数}$ (個別ドキュメント適用)
 ドキュメント毎増加数 = 分割頁数 (全ドキュメント適用)

「串刺し番号」

$$\text{開始番号} + \text{ページ毎増加数} \times (\text{フレーム毎増加数} \times \text{フレーム番号} + \text{ドキュメント相対頁数} + \text{ドキュメント毎増加数} \times \text{分割ドキュメント番号})$$

中止 適用

前置文字列: 数字の前におく文字を指定します。

後置文字列: 数字の後ろに置く文字を指定します。

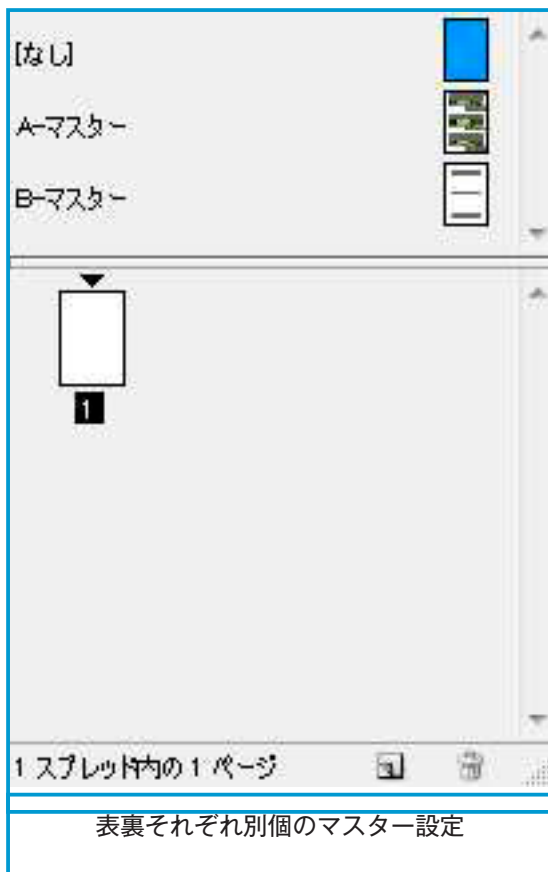
開始番号: 番号の初期値を設定します。

ページ毎増加数: ページの増加に伴って増える数。

2 頁毎に数字を増加させる: 1 頁毎に数字を増加するか 2 頁毎の増加なのか

最小桁数: 前ゼロありの場合の桁数 (数値が桁数より大きくなった場合には、前ゼロは付きません)

<< 2 頁毎でのページ数増加と表裏別マスターの設定 >>



串刺し面付けでは、当初、1 ページ毎に指定した数値が増加するモードしかありませんでした。この場合、表裏 1 枚のチケットなどを作成する場合には、別処理を考えねばならないということがありました。

2 ページ毎に数値を増加させるという機能を選択できるようになりましたので、表裏で同一の番号を印刷可能ということになりました。

ただし、串刺し面付けでは、インデザインテンプレートの作成方法に固有の方法がありますので、決まった方法で作成する必要があります。

すなはち、串刺し面付けでは、通常の SpicyLibra のテンプレート作成方法と根本的に異なり、**テンプレートをマスターに作成する**ということを行っております。

これまで、表裏の考え方がなかったので、「A- マスター」だけに挿入先のテキストフレームなどのレイアウトを行っていただきましたが、2 ページ毎に数値を増加させるというモードでは、表面用には「A- マスター」を、裏面用として「B- マスター」に、挿入先のテキストフレームなどを作成します。

この場合、「B- マスター」には、「A- マスター」と同一名称のテキストフレームを用意しておく必要があります。テキストフレームなどのページ内でのレイアウトは自由ですが、フレーム名称は枝番を含めて同一でなければならぬので注意してください。

※単純挿入パラメータ設定追加説明

単純挿入パラメータ設定ダイアログ（[次頁参照](#)）の「削除チェックボックス」は、SpicyLibra2024 にて新規に追加された機能です。

チェックボックスにチェックがある場合には、データ文字列の先頭文字を削除します。

例えば、電話番号を流し込む場合に、国内電話データを基に国際電話として別フレームに流し込むには、先頭の 0 を削除し、+ 8 1 - を前に付加しないとイケないことになります。

これまでは削除機能がないため、+81 の付加された国際電話番号を別途 k 億歳電話番号データとして準備する必要がありました。

国内電話番号データを項目コピーして k 国際電話番号用のデータとし、パラメータ定義で、データ先頭を削除を指定し付加文字で +81- を設定すれば、国際電話番号データを国内電話番号データと別個に用意する必要がなくなりました。

1) 先頭挿入文字列、末尾挿入文字列

挿入データの先頭または末尾に自動的に付加する文字列です。

2) 前置連結項目番号・前置項目後挿入文字列、後置連結項目番号・後置項目前挿入文字列、常時挿入

・前置連結項目番号で指定される入力データ項目のデータを付加します。前置項目後挿入文字列は、前置連結項目データがある場合、前置連結項目と挿入データとの間に挿入する固定文字列です。

「常時挿入」チェックボックスにチェックがある場合には、前置連結項目データがなくとも前置項目後挿入文字列を挿入します。

・後置連結項目番号で指定される入力データ項目のデータを付加します。後置項目前挿入文字列は、後置連結項目データがある場合、後置連結項目と挿入データとの間に挿入する固定文字列です。

「通常挿入」コンボボックスは、上記「常時挿入」チェックボックスが未選択と同じ処理となり、「常時挿入」にて後置連結項目データがなくとも後置項目前挿入文字列を挿入し、「Eメール挿入」においては、データ中に半角@が含まれていれば後置付加文字列の全てを付加しないが、@が含まれておらずかつ後置付加文字列の先頭が@の場合にのみ付加します。

【E-Mail 挿入】

データ中に半角@（アットマーク）が含まれず、後置項目・後置項目前挿入文字列・後置文字列を結合した後置付加文字列の先頭が半角@で始まっている場合にのみ、後置付加文字列を付加します。データ中に@が含まれている場合、後置付加文字列先頭が@でない場合には、後置付加文字列は付加されません。

(例) データ	後置付加文字列	結果
abc	@softcompany.com	abc@softcompany.com
abc@ai.jp	@softcompany.com	abc@ai.jp
abc	asahi@shinbun.com	abc

※「連続表文字列挿入」、「積み木表文字列挿入」の「E-Mail 挿入」も同一処理となります。

● 後置付加文字列が付加条件を満たさない場合には、データがない場合を含めて、後置付加文字列は付加されません。

3) 改行置換文字、「前置連結項目あるいは後置連結項目にデータがある場合、対象項目にデータがなくとも未データ扱いとしない」

・改行置換文字

挿入項目文字列中で改行を文字を使用する場合、デフォルトでは半角の「|」を使用していただくことになっていますが、この文字コードを変えたい場合に、使用する改行を表す文字を1文字で指定します。

・前置連結項目あるいは後置連結項目にデータがある場合、対象項目にデータがなくとも未データ扱いとしない。

通常、挿入する対象項目にデータがない場合、付加文字は無視され、対象項目データがない未データの処理となりますが、このチェックボックスにチェックがあり、なおかつ、前置連結項目あるいは後置連結項目にデータがある場合には、対象項目のデータがなくとも、前置連結項目あるいは後置連結項目データをテキストフレームに挿入します。

4) 特殊改行処理－1行データがあふれた時の改行処理

挿入するデータが1行の場合（複数行の場合には適用できませんので選択しないでください。想定するデータは、住所などで、通常は1行なのだが、マンション名などで長くなり行をオーバーフローするような場合に、マンション名などの文字列を、2行目として折り返すという処理をするものです）に、流し込む文字列の中に全角スペースを入れておくと、**1行で入りきれなかった場合、全角スペース箇所を改行に置き換え**ながら、2行目として流し込みます。また、あふれなかった時、全角スペースをそのまま残しておくか、削除するかも設定できます。

「2行目揃え」のコンボボックスで処理方法を選択します。

左揃え。1行の時は区切りの全角スペースを残す。:

2行目を左揃え。1行の時は区切りの全角スペースはそのまま残ります。

右揃え。1行の時は区切りの全角スペースを残す。:

2行目を右揃え。1行の時は区切りの全角スペースはそのまま残ります。

中央揃え。1行の時は区切りの全角スペースを残す。:

2行目を中央揃え。1行の時は区切りの全角スペースはそのまま残ります。

均等揃え。1 行の時は区切りの全角スペースを残す。:

2 行目を均等揃え。1 行の時は区切りの全角スペースはそのまま残ります。

左揃え。1 行の時は区切りの全角スペースを削除。:

2 行目を左揃え。1 行の時は区切りの全角スペースを削除します。

右揃え。1 行の時は区切りの全角スペースを削除。:

2 行目を右揃え。1 行の時は区切りの全角スペースを削除します。

中央揃え。1 行の時は区切りの全角スペースを削除。:

2 行目を中央揃え。1 行の時は区切りの全角スペースを削除します。

均等揃え。1 行の時は区切りの全角スペースを削除。:

2 行目を均等揃え。1 行の時は区切りの全角スペースを削除します。

特殊改行処理なし（または空白）:

改行処理はしません。

特殊改行処理が実行される場合、2 行目のインデント値を設定できます。「2 行目上（左）インデント量」で行頭のインデントを、「2 行目下（右）インデント量」で行末のインデント量を指示します。数値は小数点を有効とし、単位は InDesign ドキュメントのメジャーの単位と同じになります。

特殊改行処理は、1）と 2）で対象データに付加文字を結合した状態で行いますので、住所項目が「番地住所（例：〇〇市〇〇町 1-2）」と「建物住所（例：〇〇ハイツ 102）」に分かれているようなデータを、1 つのフレームの中に、全角スペースを固定文字列として挟み込み「〇〇市〇〇町 1-2 〇〇ハイツ 102」のように結合したデータに対して実行することができます。

注意しなければならないのは、特殊改行処理では、全角スペースを 1 行のオーバーフローする場合の改行点にするという前提で処理をしているため、上記の例でいえば、「建物住所（例：〇〇ハイツ 102）」を挿入対象項目データとし、「建物住所（例：〇〇ハイツ 102）」を後置連結項目として設定を行うとみなしています。

従いまして、対象項目と後ろに付加されるデータとの間に、自動的に全角スペースを挿入しますので、「前置連結項目番号・前置項目後挿入文字列、後置連結項目番号・後置項目前挿入文字列」には、全角スペースを入れないでください。これらの付加文字列に全角スペースが入っていると、プログラムで強制的に挿入した全角スペースと付加文字列中の全角スペースという複数の全角スペースが存在してしまい、全角スペースを強制改行とする処理に狂いを生じてしまいます。

従いまして、連結文字列が設定されている場合、特殊改行を設定しない場合には、

フレーム挿入文字列 = 先頭挿入文字列 + 前付連結項目番号データ + 前置項目後挿入文字列 + 当該項目データ + 後置項目前挿入文字列 + 後付連結項目番号データ + 末尾挿入文字列

となり、

特殊改行を設定する場合には、当該項目データと後付連結項目番号データとの間に、強制改行を可能位置を指示する「全角スペース」を自動的に挿入し、

フレーム挿入文字列 = 先頭挿入文字列 + 前付連結項目番号データ + 前置項目後挿入文字列 + 当該項目データ + （全角スペース） + 後置項目前挿入文字列 + 後付連結項目番号データ + 末尾挿入文字列

となります。

具体的な特殊改行処理の場合を例示すると以下のようになります。

対象データ項目に「東京都品川区北大井 3 丁目 2 3-8 大樹ビル 3 F 105 号」と全角スペースを挿入して改行点を明示しても、前半部と後半部に分けた項目として入力しても、処理する場合には、などの場合、1 行で収まる場合には、「東京都品川区北大井 3 丁目 2 3-8 大樹ビル 3 F 105 号」という 1 行を扱うこととなります。

オーバーフローがない場合には、そのまま 1 行で

東京都品川区北大井 3 丁目 2 3-8 大樹ビル 3 F 105 号

と表示しますが、1 行で収まらない場合には、通常のアふれ処理ではなく、

のように文字列中の全角スペースの部分で改行して2行にします。この方が美しく見やすいからです。

この処理を行うためには、必ず、フレームは2行が収まる大きさに設定しておいてください。また、この特殊改行処理方法でのあふれ処理は、通常と異なり、1行が2行に分かれないか否かで判断します。つまり、通常では、フレームに収まればあふれ処理は終わり、その結果2行に自動的に折り返していてもかまわないことになります。

しかし、特殊改行処理方法では、フレームが2行を収める設定になっていたとしても、2行への自動的な折り返しはあふれとみなし、行中の強制改行許可部（全角スペース）で改行するように調整します。

5) 属性変更指定

「属性変更テーブル」で設定した条件で文字列を流し込みたい場合に設定します。

属性変更を行う場合、「4）特殊改行処理」との同時処理はできません。同時に設定された場合には、特殊改行処理が優先されます。

「属性変更処理」コンボボックスで、「属性変更なし」を選択した場合には、属性変更処理はされません。属性変更処理を行う場合には、このコンボボックスで属性変更の目的に見合った処理方法を設定します。

(a) 条件フラグデータ項目を使用して属性テーブルのリスト番号を可変的に使用属性を変更する。

フラグ項目番号数値コントロールで指示された入力項目番号のデータを数字フラグとして判断し、たとえば、フラグ項目番号数値コントロールを5とした場合、データ項目番号の5番の項目のデータを読み取り、読み取ったデータが「1」の場合には、属性変更テーブルの1番目のリストの設定を生かし、「3」という数字でしたら、属性変更テーブルの3番目のリストの設定を生かし、設定された範囲の文字属性・文字ストローク属性、流し込まれるテキストフレーム及びフレームバックグラウンドの属性を変更することになります。

この場合、前文字列適用リスト番号、後文字列適用リスト番号の設定行の値は無視されます。

また、文字属性を適用する範囲は、属性変更テーブルに設定された範囲となります。

たとえば、テンプレートに設定した値を変更しない属性変更テーブルを0番として設定しておき、1番に文字列すべてが「赤」となるような設定をしておけば、月～土までの日付は黒で、日のみ赤で出力するということが可能です。

つまり、フラグ項目番号で指定された入力項目データとして、0,1を設定しておけばよいということになります。

(b) 文字列を3分割し、前と後ろ、または中間の文字列の属性を変更する。(文字数指定)

(a) と異なり、挿入レコードごとに可変の属性変更テーブルを適用するものではなく、各挿入レコードすべてに固定的に適用されます。また、この処理は、1行の挿入データに対して使用されます。

適用する属性変更テーブルのリストと適用範囲は、前文字列適用リスト番号（後文字列適用リスト番号）と前文字列適用文字数（後文字列適用文字数）の各数値コントロールで指定されます。

すなわち、属性変更テーブルの適用リスト番号と適用する文字数で、文字列を3分割し、リストに定義された属性を適用するということになります。

ただし、属性変更テーブルの「設定範囲」に「中間使用」のチェックがある場合には、属性テーブルの前文字列適用リスト番号に定義された設定が用いられ、変更範囲の前と後ろにはさまれた間の文字列が変更の対象となります。

たとえば、

特価 1,240円

特価 999円

のように、変更の文字数が全てのフレームで同じような場合に用いると有効的です。

(c) 前置文字列と後置文字列、または本データ文字列に対して文字列の属性を変更する。

(b) が、適用文字列の範囲をパラメータで設定した固定数値で考えるのに対し、適用文字列の範囲を、対

象入力データ項目の付加文字列と対象項目データ文字列の3分割で考えるもので、属性変更テーブルの適用リストに関しては(b)と同じとなっています。

すなわち、属性変更の範囲を、「先頭挿入文字列+前置連結項目番号文字列+前置項目後文字列」(**前付け文字列**)の文字列及び「後置項目後文字列+後置連結項目番号文字列+末尾挿入文字列」(**後付け文字列**)の文字列、それぞれの文字数を適用範囲として用います。

適用文字列範囲が異なるほかは、(b)と同じです。

たとえば、

本日大目玉 8,888 円
最終処分 14,123 円

のように、変更範囲が可変のものに用いると有効的です。

- (d) 段落スタイルテーブルを使用して、パラグラフごとの属性を変更する。

詳細は、「**テーブル作成**」の「**段落スタイルテーブル**」を参照してください。

使用する段落スタイルテーブルは、「0~9」までの10テーブルの中から、「段落スタイルテーブル番号」数値コントロールで選択します。

- (e) 全角スペースを区切りとし、各ブロック毎に文字スタイルを適用し、区切りのスペースを残す。

全角スペースを区切りとし、各ブロック毎に文字スタイルを適用し、区切りのスペースを削除。

全角スペースを区切りとし、各ブロック毎に文字スタイルを適用し、区切りのスペースを改行に置換。

挿入文字列をブロックごとに分けて、ブロック文字列に文字スタイルを適用させることが出来ます。

ただし、適用できるのは、「文字列」-「単純挿入」の場合のみです。

挿入文字列をブロックと識別する区切り文字は、全角のスペースです。

適用する文字スタイルは、ドキュメントテンプレートにて、各々、「ブロック 31」、「ブロック 32」、「ブロック 33」、--- という具合に、文字列の左から適用する順番の番号を半角数値にして、固定名「**ブロック**」に加えた名前で用意しておかなければなりません。

つまり、文字スタイル名は、

「ブロック」+シフト番号+適用するブロック数+順番番号 = ブロック 31

のようになります。

ただし、シフト番号(0のみ省略可)、ブロック数、順序番号はすべて1桁の数値とします。

また、開始する文字スタイル番号(シフト番号)が0以外のときには、「文字スタイル開始番号」数値コントロールで指示します。

たとえば、開始番号「0」と指示されている場合、挿入文字列が、

「アメリカ 大統領 大泉」

と全角スペースで仕切られていると、ブロックは、左より、

ブロック 31->「アメリカ」、

ブロック 32->「大統領」、

ブロック 33->「大泉」

と3個あることになり、それぞれのブロック名での文字スタイルがテンプレートには設定されていなければならないということになります。

区切りのスペースはデータとして残すことも、削除したり、改行コードに置換することも可能です。

本機能は、挿入される文字列が1行のみの場合に有効です。複数行になる場合には、指定しないでください。

また、特別改行処理や他の属性変更処理とは併用できません。

次のような、結果となります。

元気 日本新薬 

6) Spicy タグデータ

文字列の単純挿入(テキストフレーム並びにパス)、テキストファイル挿入、表処理では、パラメータ設定ダイアログで「Spicy タグデータ」チェックボックスにチェックをした場合、挿入データを SpicyTag でフォー

マットされた XML ライクなタグ付きデータとして処理を行います。

SpicyTag を使用することで、様々な文字属性を自由に設定することが可能となります。

ただし、SpicyLibra は、XML タグのように入力文字列に加工を施さないプレーンなテキストを使用し、パラメータ設定で種々の属性設定を行うということを基本として設計されていました。ところが、ユーザー様の多くのご意見を盛り込み機能化するに際し、タグを使用しないということでの機能拡張の困難さと設定の煩雑さが、従来の方法では払しょくしがたく、SpicyTag という XML ライクのタグフォーマットでの文字入力を可能としました。

従いまして、「Spicy タグデータ」にチェックがある場合、他のパラメータの多くは無効となりますので、ご注意ください。

SpicyTag の処理ロジックは、3 種類の処理メソッドにまとめられており、基本的な処理内容は、ほぼ同じとなっております。

3 つの処理方法による違いは、タグ付き文字列を挿入する対象が、「表のセル、テキストフレーム、パステキストフレーム」の何れなのかという、コンテナオブジェクトの違いにより、ルートドキュメントを表す、タグの違いにあります。

なお、SpicyTag では、「<」や「>」は、特別な意味をもちますので、XML データ同様に実体参照を使用して、これら特別な文字は表わされます。実体参照テーブルに関しては、テーブル編集機能で登録します。ただし、内部的に、「<」、「>」、「&」、「'」、「"」の 5 つは、XML 規約で事前に <, >, &, ', " と宣言されていますので、本テーブルで再定義する必要はありません。

また、本テーブルが使用されるのは、XML 宣言などがされていないデータであり、XML 宣言などがされている完全なデータの場合には、実体参照の定義もされているものとして、本実体参照テーブルは使用しませんので、注意してください。

実体参照テーブルに関しては、「テーブル作成」の項を参照してください。

なお、ここでは、テキストフレームへの文字列挿入・テキストファイル挿入、表セルへの文字列挿入、パスへの文字列挿入の 3 種類を全て説明いたします。

SpicyTag の基本的なフォーマットは次のようになっています。

```
<?XML version="1.0" encoding="unicode" standalone="yes" ?>
<!DOCTYPE frame [
  <!ENTITY abcd "/">
]>
< frame>
<p> ~~~~~~</p>
<p> ~~~~~~</p>
<p> ~~~~~~</p>
<p> ~~~~~~</p>
</ frame >
```

[SpicyTag 基本フォーマット例]

親コンテナの違いで、ドキュメントルート要素タグが、

テキストフレーム	→	<frame>	</frame>
表セル	→	<tablecell>	</tablecell>
パステキスト	→	<pathtext>	</pathtext>

と変わることになります。

このドキュメントルート及び段落要素タグ以外はパラグラフ内にて用いるインライン要素となっています。SpicyTag を使用する場合には、Well-FormedXML として、書かれていなければなりませんので、使用する場合には、十分フォーマットチェックを行ったものをご使用ください。

[タグ付きデータの入力形態]

とは申しまして、少ない文字列が連続する、表セルへの挿入の様な現実的な使用法を考えた場合、セルごとのデータすべてに、基本フォーマットの様なきっちりしたデータを準備し使用するのには、無駄が多いとも言えます。

そこで、SpicyLibra では、基本フォーマットによる完全な形のほか、簡易フォーマットを3種類設けています。ただし、複数の設定方法を混在させてはいけません。

簡易フォーマット 1：ドキュメントルート以下を記述。

```
< frame>
<p> ~~~~~</p>
<p> ~~~~~</p>
</ frame >
```

簡易フォーマット 2：段落パラグラフ以下のみでドキュメントルートなどは不要・

```
<p>~~~~~</p>
<p>~~~~~</p>
<p>~~~~~</p>
```

簡易フォーマット 3：段落要素タグも省き、インラインタグのみで記述。この場合、段落の区切りが必要な場合には、全角「↑」を挿入します。

```
~~~~~<i>~~~~~</i>~~~~~ ↑ ~~~~~<b>~~~~~
</b>~~~~~ ↑ ~~~~~
```

これらの簡易フォーマットは、プログラムにてドキュメントルートなどを補完し、基本フォーマットに変換して使用されます。

ただし、親コンテナに適用するオブジェクトスタイルは、ドキュメントルートタグ要素の属性として設定され、段落スタイルは、パラグラフ要素のタグの属性として設定しますので、それらの機能を利用する場合には、省略できないタグがありますので、注意してください。

それでは、まず、基本となるテキストフレームに対して用いる SpicyTag を取り上げて説明します。その他のものに関しては、違いのみを説明します。説明に用いるタグは、開始タグで表しますので注意してください。

NULL タグではないものには、必ず終了タグが必要です・

以下の説明で、●に続くのが**タグ名**、・に続くのが**属性名**となります。属性名の値は、「属性名="属性値"」のように、属性名に続く半角「=」の直後に半角「"」で囲んで設定するものとします。複数の属性がある場合には、各々の属性は、半角スペースで区切って設定します。例えば、「<tagname style="AAAAA" width="20.6">」の様に設定します。

また、スタイルを適用する属性の場合、スタイルは、インデザインテンプレートにあらかじめ登録されていなければなりません。スタイルがグループに属する場合には、グループ名パスは半角「/」とします。属性値は、大文字・小文字を区別します。数値の場合には、半角の算用数字を用います。属性値を文字列で設定する場合には、厳格に同一文字列でなければなりません。属性値が文字列の場合、多くは、インデザインでパネルで用いられている用語と関連付けて命名されていますので、属性の詳しい機能を知るときには、インデザインドキュメントを参照してください。

なお、従来の SpicyTag との互換性を保つために、同一要素であっても、複数のタグ名が並行して用いられる場合があります。

[テキストフレーム]

- ドキュメントルート → <frame>
- ・ テキストフレームに適用するオブジェクトスタイル → framestyle

値：オブジェクトスタイル名

例：framestyle=" オブジェクトスタイル名"

- パラグラフ（段落） → <p> または <para> または <paragraph>

【段抜き見出し関連】

段落を表します。データ最初の段落タグでは、段抜き見出しの設定ができます。段抜き見出しは、親のテキストフレーム内に、設定された高さで段抜きする段数から得られる幅で見出し用のテキストフレームを新規に作成し、その中に、要素データを挿入して、見出しとします。この見出しの大きさ以外の形態は、オブジェクトスタイルにて設定しますので、見出し用のオブジェクトスタイルが必須となります。オブジェクトスタイルにて、見出しとして使用される文字列への段落スタイル適用などの組要素を適用します。

また、見出し用のテキストフレームを作成する開始点は、横組みと縦組では原点が異なるので注意する必要があります。この文字の色の属性は必須項目を表します。

- ・ 段抜き見出しテキストフレームに適用するオブジェクトスタイル → framestyle

値：オブジェクトスタイル名

例：framestyle="MidashiStyle1"

- ・ 段抜きする段数（見出しフレーム幅となります） → dannukimidashi

値：段抜きする段数：0 以上の数値（0 は全段を意味します）。

例：dannukimidashi ="2"

- ・ 見出しフレーム高さ → height

値：高さ（ポイント）を double の値で：正数値

例：height ="25.6"

- ・ 見出しフレーム幅 → width

width を設定すると、指定された高さで幅のフレームをセンターに作成し、X,Y 値や段抜き数は無効となります。

値：幅（ポイント）を double の値で：正数値

例：width ="35"

- ・ 見出しフレーム開始点 x → xoffset

値：開始点の X 座標（ポイント値（親フレームのフレーム角を原点として）を double の値で：正数値（デフォルト 0）

例：xoffset ="3.3"

- ・ 見出しフレーム開始点 y → yoffset

値：開始点の Y 座標（ポイント値（親フレームのフレーム角を原点として）を double の値で：正数値（デフォルト 0）

例：yoffset ="2"

- ・ 見出しフレーム内のあふれ処理 → overset

値：あふれ処理・段落追い込み処理方法を 3 種類から選択指定します（何も行わない場合には、設定しません）。：普通、段落毎、全段落

普通は、通常にあふれ処理を行います。

段落毎は、段落毎に段落追い込みを行います。

全段落は、一番縮小率の大きな段落の追い込みの値と同じ値ですべての段落の追い込み処理をします。

例：overset =" 普通"

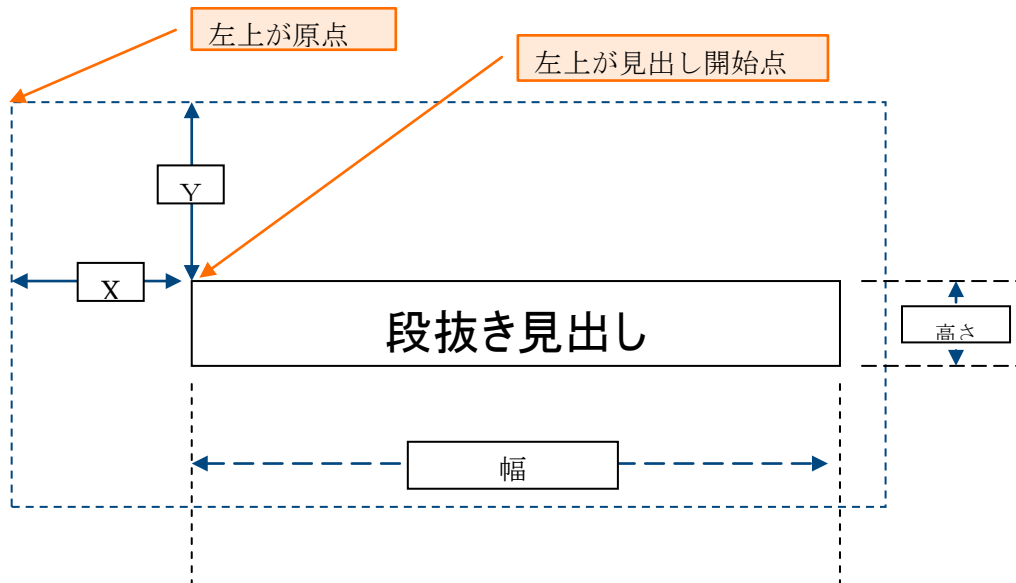
- ・ 見出しフレームのフィット → fit

値：見出しフレームを内容にフィットさせる場合には、「あり」を設定（デフォルト「なし」）。

例：fit =" あり"

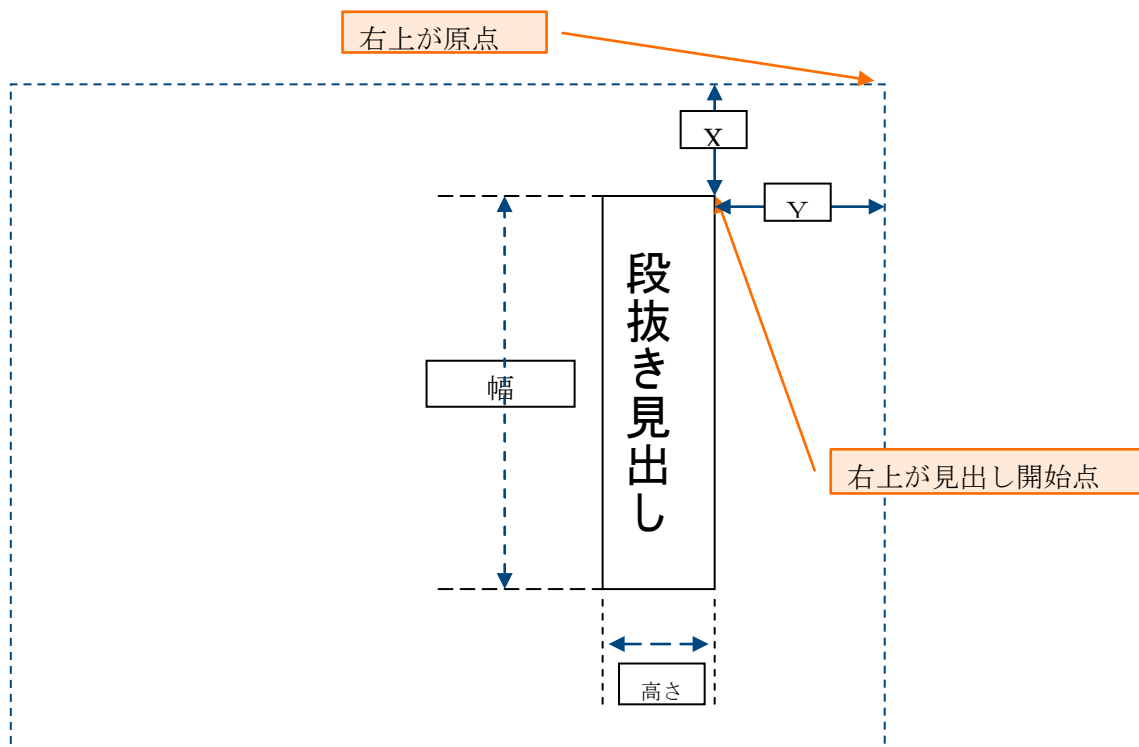
この段抜き見出しのフレームの座標と見出しフレームを作成する親のテキストフレームの X, Y 座標の測り方は次頁の関係となります。

<親フレームが横組みの場合>



<親フレームが縦組みの場合>

インデザインは、横・縦組みに関係なく左上を原点とし、右方向がX増加、下方向がY増加のX Y空間座標となっていますが、本プログラムでは、縦組は下の様な関係に変換して処理を行います。



注：段抜き見出しは、InDesignCS5 より、段落機能で段抜きの設定ができるようになりましたので、段落スタイル設定を用いて実現することも可能です。

【一般段落】

- ・段落開始点 → startposition

値：段組みの場合に強制的に改段させる場合に使用する：次段, なし（デフォルトはなし）

例：startposition =" 次段"

注：1 段組みでは無効となります。

- 段落スタイル → name
値：段落スタイルを適用する：段落スタイル名
例：name="段落スタイル名"
- 段落揃え → align
値：段落の水平方向揃え：左揃え、中央揃え、右揃え、均等配置最終行左、均等配置最終行中央、均等配置最終行右、両端揃え、ノド元に向って整列。ノド元から整列
例：align="均等配置最終行左"
- ドロップキャップ
次の3つの属性でドロップキャップを設定します。
行数 → dropcaplines
例：dropcaplines="2"
文字数 → dropcapchars
例：dropcapchars="1"
適用文字スタイル → dropcapstyle
例：dropcapstyle="ドロップ"

【以下は、インライン要素タグとなります。】

● ルビ → <ruby>

ルビは、被ルビ文字とルビ文字を合わせて設定する必要があるため、タグフォーマットとしては、ルビ全体を表す <ruby> と被ルビ文字を表す <rb>、そしてルビ文字を表す <rt> とで指示します。

WEB などの HTML で使用されるルビ機能の代替 () を表す、<rp> タグが使用されている場合には、このタグ要素に属する文字列は無視されます。

ルビ全体の定型は、

<ruby><rb>被ルビ文字</rb><rt>ルビ文字</rt></ruby>

という形です。

ルビのすべての処理属性は、<ruby> タグにて設定します。

- ルビの種類 → kind
値：モノルビ、グループルビの選択：モノルビ、グループルビ（デフォルトはテンプレート設定値）
例：kind="モノルビ"
- ルビの揃え方 → align
値：文字揃え：中付き、右、両端、均等アキ、JIS、ルビ 1 文字アキ、肩付き（デフォルトはテンプレート設定値）
例：align="中付き"
- ルビの位置 → position
値：ルビを被ルビ文字列の上につけるのか下につけるのか：上、下（デフォルトはテンプレート設定値）
縦組では、それぞれ、右、左に表示されます（属性値の変更はありません）。
例：position="上"
- ルビのオーバーハング → overhung
値：被ルビ文字をルビ文字がオーバーした時場合の前後文字との関係：ルビ 1 文字分、ルビ半文字分、親 1 文字分、無制限、なし（デフォルトはテンプレート 設定値）
例：overhung="無制限"
- 被ルビ文字のスペース調整 → space
値：被ルビ文字をルビ文字がオーバーした時場合の被ルビ文字間の調整：両サイド、アキ 121、均等アキ、両端揃え、調整しない（デフォルトはテンプレート設定値）
例：space="均等アキ"
- ルビ文字の大きさ → size
値：ルビ文字の文字サイズを double（ポイント）の値で：ポイントサイズ、
例：size="6.5"

- ルビ文字のフォント → font
値：ルビ文字のフォント：フォント名（スタイル名を除いた部分）
例：font=" 小塚明朝 Pro"
- ルビ文字のフォントスタイル → style

フォントを設定する場合、フォントファミリー名とスタイル名（スタイル名がない場合を除き）を同時に設定する必要があります（例えば、「小塚明朝 Pro R」など）。

スタイル名は、単独でも指定できますが、その場合、カレントの位置で使われているフォントに付随するスタイル名でなければなりません。スタイル名は、フォントによって異なりますので注意してください。

- 値：ルビ文字のフォントスタイル：フォントスタイル名、
例：style=" Expand"
- ルビ文字の被ルビからのオフセット（X 値） → offsetx
値：オフセットの X 値を double(ポイント) で。：オフセット値
例：offsetx=" 2.3"
 - ルビ文字の被ルビからのオフセット（Y 値） → offsety
値：オフセットの Y 値を double(ポイント) で。：オフセット値
例：offsety=" 0.5"
 - ルビ文字の色 → color
値：ルビ文字の色：スウォッチカラー名
例：color ="C=0 M=0 Y=100 K=0"
 - ルビ文字濃度 → tint
値：ルビ文字の濃度を double で。：%値
例：tint="56"

- 被ルビ文字列 → <ruby>
被ルビ文字列を表します。

- ルビ文字列 → <rt>
ルビ文字列を表します。

ルビ文字列が、半角スラッシュ「/」で複数の文字（列）に区切られて記述されている場合、「/」で区切られた文字を、被ルビ文字列の一つ一つにかかるルビとしてとらえ、<ruby> タグでの属性設定に優先し、各々の文字へのモノルビとして扱います。

例：<ruby><rb> 大山田 </rb><rt> おお / やま / だ </rt></ruby>
とあれば、
<ruby><rb> 大 </rb><rt> おお </rt></ruby><ruby><rb> 山 </rb><rt> やま </rt></ruby><ruby><rb> 田 </rb><rt> だ </rt></ruby>

と、一つ一つをモノルビで設定したのと同じ扱いとなります。

より正確に言えば、インデザイン上の機能としては、ルビ文字を全角スペースで区切って設定したのと同じ処理となります。

- 異体字 → <cvar> または、<charvariation>
要素内の文字を異体字に変換します。要素内で指定できる文字は 1 文字のみです、文字列を変換することはできません。1 文字 1 文字の設定となります。

- 異体字種類 → kind
値：異体字の種類を OpenType フィーチャータグで指定：aalt、nalt、expt、jo04、jp76、jp83、jp90、

trad、nick、code

例：kind="aalt"

注：aalt、nalt の場合には、オフセット属性の値が必須であり、code の場合には、code 属性の値が必須となります。

- 異体字オフセット番号 → offset

値：異体字基底文字からのオフセット値を設定：正数値

例：offset="5"

注：異体字種類が、aalt、nalt の場合にのみ有効となります。

- 異体字コード番号 → code

値：異体字を直接漢字コードで指定：UNICODE(サロゲートペアを含)

例：code=" 20BB7"

注：異体字種類が、code の場合にのみ有効となります。

例」 <cvar kind="code" code="20BB7">吉</cvar>

とすると、いわゆる土吉となります。

- 斜体 → <i> または、<italic>

要素内の文字に斜体をかけます。詰めの調整とライン揃えは常に有効に設定されます。

- 斜体角度 → degree

値：斜体の角度 double(度)：100 倍した値 (デフォルト 4500 = 45°)

例：degree="4500"

- 斜体角度 → compress

値：斜体の縮小率 double(%)：100 倍した値 (デフォルト 1000 = 10%)

例：compress="1000"

- ボールド → または、<bold>

要素内の文字のフォントをボールドスタイルに変更します。B または Bold のスタイルを もっているフォントに限りです。それ以外のスタイル名のフォントでは、スタイル設定で 同じような処理を実行してください。

- 下付き → <sub> または、<subscript>

要素内の文字を下付き文字に変換します。

- 上付き → <sup> または、<superscript>

要素内の文字を上付き文字に変換します。

- 圏点 → <kenten> または、<bouten>

要素内の文字に圏点記号をつけます。設定項目以外はテンプレートの設定によります。

- 圏点種類 → kind

値：圏点記号を選択：ゴマ、白ゴマ、蛇の目、黒丸、小さい黒丸、二重丸、黒三角、白三角、白丸、小さい白丸 (デフォルトは、小さい黒丸)

例：kind=" 白ゴマ"

- 圏点位置 → position

値：圏点を付ける位置 (横組：上下、縦組：左右)：上、下

例：position=" 上"

- 圏点揃え → align

値：圏点の揃え：肩付き、中付き

例：position=" 肩付き"

- 圏点距離 → offset

値：親文字からの間隔 double (ポイント)：数値

- 例：offset ="4.1"
- 圏点カラー → color
値：圏点の色：スウォッチカラー
例：color ="C=0 M=100 Y=0 K=0"
 - 圏点濃度 → tint
値：圏点の濃度 double (%)：数値
例：tint ="65"
 - 画像、アセット →
インライン画像として、画像ファイルまたはアセットを貼りこみます。要素値の文字列に半角ピリオド「.」があれば画像ファイル、そうでなければアセットとして扱います。
 - ベースラインシフト → shift
値：画像のベースラインをシフトします。double(ポイント)：数値
例：shift ="-1.5"
 - OTF フィーチャー → <otf>
OTF フィーチャー要素に設定します。現状では欧文イタリックのみです。フォント自体に OTF フィーチャーの設定がなければなりません。
 - 欧文イタリック → italic
値：OTF 欧文イタリックに変更します。：オン
例：italic =" オン"
 - 割注 → <wari>
要素を割注処理します。インデザインでは最大 5 行までの割注となります。
 - 割注の行数 → lines
値：割注の行数（インデザインでは最大 5 行）：正数値（デフォルト 2 行）
例：lines ="3"
 - 割注内改行 → <wr /> ：NULL タグ
割注要素内で用いられ、割注要素文字列を強制改行します。

例：<wari lines="5"> 山田 X X X<wr />小山 Y Y Y Y<wr />青森 ZZZZ<wr />
秋田 K K K K<wr />新潟 WWWWW</wari>
 - ベースラインシフト → <shift>
要素オブジェクトのベースラインをシフトします。
 - シフト量 → offset
値：ベースラインシフト値 double(ポイント)：数値
例：offset ="-5.6"
 - 文字スタイル → <cstyle>、または <char>
要素文字列に文字スタイルを適用します。
 - 文字スタイル → name
値：文字スタイル名：インデザインテンプレートに登録してある文字スタイル名
例：name =" 特売価格"

● アンダーライン → <u>、または <underline>

要素文字列にアンダーラインを引きます。

・線種 → kind

値：線の種類。次の線種リストの番号：0~16 までの数値 0: ベタ, 1: 太いー太い, 2: 太いー細いー太い, 3: 細いー太い, 4: 細いー太いー細い, 5: 二重線, 6: 三重線, 7: 点線三ー二, 8: 点線四ー四, 9: 左斜線ハッシュ, 10: 右斜線ハッシュ, 11: 直線ハッシュ, 12: 点, 13: 波状, 14: ホワイトダイヤモンド, 15: 句点, 16: 点線

例：kind = " 0"

・オフセット → offset

値：線と文字の間隔 double(ポイント)：数値

例：offset = " 5.3"

・線幅 → weight

値：線幅 double(ポイント)：数値

例：weight = " 0.25"

・線色 → color

値：線色：スウォッチカラー

例：color="C=0 M=36 Y=0 K=0"

・線の濃度 → tint

値：線のウエイト double(%)：数値

例：tint = "82"

● ストライクスルー → <ss>、または <strikeout>

要素文字列に取り消し線を引きます。

・線種 → kind

値：線の種類。次の線種リストの番号：0~16 までの数値 0: ベタ, 1: 太いー太い, 2: 太いー細いー太い, 3: 細いー太い, 4: 細いー太いー細い, 5: 二重線, 6: 三重線, 7: 点線三ー二, 8: 点線四ー四, 9: 左斜線ハッシュ, 10: 右斜線ハッシュ, 11: 直線ハッシュ, 12: 点, 13: 波状, 14: ホワイトダイヤモンド, 15: 句点, 16: 点線

例：kind = " 0"

・オフセット → offset

値：線と文字の間隔 double(ポイント)：数値

例：offset = " 5.3"

・線幅 → weight

値：線幅 double(ポイント)：数値

例：weight = " 0.25"

・線色 → color

値：線色：スウォッチカラー

例：color="C=0 M=36 Y=0 K=0"

・線の濃度 → tint

値：線のウエイト double(%)：数値

例：tint = "82"

● 特殊文字 → <sc />、または <specialchar />：NULL タグ

特殊な意味をもつ記号、文字を挿入します。特殊性を分類した type 属性と、其の各々の分類の中での kind 属性である種類（実際の文字・記号など）を指定します。従いまして、設定には、type、kind の両属性を同時に設定する必要があります。

・特殊文字分類タイプ → type

値：タイプ分類名：記号、マーカー、ハイフン・ダッシュ、引用符、スペース、その他

・特殊文字種 → kind

値：タイプ分類名毎に、次の種類があります。

[記号]

ビュレット、中点、著作権、省略記号、段落記号、登録商標、セクション、商標

[マーカー]

現在のページ

[ハイフン・ダッシュ]

EM ダーシ, EN ダーシ, 任意ハイフン, 分離禁止ハイフン

[引用符]

左二重引用符, 右二重引用符, 左引用符, 右引用符, 半角二重引用符, 半角一重引用符

[スペース]

全角スペース, EM スペース, EN スペース, 分離禁止スペース, 分離禁止固定スペース, 極細, 六分の一, 細い, 四分の一, 三分の一, 句読点の幅, 数字の幅, フラッシュスペース

[その他]

タブ, 右インデント, ここまでタブ, 先頭文字スタイルの終わり

例: <sc type=" 記号" kind=" 著作権" />

- シフトリターン → <sr />, <shiftretun />, または <softreturn /> : NULL タグ
段落内の改行を行います。

- 強制改行 → <cr />, または
 : NULL タグ
段落終了の改行を行います。

- フォント →
要素文字列のフォントやフォントスタイルを変更します。

- ・フォント名 → name
値: フォント名: フォントファミリー名
例: font=" 小塚明朝 Pro"
- ・フォントスタイル → style
値: フォントスタイル: フォントスタイル名,
例: style=" Expand"
- ・文字の大きさ → size
値: 文字サイズ double (ポイント): 数値
例: size=" 6.5"
- ・文字の色 → color
値: 文字の色: スウォッチカラー名
例: color ="C=0 M=0 Y=100 K=0"
- ・文字濃度 → tint
値: 文字の濃度を double (%): 数値
例: tint="56"

フォントを設定する場合、フォント名（フォントファミリー名）とフォントスタイル名（スタイル名がない場合を除き）を同時に設定する必要があります（例えば、「小塚明朝 Pro R」など）。

フォントスタイルは、単独でも指定できますが、その場合、カレントの位置で使われているフォントに付随するフォントスタイル名でなければなりません。フォントスタイル名は、フォントによって異なりますので注意してください。

例えば、ボールドスタイルが、あるフォントでは **Bold** であり、別なフォントでは **B** などということがあります。

- 分離禁止 → bunkin
囲まれた文字列を分離禁止します。

● 縦中横 → `tcy`

縦組み中で横組みを行います。

・縦方向位置 → `vposition`

・横方向位置 → `hposition`

例：`<tcy vposition="12" hposition="5">〜〜〜</tcy>`

● 囲み罫 → `<kakomikei>`

要素文字列の周囲を罫線で囲みます。本機能は、下線 / 打ち消し線及びグラフィックラインなどのインデザインの組版機能を利用して実現しているため、下線 / 打ち消し線やベースラインシフトなどを使用している場所では機能がかち合ってしまう、囲み罫とならないので、使用に当たっては、XML 構造レベルの最下位で、なおかつプレーンな状態で使うことを前提としています。

したがって、本タグ内で使用するタグは異体字設定のタグのみとしてください。

・線の種類 → `kind`

値：線種番号（0～13）または、線種名

例：`kind="10"` または `kind="三重線"`

線種番号は、下記の線種名リストでベタ=0で始まり、右に1ずつ増加します。

「ベタ、太いー太い、太いー細いー太い、細いー太い、細いー太いー細い、二重線、三重線、点線三一、点線四一四、左斜線ハッシュ、右斜線ハッシュ、直線ハッシュ、点、波状、ホワイダイヤモンド、句点、点線」

・罫線幅 → `weight`

値：罫線の幅（double）：数値

例：`weight="1.5"`

・罫線の濃度 → `tint`

値：濃度（%）：数値

例：`tint="50"`

・罫線の色 → `color`

値：線の色：スウォッチカラー名

例：`color="C=0 M=0 Y=100 K=0"`

（紙色、黒、赤、黄、青は、それぞれ、内部名の Paper, Black, Magenta, Yellow, Cyan に置き換えます）

・上下の罫線と文字との空き → `offset`

値：上下の空き量を double（ポイント）：数値

例：`offset="2.5"`

・字送り方向の囲み罫内部の文字列と罫線との空き → `inset`

値：左右の空き量を double（EM）：数値

例：`inset="1"`

・囲み罫と字送り方向の前後の文字との空き → `outerspace`

値：前後の空きを特定のスペース名

例：`outerspace="細い"`

選択できるスペースは次の通り。

「全角スペース、EM スペース、EN スペース、極細、六分の一、細い、四分の一、三分の一、句読点の幅、数字の幅」

【使用例】

`<kakomikei kind="ベタ" weight="1" tint="80" color="C=0 M=100 Y=0 K=0" offset="1" inset="1" outerspace="四分の一">布 陣</kakomikei>`

● 文字合成 → `<gousei>`

要素文字列（ただし2文字固定）を重ね合わせてイメージを合成します。この機能も、インデザインの組版機能を利用して実現しているため、使用している文字スケーリング機能を利用した文字列中などでは正常な結果を得られませんので、プレーンな文字列中で使用してください。

このタグ内では、異体字のタグのみ利用可能となります。

- 前の文字の大きさ → `presize`
値：文字のスケール (%)：数値 (100% 以上 200% 以下、デフォルト 100%)
例：`presize=" 120"`
- 後ろの文字の大きさ → `postsize` (`presize` より小さく、デフォルト 75%)
値：文字のスケール (%)：数値
例：`postsize=" 65"`

【使用例】

渡 `<gousei presize ="120" postsize ="75"> ○ <cvar kind="aalt" offset="5"> 辺 </cvar></gousei>`

● ハイパーリンク → `<hyper>`

要素文字列にハイパーリンク属性を付与します。ただし、**SpicyLibra5.1** では、URL ハイパーリンクのみが対象となります。

- ハイパーリンクの種類 → `type`
値：種類： 文字列 (今回は URL のみ。デフォルトで URL)
例：`type=" URL"`
- ハイパーリンク先の URI → `path`
値：URI：文字列
例：`path=" http://www.spicy-inc.jp"`
- ハイパーリンクオブジェクトのボックス表示 → `visible`
値：表示 / 非表示：`true/false`
例：`visible=" true"`
- ハイパーリンクオブジェクトの名前 → `name`
値：ユニークなオブジェクト識別名：文字列
例：`name="Spicy1"`
- ボックス罫線種 → `borderstyle`
値：線種名：文字列 (" ソリッド"、" 点線" から選択)
例：`borderstyle=" 点線"`
- ボーダーカラー → `bordercolor`
値：ボックス罫線色名：文字列 (下記の色名リストから選択)
例：`bordercolor=" ピーチ"`

色名リストは、「黒, 青, 赤茶色, 茶色, 暗紅色, 藤紫, ベイビーブルー, シアン, ダークブルー, ダークグリーン, いちご, 金色, 若草色, グレー, 緑, スカイブルー, 若菜色, ほおずき色, ラベンダー, ライトブルー, ライトグレー, 鶯色, 乳紫色, マゼンタ, 黄土色, 黄緑色, オレンジ, ピーチ, ピンク, 紫色, 赤, ミルキー, 黄褐色, 濃青緑色, すみれ色, ホワイト, イエロー」です。

【使用例】

`<hyper type="URL" path="http://www.spicy-inc.jp" visible="true" name="spicy1" borderstyle=" 点 線 " bordercolor=" ベイビーブルー "> ソフト会社 </hyper>`

● 網掛け・文字抜き → `<aminuki>`

要素文字列の背面に網掛けを行います。同時に、要素文字列の文字色を指定して色抜きを行います。また、文字をアウトライン化することも可能です。

なお、この機能は、インデザインの下線機能を利用して実現しているため、同機能を利用している文字列中では正常に機能しませんので、他の組版機能との兼ね合いに注意してください。

- 文字色 → `fcolor`
値：色名： 文字列 (デフォルト、挿入位置の継続)
例：`fcolor=" 黄"`
- 文字濃度 → `ftint`
値：濃度 (%)：数値 (デフォルト、100%)
例：`ftint=" 85"`

- 背景色 → bcolor
値：色名： 文字列（デフォルト、挿入位置の継続）
例：bcolor=" 黒"
- 背景濃度 → btint
値：濃度（%）：数値（デフォルト、100%）
例：btint="90"
- アウトライン化 → outline
値：アウトライン化するしない：true/false(デフォルト false)
例：outline="true"

【使用例】

<aminuki fcolor=" 赤 " bcolor=" 紙色 " ftint="100" outline="true"> 青空市場 </aminuki>

● TEX → <tex>

TEX テキストを、登録されている TEX 環境のプログラムを利用して EPS 画像に変換したのち、インラインのアンカーオブジェクトとして文字列中に貼り込みます。1 行中に複数の TEX 画像が挿入された場合、行に設定されたいる文字揃え（仮想ボディのトップ / 仮想ボディのセンター / 仮想ボディのボトムのみ）に従って天地を揃えます。

変換された EPS 画像は、プロジェクトで設定されている「出力」フォルダー直下に、「TexImage」のフォルダーを作成し、その下に保存します。

貼り込まれた EPS 画像は、当該行の文字揃えが文字センター、仮想ボディトップ、仮想ボディボトムの場合には、EPS 画像の高さに応じた揃え処理を行います。

TEX テキストデータは、処理データ内に直接記述するほか、外部ファイル（****.tex）としてファイルを読み込むことも可能です。外部ファイルとする場合には、プロジェクトで設定された「テキスト」フォルダーに格納しておく必要があります。TEX データが外部ファイルの場合、本エレメントの内容は、TEX ファイル名となります。

なお、直接、処理データ内に記述する場合、TEX データ内の改行、半角カンマ、ダブルクォート、半角垂直バーは、それぞれ欧文大文字で、

改 行 → CR
半角カンマ (,) → CM
ダブルクォート (") → DQ
半角垂直バー (|) → VBAR

と置換し記述されている必要があります。ただし、外部ファイルとして TEX データを読み込む場合には、これらの事前の文字列置換を行う必要はありません。

また、TEX データの構造は、

▲プリアンブル

(例) \documentclass[12]{article}
 \pagestyle{empty}
 \begin{document}

▲本文

▲ポストスクリプト

(例) \end{document}

という 3 部構成になっており、プリアンブルとポストスクリプトは 1 プロジェクト中では同じ場合が多いため、共通要素として、予めプログラムの属性として登録しておくことができます。その場合には、処理する TEX データには処理する本文データのみを記述すればよいということになります。

- TEX データは外部ファイル → outsource

- 値：真偽値：true または false（デフォルト false）
例：outsource="true"
- データ中にプリアンブル / ポストスクリプトも記述されている → includepreamble
値：真偽値：true または false（デフォルト false）
例：includepreamble="true"
(false の場合、アプリケーションに登録されたプリアンブル / ポストスクリプトを付加します。)
 - 外部ファイルデータの文字コード → encode
値：文字列：SJIS/UTF8/UTF16（デフォルト、SJIS）
例：encode="UTF8"
 - 個別のプリアンブルを付加する → preamble
値：文字列：改行など置換されたプリアンブルデータ（デフォルト 既定値）
例：preamble="\documentclass[12]{article}_CR_\pagestyle{empty}_CR_\begin{document}"
 - 個別のポストスクリプトを付加する → postscript
値：文字列：改行など置換されたポストスクリプトデータ（デフォルト 既定値）
例：postscript="\end{document}"
 - インラインのアンカーポイントで貼り込まれる画像の y 方向オフセット値 → yoffset
値：数値：アンカーオブジェクトの y 値 (double、デフォルト 0)
例：yoffset="-2"
 - 画像を貼り込むフレームを作成時に実寸ではなく横方向にスケーリングする場合の値 → hscale
値：数値：実寸値に対するスケーリング値 (double、デフォルト 1)
例：hscale="1.5"
 - 画像を貼り込むフレームを作成時に実寸ではなく縦方向にスケーリングする場合の値 → vscale
値：数値：実寸値に対するスケーリング値 (double、デフォルト 1)
例：vscale="2"
 - 画像フレームをスケーリングした場合の画像フィット方法 → imgefit
値：数値：0 ~ 7 (0: なし = デフォルト、1: 比例縮小、2: センター、3: フレームにフィット、4: 内容にフィット、5: 比例縮小後センター、6: フレームに均等、7: フレームに均等後センター)
例：imgefit="2"
 - TEX データ処理を行う場合に、最初のプログラムに引き渡すファイルの拡張子 → startfileextension
値：文字列：先頭にピリオドを付けない拡張子（デフォルト tex）
例：startfileextension="txt"

【使用例】

```
<tex outsource="true" includepreamble="true">eq9.tex</tex>
```

● アンカーオブジェクト → <anchor>

グラフィックフレーム (Rectangle) やテキストフレームをアンカーオブジェクト (カスタム) として作成し、画像を貼り込む、あるいはテキストを流し込みます。

img タグでの画像挿入がインライングラフィックとして貼り込まれるのに対し、本コマンドでは、カスタムアンカーオブジェクト設定を施したオブジェクトスタイルを適用することによって、カスタムアンカーオブジェクトとしてフレームを作成します。

したがって、属性値としてカスタムアンカーオブジェクトを設定したオブジェクトスタイル、フレームの幅と高さは必須指定項目となります。

- 作成するフレームの種類 → `frame`
 値：文字列：テキスト / グラフィック（デフォルト グラフィック）
 例：`frame=" テキスト"`
- 適用するオブジェクトスタイル名 → `style`
 値：文字列：アンカーオブジェクトの設定してあるオブジェクトスタイル名（必須）
 例：`style="anchorobjstyle"`
- 作成するフレームの幅 → `width`
 値：数値：Point 値（必須 double）
 例：`width="125"`
- 作成するフレームの高さ → `height`
 値：数値：Point 値（必須 double）
 例：`height="25"`
- テキスト挿入の場合、フレームに空きが生じるときにフレームにフィット → `shrink`
 値：真偽値：`true/false`（デフォルト `false`）
 例：`shrink="true"`
- テキスト挿入の場合、テキストがオーバーセットするときにフレームにフィット → `expand`
 値：真偽値：`true/false`（デフォルト `false`）
 例：`expand="true"`
- テキストフレームがドキュメントページの深さを超えたばあいフレーム深さを調整しますが、この結果テキストにあふれが生じた場合ににあふれ処理を実行するステップ値と最大値 → `overset`
 値：数値：ステップ値：最大値（int 区切りの：は半角のコロン、デフォルト 0:100）
 例：`overset="5:50"`
 ※ステップ値が 0 または最大値が 100 の場合にはあふれ処理を実行しません。
 ※ここでのあふれ処理は、扁平（平体 / 長体）での処理のみとなります。

【使用例】

グラフィック：

```
<anchor frame=" グラフィック " style="anchorimage1" width="90" height="48">img0036.jpg</anchor>
```

テキスト：

```
<anchor frame=" テキスト " style="anchortext1" width="230" height = "75" shrink="true" overset="5:50"> 日  
本は大きく変わり、昔の面影はどこにも見当たりません。 | 政治家になった山下 三郎には、飛行機の窓か  
ら見える日本の姿を目に焼き付け、太平洋の彼方に向かっていった。</anchor>
```

※テキスト内の改行は全角 | で記述します。

※フレームのフィットはアンカーオブジェクトのテキストフレームが 1 段組の場合にのみ設定可能です。

● アンカーオブジェクトのブロック → `<ancblock>`

一段組みテキストフレームの中でアンカーオブジェクトを設定し、例えば、左側に顔写真を配し、その右側に本人紹介文を記述するような場合、テキスト部分が写真部分より深さが大きい場合には、次の紹介文は、この写真の次に来て重なることはありませんが、写真の深さよりテキストが小さい場合には、次の写真が重なってしまうことがあります。

それを防ぐために、アンカーオブジェクトとそれに付随するテキストの深さを比較し、テキスト部分が小さい場合には、最終行の行送りを調整して、次のテキストがかぶらないようにします。

このタグの中に格納できるアンカーオブジェクトは 1 個のみとなります。また、格納できるタグはアンカーオブジェクトのみとなります。

- アンカーブロックと次の段落までの空き → `spaceafter`
 値：数値：ポイント（double デフォルト 当該フレームの行間設定値の最小倍数）

例：spaceafter="10"

- ・テキスト部分に適用する右インデント値 → rindent
値：数値：ポイント（double デフォルト 0）
例：rindent="100"
- ・テキスト部分に適用する左インデント値 → lindent
値：数値：Point 値（必須 double）
例：lindent="125"
- ・ブロック内で使用するアンカーオブジェクト設定にノド属性が設定されているか → nodo
値：真偽値：true/false（デフォルト false）
例：nodo="true"
- ・テキスト部分のインデント適用を1行目のみにする → indentfirst
値：真偽値：true/false（デフォルト false）
例：indentfirst="true"

【使用例】

<ancblock rindent="100" indentfirst="true">（2）<anchor frame=" グラフィック " style="anchorimage1" width="90" height="48">img0036.jpg</anchor> 右の写真は何を表しているのか、説明しなさい（ヒント：この写真は、2011 年 4 月の中旬に静岡県のある都市で写したものです）。</ancblock>

- CID コードで文字を挿入 → <cid>
CID コードで文字（1 文字）を入力します（マルチタグです）。

- ・挿入する文字の CID コード → code
値：数値：必須
例：code="11044"

【使用例】

<cid code="11044" />

※最終ノードとなります。

※書体に定義されていなければなりません。

- UNICODE で文字を挿入 → <unicode>
UNICODE で文字（1 文字）を入力します（マルチタグです）。

- ・挿入する文字の UNICODE → code
値：数値：必須
例：code="216A"

【使用例】

<unicode code="216A" />

※最終ノードとなります。

※書体に定義されていなければなりません。

- 人名字取を行う → <jinmei>

カスタム人名字取用のテーブルを使用して、テキスト中で人名字取処理を行います。カスタム人名字取りがフレームに対して人名しか挿入できない（つまり人名用のテキストフレーム専用の処理）のに対し、SpicyTag では、テキスト中でありさえすれば、どこにでも設定することが可能です。すなはち、通常のテキスト中に人名に対して字取を行えるということになります。

適用可能な、字取数は、標準で、5、7、8、9 字取りとなっています。6 字取は、テーブルを作成してい

ただければ対応可能です。また、付属のテーブルの値を編集していただき、独自の値での字取処理を行わせることもできます。

その他、処理機能は、カスタム人名処理に準拠しますが、通常の文字列の並びと混在しますので、カスタム人名処理に比べ、いくつかの制約と違いがあります。

- ①インデントが使用できない。
- ②設定された字取数をオーバーした場合には、字取数の文字列の範囲で扁平処理をします。
- ③ XmlTag データとなりますので、異体字を設定する <> は使用できません。代わりに、半角の [] を使用してください。
- ④ 姓名別項目入力や姓名読み別項目入力はできませんので、以下に示す入力フォーマットにて記述する必要があります。

【人名字取入力定型】

・ 姓と名の間には全角スペースを挿入する（全角スペースは挿入時には削除押されます。姓と名の区切りの役割だけの機能となります）。

姓名の区切りのないデータの場合、文字数が字取数以下の場合には通常の文字扱いとなります、字取数を超えた場合には、字取り数の文字数の幅に扁平をかけておさめます。ただし、よみや異体字設定は無視されます。

・ 異体字は異体字に変換する文字の直後に、半角 [] で囲んで指示します。[] 内の設定方法は、カスタム人名字取処理の場合と同じとなります。

・ よみがなは、モノルビで処理する場合には、よみがなを振る文字の直後に半角 () で囲い、グループルビで処理する場合には、当該文字列の直後に半角 (g) で囲い指示します。カスタム人名字取の場合の姓名を 1 項目で記述する場合と同じになります。

【人名字取入力定型例】

鞍 (くら) 掛 (かけ) 俊樹 (g としき)
石井 伸道 [aalt:2](g のぶみち)

【パラメータ】

・ 字取数 → span

値：数値：必須

例：span="7"

※字取数はテーブルで定義されている値でなければなりません。

・ よみがなの位置 → position

値：文字列：「上」または「下」：デフォルトは「上」

例：position=" 下"

・ 読み仮名の揃え → align

値：文字列：「肩付き、中付き、右、両端、JIS、均等アキ、ルビ 1 文字アキ」：デフォルトは横組み「中付き」、縦組み「肩付き」

例：align=" 両端"

・ 字間調整方法 → method

値：文字列：「字空き」または「字送り」：デフォルトは「字送り」

例：method=" 字空き"

・ UNICODE の私用領域 (Private Use Area) の範囲 (U+E000 ～ U+F8FF) にある文字の自動フォント切替
→ gajifont

値：文字列：適用フォント名 (フォントファミリー名 + \t + スタイル名)：デフォルトはなし

例：gajifont=" 小澤外字 \tRegular"

【使用例】

<jinmei span="5" position=" 上 " align=" ルビ 1 文字アキ " method=" 字空き "> 石井 伸道 [aalt:2](g のぶみち)</jinmei> さんは、お元気でしょうか？↑私は、大いに元気で頑張っています。

※最終ノードとなります。

● 字取を行う → `<jidori>`

InDesign の通常の字取処理を行います。

【パラメータ】

・字取数 → `span`

値：数値：必須

例：`span="6"`

【使用例】

`<jidori span="6"> 世界遺産 </jidori>` に指定された場所を列举します。

※字取は、テキストフレームに設定されているレイアウトグリッドの文字サイズを基準として空き量が計算されますので、例えば、レイアウトグリッドの文字サイズが 10 ポイントで、表示されている文字サイズが 20 ポイントである場合に、字取を 5 とすると、字取を行う幅は、 $5 \times 20 = 100$ ポイントではなく、 $5 \times 10 = 50$ ポイントとなりますので注意してください。

● 文字回転 → `<chrotate>`

要素文字列を文字ごとに回転します。

・回転角度 → `angle`

値：度：数値 (double) $-360.0 \sim 360.0$ の範囲

例：`angle="-90"`

【使用例】

`<chrotate angle="90"> ソフト会社 </chrotate>`

● 文字揃え → `<chalign>`

異サイズの文字が混在する場合の文字の天地の揃えを指示します。

・揃え方法 → `align`

値：文字列：仮想ボディの上、仮想ボディの中央、欧文ベースライン、仮想ボディの下、平均字面の上、平均字面の下

例：`align=" 欧文ベースライン"`

【使用例】

`<chalign align=" 仮想ボディの上 "> 登録商標 </chalign>`

〔表セル〕

表セルは、各々のセルごとに、1つのSpicyTag データ構造をもったデータを挿入するということになっております。従いまして、セル内に挿入する文字列や画像データに対する属性設定ではない、セル、テーブル、テキストフレームに対して、各々のスタイルを適用しようとする場合には、ドキュメントルートタグの属性として設定する必要があります。

- ドキュメントルート → <tablecell>
- ・親テキストフレームに適用するオブジェクトスタイル → framestyle
値：オブジェクトスタイル名
例：framestyle=" オブジェクトスタイル名"
- ・親テーブルに適用するテーブルスタイル → tablestyle
値：テーブルスタイル名
例：tablestyle =" テーブルスタイル名"
- ・セルに適用するセルスタイル → style
値：セルスタイル名
例：style =" セルスタイル名"

表先頭セルのデータでは、オブジェクトスタイル、テーブルスタイル、セルスタイルのすべてが設定できます。

例：<tablecell framestyle="フレームオブジェクトスタイル名" tablestyle="テーブルスタイル名" style="セルスタイル名">
 <p> ~~~~~</p>
 <p> ~~~~~</p>
 </tablecell>

表先頭セルのデータではない場合、セルスタイルのみが設定できます（オブジェクトスタイルもテーブルスタイルも設定できますが、前のセルにて実行した処理との整合性が取れなくなりますので、先頭以外のセルでは、セルスタイル以外のスタイル設定はしないでください）。

例：<tablecell style="セルスタイル名">
 <p> ~~~~~</p>
 <p> ~~~~~</p>
 </tablecell>

- パラグラフ（段落） → <p> または <para> または <paragraph>

- ・段落スタイル → name
値：段落スタイルを適用する：段落スタイル名
例：name =" 段落スタイル名"

【インライン要素はテキストフレームと同一のため、テキストフレームの説明を参照してください。ただし、囲み罫、網掛け、ハイパーリンク、tex、アンカーブロック、アンカーオブジェクトは除きます】

【パステキスト】

- ドキュメントルート → <path>
- グラフィックラインに適用するオブジェクトスタイル → linestyle
 値：オブジェクトスタイル名
 例：linestyle = " オブジェクトスタイル名"
- パラグラフ（段落） → <p> または <para> または <paragraph>
- 段落スタイル → name
 値：段落スタイルを適用する：段落スタイル名
 例：name = " 段落スタイル名"

【インライン要素の設定はできません。ただし、文字合成、異体字、cid、unicode は使用できます】

7) 未データ時フレーム削除

挿入対象入力データ項目にデータがない場合に、挿入対象のテキストフレームを削除します。
 ただし、固定的に付加文字を挿入する設定になっている場合には、チェックがされていても削除しません。

8) 改頁処理（文字列の違いによる改頁処理を行う場合のマスター名項目設定番号）

改頁条件にカレントレコードが合致した時に、ドキュメントページに適用するマスターを変更する場合、マスター名（A- マスター、など）が記述されている、0 以上、100 以下のレコード項目番号を設定します。

0 は、マスター変更をしないことを意味します。

改頁条件を判断する項目とマスター名が記述されている項目が同じでも構いません。

改頁処理を行う場合、SpicyLibra のメイン画面の「マスター適用：マスター名」でマスター名が設定されていない場合、適用マスター名の項目に設定されたマスター名を先頭ページに適用します。

「マスター適用：マスター名」でマスター名が設定されている場合には、適用マスター名の項目に設定されたマスター名ではなく、「マスター適用：マスター名」でマスター名を先頭ページに適用します。

9) 追出し処理（テキストフレームにオーバーセットがあった場合、そのフレームであふれ処理を行わず、次ページのフレームに追い出す。）

テキストフレームがオーバーセット（あふれる）した場合、当該テキストフレームに「追い込む」方法で強制的に収めるのではなく、次ページ設定されている、ラベル名が同じテキストフレームにデータを「追い出す」方法をとります。

この設定ができるのは、「1レコードを2ページに亘ってレイアウトする」見開きページ処理に限りです。

したがって、この場合のみ、1, 2 ページに、同じフレーム名（枝番号を含めて）のものがなければなりません。

次ページのテキストフレームに追い出しても、オーバーセットする場合には、2つのテキストフレームを合わせた内容に対して、「追い込み」を行います。

10) 空白行削除

テキストフレーム中に、空白段落（行）がある場合、空白段落を削除します。

11) あふれ処理（段落追い込み）

テキストフレームにあふれが生じた場合の処理方法 3 種類とあふれが生じない場合でも処理を行う段落の追い込み方法 2 種類のうちから選択します。

- ① 段落を 1 行に強制的に収めない（標準：フレーム全体でのあふれ処理）
- ② 段落を 1 行に強制的に収め、複数段落ある場合には、1 行で収まる段落に対しても、同じ率での扁平処理を行う
- ③ 段落を 1 行に強制的に収め、複数段落ある場合には、1 行で収まる段落に対しては扁平処理をしない

- ④未あふれ時でも、段落を 1 行に強制的に収め、複数段落ある場合には、1 行で収まる段落に対しても、同じ率での扁平処理を行う
- ⑤未あふれ時でも、段落を 1 行に強制的に収め、複数段落ある場合には、1 行で収まる段落に対しては、扁平処理を行わない

文字挿入に対するあふれ処理は、通常、フレーム全体に対するあふれ処理（①）を対象としますが、1 段落を 2 行に自動改行させないで、1 行に収めたい場合があります。

SpicyLibra では、段落ごとで、1 行に追い込む機能を設けています。④及び⑤を選択した場合には、段落追い込みは、テキストフレームがあふれていない場合にも有効となり、段落が複数行に自動改行される場合、すなわち、1 段落 = 1 行でない場合に、段落の文字に扁平をかけて強制的に 1 行に収める処理を行います。この時の扁平率と扁平のステップ毎の増加率の設定は、あふれ処理の場合の設定値に準じます。

段落追い込みの方法には 2 種類あり、

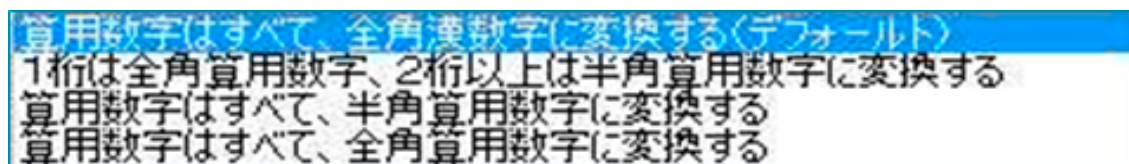
「対象となる段落群の一番扁平率の高いものに合わせて、すべての段落の文字に扁平をかける」方法（②）と、「段落毎に、段落追い込みの必要があるかをチェックし、それぞれの段落毎の段落追い込みの扁平率で処理を行う」方法（③）とがあります。

先の方法は、段落追い込みの必要がない段落でも扁平処理がされるので、すべての文字の扁平率が同じになり、文字並びでは見栄えが良いが、不必要な空白が生じてしまうということも考えられます。もう一方は、不必要な空白は発生しませんが、段落毎の文字の扁平率が異なる可能性が炊きため、文字並びの美しさは損なわれる可能性があります。

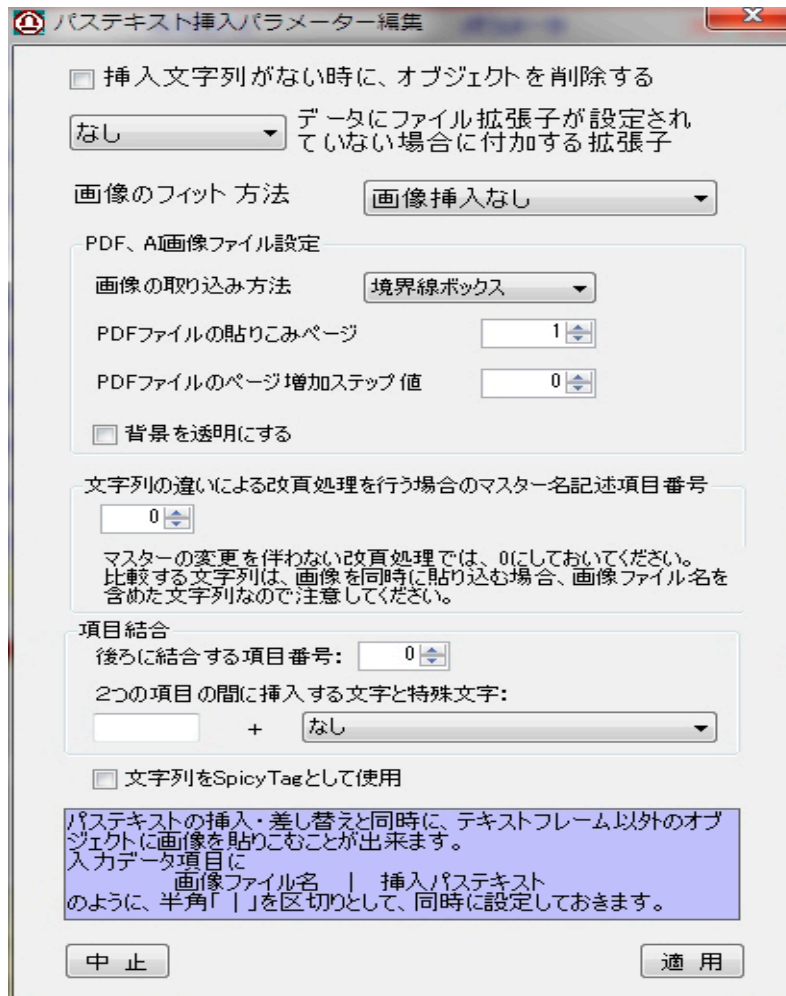
いずれにしろ、一長一短がありますので、使用する場合には、特質にあった方法を選択してください。

12) 数字変換方法

住所漢数字変換に漢数字変換を含めて 4 種類の変換方法から選択することができます。



●パステキストの場合



パステキストは、線分に沿ってテキストを配置する方法ですが、SpicyLibra では、線ツールで描いたパスはもちろんのこと、各種のフレーム（テキストフレームを除く）枠の線分に対しても、パステキストを挿入することができます。

文字列は、1 行のみのデータとなります。

また、文字列挿入と同時に、パスに対して画像の貼り込みを行うことも可能です。この場合、入力データの定型は、

画像ファイル名 | 挿入文字列

となります。（区切りは半角の「|」です。

各パラメータの設定は以下の選択枝から選びます。

1) 挿入文字列がないときにオブジェクトを削除する。

入力データがないとき、パスやパスを構成するフレームオブジェクトを削除します。

2) 画像のフィット方法

画像貼り込みを伴う場合、貼り込み後のオブジェクトの調整で、以下の方法を選択します。

「画像挿入なし、比例縮小、センター、フレームにフィット、画像にフィット、比例縮小後センター、フレームに均等、フレームに均等後センター」

3) 画像の取り込み方法

PDF または AI 画像ファイルを画像フレームに貼り込む時のトリミング方法を以下の中から選択し設定します。

「境界線ボックス、アート、トリミング、トンボ、裁ち落とし、メディア」

境界線ボックスを選択した場合、メイン画面の「PDF 貼り込み：境界線ボックスのレイヤー選択」の設定に従って、レイヤー処理を行います。

4) 背景を透明にする

PDF ファイル貼り込み時に、背景を透明にします。

5) PDF ファイルの貼り込み頁（開始頁）

PDF ファイルを貼り込む時の貼り込み開始するページを設定します。

次の PDF ステップページが設定されていない場合、常に同じページが貼り込まれることになります。

6) PDF ファイルのステップページ増加数

PDF ファイルを貼り込む時、レコードごとに増加させるページ数を設定します。

7) データファイルに拡張子が設定されていない場合に付加する拡張子

画像ファイルを貼り込む時、処理データにファイル拡張子が設定されていない場合に付加するファイル拡張子を設定します。

なし、ai、jpg、gif、eps、pict、wmf、pcx、pdf、png、sct、tif、dcs、psd、bmp、dxf、indd

「なし」は、データ中のファイル名を指示している部分の文字列に、ファイル拡張子がなくても拡張子を付加しません。

8) 文字列の違いによる改頁処理を行う場合のマスター名記述項目番号

改頁条件に合致し、改ページを行う場合、改頁以降のドキュメントページに適用するマスターページ名を記述してある項目番号を設定します。

テキストフレーム挿入の場合と同じです。

9) 項目結合

- ・後ろに結合する項目番号

対象項目データの後ろに、別項目のデータを結合します。

- ・2つの項目の間に挿入する文字列と特殊文字

2つの項目を結合する時に、項目間に、固定文字列と特殊文字を挿入できます。

特殊文字は、次の中から選択します。

「なし、フラッシュスペース、右インデント、ここまでタブ、先頭文字スタイルの終わり、登録商標、著作権、商標、現在のページ」

10) 文字列を SpicyTag として使用

SpicyTag として文字列を処理します（[詳細は、単純文字挿入の SpicyTag の項を参照](#)）

②人名字取り

人名字取りパラメータ編集

「名」項目番号 (「名」が「姓」と別項目のデータ入力である場合、0は、姓と名が同一項目に入力されているデータ。)

ルビ文字項目番号 (0 はルビなし)

「名」ルビ項目番号 (「名」が別項目のデータ入力である場合の「名」のルビ、0は、ルビなし。また、姓と名が同一項目データの場合には、無効となります。)

ルビ位置

ルビ文字揃え

私的領域文字フォント変換

☒ UNICODE私的領域(U+E000 ~ U+F8FF)のフォントを変更する。

	基底フォント	私的領域文字適用フォント
①	<input type="text" value="Windows TV 太丸ゴシック Regular"/>	<input type="text" value="小澤フォント21 Regular"/>
②	<input type="text" value="Windows TV 丸ゴシック Regular"/>	<input type="text" value="小澤フォント21 Regular"/>

人名の入力定型は2種類あります。

一つは、姓と名を同じ項目のデータとして入力する方法で、

「姓+全角スペース+名」

という形で、姓と名の間に全角スペースを挿入し手入力します。

この方法で入力したものにルビを振る場合、同様な形式で、

「姓よみ+全角スペース+名よみ」

のように、全角スペースを挿入して入力します。

もう一つは、姓と名を別々な項目として入力する方法で、この場合にルビを振るときには、ルビのほうも、姓よみと名よみを別項目として入力します。

姓の項目は、マッピングの対象項目なので、メイン画面でフレームに対応付けられている必要があります。

なお、**ルビの種類は、ルビ文字の設定で変わります。**

モノルビ → 親文字の1文字1文字に対応するように、ルビ文字を半角「/」で区切る。例えば、「木ノ内」のように3文字に対してルビを振る場合、「き // うち」のように、ルビを振らない文字の部分も「/」で区切って入力します。

グルーブルビ → ルビ文字中に半角「/」を含めない。

また、区切りの「/」が親文字より多い場合には、該当する親文字の数分を先頭より逐次使用し、あまったルビ文字は利用しません。逆に、「/」が不足している場合には、不足する部分の親文字には、ルビは振られません。

1) 「名」項目番号

名を別項目として入力する場合には、0以上の項目番号を、姓と名を同一項目として入力する場合には、0を設定します。

2) ルビ文字項目番号

姓と名が同一入力項目の場合には、姓と名のよみの入力項目の番号を、姓と名を別項目入力する場合には、「姓

よみ」の項目番号を設定します。

ルビを振らない場合には、0を設定します。

3)「名」ルビ項目番号

姓と名が同一入力項目の場合には無効となります。姓と名を別項目で入力する場合の、「名よみ」の項目番号を設定します。

ルビを振らない場合には、0を設定します。

4) ルビ位置

ルビを上(右)につけるか、下(左)につけるか設定します。

5) ルビ文字揃え

ルビの文字揃えの方法を以下から選択し設定します。 :

「1 ルビ文字アキ、中付き、両端揃え、1-2-1(JIS) 揃え、肩付き、右 / 下揃え」

6) 私用領域文字フォント変更

UNICODE 私用領域 (U+E000 ~ U+F8FF) の文字の適用フォントを変更します。

変更のチェックボックスにチェックを入れ、適用するフォントを設定することで、データ中にフォント切り替えの指定がなくても、フォント設定を変更します。

この領域は、いわゆる外字フォントのエリアに該当し、レガシーな外字をリンク形式の ttf フォントとして作成してある場合に、InDesign では、リンク形式のフォントは使用できないため、外字フォントをリンク形式ではない 1 フォントとして作成し使用することになります。

したがって、データ中に、外字文字の出現に合わせて、フォント切り替えの操作をする必要があり、外字の出現頻度の高い人名の処理では、外字フォントを使用するうえで障害となります。

本機能を使用することで、データには手を加えることなく、外字文字のフォント切り替えを行うことが可能となります。

設定方法は、まず、InDesign が使用できるアプリケーションフォントリストを「フォントリストの取得」ボタンをクリックし取得します（この操作は、一度取得しておけば、新規にフォントを登録したり削除したりしない限り、実行する必要はありません）。

次に、上記操作でフォント指定のコンボボックスが選択できるようになりますので、

「基底フォント」にて、当該人名処理を行っているテキストフレームに適用されているフォントを選択します。選択した結果は、直下のテキストフレームに表示されます。

その後、同じ行の「私用領域文字適用フォント」にて、使用する外字が登録されているフォントを選択します。

基底フォント①が適用されてる使用領域文字には、使用領域適用フォント①が適用され、基底フォント②が適用されてる使用領域文字には、使用領域適用フォント②が適用されるということになります。同時に、2 種類の異なった基底フォントに対してフォント変更処理が可能ということになります。

③数字桁取り（文字列）

算用数字を流し込む時、3 桁毎の桁取り文字「,」を挿入します。

パラメータの設定は①「単純挿入」と同じ設定ができます。

④数字フラグ（文字列）

フラグパラメータ編集

番号	挿入文字列
0	1
1	20
2	14
3	5
4	
5	
6	
7	
8	
9	

オブジェクトスタイル使用
☐ オブジェクトスタイル名として使用
 適用フレーム名

アセット使用
☐ アセット名として使用
 ベースラインシフト値

通常は、データ項目の番号(0,1,2,3,...)の値にしたがって、「挿入文字列」で設定した文字列をメイン画面の「フレーム名称」に設定したフレームに挿入します。

この時、「アセット名として使用」チェックボックスにチェックが入っていれば、文字列を挿入する代わりに、アセットを挿入します。

また、「オブジェクトスタイル名として使用」にチェックが入っている場合、一義的には、「挿入文字列」で設定した文字列をオブジェクトスタイル名として「適用フレーム名」に設定したフレームにオブジェクトスタイルを適用します。

この場合(オブジェクトスタイル使用)、メイン画面の「フレーム名称」にフレーム名が設定されている場合は、「挿入文字列」で設定したオブジェクトスタイル名は、通常の文字列としてここに挿入されます。同時に、アセット使用となっていれば、オブジェクトスタイル名であり、かつ、アセット名であるとして、アセットを挿入します。アセット名、オブジェクトスタイル名の付け方で、様々な応用が効くということになります。

例えば、「様、ちゃん、殿、御中」などで、アセット名、オブジェクトスタイル名を同一の設定にしておけば、フレームにオブジェクトスタイル適用し、さらに、文字列を挿入するフレームには、アセットが入ることになります。もちろん、オブジェクトスタイルを適用するフレームと、文字列、アセットを挿入するフレームを同一に出来ます。

中止 適用

0,1,2,3,4,5,6,7,8,9（固定）の順番にフレームに挿入する文字列を指定します。

項目データには「0～9」のいずれかの数字を入力しておきます。

最大 10 個までの番号を挿入文字列に置き換え、使用することができます。

基本は、番号に対応する挿入文字列を、メイン画面のフレーム名称設定欄に設定されたフレームに挿入します。

応用として、「オブジェクトスタイル名として使用する」にチェックがついており、適用フレームにフレーム名が設定してあれば、その適用フレームに挿入文字列をオブジェクトスタイル名として使用しオブジェクトスタイルを適用します。

この時、メイン画面のフレーム名称設定欄にフレーム名が設定してあれば、そのフレームには基本動作として、挿入文字列が文字列として挿入されます。メイン画面のフレーム名称設定欄に設定がなければ、オブジェクトスタイルの適用のみが行われます。

また、メイン画面のフレーム名称設定欄のフレーム名とオブジェクトスタイル適用フレーム名を同一とすることも可能です。

挿入文字列をアセット名として使用する場合には、「アセット名として使用」チェックボックスをチェックします。

この場合、メイン画面のフレーム名称設定

欄にフレーム名が設定してあれば、基本動作の場合と異なり、挿入文字列をそのまま挿入するのではなく、アセット名として使用し、アセットを挿入します。

アセットを挿入するとき、ベースラインをシフトさせたい場合には、「ベースラインシフト値」に適切な値（マイナス値可）を設定します。

挿入文字列は、オブジェクトスタイル適用、アセット挿入と同時に使用することも可能です。

SpicyLibra2109 より、挿入文字列項目すべての設定に半角数字のみを使用し、データレコード中の項目を挿入文字列の代わりに挿入する機能を追加しました。従いまして、挿入文字列をすべて半角数字で設定しているような場合には、基本処理とは異なり設定文字列挿入しなくなりましたので注意してください。

例：挿入文字列に、「ご家族様、様、殿、御中」の設定がある場合。

（データとして入力した数字に対応して、0 → ご家族様、1 → 様、2 → 殿、3 → 御中…が挿入されます。）

例：挿入文字列に、半角数字にて「1,20,14,5」の設定がある場合。

（データとして入力した数字に対応して、0 → データレコードの 1 項目目の値を挿入、1 → 20 項目目、2 → 14 項目目、3 → 5 項目目…が挿入されます。設定する番号は、1 から始まり、データレコード項目の最大数までとなりますので注意してください。）

⑤柱（文字列）

柱パラメーター編集

文字数 結合文字

柱 処 理 の 概 要

下黄色背景色のデータ項目の1番を4文字で処理の場合
結合文字を「-」とする

あきあかね、 あきのしま、 あけぼの、 あこうろし、	蜻蛉 相撲取り レスラー 47士
-------------------------------------	---------------------------

処理方法	結 果
先 頭	あきあか
末 尾	あこうろ
先頭-末尾	あきあか-あこうろ
全件結合	あきあか-あきのし-あけぼの-あこうろ

柱用フレームは、ページ先頭のフレームのみ作成。

中止 適用

柱文のように頁毎にデータを表示する場合に、柱文のコンテンツをページに読み込まれたデータから抽出・結合して所定のテキストフレームに挿入します。

通常、柱文を挿入するフレームの枝番号は「1」にし、1ページ当たりの処理レコード数が2以上の場合でも、柱用のフレームは枝番号が「1」以外のものは削除するか、作成しません。

1) 結合文字数 : 1-9

指定された項目データから1～9までの設定された文字を抽出します。

2) 結合文字 : 複数フレームを結合する時の結合文字（無指定は-）

複数項目からの抽出データを結合する時に抽出文字列間に挿入する文字（1文字）を設定します。

⑥住所漢数字変換（文字列）

住所データの算用数字の部分に漢数字に変換したりし、挿入します。

パラメータの設定は④「単純挿入」と同じ設定ができます。

ただし、属性変更、特殊改行処理の部分は、使用できません。

⑦漢数字桁取り（文字列）

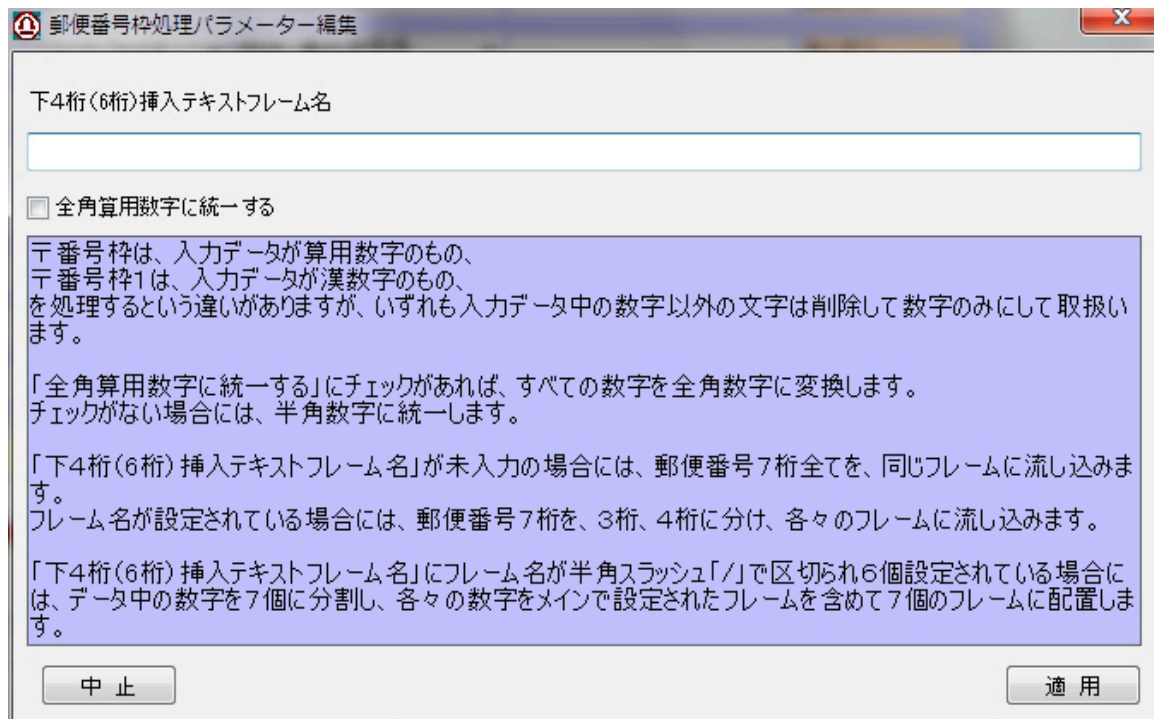
算用数字を漢数字に変換しながら、3桁毎の桁取り文字「,」を挿入します。

パラメータの設定は④「単純挿入」と同じ設定ができます。

ただし、属性変更、特殊改行処理の部分は、使用できません。

例：定価（データの先頭に「定価」という文字を差し込みながら、桁区切り文字付き漢数字に変換します。）

⑧〒番号枠、〒番号枠1（文字列）



郵便枠機能は、1つのテキストフレームに、7桁すべてを挿入する場合と、上3桁+下4桁を2つのテキストフレームに挿入する場合と7桁の数字すべてを、一つ一つのテキストフレームに挿入する機能を選択することができます。

一つのテキストフレームに7桁すべてを挿入する場合には、メイン画面のフレーム名称欄にのみフレーム名を設定します。

残りの2つの方法では、

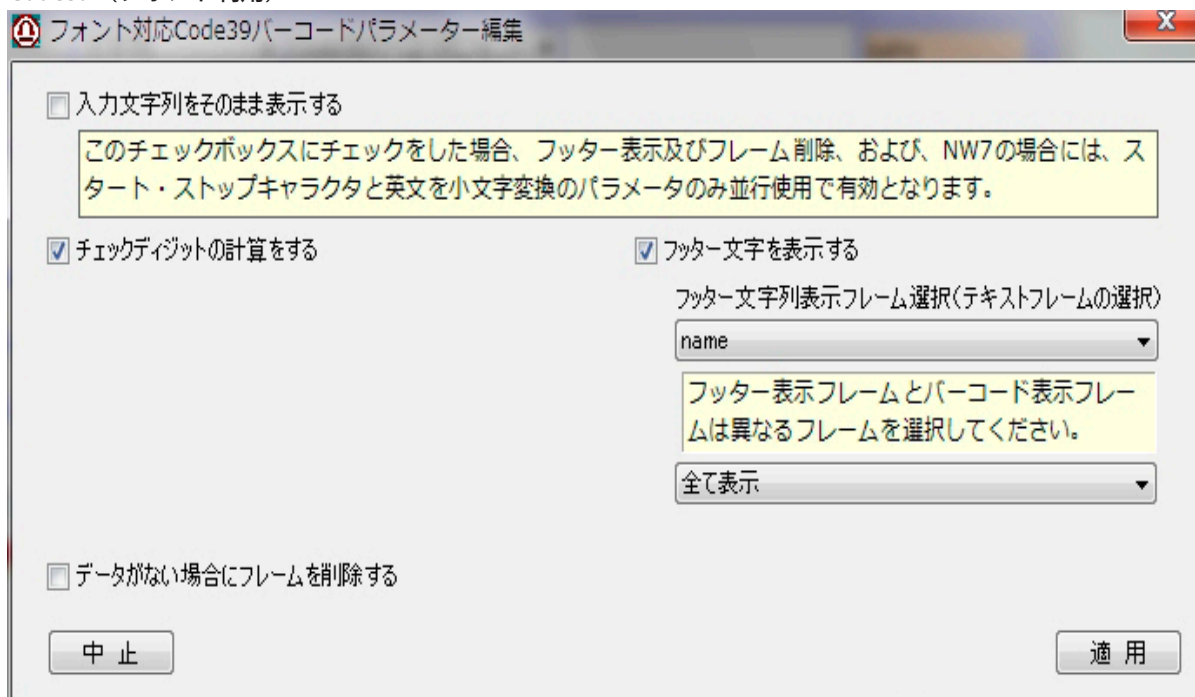
上3桁+下4桁を2つのテキストフレームに挿入する場合は、上3桁を挿入するテキストフレームをメイン画面で、下4桁を挿入するテキストフレームを、このパラメータ設定ダイアログで設定します。

7桁の数字すべてを、個別のテキストフレームに挿入する場合

先頭の1桁を挿入するテキストフレームをメイン画面で、残りの6桁を挿入するテキストフレームを、このパラメータ設定ダイアログで設定します。この6個のテキストフレームの名称を、「下4桁（6桁）挿入テキストフレーム名」のテキストボックスに、半角スラッシュ「/」で区切って設定します。

なお、「全角算用数字に統一する」にチェックがある場合、7桁の数字は、すべて全角の算用数字に置き換えられます。

⑨ Code39（フォント利用）



《 Code39 および NW7 フォント処理共通事項》

バーコード処理のうち、Code39 および NW7 に関しまして、画像処理以外に、バーコードフォントを使用した処理が可能です（ITF バーコードはフォント対応のみ）。

Code39 および NW7 バーコードのフォントでの処理を行うには、画像での処理と異なり、テキストフレームにて挿入するフレームを作成していただく必要があります。

また、バーコードのほかに、バーコード文字列も合わせて印字するためには、バーコード文字列印字用のテキストフレームを別個に作成しておく必要があります。

ここでは、Code39 および NW7 共通事項に関して、記述します。

①フォントのインストール

バーコードフォントは、Code39,NW7 とともに、正しくインストールされている必要があります。

すでに、これらのフォントをご使用の場合、ご使用フォントがお使いいただけるかは、予めテストの上確認してください。

SpicyLibra では、無償再配布を許可しております、Code39.ttf,NW7.ttf フォントを添付していますので、解凍の上、コンピュータにインストールしてください。

本フォントをご使用になる場合には、添付の「お読みください」を必ずご覧の上、フォント提供者の使用条件を確認してください）

（C:Windows\Fonts フォルダにインストールします。ご不明の場合には、コンピュータ付属の説明書をご覧ください。）

② テンプレートファイルでのフレームの作成

② -1 テキストフレームの作成

●バーコード印字テキストフレーム

●バーコード文字列印字テキストフレーム（必要がある場合）

のテキストフレームを、印字する大きさに合わせて作成します。

本処理を行う場合、あふれ処理は行いませんので、十分な大きさを取ってください。

② -2 テキストフレームの属性設定

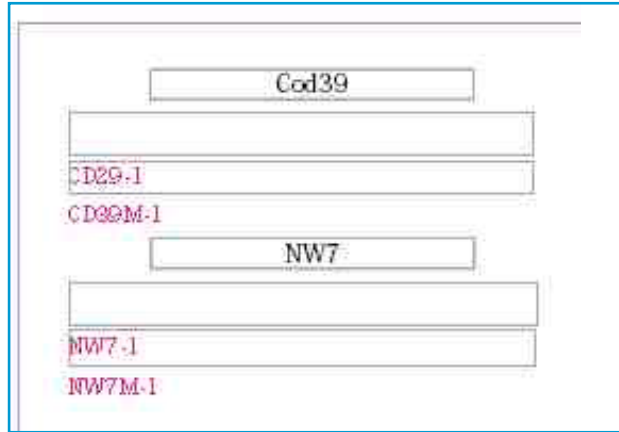
●バーコード印字テキストフレームでは、必ず、バーコードフォントを設定してください。

●バーコード文字列印字テキストフレームでは、適当なフォントを設定します。

フォント選択を確認しましたら、フォントの大きさなどの文字属性設定や段落設定、フレームの属性設定等を実行し、適切なテキストフレームの設定を行います。

② -3 フレーム名称の設定

バーコード以外のフレームの設定が終了後、従来どおりにフレーム名称をつけます。



ここまでで、Code39 と NW7 の共通事項の説明を終わります。

次からは、それぞれ個別に、バーコード用のフレームとバーコードデータとのマッピングの説明を行います。注意しないといけないのは、マッピングを行うのは、バーコードを印字するテキストフレームとバーコードデータとの間で行い、バーコード文字列印字用テキストフレームではないということです。

[Code39 パラメータ設定ダイアログ]

1) 入力文字列をそのまま表示する

バーコード、文字列フレームに、データ加工をしないで挿入する（テキストフレームへの単純挿入）。

2) チェックサムを計算する

チェックサム計算をし、データ末尾に付加します。

ただし、「入力文字列をそのまま表示する」にチェックがある場合、指定は無効となります。

3) フッター文字を表示する

バーコード文字列を印字します。

バーコード文字列を挿入するフレーム名を右側のコンボボックスより選択します。

また、フレーム選択コンボボックスの下のコンボボックスで、文字列表示のオプション設定を行います。
選択可能な表示オプション（「入力文字列をそのまま表示する」の場合も有効）

- ▼全て表示→スタートコード、ストップコード、チェックデジットを含めて印字。
- ▼スタート・ストップ文字とチェックデジットを表示しない→実データのみを印字。
- ▼スタート・ストップ文字を表示しない→チェックデジットと実データを印字。
- ▼チェックデジットを表示しない→スタートコード、ストップコード、実データを印字。

ここで、チェックデジットは、ストップコードの前の文字であると仮定しますので、チェックデジットのないデータのない場合あるいは作成しない場合には、注意してください。

4) データがない場合にフレームを削除する

入力データがない場合、テキストフレームを削除します。

文字列印字用のフレームが設定してある場合、このフレームの削除します。

※ Code39 では、スタートストップコードとして、*がなければなりません。「* 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 *」の样になっている必要がありますので、データにスタート・ストップコードがない場合には、プログラムにより自動的に付加されます。

⑩ NW7（フォント利用）

共通事項は、Code39（フォント）項目を参照。

設定は、Code39 の場合と同じですが、フッター表示方法とスタートストップキャラクターの扱い方及びチェックデジットの計算方式の選択が異なります。

●フッター文字列表示オプション設定では、

▼全て表示

▼チェックデジットを表示しない

のどちらかの選択となります。

●また、SpicyLibra Ver5 までは、スタート・ストップキャラクターがないデータの場合には、データエラーとしておりましたが、Ver5.5 より、スタート・ストップキャラクターがない場合に、データを付加することを可能としました。

挿入する「スタート・ストップキャラクターを付加」チェックボックスをチェックし、A～D または a～d までの英字で、挿入するスタート・ストップキャラクターを、それぞれのコンボボックスより選択します。小文字を付加する場合には、「小文字に変換して挿入」チェックボックスをチェックします。

●チェックデジットの計算方式

NW7 の場合、チェックデジットの計算方式が複数存在します。SpicyLibra では、

- ①モジュラス 16
- ②モジュラス 10 ウェイト 2~1 分割（ルーンズ）
- ③モジュラス 10 ウェイト 2~1 一括
- ④モジュラス 10 ウェイト 3~1
- ⑤加重モジュラス 11
- ⑥加重モジュラス 11（循環）
- ⑦モジュラス 11 ウェイト 2~7
- ⑧モジュラス 11 ウェイト 2~7(循環)
- ⑨モジュラス 11 ウェイト 1~0
- ⑩モジュラス 11 ウェイト 2~0
- ⑪セブンチェック（7DR）
- ⑫セブンチェック（7DSR）
- ⑬ナインチェック（9DR）
- ⑭ナインチェック（9DSR）

の計算方式をサポートします。

加重モジュラス 11 の⑤と加重モジュラス 11(循環)⑥の違いは、加重モジュラス 11 ⑤が **12 桁固定**のデータ長なのに対し、12 桁を超えた場合にも各桁に乗する数字列 (6,3,5,9,10,7,8,4,5,3,6,2 等) を繰り返し適用することで、データ長を延長することを可能にしたのが加重モジュラス 11 (循環) ⑥ということになります。

また、モジュラス 11 ウェイト 2~7 ⑦とモジュラス 11 ウェイト 2~7(循環)⑧の違いも、モジュラス 11 ウェイト 2~7 ⑦が **6 桁固定**のデータ長に対して、6 桁を超えるデータに対しても「2~7」の乗数を繰り返し適用させることでデータ長を延長することを可能にしたのがモジュラス 11 ウェイト 2~7(循環)⑧ということになります。

●モジュラス 11 欠番処理

モジュラス 11 は、データ各桁を指定の計算方式で計算した結果を 11 のモジュロ (11 で割った余り) にとり、その値を 11 から引いた値をチェックデジットとして使用します。




ところが、チェックデジットは 1 桁のため、単純に計算しただけでは、10、11 という 2 桁の数値が結果として産出されることがあり得ます。

この 2 桁になってしまったチェックデジットの 1 桁への丸めの方法として、両方とも「0」にする方式と、2 桁目の「1」を無視し、下 1 桁の値「0」または「1」を採用するという方式があります。

ここでは、どちらの方式を適用するのかを設定します。

次ページは、SpicyLibra で処理した結果のサンプルです。

左側は、バーコード印字に通常のフォントを指定したもの、右側は、正しく、バーコードフォントを指定したものです。

<div>Cod39</div> <div>*25789765987U*</div> <div>25789765987</div>	<div>Cod39</div> <div></div> <div>25789765987</div>
<div>NW7</div> <div>A12348954D</div> <div>A12348954D</div>	<div>NW7</div> <div></div> <div>A12348954D</div>
<div>Cod39</div> <div>*33765993433C*</div> <div>33765993433</div>	<div>Cod39</div> <div></div> <div>33765993433</div>
<div>NW7</div> <div>A34789023D</div> <div>A34789023D</div>	<div>NW7</div> <div></div> <div>A34789023D</div>
<div>Cod39</div> <div>*78957345232C*</div> <div>78957345232</div>	<div>Cod39</div> <div></div> <div>78957345232</div>
<div>NW7</div> <div>A96548239D</div> <div>A96548239D</div>	<div>NW7</div> <div></div> <div>A96548239D</div>

⑪ カスタム人名字取り

カスタム人名字取り

組方向 **横組** 名項目番号 **2** (「名」が「姓」と別項目としてデータ入力されている場合の項目番号)

読み項目設定

姓よみ項目番号 **3**

名よみ項目番号 **4**

字取数 **7** (ただし、カスタム人名字取りテーブルに設定した字取数に限りです)

字取数をオーバーした人名の処理方法

姓と名の間に全角スペースを挿入したのち、全体をテキストフレームに収まるように長(平)体をかける。

姓、名、どちらか一方のみの人名の処理方法

● ひらがな、カタカナ、英数字のみの人名の場合 (異体字、ルビは設定できません)

何もしない(通常の文字列挿入と同じ)

● 漢字混じりの人名の場合

何もしない(通常の文字列挿入と同じ)

ルビを付加する場合のルビ設定

モノルビ設定

ルビ位置 **上(右)**

ルビ文字揃 **1ルビ文字アキ**

グループルビ設定

ルビ位置 **上(右)**

ルビ文字揃 **1ルビ文字アキ**

文字間スペース調整方法

字空き(後)でスペースを調整

私の領域文字フォント変換

☒ UNICODE私の領域(U+E000 ~U+F8FF)のフォントを変更する。

フォントリスト取得

基底フォント

① **HG正楷書体-PRO 標準**

② **HG正楷書体-PRO 標準**

私的領域文字適用フォント

小澤フォント21 Regular

小澤フォント21 Regular

中止 適用

姓と名を別個の項目として入力する場合、姓及び名の読みを個別の項目として入力することができます。この場合、読み項目には、半角パーレンも不要で読みのみを入力してください。
(ただし、姓または名のデータと同じ項目に入力することもできます。この場合の入力定型は下の背景色の青いテキストボックスを参照してください。)
姓名よみ項目番号の数値アップダウンコントロールの値が「0」以上の場合には、その項目データを読みデータとして扱い、グループルビとして組版します。
また、よみ項目を別項目として入力した場合、よみを対応する姓名文字ごとに対応するように半角「/」で区切ることで、各文字ごとのモノルビとして、よみを処理します。

●モノルビのデータ定型
親文字1文字ごとにルビを振る場合に、親文字1文字ごとにルビ文字をデータ中に挿入します。
親文字(ルビ文字)
のように、ルビを振る1文字ごとに、半角パーレンで囲んで指示します。
(例) 山(やま)田(だ)一(いち)郎(ろう)

●グループルビのデータ定型
姓または名の読みを個別の入力項目として設定した場合には、下記の定型では入力せず、各々の読み項目に読みを入力してください(この場合、パーレンも不要です)。
複数文字で構成される親文字にルビを振る場合に、親文字列全体に対してルビ文字をデータ中に挿入します。
親文字列(ルビ文字)
のように、ルビを振る文字列ごとに、半角パーレンで囲んで指示します。入りの半角パーレンの直後には、グループルビであることを示す半角のgを挿入します。
(例) 山田(gやまだ) 一郎(gいちろう)

※【注意】
姓または名という単位で人名字取りを考えたので、姓または名という文字列に対して、モノルビとグループルビの混在使用はできません。
ただし、姓をグループルビ、名をモノルビでという使用方法は可能です。

カスタム字取りテーブルに設定された値を使用して姓と名の文字送りを制御し、ユーザーの自由な字割を行います。

基本的な入力方法は、ルビ文字と親文字を同じ項目で入力する形となります。

● 姓名同一項目入力の場合

姓と名の間に全角スペースを挿入して入力します。

「山田 太郎」

この時、ルビを振るには次の方法があります。

(以下、g はグループルビを表し、半角パーレンはルビ文字を表しますが、g、(、) の文字はすべて半角文字とします)

① モノルビ

山(やま)田(だ) 太(た)郎(ろう)

② グループルビ

山田(gやまだ) 太郎(gたろう)

③ 姓と名をグループルビとモノルビのそれぞれで指定

山田(gやまだ) 太(た)郎(ろう)

あるいは

山(やま)田(だ) 太郎(g たらう)

ただし、山(やま)田(g だ)のような混在使用はできません。

● 姓名別項目入力の場合

▲ 姓名のよみを同一項目にて指定

姓(名)の項目中で以下のように入力。

① モノルビ

山(やま)田(だ)

② グループルビ

山田(g やまだ)

▲ 姓名のよみを別項目にて指定

姓(名)の項目と姓(名)のよみ項目で次のように入力。

④ モノルビ

姓(名)の項目：山田

姓(名)のよみ項目：やま / だ

⑤ グループルビ

姓(名)の項目：山田

姓(名)のよみ項目：やまだ

以上で入力形式は決まりましたが、「姓名同一項目入力」を行うかなどはパラメータで設定することになります。

1) 組方向

横組みか縦組みか選択します。

2) 字取数

5字取～9字取でカスタム字取りテーブルに値が設定してある字取数を設定。

3) 姓と名の別項目入力

「名項目番号」を0以外に設定することで、姓はマッピング対象データ項目で、名はこの「名項目番号」という「姓名別項目データ入力」を行うことになります。

合わせて、「姓よみ項目」と「名よみ項目」を0以外に設定し、よみデータも別項目入力とすることができます。この場合、上記入力方法の④の形となります。

4) 字取オーバー時処理方法

「姓と名の間に全角スペースを挿入したのち、全体をテキストフレームに収まるように長(平)体をかける。」

「姓と名の間に全角スペースを挿入せず、全体をテキストフレームに収まるように長(平)体をかける。」

のどちらかを選択します。

5) 姓名一方のデータしかなく、そのデータが英数字のみの場合

- ・何もしない(通常の文字列挿入と同じ)
- ・均等割りにする
- ・左(頭)揃えにする
- ・右(尻)揃えにする
- ・センター揃えにする

から処理を選択します。

6) 姓名一方のデータしかなく、そのデータが漢字混じりの場合

- ・何もしない(通常の文字列挿入と同じ)
- ・不足する姓または名に全角スペースを充当し字取りを行う(ただし、文字数がオーバーしている場合を除く)
- ・均等割りにする

- ・左（頭）揃えにする
- ・右（尻）揃えにする
- ・センター揃えにする

から処理を選択します。

7) ルビ位置

上（右）か下（左）のどちらかを選択します。

8) ルビ揃え

- ・1 ルビ文字アキ
- ・中付き
- ・均等アキ
- ・両端揃え
- ・1-2-1(JIS) 揃え
- ・肩付き
- ・右 / 下揃え

から処理を選択します。

9) 字取文字空き調整方法

「字空き（後）でスペースを調整」あるいは「字送りでスペースを調整」のどちらかを選択します。

10) 私用領域文字フォント変更

UNICODE 私用領域 (U+E000 ～ U+F8FF) の文字の適用フォントを変更します。

変更のチェックボックスにチェックを入れ、適用するフォントを設定することで、データ中にフォント切り替えの指定がなくても、フォント設定を変更します。

この領域は、いわゆる外字フォントのエリアに該当し、レガシーな外字をリンク形式の ttf フォントとして作成してある場合に、InDesign では、リンク形式のフォントは使用できないため、外字フォントをリンク形式ではない 1 フォントとして作成し使用することになります。

したがって、データ中に、外字文字の出現に合わせて、フォント切り替えの操作をする必要があり、外字の出現頻度の高い人名の処理では、外字フォントを使用するうえで障害となります。

本機能を使用することで、データには手を加えることなく、外字文字のフォント切り替えを行うことが可能となります。

設定方法は、まず、InDesign が使用できるアプリケーションフォントリストを「フォントリストの取得」ボタンをクリックし取得します（この操作は、一度取得しておけば、新規にフォントを登録したり削除したりしない限り、実行する必要はありません）。

次に、上記操作でフォント指定のコンボボックスが選択できるようになりますので、

「基底フォント」にて、当該人名処理を行っているテキストフレームに適用されているフォントを選択します。選択した結果は、直下のテキストフレームに表示されます。

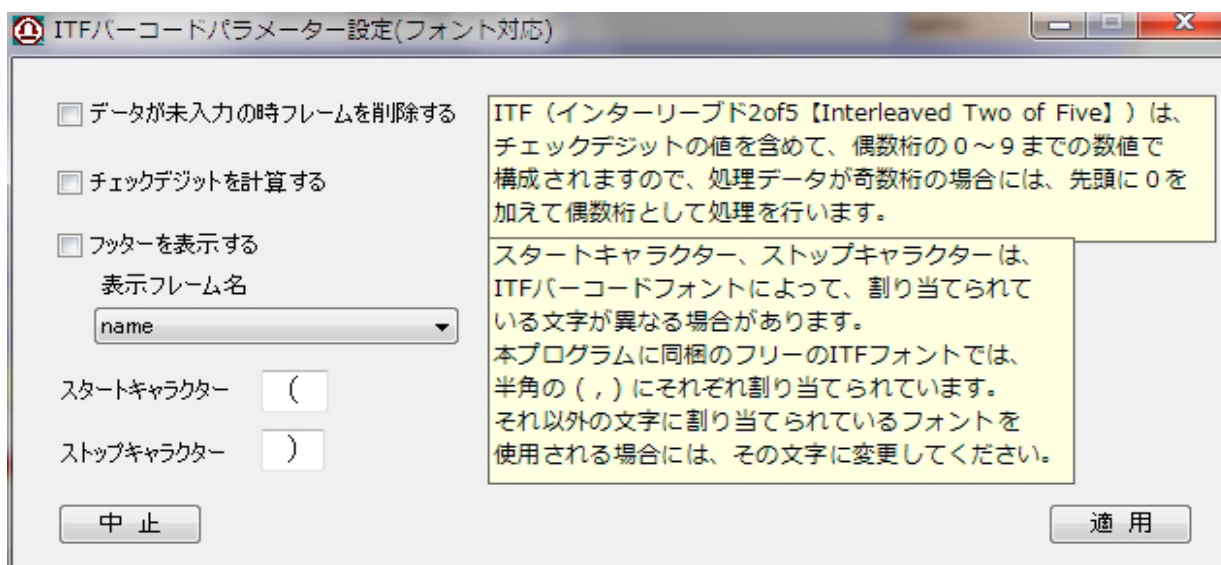
その後、同じ行の「私用領域文字適用フォント」にて、使用する外字が登録されているフォントを選択します。

基底フォント①が適用されてる使用領域文字には、使用領域適用フォント①が適用され、基底フォント②が適用されてる使用領域文字には、使用領域適用フォント②が適用されるということになります。同時に、2 種類の異なった基底フォントに対してフォント変更処理が可能ということになります。

※字送りと字空きでの処理では、ルビを振る場合に顕著に違いが現れ、字送りでは字送りであいたスペースも親文字として認識されてしまいます。

一方、字空きでの方法では、プログラムでは細かな値で制御できますが、InDesign の画面では、その細かな値が制御できない場合があります。

⑫ ITF バーコード（フォント）



ITF バーコードは、フォントのみの対応となっておりますので、使用する前に、必ず、ITF 用のフォントがインストールされていることをご確認ください。

なお、SpicyLibra においては、同梱しております無償の ITF フォントである「ITF.otf」を利用して処理を行うようにしております。

これ以外の ITF フォントをご利用になる場合には、必ず、OTF リガチャー機能によって数字組み合わせをサポートしている OTF フォントをご利用ください。

ITF バーコードで使用できるキャラクターは、「0～9」までの数値のみとなります。

1) データが未入力の時にフレームを削除する。

本チェックボックスにチェックがあり、処理用のデータが空の場合には、設定された挿入用フレームを削除します。

2) チェックデジットを計算する

本チェックボックスにチェックがない場合、入力データの最終桁の数値をチェックデジットとして扱い、再計算チェックは行いません。

チェック簿KK集にチェックがある場合には、データを計算して末尾にチェックデジットを付加します。

3) フッターを表示する

「表示フレーム名」コンボボックスをクリックしをクリックし、フッター文字列を挿入するフレームを選択します。

4) スタートキャラクター

バーコードの開始を表すバーを割り当てている文字キャラクターを設定します。

デフォルトでは、添付の ITF.otf フォントに割り当てられています半角パーレン「(」を設定します。

5) ストップキャラクター

バーコードの終了を表すバーを割り当てている文字キャラクターを設定します。

デフォルトでは、添付の ITF.otf フォントに割り当てられています半角パーレン「)」を設定します。

次ページは、ITF.otf フォントを使用した出力例です。

※ ITF コードは数値 2 桁で 1 つのバーコードシンボルを表示しますので、チェックデジットの桁を含めて、偶数桁である必要があります。従いまして、データが全体で奇数桁の場合には、データ先頭に「0」を付加し、偶数桁に整形しますので、注意してください。

ITF(Interleaved 2 of 5)

偶数データ



012348

前 0・CD 追加

奇数データ

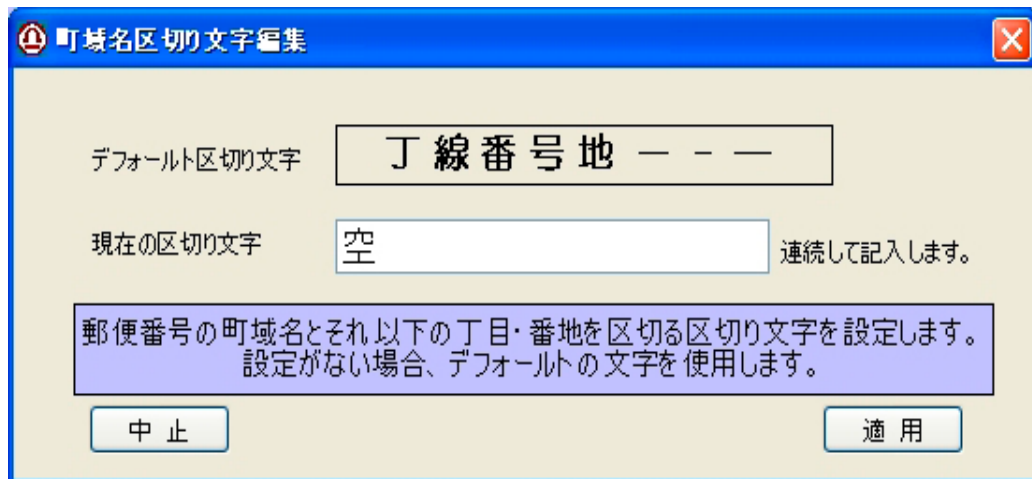


123457

CD 付加

⑬カスタマーバーコード

1) 町域名区切り



町域名区切り文字編集

デフォルト区切り文字

現在の区切り文字 連続して記入します。

郵便番号の町域名とそれ以下の丁目・番地を区切る区切り文字を設定します。
設定がない場合、デフォルトの文字を使用します。

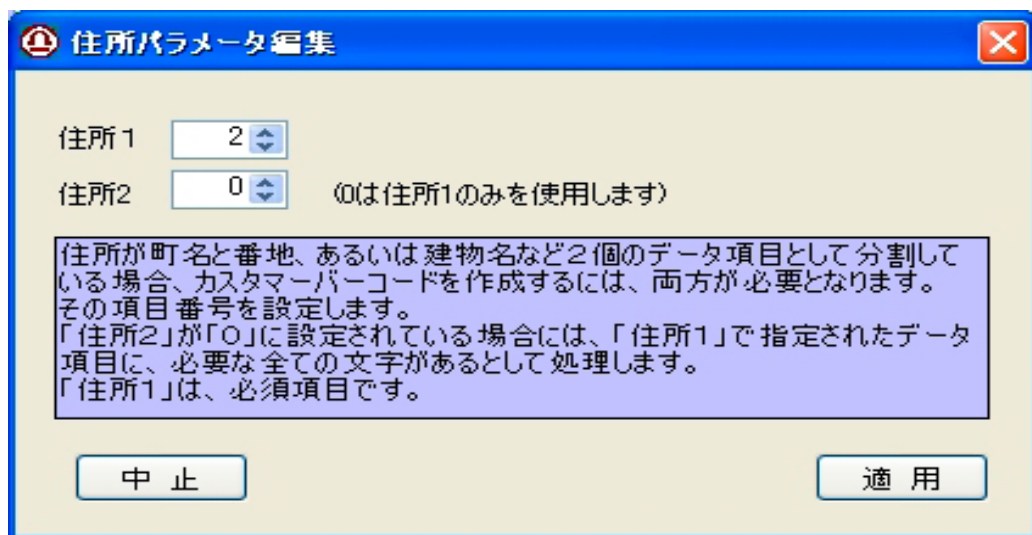
町域名と丁目番地以降を切り分けるために、丁目番地の最初の数字の後ろに来る文字を指定します。デフォルトでは「丁」「線」「番」「号」「地」が設定されています。パラメータに何も設定しなければ、このデフォルト値で区切ります。この区切り文字直前の数字から丁目番地データとなります。

「〇〇 15 の 5 - 66-001」のような形のデータの場合には、この町域名設定画面では「の -」のように対象文字を連続して記入します。ただし、メイン画面上のテキストボックスにて直接設定する場合には、「の / - /」のように区切りとしたい文字を「/ (半角スラッシュ)」で挟みながら、パラメータとして設定します。

データが町域名を含まず、「5 丁目 3 番地」のように、区切り検索が不要な場合は、パラメータに「n」と指定しておきます。

なお、カスタマーバーコードとして使用するデータは、郵便番号 7 桁 + 丁目番地データ 13 桁の 20 桁が標準のため、特殊な場合を除いて、丁目番地データが 13 桁を超える場合には、超えた部分は使用されません。

2) 住所項目



住所パラメータ編集

住所1

住所2 (0は住所1のみを使用します)

住所が町名と番地、あるいは建物名など2個のデータ項目として分割している場合、カスタマーバーコードを作成するには、両方が必要となります。
その項目番号を設定します。
「住所2」が「0」に設定されている場合には、「住所1」で指定されたデータ項目に、必要な全ての文字があるとして処理します。
「住所1」は、必須項目です。

バーコード発生に必要な住所項目が、「番地住所（例：〇〇市〇〇町 1 - 2）」と「建物住所（例：〇〇ハイッ 102）」の2つに分かれているような場合、1つ目の項目番号（半角数字）と2つ目の項目番号を「, (半角カンマ)」で区切って入力します。

例：6,7（6項目と7項目のデータを合わせた形でバーコードが作成されます。）

⑭ 番号発生

自動番号発生パラメーター編集

開始番号 (デフォルトは 1)

増加数(フレーム毎) (デフォルトは 1)

増加数(ページ毎) (デフォルトは 0)

最小桁数(前0ありのみ有効) (デフォルトは 4)

番号の算出計算式は、次のとおり。

開始番号 + 頁増加数 × (頁数 - 1) + フレーム増加数 × (フレーム枝番号 - 1)

中止 適用

開始番号：開始する番号（デフォルトは 1）

増 加 数：1 フレームごとに増加する数（デフォルトは 1）

頁増加数：頁が変わるごとに増加する数（デフォルトは 0）

最小桁数：印字する最小桁数（デフォルトは 4）

1. 頁増加数を指定した場合、頁が変わるごとに、
「開始番号 + 頁増加数 × (頁数 - 1)」の数から開始します。

たとえば、1001,1,1000,5 と指定すれば、

1 ページ目 -----01001, 01002, 01003,

2 ページ目 -----02001, 02002, 02003,

となります。

ただし、2 ページ目に当該フレームがない場合に、

3 ページ目 -----02001, 02002, 02003,

ではなく、

3 ページ目 -----03001, 03002, 03003,

となりますので注意してください。

2. ページ内での番号の挿入順番は、フレームの枝番順となります。
3. 最小桁数は、前ゼロありの場合のみ有効です。

⑮文字差し替え

文字差し替えパラメーター編集

☐ 空段落(行)の削除

アンダーフローの処理方法 アンダーフロー処理をしない。

アセットのベースラインシフト 値

テキストフレームにオーバーセットがあった場合、当該フレームであふれ処理を行わず、次ページのフレームに追い出す。

☐ 「2頁連続(1レコードを2ページに配置)」ページ処理で、文字列挿入の場合のみ有効。

中止 適用

1) 空段落(行) 削除

削除しない、削除する
のどちらかを選択。

2) アンダーフロー処理

- ・アンダーフロー処理をしない。
- ・フレームを内容に合わせて縮める。(1段組のみ)
- ・フレームに対して上(右)揃え。
- ・ " 中心揃え。
- ・ " 下(左)揃え。
- ・ " 均等揃え。

から選択。

3) ベースラインシフト

交換するものがアセットの場合のベースラインシフト値

4) テキスト追い出し

追い込み、追い出し
のどちらかを選択。

空段落(行) 削除とは、たとえば、半角数字の「1」を、処理区分で「% 1 %」の指定をした項目のパラメータテキストボックスに設定することにより連続する改行を削除します。

例えば、テキストフレーム中に、

% 1 %
% 2 %
% 3 %
% 4 %
% 5 %

等と入力しておき、

それぞれのプレースホルダーを実際のデータで置き換える場合、
たとえば、% 2 %、% 3 %、% 4 %の部分のデータが空のレコードだったとすると、

東京都品川区南大井 6-20-9

大木 太郎

のように、空白行が生じてしまいます。

この空白行を削除するために、このパラメータに「1」を設定すると、

東京都品川区南大井 6-20-9

大木 太郎

のように、空段落（行）を削除し空白行をなくします。

アンダーフロー処理とは、プレースホルダーに文字列を挿入した時、フレームより、行数が少なく、フレームの天地にスペースが出来てしまったときの処理方法です。

ベースラインシフトは、置換するものが、アセットの場合に、置換したアセットオブジェクトのベースラインシフトの値です。

テキスト追い出しとは、見開きページ処理（1レコードを2ページに亘って配置する）の場合に、テキストフレームがオーバーセットした時に、そのテキストフレームに追い込んでオーバーセットを解消するのではなく、次ページに設定してある同一ラベル名のテキストフレームに追い出してオーバーセットを解消するものです。

ただし、次ページに追い出してもオーバーセットが解消されない場合、2つのテキストフレームを通して、追い込み処理を行います（あふれ処理の設定がしてある場合）。

<<パステキストの場合>>

パステキスト差し替えパラメーター編集 (% 1 のみ)

☐ 差し替え文字列がない時に、オブジェクトを削除する

なし データにファイル拡張子が設定されていない場合に付加する拡張子

画像のフィット方法 **画像挿入なし**

PDF、AI画像ファイル設定

画像の取り込み方法 **境界線ボックス**

PDFファイルの貼りこみページ **1**

PDFファイルのページ増加ステップ値 **0**

☐ 背景を透明にする

文字列の違いによる改頁処理を行う場合のマスター名記述項目番号 **0**

マスターの変更を伴わない改頁処理では、0にしておいてください。
比較する文字列は、画像を同時に貼り込む場合、画像ファイル名を含めた文字列なので注意してください。

項目結合

後ろに結合する項目番号: **0**

2つの項目の間に挿入する文字と特殊文字:
なし

☐ 文字列をSpicyTagとして使用

パステキストの挿入・差し替えと同時に、テキストフレーム以外のオブジェクトに画像を貼り込むことができます。
入力データ項目に
画像ファイル名 | 挿入パステキスト
のように、半角「|」を区切りとして、同時に設定しておきます。

中止 **適用**

1) 差し替え文字列がないときに、オブジェクトを削除する

削除しない、削除する
のどちらかを選択。

2) 画像のフィット方法

- ・画像挿入なし
- ・比例縮小
- ・センター
- ・フレームにフィット
- ・画像にフィット
- ・比例縮小後センター
- ・フレームに均等
- ・フレームに均等後センター

のいずれかを選択。

3) 画像の取り込み方法

PDFまたはAI画像ファイルを画像フレームに貼り込む時のトリミング方法を設定します。

- ・境界線ボックス
- ・アート

- ・トリミング
- ・トンボ
- ・裁ち落とし
- ・メディア

のいずれかを選択。

境界線ボックスを選択した場合、PDF 貼り込みに際し、レイヤーの選択をメイン画面の設定にて行います。

4) 背景を透明にする

PDF 貼り込みの場合、
透明にしない、透明にする
のいずれかを選択。

5)PDF ファイルの貼り込み頁（開始頁）

PDF ファイルを貼り込む時の貼り込み開始するページを設定します。
次の PDF ステップページが設定されていない場合、常に同じページが貼り込まれることになります。

6)PDF ファイルのページ増加ステップ数

PDF ファイルを貼り込む時、レコードごとに増加させるページ数を設定します。

7) データにファイル拡張子が設定されていない場合に付加する拡張子

画像ファイルを貼り込む時、処理データに拡張子が設定されていない場合に付加するファイル拡張子を設定します。

「なし、ai、jpg、gif、eps、pict、wmf、pcx、pdf、png、sct、tif、dcs、psd、bmp、dxf、indd」
のいずれかを選択。

⑩ QRイメージ

標準の QR コード及び MicroQR コードを画像生成します。

1) 誤り訂正レベル: 1 ～ 4 : 読み取り時の誤読の訂正レベル (デフォルトは 2 の M、MicroQR は 1 ～ 3)
1 -> L (7%)、2 -> M (15%)、3 -> Q (25%)、4 -> H (30%)

2) バージョン番号: MicroQR は 1 ～ 4。
1 ～ 40 : バージョン番号 (デフォルトは 0 の自動)

~~3) マスキング番号: MicroQR では無効。
0 ～ 7 : マスクの番号 (デフォルトは -1 の自動)~~

4) スケール:
1 ～ 15 : セルの拡大率 (デフォルトは 4)

~~5) 描画色透明度: MicroQR では無効。
0 ～ 255 : 描画色の透明度 (デフォルトは 255 のオpaque)~~

~~6) 背景色透明度: MicroQR では無効。
0 ～ 255 : 背景色の透明度 (デフォルトは 255 のオpaque)~~

~~7) 白黒2値化する: MicroQR では無効。
チェックの場合、画像を2値画像に変換して埋め込む (デフォルトは多値)~~

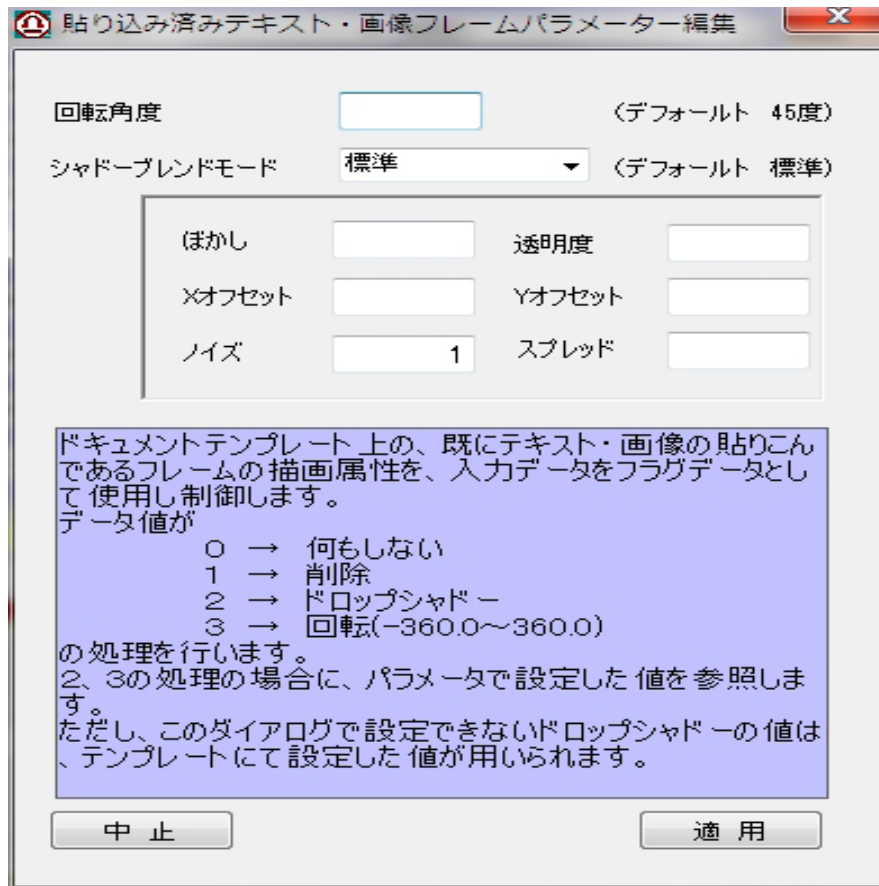
8) データがない場合フレーム削除:
チェックの場合フレーム削除: デフォルトは削除しない

9) MicroQR コードを作成する
標準 QR コードではなく、MicroQR コードを作成します。

10) MicroQR コードの英数モードで、小文字を大文字に変換する。
MicroQR コードの英数モードでは英文大文字のみが対象となるためデータの英文小文字を大文字に変換。

11) 画像フィット方法
QR コード画像のフレームフィット方法を選択します。
※ SpicyLibra2020 より QR コード画像の四方の空白はなくなりましたのでフレームサイズに注意。
※ MicroQR コードは漢字モードで9文字と収容文字数が少ないので注意してください。また、バイナリーデータは使用できません。

⑦配置済みフレーム制御



テキストの場合は、「配置済みテキスト表示制御」をデータ種「テキストファイル」から、画像の場合には、「配置済み画像表示制御」を「画像ファイル」にしてから、処理区分でそれぞれを選択します。

対象項目データの値で処理を決定しますが、データの数値（半角）により、

- 0：何もしない。
- 1：フレーム削除。
- 2：ドロップシャドウ（ただし、値はブレンドモード以外 InDesign の初期値となります）。
- 3：回転。
- 4以上：何もしない。

となります。

1) 回転角度（フレームセンターを中心）：-360.0 ～ 360.0

2) シャドウブレンドモード：

「標準、カラー、覆い焼きカラー、焼き込みカラー、比較（暗）、差の絶対値、除外、ハードライト、色相、比較（明）、輝度、乗算、オーバーレイ、彩度、スクリーン、ソフトライト」から選択。

オプションの設定を行います。

ぼかし	： 0-144(Pt)
透明度	： 0-100%
X オフセット	： -1000 ～ 1000(Pt)
Y オフセット	： -1000 ～ 1000(Pt)
ノイズ	： 0-100%
スプレッド	： 0-100%

⑱テキストファイル

グリッド書式保持項目番号 : 処理区分の書式選択とは関係なく、別データで書式の選択を変えたい場合に設定します。デフォルトは 0 で処理区分に従います。1 ～ 100 までの項目番号。
データ中の数字をフラグ数値として扱います。
0 ～ 4 までの数字が、処理区分の 0 番～ 4 番までに対応します。

グリッド適用時の揃え : グリッドフォーマット適用時のグリッドに対する行のそろえ方。
「仮想ボディのセンター、仮想ボディの上、仮想ボディの下、平均字面の上、平均字面の下、欧文ベースライン」から選択。

アンダーフロー制御 : アンダーフローの場合の処理を選択。

- ・アンダーフロー処理をしない。
- ・フレームを内容に合わせて縮める。
- ・フレームに対し 上 (右) 揃え。
- ・ " 中心揃え。
- ・ " 下 (左) 揃え。
- ・ " 均等揃え。
- ・フレームを内容に合わせて縮める。データがない場合フレーム削除。
- ・フレームに対し 上 (右) 揃え。ただし、データがない場合フレーム削除。
- ・ " 中心揃え。ただし、データがない場合フレーム削除。
- ・ " 下 (左) 揃え。ただし、データがない場合フレーム削除。
- ・ " 均等揃え。ただし、データがない場合フレーム削除。

段落スタイル適用 : 段落スタイルの適用
「適用しない、適用する」のいずれかを選択。

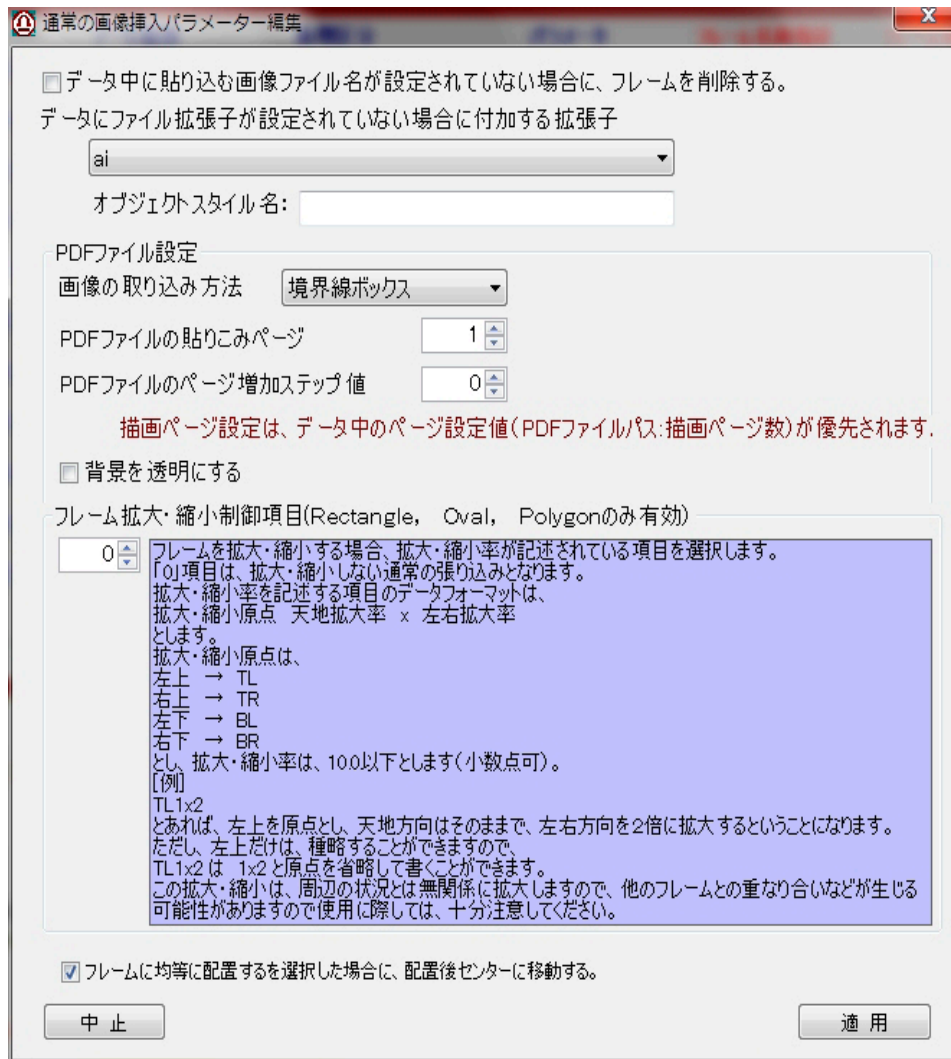
段落スタイルテーブル番号 : 段落スタイルを適用する場合の段落スタイルテーブル番号 (0 ～ 9)

Spicy タグデータ : データを Spicy タグで記述 (他の設定は無効)。

テキスト追い出し : あふれ時に次ページへ追い出す (見開きのみ)。

空段落 (行) 削除 : 空行を削除します。

⑨画像ファイル（単純挿入）



1) データ中に貼り込むファイル名が設定されていない場合にフレームを削除する。

削除するには、チェックボックスをチェックします。

2) データにファイル拡張子が設定されていない場合に付加する拡張子

画像ファイルを貼り込む時、処理データに拡張子が設定されていない場合に付加するファイル拡張子を設定します。

・「なし」は拡張子を付けません。

・「ai, jpg, gif, eps, pict, wmf, pcx, pdf, png, sct, tif, dcs, psd, bmp, dxf, indd」は、それぞれの拡張子を付加します。

・「テキストとして挿入（次のオブジェクトスタイルを適用）」を選択すると、拡張子がないデータは、**代替テキスト**として、次の「オブジェクトスタイル名：」で設定されたオブジェクトスタイルを対象フレームに適用し、テキストとしてフレームに挿入します。

これは、画像を貼りこむ場合、処理時点では、画像原稿入稿が間に合わなかったり、商品の区分の区切りなどで、画像ボックスに何らかのテキストを、画像の代わりに挿入したい場合がよくあるということに対応するための機能です。通常は、画像を貼りこむボックスなので、埋草用の画像やタイトル用の画像を用意して、本来の画像の代わりに貼りこむことが多いと思われますが、代わりの画像を貼りこむのではなく、対象となる画像ボックスの属性をテキストボックスに変更し、テキストを挿入する、しかも、パラメータで画像ボックスのオブジェクトスタイルを設定することで、専用に用意する代替画像に劣らない表現豊かなテキスト処理が可能となります。

ただし、この場合には、通常の画像の拡張子は省略できません。

3) 画像取り込み方法

PDF または AI 画像ファイルを画像フレームに貼り込む時のトリミング方法を設定します。

「境界線ボックス、アート、トリミング、トンボ、裁ち落とし、メディア」から選択します。

なお、PDF が貼り込み対象ファイルであり、「境界線ボックス」を選択した場合、メイン画面の「PDF 貼り込み」で設定されたレイヤーの処理を行います。

また、PDF と InDesign ドキュメントでは、微妙に貼り込む際の設定が異なります。

ここで設定される画像のカッティング（クリッピング）オプションの違いや、背景の透明化などが異なっています。

(PDF の場合)		(インデザインドキュメントの場合)
バウンディング（境界線ボックス）	→	頁境界線ボックス
アート	→	印刷可能領域境界線ボックス
トリミング	→	印刷可能領域境界線ボックス
トンボ	→	印刷可能領域境界線ボックス
裁ち落とし	→	裁ち落とし境界線ボックス
メディア	→	印刷可能領域境界線ボックス

4) 背景を透明にする

PDF を貼り込む場合、背景を透明にして貼り込むときに、チェックを入れます。

5) PDF ファイルの貼り込みページ（開始ページ）

PDF ファイルを貼り込む時の貼り込み開始するページを設定します。

次の PDF ステップページが設定されていない場合、常に同じページが貼り込まれることになります。

6) PDF ファイルのページ増加ステップ数

レコードごとの増加ページ数。

※ PDF のページ指定には 2 種類の方法があります。

●パラメータで設定

パラメータで、開始番号とステップ番号を設定します。

描画する PDF 頁は、「開始番号＋ステップ番号」となります。

●データ中にて設定

上記パラメータでの設定は無効となります。

[入力データ形式（ファイル名とページ数を半角コロンで区切って指定します）]

PDF ファイル名：ページ数

描画する PDF 頁は、「ページ数」で設定したページとなります。

6) フレーム拡大縮小制御項目

条件記述項目の設定で、画像貼り込みフレームに対して、フレームサイズの拡張・縮小、回転、オブジェクトスタイルの適用の 3 種の変形を行うことができます。

条件項目に記述がない場合には、変形作業を行いません。

●拡張・縮小

画像を貼り込む画像フレーム（Rectangle, Oval, Polygon）の天地・左右のサイズを、レコード中の項目を参照して、0.1 ～ 10.0 倍まで変更します。

ただし、単純にサイズ変更をするだけですので、処理するデータレコードの並びを調整して利用する必要があります。

これは、画像を並べて利用するカタログの様に、特定の画像のフレームを大きくしたり小さくしたりしたい場合を想定した機能です。

通常は、基本コマサイズの整数倍のコマサイズを適宜配列して使用するような場面を考えたものです。

フレームのサイズ変更原点は 5 か所（左上、右上、左下、右下、真中）で、小数点を含む値で天地左右の倍率を設定します。

ここでは、その値が入力されている項目番号を指定します。

【倍率変更書式】 原点 天地倍率 x 左右倍率

[例]

TL2x3 → 左上を原点とし、天地2倍、左右3倍にフレームを拡大する。

●回転

フレームを指定した回転ポイントで回転します。

「RTL-25.3」のように、**回転を表す R**、**回転ポイント表す TL**、**回転角度を表す -25.3** といった書式で設定します。

いずれも英数字半角で記述し、どの部分も省略不可です。

回転ポイントは、フレームの回転基準となる部分を指定します。指定できるのは、TL(天左)、TC(天中)、TR(天右)、CL(中左)、CC(中中)、CR(中右)、BL(地左)、BC(地中)、BR(地右)の9つの点となります。

回転角度は、-360.0 ～ 360.0 の範囲で、-を付けると時計回り、付けずに反時計回りとなります。

※この処理で回転した場合、当該フレームを選択したときに表されるドキュメントバーに表示される基準点には反映されませんので注意してください。あくまでも、回転する場合の回転基準点です。

●オブジェクトスタイル適用

フレームにオブジェクトスタイルを適用します。

style: オブジェクトスタイル名

と記述してください。style: はすべて半角小文字の英字です。

7) フレームに均等配置するを選択した場合に、配置後センターに移動する。

画像を貼り込みで「フレームに均等配置する」を選択した場合のオプションで、さらに均等配置後にセンターに移動します。

⑨ -1 画像ファイル (JAN バーコード)

JANコードパラメーター編集

☐ データ未入力の場合、フレームを削除する (JANのみ)

画像のフィット方法 フィットなし

☒ バーコードの高さに、テンプレートのフレーム高さを使用

バーコード高さ (スケール1倍時) Pt 解像度 600dpi

スケール (書籍・定期刊行物コードは原寸のみ)

フォント OCR-B

☐ 雑誌・定期刊行物コードとして作成する。

書籍・定期刊行物コードとして作成する場合の設定

バーコードタイプ 書籍コード

プリフィックス 書籍フラグ 分類・価格 定期刊行物

書籍分類コード前置文字 C 書籍価格コード前置文字 ¥
 分類・価格間文字列 書籍価格コード後置文字 E

ISBN表記 ISBN

固定値項目データ

国・グループコード
 雑誌コード予備
 本体価格予備
 書籍併記欄項目区切
☒ ISBNコード非分割表示

プリフィックス「書籍フラグ」及び固定値項目データ「国・グループコード」は、下記の使用データ項目設定タブページにて、書籍コード項目設定の「書籍フラグ」、「国・グループコード」の設定値が「固定」またはデータが未入力の場合に適用されます。ISBN(国・グループコードと出版者記号及び書名記号の合計)桁数は9桁固定。価格コード及び本体価格は、最大桁数に満たない場合、前ゼロを挿入します。発行年月日は、YYYYMMDD 形式 (月刊誌系は YYYYMM、YMM も可) で入

メインバーコード以外のデータ挿入フレーム設定 使用データ項目設定

分類・価格バーコード描画フレーム(必須) 挿入しない

ISBNコード文字列挿入フレーム 挿入しない

分類・価格コード文字列描画フレーム 挿入しない

ISBNバーコード下文字列フレーム 挿入しない

分類・価格バーコード下文字列フレーム 挿入しない

メイン画面のデータ項目とフレームのマッピングの欄にて作成したバーコードを貼込むフレームに、通常の場合、書籍バーコードでは「出版者記号」の項目を対応付け、定期刊行物バーコードでは「雑誌コード」の項目に対応付けます。
 ただし、メイン画面で、別データ項目と対応付けしている場合には、「使用データ項目設定」タブページにてマッピングを行います。

中止 適用

JAN バーコード処理では、通常の JAN13/8 のバーコードの処理と ISBN 書籍バーコード及び定期刊行物バーコードの3種類のバーコードを作成・貼り込むことができます。

(1) JAN バーコード及び共通事項

JAN バーコードの設定は、パラメータ設定画面の「書籍・定期刊行物コード」チェックボックスの設定行の前までで行います。

また、この部分は、「書籍・定期刊行物コード」処理に際しても、共通のパラメータとして使用するものとなっています。

1) データが未存在時にフレームを削除する (JAN 以外は無効)

削除する場合にはチェックします。

2) 画像のフィット方法

「フィットなし (デフォルトなし)、比例縮小、センター、フレームにフィット、画像にフィット、比例縮小後センターに、フレームに均等、フレームに均等後センター」から選択します。

3) バーコードの高さにテンプレートのフレーム高さを使用：

使用する場合には、チェックします。

4) バーコードの高さ : スケール .1.0 の時の高さ (Pt)

書籍コードでは最小 11mm、定期刊行物では最小 12mm が必要です

5) スケール : 0.8 ~ 2.0 (JAN 以外は無効)

6) 解像度 : 600dpi, 1200dpi, 2400dpi

7) フォント : フォント名 (デフォルト OCRB)

「書籍・定期刊行物コードとして作成する」のチェックボックスをチェックすると、書籍・定期刊行物バーコードを作成するのに必要なパラメータ設定タブコントロールのエリアが設定可能状態となりますので、「バーコードタイプ」コンボボックスにて、書籍なのか定期刊行物なのかを選択します。

選択されたバーコードタイプにより、一部、どちらかに専用の設定項目は、使用不可となるものがあります。

次ページ以降に、書籍バーコード、定期刊行物バーコード作成に関するパラメータ設定の説明をします。

ただし、共通部分の説明に関しましては、本項目を参照してください。

(2) 書籍バーコード

JANコードパラメーター編集

☐ データ未入力の場合、フレームを削除する (JANのみ)

画像のフィット方法 フィットなし

☒ バーコードの高さに、テンプレートのフレーム高さを使用

バーコード高さ (スケール1倍時) Pt 解像度 600dpi

スケール 1.0 (書籍・定期刊行物コードは原寸のみ)

フォント OCR-B

☒ 雑誌・定期刊行物コードとして作成する。

書籍・定期刊行物コードとして作成する場合の設定

バーコードタイプ 書籍コード

プリフィックス 書籍フラグ 分類・価格 定期刊行物

978 192 491

書籍分類コード前置文字 C 書籍価格コード前置文字 ¥

分類・価格間文字列 書籍価格コード後置文字 E

ISBN表記 ISBN

固定値項目データ

国・グループコード 4

雑誌コード予備 0

本体価格予備 0

書籍併記欄項目区切 -

☒ ISBNコード非分割表示

プリフィックス「書籍フラグ」及び固定値項目データ「国・グループコード」は、下記の使用データ項目設定タブページにて、書籍コード項目設定の「書籍フラグ」、「国・グループコード」の設定値が「固定」またはデータが未入力の場合に適用されます。ISBN(国・グループコードと出版者記号及び書名記号の合計)桁数は9桁固定。価格コード及び本体価格は、最大桁数に満たない場合、前ゼロを挿入します。発行年月日は、YYYYMMDD 形式 (月刊誌系は YYYYMM、YMM 可) で入

メインバーコード以外のデータ挿入フレーム設定 使用データ項目設定

分類・価格バーコード描画フレーム(必須) name

ISBNコード文字列挿入フレーム jusho

分類・価格コード文字列描画フレーム tel

ISBNバーコード下文字列フレーム yaku

分類・価格バーコード下文字列フレーム mobile

メイン画面のデータ項目とフレームのマッピングの欄にて作成したバーコードを貼込むフレームに、通常の場合、書籍バーコードでは「出版者記号」の項目を対応付け、定期刊行物バーコードでは「雑誌コード」の項目に対応付けます。
ただし、メイン画面で、別データ項目と対応付けしている場合には、「使用データ項目設定」タブページにてマッピングを行います。

中止 適用

書籍バーコードは、ISBNコードを表すバーコードと書籍の図書分類コード及び価格を表す価格コードからなる2つの13桁のバーコードで構成されています。

通常、この2つのバーコードは、上下2段に配置されています。

● ISBN コードを表すバーコード 13 桁の内容は次のように規定されています。

- ①バーコードが ISBN を表すフラグ 3 桁で、「978 または 979」に固定。
- ②国。グループ別コードで、国際的には 3 桁までの可変値だが、日本では、「4」の 1 桁に固定。
- ③出版者記号（2 ～ 6 桁）及び ④書名記号（2 ～ 6 桁）を合わせて 8 桁に日本では固定。
- ⑤チェックデジット 1 桁。

● 図書分類コードと価格を表すバーコード 13 桁の内容は次のようになっています（この分類価格バーコードの規定は日本独自のものの）。

- ①バーコードが分類・価格コードを表すフラグ 3 桁で、「192」に固定。
- ②分類コード 4 桁固定。
- ③価格コード 5 桁固定。
- ④チェックデジット 1 桁固定。

書籍バーコードでは、バーコード自体の表示のほか、各バーコードで表わされるバーコードの数値 13 桁をバーコードの下に表示し、さらに別の場所に、ISBN コード及び分類、価格の視認テキストとして表示させます。

例えば、

「9784839945705」、「1923055029456」の 2 つのバーコード数値表示フッターテキスト。
 「ISBN 978-4-8399-4570-5」、「C3055 ¥02980E」の 2 つの視認用テキスト。

などとなります。

これらのテキストは、文字列として扱われ、バーコードを作成するデータより、視認テキストとして整形して抽出されます。

従って、InDesign テンプレートでは、バーコードを貼り込む 2 つのグラフィックフレームと 4 つのテキストフレームが必要となります。

ただし、バーコード画像のみを貼り込むという場合には、テキスト挿入用のテキストフレームを設定する必要はありませんが、バーコードを貼り込むグラフィックフレームを省くことはできません。

SpicyLibra では、上記で述べましたバーコードを作成するのに必要な固定的な値につきましても、何らかの規格の改編があっても対応できるように、本パラメータ設定画面にて、これらの固定値を変更できるようにしております。

ただし、現状では、日本での書籍用のバーコードを作成するには、予め設定してあるデフォルト値を変更する必要はありません。

書籍バーコードで設定できる定数の値は以下のようになっています。

(A) バーコード作成に直接関係する値

- ▼プリフィックスは、バーコードが何を表したものを示します。
 書籍フラグは、「978」がデフォルト。
 分離・価格フラグは、「192」がデフォルト。
- ▼国・グループコードは、日本が属するグループコードを設定します。
 「4」がデフォルト。

(B) 視認テキスト整形に関係する値：ISBN 表記関連

- ▼ISBN 表記
 テキストの先頭に付加する「ISBN」文字列を設定します。
 「ISBN」文字列とコードとの間にスペースを入れる場合には、「ISBN」の様に、必要なスペースを挿入設定します。
 デフォルトでは、空白の伴わない「ISBN」文字列となっています。

▼ ISBN コード非分割表示

「ISBN97841234567893」のように、ISBN コードを連続して表記するか、「ISBN978-4-1234-5678-9」の様に、ISBN 項目を区切りの文字で区切って表記するかを設定します。
デフォルトは、前者の分割しない表記になっています（チェックボックスがオン）。

▼書籍併記欄項目区切り

ISBN 項目を分割表示する場合の区切り文字を設定します。
デフォルトでは半角ハイフン「-」になっています。

(C) 視認テキスト整形に関する値：分類・価格コード表記関連

▼書籍分類コード前置文字

分類コードの前には、図書分類を表す記号付加します。
デフォルトでは欧文の「C」となっています。

▼書籍価格コード前置文字

価格コードの前には、表記価格の単位を付加します。
デフォルトでは、円記号「¥」となっています（ただし、半角の「/」記号を私用していますので、適用されているフォントによっては、半角「/」になってしまいますので、注意してください）。

▼書籍価格コード後置文字

価格コードの終了を表すきごうを付加します。
デフォルトでは「E」となっています。

▼分類・価格間文字列

分類コードと価格コードとの間にスペースを置きたい場合に、設定します。
デフォルトでは設定されていません。分類コードと価格コードはベタでつながり表記されます。

次に、ISBN バーコード画像を貼り込む画像フレームは、メインのマッピング画面で対応付けられていますので、それ以外のフレームの設定を行います。

(A) 設定画面の下部のタブコントロールの「メインバーコード以外のデータ挿入フレーム設定」タブをクリックし、フレーム対応設定画面に切り替えます。

▼分類・価格バーコード描画フレーム（必須）

下段の分類・価格バーコード画像を貼り込む画像フレームを選択コンボボックスにて選択します（このフレームは、処理の必須事項となっていますので、設定されていない場合には、エラーとなります）。

▼ISBN コード文字列挿入フレーム

視認用の ISBN テキストを表示するテキストフレームを選択コンボボックスにて設定します（テキストを表示しない場合には設定は不要です。以下同じ）。

▼分類・価格コード文字列挿入フレーム

視認用の分類・価格コードテキストを表示するテキストフレームを選択コンボボックスにて設定します。

▼ISBN バーコード下文字列フレーム

バーコードのフッターテキスト表示用テキストフレームを選択コンボボックスにて設定します。

▼分類・価格コード下文字列フレーム

バーコードのフッターテキスト表示用テキストフレームを選択コンボボックスにて設定します。

(B) 設定画面の下部のタブコントロールの「使用データ項目設定」タブをクリックし、データ設定画面に切り替えます。

ここでは、処理をするのに必要なデータ項目の設定を行います。

当該タブをクリックすると、「書籍バーコード」で設定可能なデータ項目設定のコンボボックスが並んでいるエリアが設定可能領域となり、他の定期刊行物バーコードに関するエリアが設定不可となった画面に切り替わります。

▼メインの ISBN バーコード処理用のデータ項目の設定。

ISBN バーコードを処理するデータは、「出版者記号」と「書名記号」とが必要となります。
このデータの設定方法には、3 種類の方法があり、処理するデータ形式により、設定方法が異なります。

メンバーコード以外のデータ挿入フレーム設定		使用データ項目設定	
書籍コード 出版者記号 <input type="text" value="不使用"/> 書名記号 <input type="text" value="不使用"/> 分類コード <input type="text" value="sei"/> 価格コード <input type="text" value="mei"/> 書籍フラグ <input type="text" value="不使用"/> 国・グループコード <input type="text" value="不使用"/>		定期刊行物併記欄 プレフィックス文字列 <input type="text" value="雑誌"/> 発行形態(0~3)の別冊等の場合 <input type="text" value="不使用"/> 発行日欄表記文字 発行日欄 <input type="checkbox"/> 雑誌コード欄 <input type="text" value=""/> 月・日区切 <input type="checkbox"/> 発行日欄区切 <input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> 発行日欄の1桁月の前ゼロ削除 発行日欄の数字 <input type="text" value="1桁全角・2桁半角"/> 返却期限文字列 <input type="text" value="不使用"/> 返却期限文字列挿入位置 <input type="text" value="挿入しない"/>	
定期刊行物コード 雑誌コード <input type="text" value="不使用"/> 発行年月日 <input type="text" value="不使用"/> 本体価格 <input type="text" value="不使用"/>			

□完全タイプ

1項目にISBNフラグを含めて、チェックデジットのない「978-4-1234-5678」の様に、ISBNの項目ごとに区切りの半角「-」で区切られた項目がすべて入力されていることが必須となります。

この場合、SpicyLibraのメイン画面にて対応付けされたデータ項目に、この完全データがあるものとみなしますので、ここでの「出版者記号」「書名記号」の設定は不要となります。いずれも、「不使用」を選択します。

完全データであることを示すために、プリフィックスの書籍フラグ項目の「978」を削除しておきます（削除されていないと完全データとはみなしませんので注意してください）。

□半完全タイプ

1項目に、「1234-5678」のように、「出版者記号」と「書名記号」とが半角ハイフン「-」で区切られて記述されている場合に用います。

この場合も、SpicyLibraのメイン設定画面で対応付けられた項目にデータがあるものとみなしますので、ここでの対応付けは不要となります。いずれも、「不使用」を選択します。

ただし、完全タイプとは異なり、プリフィックスの書籍フラグ項目は設定されていなければなりません。

□個別タイプ

「出版者記号」と「書名記号」とが別々の項目で入力されている場合に用います。

SpicyLibraのメインの画面での対応付けされた項目は使用せずに、ここでの対応付けされたデータ項目を使用します。

従って、「出版者記号」と「書名記号」の両方を、コンボボックスより選択して設定する必要があります。また、プリフィックスの書籍フラグ項目は設定されていなければなりません。

▼分類・価格バーコード処理用のデータ項目の設定（必須）。

分類・価格バーコードに必要なデータ項目を、それぞれ「分類コード」「価格コード」設定コンボボックスにて設定します。

この設定は、処理必須要件です。

▼書籍フラグ、国・グループコード

書籍フラグが処理データのすべてで同じであれば、プリフィックスの書籍フラグで設定しておけば済みますが、例えば、ほとんどが「978」なのに、中に少数の「979」などがある場合、データ中に書籍フラグ項目を設け、その項目データに「979」と記述することで、特定レコードのみ別の書籍フラグで処理を行うことを可能にします。

同様に、国・グループコードも、国・グループコード項目をデータ中に設け、基本と異なる国・グループコードで処理を行うことを可能にします。ただし、1桁ではないコードを指定する場合には、チェックデジットを除いて12桁でお振るのかといった注意が必要です。

通常は設定すつ必要はありませんので、「不使用」のままにしておきます。

(3) 定期刊行物バーコード

JANコードパラメーター編集

☐ データ未入力の場合、フレームを削除する（JANのみ）

画像のフィット方法 フィットなし

☒ バーコードの高さに、テンプレートのフレーム高さを使用

バーコード高さ（スケール1倍時） Pt 解像度 600dpi

スケール 1.0 （書籍・定期刊行物コードは原寸のみ）

フォント OCR-B

☒ 雑誌・定期刊行物コードとして作成する。

書籍・定期刊行物コードとして作成する場合の設定

バーコードタイプ 定期刊行物コード

プリフィックス 書籍フラグ 分類・価格 定期刊行物

978 192 491

書籍分類コード前置文字 C 書籍価格コード前置文字 ¥

分類・価格間文字列 書籍価格コード後置文字 E

ISBN表記 ISBN

固定値項目データ

国・グループコード 4

雑誌コード予備 0

本体価格予備 0

書籍併記欄項目区切 -

☒ ISBNコード非分割表示

プリフィックス「書籍フラグ」及び固定値項目データ「国・グループコード」は、下記の使用データ項目設定タブページにて、書籍コード項目設定の「書籍フラグ」、「国・グループコード」の設定値が「固定」またはデータが未入力の場合に適用されます。ISBN(国・グループコードと出版者記号及び書名記号の合計)桁数は9桁固定。価格コード及び本体価格は、最大桁数に満たない場合、前ゼロを挿入します。発行年月日は、YYYYMMDD 形式（月刊誌系はYYYYMM、YMM 可）で入

メインバーコード以外のデータ挿入フレーム設定 使用データ項目設定

本体価格バーコード描画フレーム(必須) name

雑誌コード等文字列描画フレーム jusho

本体価格コード文字列描画フレーム tel

視認用雑誌コード・号フレーム yaku

メイン画面のデータ項目とフレームのマッピングの欄にて作成したバーコードを貼込むフレームに、通常の場合、書籍バーコードでは「出版者記号」の項目を対応付け、定期刊行物バーコードでは「雑誌コード」の項目に対応付けます。
ただし、メイン画面で、別データ項目と対応付けしている場合には、「使用データ項目設定」タブページにてマッピングを行います。

中止 適用

定期刊行物バーコードは、雑誌コードと発行号数からなる13桁のバーコードと価格を表す5桁のバーコードという2つのバーコードで構成されています。

通常、この2つのバーコードは、左右に特定の間隔を置いて配置されます。

また、バーコードを内容を表すフッターテキストは、書籍バーコードの場合と異なり、バーコードの下ではなく、別位置に配置されます。

●雑誌コードと発行号数を表すバーコード 13 桁の内容は次のように規定されています。

- ①バーコードが定期刊行物を表すフラグ 3 桁で、「491」に固定。
- ②雑誌コードの予備コードを表す数値 1 桁で現在は、「0」に固定。
- ③雑誌コード 5 桁。
- ④発行月号 2 桁（月数）。
- ⑤年号 1 桁（西暦の下一桁）。
- ⑥チェックデジット 1 桁。

●本体価格を表すバーコード 5 桁の内容は次のようになっています。

- ①本体価格の予備を表す数値 1 桁で現在は、「0」に固定。
- ②本体価格 4 桁固定。

定期刊行物バーコードも、バーコード本体以外に、バーコードの内容を表す数値テキストのフレーム 2 個と視認用のテキストフレーム 1 個とを設け、バーコード本体の処理と同時にテキストを挿入し作成することが可能です。

例えば、バーコード内容を表すフッターテキストには、

雑誌コードを表す、「4910123451223」といった 13 桁のテキスト、及び、
本体価格を表す、「00456」

等といった数値データです。

また、視認用のテキストは、書籍バーコードとは異なり、雑誌コードと発行号数等が記述された 1 つのテキストフレームとなります。

例えば、

雑誌 27701-11/5

のように、雑誌コードと発行号数が区切り文字で区切られて表記されます。

発行号数の部分は、定期刊行物が月刊なのか週刊なのかなどによって表記内容が異なります。

また、視認用データの中には、定期刊行物の出版社への返却期日を付したものもあります。

例えば、

雑誌 13350-5

① 6/5

の様に表記されます。

SpicyLibra では、これらのバーコード以外のテキストに関して、バーコード作成と同時に処理することが可能です。また、いくつかの値は固定的に決まっているものもあり、これらの値につきましては、この設定画面から変更して不要することが可能ですが、基本的には、あらかじめ設定されたデフォルト値を変更する必要はないものと思われます。

（A）バーコード作成に直接関係する値

▼プリフィックスは、バーコードが定期刊行物であることを示し、「491」固定です。

▼雑誌コード予備と本体コード予備は、現在「0」に固定されています。

（B）視認用テキスト整形に関する値

視認用テキスト整形に関する値の設定に関しては、設定画面の下部のタブコントロールで「使用項目データ設定」タブを選択して表示される画面にて設定します。

メインバーコード以外のデータ挿入フレーム設定		使用データ項目設定	
書籍コード		定期刊行物併記欄	
出版者記号	不使用	プレフィックス文字列	雑誌
書名記号	不使用	発行形態(0~3) の別冊等の場合	mei
分類コード	sei	発行日欄表記文字	
価格コード	mei	発行日欄	雑誌コード欄
書籍フラグ	不使用	月・日区切	発行日欄区切
国・グループコード	不使用	<input checked="" type="checkbox"/> 発行日欄の1桁月の前ゼロ削除	
定期刊行物コード		発行日欄の数字	すべて半角
雑誌コード	不使用	返却期限文字列	mei
発行年月日	busho	返却期限文字列挿入位置	雑誌コードの次行
本体価格	mobile		

▼プリフィックス文字列

雑誌コード先頭に付加される文字列で、デフォルトは「雑誌」となっています。この文字と実際の雑誌コードの間にスペースを入れる場合には、「雑誌」のように、スペースを入れて設定します。

▼発行形態(0~3)の別冊等の場合発行日欄表記文字

雑誌コードの先頭1桁は0,1が月刊誌など、2,3が週刊誌などを表し、この発行形態により、雑誌コードに続く発行号数の表記が、通常であれば、月刊誌系は発行月を、週刊誌系は、発行月/日という形で表記します。しかし、これらが別冊などの特別な発行である場合(雑誌コードの下1桁が6~9)には、出版者の特別な値を表記することがあります。

SpicyLibraでは、この項目が設定してある場合には、通常の表記方法に変え、このコンボボックスで示されたデータ項目の内容を整形データとして使用し、フレームに挿入します。

デフォルトは「不使用」です。

▼発行日欄月/日区切り

週刊誌系で発行月と発行日を合わせて表記する場合の区切り文字を設定します。

デフォルトは、全角「/」です。

▼雑誌コード欄発行日欄区切り

雑誌コードと発行号数の間を区切る文字を設定します。

デフォルトは、全角「-」です。

▼発行日欄の1桁月の前0を削除

発行号数の月が01,02のように1桁の月の場合に、0を削除する。

デフォルトは、削除しない。

▼発行日欄の数字

発行号数の記述に使用する数字の種類を「1桁全角、2桁半角」、「すべて全角」、「すべて半角」から選択します。

デフォルトは、「1桁全角、2桁半角」です。

▼返却期限文字列

返却期限の文字列を挿入する場合に使用するデータ項目を設定します。

デフォルトは「不使用」です。

▼返却期限文字列挿入位置

返却期限文字列を挿入する場合の挿入位置を設定します。

「雑誌コードと月号欄の間」	→	雑誌	234567	①	1/8 - 12
「月号欄の後」	→	雑誌	234567 - 12	①	1/8
「雑誌コードの次行」	→	雑誌	234567 - 12		
				①	1/8

のようになります。

デフォルトは「挿入しない」です。

次に、同じ「使用データ項目設定」の画面の左下にある「定期刊行物」のデータ項目設定エリアにて、処理用のデータ項目の対応を設定します。

▼雑誌コード：先頭の予備キャラクターを除く 5 桁の数字。

SpicyLibra のメインの画面で対応付けした項目を使用しないで、他の項目を雑誌コードデータとして使用する場合には、雑誌コードが記述されているデータ項目を選択コンボボックスから設定します。

通常は、SpicyLibra のメイン画面で対応付けしたデータ項目を使用するので、ここは「不使用」で構いません。

▼発行年月日（必須）

発行年月日は、週刊誌系のデータを処理する場合には、年月日まですべて、「YYYYMMDD」の形式で入力されている必要があります。

月刊誌系の場合には、「YYYYMMDD」または「YYYYMM」の形式で入力されていなければなりません。

このデータはバーコード作成に必須項目となっています。

▼本体価格（必須）：先頭の予備キャラクターを除く 4 桁の数字

価格バーコード作成に必要な税抜きの本体価格の項目を選択します。

価格バーコード作成編必須項目です。

最後に、価格バーコード画像を貼り込むグラフィックフレームと、バーコードフッターテキストや視認テキストを挿入するテキストフレームを設定します。

設定は、タブコントロールの「メインバーコード以外のデータ挿入フレーム設定」タブをクリックし、表示された画面下部のコンボボックスを選択することで行います。

メインの雑誌コード・発行号数のバーコードは、SpicyLibra のメイン画面の対応付けで行いますので、ここでは、価格バーコードとバーコードフッターテキスト及び視認テキスト挿入テキストフレームの選択を行うことになります。

▼本体価格バーコードフレーム（必須）

価格を表す 5 桁のうち、予備を除いた 4 桁の数値（4 桁に満たない場合には、前ゼロを埋めて 4 桁にしておく）。

必須の設定事項となります。

▼雑誌コード等文字列描画フレーム

雑誌コード・発行号数バーコードのフッター文字テキストを挿入するテキストフレームを設定します。

▼本体価格コード文字列描画フレーム

本体価格バーコードのフッター文字テキストを挿入するテキストフレームを設定します。

▼視認用雑誌コード・号フレーム

視認用のテキストを描画するフレームを選択します。

※書籍バーコード及び定期刊行物バーコードでフッター文字列や視認文字列が挿入されたテキストフレームのあふれ処理は行いませんので、テンプレート作成時には、挿入されるテキストの最大長に注意をしたテキストフレームの設定をしてください。

※書籍バーコード及び定期刊行物バーコードを処理する場合、データが未入力でもフレームは削除しません。

⑨ -2 画像ファイル (Code39、NW7 バーコード)

1) データが未入力の際に、フレームを削除する

削除する場合にはチェックを入れます。

2) チェックデジット

チェックデジットを計算して追加する場合にはチェックを入れます。

NW7 の場合には、チェックデジットの計算方法とチェックデジットの欠番処理の方法を設定します (Code39 では不要)。

●チェックデジット計算方式

- ①モジュラス 16
- ②モジュラス 10 ウェイト 2~1 分割 (ルーンズ)
- ③モジュラス 10 ウェイト 2~1 一括
- ④モジュラス 10 ウェイト 3~1
- ⑤加重モジュラス 11
- ⑥加重モジュラス 11 (循環)
- ⑦モジュラス 11 ウェイト 2~7
- ⑧モジュラス 11 ウェイト 2~7(循環)
- ⑨モジュラス 11 ウェイト 1~0
- ⑩モジュラス 11 ウェイト 2~0
- ⑪セブンチェック (7DR)
- ⑫セブンチェック (7DSR)
- ⑬ナインチェック (9DR)
- ⑭ナインチェック (9DSR)

の計算方式をサポートします。

加重モジュラス 11 の⑤と加重モジュラス 11(循環)⑥の違いは、加重モジュラス 11 ⑤が 12 桁固定のデータ長なのに対し、12 桁を超えた場合にも各桁に乗する数字列 (6,3,5,9,10,7,8,4,5,3,6,2 等) を繰り返して適用することで、データ長を延長することを可能にしたのが加重モジュラス 11 (循環) ⑥ということになります。

また、モジュラス 11 ウェイト 2~7 ⑦とモジュラス 11 ウェイト 2~7(循環) ⑧の違いも、モジュラス 11 ウェイト 2~7 ⑦が 6 桁固定のデータ長に対して、6 桁を超えるデータに対しても「2~7」の乗数を繰り返して適用させることでデータ長を延長することを可能にしたのがモジュラス 11 ウェイト 2~7(循環) ⑧ということになります。

●モジュラス 11 欠番処理

モジュラス 11 は、データ各桁を指定の計算方式で計算した結果を 11 のモジュロ（11 で割った余り）にとり、その値を 11 から引いた値をチェックデジットとして使用します。

ところが、チェックデジットは 1 桁のため、単純に計算しただけでは、10、11 という 2 桁の数値が結果として産出されることがあり得ます。

この 2 桁になってしまったチェックデジットの 1 桁への丸めの方法として、両方とも「0」にする方式と、2 桁目の「1」を無視し、下 1 桁の値「0」または「1」を採用するという方式があります。

ここでは、どちらの方式を適用するのかを設定します。

3) フッター文字表示

「しない、チェックサム文字なしで表示、チェックサム文字を含めて表示)」から選択。

4) フッターを均等揃えで表示

フッター文字を表示する時に、バーコードの横幅に対してセンターに揃えるのではなく、均等にそろえる場合にはチェックを入れます。

5) 画像のフィット

「フィットなし（デフォルト）、比例縮小、センター、フレームにフィット、画像にフィット、比例縮小後センターに、フレームに均等、フレームに均等後センター」から選択します。

6) バーコードの高さにテンプレートのフレーム高さを使用

バーコードの高さに、下記の数値設定でなく、テンプレートの挿入するフレームの高さを使用する場合にはチェックを入れます。

7) バーコードの高さ

スケールが 1.0 の時の高さ (Pt) を設定します。

8) スケール

画像の拡大縮小を、0.8 ～ 3.0（0.8 以下は 0.8 に、3.0 以上は 3.0 に丸めます）で、設定します。

9) 解像度

画像解像度を、「600dpi, 1200dpi, 2400dpi」から選択します。

10) フォント

フッター表記文字フォントをデフォルトの OCRB 以外を使用する場合に、フォント名（フォントファイル名ではない）を設定します。

11) フォントサイズ

フッター表記文字フォントの大きさ (Pt) を 10Pt 以外に設定する場合に大きさを設定します。

12) スタート・ストップキャラクターを付加 (NW7 の場合のみ有効)

「スタート・ストップキャラクターを付加」チェックボックスをチェックし、A ～ D または a ～ d までの英字で、挿入するスタート・ストップキャラクターを、それぞれのコンボボックスより選択します。小文字を付加する場合には、「小文字に変換して挿入」チェックボックスをチェックします。

※本処理では、画像を生成し InDesign に貼り込んでいますので、画像の解像度を大きくしたり、スケールを大きくしたりすると処理速度に影響を及ぼすことが考えられます。

また、フォントを変更する場合、OCRB フォントで種々の調整をしておりますので、オーバーフローをすることなどがあり得ます。十分テストを行い、サイズなどの調整を行ってください。

⑨ -3 画像ファイル (CODE128 バースコード)

☐ データが未入力の時、フレームを削除する

☐ チェックサムの計算を行う

フッター表示 下左揃えで表示

バースコードタイプ コンビニ標準料金代理収納(EAN128C)

画像のフィット方法 フィットなし

☒ バースコードの高さに、テンプレートのフレーム高さを使用

バースコード高さ Pt

解像度 600dpi

フォント MS Sans Serif

8.25 Pt

中止 適用

1) データが未入力の際に、フレームを削除する
削除する場合にはチェックを入れます。

2) チェックサム (EAN128C の場合のみ有効)
チェックサムを計算して追加する場合にはチェックを入れます。

3) フッター文字表示
「表示しない、下センターに表示、下左揃えで表示」
から選択。

4) バースコードタイプ
使用するバースコードの種類を、「CODE128A、CODE128B、CODE128C、コンビニ標準料金代理収納 (EAN128C)」
から選択します。

5) 画像のフィット
「フィットなし (デフォルト)、比例縮小、センター、フレームにフィット、画像にフィット、比例縮小後センターに、フレームに均等、フレームに均等後センター」
から選択します。

6) バースコードの高さにテンプレートのフレーム高さを使用
バースコードの高さに、下記の数値設定でなく、テンプレートの挿入するフレームの高さを使用する場合には
チェックを入れます。

7) バーコードの高さ

直接バーコードの高さを指示する場合に、高さ (Pt) を設定します。

8) 解像度

画像解像度を、「600dpi, 1200dpi, 2400dpi」から選択します。

9) フォント

フッター表記文字フォントをデフォルトの MSSanSerif 以外を使用する場合に、フォント名（フォントファイル名ではない）を設定します。

10) フォントサイズ

フッター表記文字フォントの大きさ (Pt) を 8.25Pt 以外に設定する場合に大きさを設定します。

⑨ -4 画像ファイル（イメージバリアブル）

イメージバリアブルには、Photoshop と Illustrator のどちらで処理するのかにより、パラメータが若干違います。基本的には、ページに読み込んできた処理レコードの項目を Photoshop ならば、どのテンプレート中のレイヤーデータと置き換えるのか、Illustrator ならば、どの変数データに置き換えデータセットを作るのかという置換対象の違いがあるだけで、考え方はよく似ています。

1) データが未入力の場合、フレームを削除する

削除する場合にはチェックを入れます。

2) 使用するアプリケーションソフト

イメージバリアブル処理に使用するアプリケーションソフトをフォトショップ、イラストレーターより選択します。

フォトショップを選択した場合、画面左のテキストボックス項目のヘッダー名が「変数名→レイヤー名」に変わります。同時に、データセット名入力テキストボックスが使用不可となります。

3) データマッピング

画面中央のテーブル形式の入力選択欄において、変数名（レイヤー名）とデータ項目との対応を行い、そのデータ種が何なのかを設定します。

変数名（レイヤー名）の欄には、各々のテンプレートにて設定した変数名（レイヤー名）を間違いなく記述します（最大 10 個までのレイヤー、変数設定が可能です）。

データ項目の欄では、処理データ項目をコンボボックスから選択します。

データ種類の欄では、挿入するデータが文字列（テキスト）なのか、画像（リンクパス）なのか、あるいはテンプレートに存在するオブジェクトの表示・非表示（表示）の制御なのかを選択します。

フォトショップを使用する場合、画像・テキスト挿入、オブジェクト表示切り替えの 3 種類の処理方法に加え、テキストレイヤーに書かれているテキストの一部の文字列を置換する処理も可能となっています。

これは、「テキスト差替」処理と呼び、テキストレイヤー中の文字列に、「% 1 %」（すべて全角）というプレースホルダー文字列を設定しておくことで、その部分を指定された文字列に置き換えたのち、そのレイヤーに再挿入します（イラストレーターでは、この処理は選択できません）。

4) アクション設定

「アクション名」には、テンプレートに設定したアクション名を正確に書きます。

「アクションセット名」には、上記アクションが属しているアクションセット名を記入します。

使用できるアクションは、処理途中でユーザーダイアログを出したり、ファイルに書き出す処理をしたりしない、ユーザーインタラクションの発生しないもののみとなりますので注意してください。

5) 画像のフィット 方法

「フィットなし（デフォルト）、比例縮小、センター、フレームにフィット、画像にフィット、比例縮小後センターに、フレームに均等、フレームに均等後センター」から選択します。

6) データセット名

イラストレーターの場合、テンプレートにて設定した変数でキャプチャーしたデータのデータセット名を入力します。未入力の場合、デフォルトの「データセット 1」を使用するものとします。

7) テンプレートファイルを変更

パス設定で設定したテンプレートファイルとは異なるテンプレートファイルを使用する場合に設定します。ただし、テンプレートはインデザインテンプレートファイルと同じフォルダーになくてもなりません。

8) イラストレータ遅延時間

イラストレータを使用する場合、変数データを読み込みデータセットを更新するまでの遅延時間（mm秒）を設定します（読み込みが反映されない場合があるため、デフォルト 2000mm 秒）。

（※）テキストを挿入、置換する場合、テンプレートに設定されているテキストフレームをオーバーすると文字列が切れてしまいます。あふれ処理は行いませんので、データ設計時に、最長の文字列が挿入できるように、テンプレートを作成しておいてください。また、フォトショップで「テキスト差替」を行う場合、レイヤーに貼り込まれている文字列を一度取得し、文字列置換をしたのちに再挿入しておりますので、文字サイズなどは、先頭文字のサイズとなりますので注意してください。

9) 作成画像保存フォルダー名を欧文とする

「作成画像保存フォルダー名を欧文とする」にチェックがある場合、Photoshop や Illustrator で処理した結果を保存するフォルダーの名前を、通常の日本語名に変え欧文名「PhtoshopVariableImage」、
「IllustratorVariableImage」とします。これは、Dreamweaver 書き出しなどフォルダー名が日本語の場合に、画像パスが正常にアクセスできない状態になることを防ぐためです。このような書き出しをしない場合には、設定する必要はありません。

10) 画像フォーマット

「画像フォーマット」選択コンボボックスでは、デフォルトのアプリケーションデフォルト画像フォーマットである「pad」や「ai」の他に、「jpeg」フォーマットでの画像を作成を選択することができます。

これは、「psd」や「ai」といった画像フォーマットで処理を行った場合、SWF 書き出しなどの HTML ファイルでは、これらの画像フォーマットはサポートされておらず、表示できないため、JPEG 画像で作成することで、非表示になることを防ぐためです。

このようなドキュメント書き出しを実行しない場合には、アプリケーションデフォルトで問題はありません。

11) グラフ設定

「グラフ設定」は、処理アプリケーションにイラストレータを選択し、データ種類として「グラフ」を選択した場合に、グラフの種類など、処理するグラフの属性を設定するもので、設定が選択できる場合には、「グラフ」ボタンが選択状態となり、グラフ以外のデータ種類が選択されている場合には、グレー表示となりボタンを選択することはできません。

「グラフ」ボタンをクリックすると、グラフ処理にまつわる各種属性を設定するダイアログ画面が表示されます。

グラフ処理は、イラストレーターのグラフ機能を用いてバリエーションデータをグラフに反映させ、処理結果をインデザインドキュメントの所定のフレームに貼り込むものです。

従いまして、イラストレーターで作成したグラフは、「変数」として登録され、データキャプチャーがされていなければなりません。また、本ダイアログで設定する内容は、イラストレーターのメニューである「グラフ→データ」を選択した場合に表示されるデータ入力表に準拠するもので、イラストレーターの「グラフ→データ」表のデータセットラベル及びカテゴリーラベルを別項目として入力するテキストボックスを設け表入力とは別とし、表部分の入力は、あくまでも、グラフの実際のデータを格納する、処理データ項目番号となっています。

なお、SpicyLibra では、データ項目数が 100 項目の制限がありますので、データ入力表を 10 行 x10 列を最大とするような制限があります。

このグラフデータの入力に関しましては、イラストレーターの「グラフ→データ」に関する説明を参考にしていたき、グラフ種類、ラベル、データ表の関係につきまして、ご理解いただいたうえでご利用ください。

グラフの種類によって、これらの関連が異なるため、予め、イラストレーターのグラフ処理のご理解が必須となります。

1) グラフの種類

「グラフの種類」コンボボックスでは、イラストレーターが扱う 9 種類のグラフ（棒グラフ、横向き棒グラフ、積み上げグラフ、横向き積み上げグラフ、折れ線グラフ、階層グラフ、散布図グラフ、円グラフ、レーダーチャート）からグラフを選択します。

2) データ行列サイズ設定

データ入力の行と列の大きさを指定し、データ入力表の入力項目を作成します。実際のグラフのデータ項目数となります。

3) データセットラベル

イラストレーターのグラフデータ入力表の 1 行目に該当するデータセットラベルの入力項目に該当します。イラストレーターのグラフデータ入力表では、次に述べるカテゴリーラベルを設定する場合、一番左の項目を空白として 2 項目目から入力を行いますが、SpicyLibra ではラベルとデータとの入力は別項目となっておりますので、一番左の項目から入力を行います。

イラストレーターのグラフメニューでラベルを自動挿入した場合、必ず、このラベル項目を設定します。ラベ

ル名は、イラストレーターテンプレートに設定したラベル名と同じでも、別のラベル名でも構いませんが、ラベルの個数は同じでなければなりません。

4) 散布図軸ラベル

グラフを散布図にした場合、散布図には、他のグラフのような行先頭でのカテゴリーラベルはありません、Y 軸と X 軸のラベルを 2 行目の列に設定することができます。

散布図を選択した場合、この入力項目を選択し、ラベルを設定することが可能となります。

ただし、散布図は、2 組で 1 データを表現するものなので、必ず、偶数個の列数となります。

5) カテゴリーラベル

イラストレータのグラフデータ入力表で、各行の先頭に入力するカテゴリーラベルを入力します。このカテゴリーラベルも、データセットラベルと同様、イラストレーターテンプレートにて設定したカテゴリーラベル数と同数の設定をしなければなりません。

ラベル名に関しましては、イラストレーターテンプレートにて設定したものとは異なってもかまいません。

6) 処理データ項目番号入力表

上記、1) で作成された行と列で入力項目が表示されますので、この入力欄に、右側に表示される処理データ項目例のリストビューを参照しながら、処理データの格納されているデータレコードの項目番号を「1」から始まる番号で設定します（実際の処理数字ではなく、処理数字が格納されているレコードの項目番号です）。

⑨ -5 画像ファイル (TEX)

TEX データから EPS 画像を作成し、指定されたグラフィックフレームに貼り込むときのパラメータ設定を行います。



- ・データは外部ファイルのパス → TEX データを外部ファイルとして読み込みます。
- ・データが未入力の場合、フレームを削除する → データがないばあにフレームを削除します。
- ・プリアンブル・ポストスクリプト → プリアンブル・ポストスクリプトデータの扱いを、

データに含まれる / アプリケーション設定の値を使用する / このダイアログで設定した値を使用する

から選択します。

「このダイアログで設定した値を使用する」を選択した場合、下のプリアンブル、ポストスクリプトのテキストフレームに記述します。

- ・外部テキストファイル文字エンコーディング → TEX データとして外部ファイルを使用する場合、「Shift-JIS/UTF-8/UTF-16」の中から、テキストの文字エンコーディングを指定します。
- ・最初に実行する処理ファイルの拡張子 → 登録した TEX 環境で最初に処理プログラムに引き渡すファイルの拡張子（デフォルト tex）を指定します。
- ・画像フィット方法 → 「フィットなし / 比例縮小 / センター / フレームにフィット / 画像にフィット / 比例縮小後センター / フレームに均等 / フレームに均等後センター」から選択します。
- ・「中止」ボタン → 設定を適用しないで呼び出し画面に戻ります。
- ・「摘要」ボタン → 設定を適用して呼び出し画面に戻ります。

(※) 予め、64 ビット版での Tex 環境を設定しておく必要があります。

⑨ -6 画像ファイル (GS1 バーコード)

GS1バーコードパラメータ設定

☐ データ未入力時にフレームを削除する

GS1バーコード処理種 **GS1-128**

画像のフィット方法 **センター**

視認文字描画フレーム **GS1Text1**

GS1 DataBar Expanded Stack のカラム数 (0は自動。実際の処理では2倍の値になります) **0**

☐ GS1-128,GS1 Data Bar Expandedを除き、8/10/12/13桁をそれぞれGTINとして扱い、前ゼロを付けて14桁に揃える。

バーコード高さ **30** スケール **1.0** (1.0~15.0)

(基本モジュールの倍数：バーコード種によって最小高が異なります)

合成シンボル

合成シンボルトタイプ **合成シンボルを付けない** 視認文字描画フレーム **非表示**

CC-CはGS-128でのみ設定可能です。LibraCC2018では、自動モードをCCAとします。

合成シンボル用付加データ項目 **[01]98898765432**

● GS1-128及びGS1 DataBar Expanded系を除き、データはGTINの14ケタのうちチェックデジットを除いた13桁とします。14桁の場合には、最終桁のチェックデジット部分は再計算された値に置き換えられます。データは、GTIN (Global Trade Item Number) のみとなりますので、AI番号(01)はデータには不要です。

● GS1 DataBar Limited系は、データ先頭の1文字が、「0または1」に限定されます。

● GS1 DataBarバーの高さは、基本モジュールのLimitedは10倍以上、Expandedは34倍以上、Truncatedは13倍に固定、その他は33倍以上となります。

● GS1-128及びGS1 DataBar Expanded系のデータは、データ長が可変長となりますが、必ず、AI番号を半角ブラケット[] (視認用の半角パーレン()ではない) で囲んでデータ中に挿入しておく必要があります。半角ブラケット[]は、視認用には半角パーレンに変換されます。

また、データ先頭が(01)XXXXXXXXXXXXCの商品コード(GTIN)で、チェックデジット(C)がない場合にはチェックデジットを計算して付加します。Cの部分にチェックデジットがある場合には、そのまま使用します。

ただし、GTINがデータ途中にある場合には、チェックデジットは自動付加しませんので注意してください。

● CompositeCodeの長さは、90文字以下とします。

● GS-128で「コンビニエンスストア料金代納収行」には、Code128の処理で行ってください。

中 止 通 用

GS1 バーコードは、大別して、従来 EAN-128 と呼ばれていた **GS1-128** と **RSS (Reduced Space Symbology)** と呼ばれていたものから移行した **GS1 DataBar** 系統の2種類のバーコードに分けられます。

そのうち、GS1-128 と GS1 DataBar Expanded 系のバーコードは、AI(Application Identifier)というアプリケーション識別子をデータ中に挿入することで、数値列に特別な意味を持たせることをしています。

従いまして、上記2種類の系統のバーコードデータは、それぞれの意味を持ったデータ項目に分かれたデータが連続することとなります。

この AI をデータ中に記述するに当たっては、AI の数値を半角ブレス [] で囲んで入力する必要があります。

すなわち、[01]1234567[322]123456789[102]34567 の様に連続したデータとして入力することとなります。

ただし、この AI を識別する [] は、バーコードデータ内容を表記するフッターテキストを使用する場合には、SpicyLibraにより、半角パーレン () に置き換えられます。

また、これらの AI 識別記号は、バーコードシンボルには含まれません。

なお、各 AI 毎に、データ項目の長さなどの提携が決まっていますので、使用に際しては、(財)流通システム開発センターが公開しております、「**GS1 アプリケーション識別子 (AI) リスト (Application Identifiers)**」などを参考のうえ、正しい書式にて入力をする必要があります。

これらの通常のバーコード以外に、合成シンボル (Composite Component) を、メインのバーコードの上に配した、

多段のバーコードを利用する場合には、Composite Component 用のデータは、必ず、AI 付きのデータでなければなりません。

1) データ未入力の時にフレームを削除する

データが未入力の場合、対応付けられたフレームを削除します。

2) GS1 バーコード処理種

GS1-128
GS1 DataBar Omnidirectional
GS1 DataBar Truncated
GS1 DataBar Stacked
GS1 DataBar Stacked Omnidirectional
GS1 DataBar Limited
GS1 DataBar Expanded
GS1 DataBar Expanded Stacked

の中から処理するバーコードの種類を選択します。

3) 画像のフィット方法

フレーム設定値に従う
比例縮小
センター
フレームにフィット
画像にフィット
比例縮小後センター
フレームに均等
フレームに均等後センター

の中からバーコード画像をフレームにフィットさせる方法を選択します。

4) 視認文字列描画フレーム

バーコードの内容をテキストとして表示する場合のテキストフレームを選択します。

5) ~~「DataBar Expanded 系及び GS1-128 で複数の AI がある場合に、2 番目の AI 以降を次行に改行する。」~~

~~例えば、(01)1234567(235)9876788(56)886633 のようなバーコードデータがあった場合、視認用のテキストを~~

~~(01)1234567
(235)9876788(56)886633~~

~~の様に、1 つ目の AI データ項目のみを 1 行とし、それ以降のデータ項目を 2 行目に配置するような場合に、チェックします。~~

6) バーコード高さ

バーコードシンボルの基本モジュールの倍数でバーコードの高さを指定します。

GS1 DataBar では、種類ごとに最低高が決まっているものがありますので注意してください。

7) スケール

バーコードは画像で生成しますので、画像全体の大きさの倍率を 0.2 ～ 2.0 の間で指定します。デフォルトは 1.0 倍となっています。

8) GS1 DataBar Expanded Stack のカラム数 (0 と 1 は自動)

GS1 DataBar Expanded Stack の処理を行う場合に段数を指定する際に用います。ただし、必ずしも、指定段数で描画するとは限りません。プログラムによって変更される場合がありますので、予めご承知おきください。

9) GS1-128,GS1 Data Bar Expanded を除き、8/10/12/13 桁をそれぞれ GTIN として扱い、前ゼロを付けて 14 桁に揃える。

GS1-128,GS1 Data Bar Expanded 系のバーコードを除き、他の GS1 DataBar は、AI の 01 である商品識別記号 (GTIN) を表すことになっています。この GTIN の表現には、現在の様に 14 桁と決まる前まで、8/10/12/13 桁と複数種類あったため、これらのデータを用いる場合、14 桁に不足する桁数分データの前に「0」を付加して 14 桁に揃えることが許されています。

このチェックボックスをチェックした場合、桁数不足データに前ゼロを付加して 14 桁として処理を行います。

【以下、合成シンボル (Composite Component) を付加する場合の設定】

10) 合成シンボルタイプ

自動 (デフォルト)

CC-A

CC-B

CC-C

合成シンボルを付ける場合には、上記から種類を選択します。

ただし、CC-C は GS-128 のみに設定ができます。

ちなみに、合成シンボルで作成されるバーコードは、メインのバーの部分、GS-128/GS1 DataBar となりますが、付加される合成シンボルのバーコードの生成方式は、CCC-A/CC-B が MicroPDF417、CC-C が PDF417 の形式となります。

11) 合成シンボル用付加データ項目

合成シンボルを作成するのに必要なデータが記述されているデータ項目を設定します。

12) 視認文字描画フレーム

合成シンボルのデータ内容を表記する場合に、テキストを挿入するテキストフレームを設定します。

※次頁に AI の一部を参考に掲載します。

(出典：財団法人 流通システム開発センター 発行 2011 年 3 月版)

※ SpicyLibra2020 にて、GS1 データバー作成のモジュールを変更しました。その結果、データ並びに Composite データ中に複数の AI がある場合の処理が変更されましたので注意してください。

これらの場合には、バーコードが利用できるか否か十分にチェックの上ご利用ください。実際にスキャナーにて読み取りテストし使用できないと判断された場合には、誠に申し訳ありませんが、使用を控えてください。

GS1アプリケーション識別子(AI) 一覧表 (ISO/IEC 15418規格)

現在、GS1が標準化しているアプリケーション識別子(AI)の一覧表を掲載します。

アプリケーション識別子の定義その他はGS1により継続的に更新されます。詳細は流通システム開発センターにお問合せ願います。

2011年3月現在

A I	データ項目		識別子の定義・内容	フォーマット
00	シリアル・ SHIPPING・コンテナ・コード (SSCC)		物流・出荷単位の個別識別に使用するシリアル番号。拡張デジット(0～9の数字)1桁+JAN企業コード(国際的には「GS1企業コード」)+物流単位ごとの識別番号+チェックデジットの合計18桁。	n2+n18
01	グローバル・トレード・アイテム・ナンバー (GTIN)		商品識別コード。ある商品またはサービスを国際的に一意に識別するための番号。長さは8桁、12桁、13桁、または14桁がある。14桁未満のGTINをAI(01)により表現する場合は、GTINの先頭に、必要分だけ0を足して14桁とする。	n2+n14
02			物流単位(パレット等)の中に収納された、最大梱包レベルの取引単位(ケースなど)の商品識別コード。全て同じGTINを持つ取引単位により構成される物流単位にのみ使用する(混載には使用できない)。常に、梱包単位に含まれるこの取引単位の個数を示すAI(37)と併用する。	n2+n14
10	バッチ/ロット番号		識別のためメーカーが設定する記号番号 (ロット番号、バッチ番号、加工処理番号、シフト番号等)。	(n2+an...20)
11(*)	年月日	製造年月日	メーカーが定義する、製造または組み立て日。ISOのフォーマットYYMMDD (例: 製造年月日“100707”) で記述。	n2+n6
12(*)		支払期限日	請求書にもとづく支払い期限。ISOのフォーマットYYMMDD (例: 支払年月日“100708”) で記述。	n2+n6
13(*)		包装年月日	製品が包装された日を示す。ISOのフォーマットYYMMDD (例: 包装年月日“100714”) で記述。	n2+n6
15(*)		品質保持期限日	製品を使用/消費する際に望ましい品質が保持される期日を示す。ISOのフォーマットYYMMDDで記述。 (例: 販売期限日や品質保持期限日など“101115”) Best Before Date/ Sell By Date と同	n2+n6
17(*)		有効期限日	有効(使用)期限、薬効期限など。製品が使用または消費に耐えうる期日を示す。これ以降の使用・消費は直接または間接的なリスクを生じる可能性がある期日。ISOのフォーマットYYMMDDで記述。(例: 有効期限日“101205”) Expiration Date/Use By Dateとも	n2+n6
20	リニューアル商品／規格変更品識別番号		GTINを変更する必要はないが、メーカーが内部のバージョン管理のために区別する必要がある製品に使用する識別番号。	n2+n2
21	シリアル番号		製品のライフタイム全体にわたって、メーカーが設定した連続番号、またはコード(例: 製造シリアル番号、追跡可能番号、連絡管理のID番号等)。	(n2+an...20)
22			HIBCC(米国医療産業情報標準化協議会: Health Industry Business Communication Council)の標準コードの表示が必要な場合に使用。2012年末をもって、このデータの使用は終了する。	(n2+an...29)
240	追加の商品識別番号		メーカーが独自に使用する識別番号。GTIN以外の商品識別コードをGS1データキャリアにより表示する際に使用。GTINの使用を開始するまでの移行期間限定に、合意した企業間に限って用いることができる。	(n3+ an...30)
241	顧客製品番号		顧客が発注に使用する製品の識別コード。GTIN以外の商品識別コードをGS1データキャリアにより表示する際に使用。GTINの使用を開始するまでの移行期間限定に、合意した企業間に限って用いることができる。	(n3+ an...30)

②0 串刺し番号

串刺し面付け(番号)パラメーター編集

前置文字列

後置文字列

開始番号 (デフォルト 1)

増加数(ページ毎) (デフォルト 1) ☐ 2ページごとに数字を増加させる

桁数 (デフォルト 0)

1増加数(フレーム毎) (串刺し面付けでは無効。串刺し番号では、デフォルト 0)

増加数(ドキュメント毎) (串刺し面付けでは、自動生成するので無効。串刺し番号では、デフォルト 0)

串刺し面付け(番号)は、通常の「番号発生」とは異なり、ページに割り付けられた各フレームが、各々単独にページの増加に伴って、その番号を増加させることが主要な機能となっています。
 従って、「開始番号」と「増加数(ページ毎)」のパラメータが基本となります。
 「増加数(フレーム毎)」は、「串刺し面付け」ではなく、通常の処理の場合に、フレームの増加で加算される値です。
 「串刺し面付け」では無視されます。
 「増加数(ドキュメント毎)」は、ページ分割処理を行う時に、各分割されたドキュメントで増加する値です。この値を、1分割で付けられる総番号にしておくと、分割したドキュメントの最初のフレームに挿入される番号が、前分割ドキュメントの最後のフレームに挿入された番号に連続します。このドキュメント毎の増加数が0の場合には、分割されたドキュメントの各フレームに挿入される番号は、前のドキュメントで該当するフレームに挿入された番号に連続します。

番号作成の計算式
 「串刺し面付け」

$$\text{開始番号} + \text{ページ毎増加数} \times (\text{ドキュメント相対頁数} + \text{ドキュメント毎増加数} \times \text{分割ドキュメント番号})$$

 ただし、ドキュメント毎増加数 = $\frac{\text{フレーム数}}{1 \text{ 頁}} \times \text{分割頁数}$ (個別ドキュメント適用)
 ドキュメント毎増加数 = 分割頁数 (全ドキュメント適用)

「串刺し番号」

$$\text{開始番号} + \text{ページ毎増加数} \times (\text{フレーム毎増加数} \times \text{フレーム番号} + \text{ドキュメント相対頁数} + \text{ドキュメント毎増加数} \times \text{分割ドキュメント番号})$$

中止 適用

1) 前置文字列

データ先頭に付加する文字

2) 後置文字列

データ末尾に付加する文字

3) 開始番号

開始する番号

4) 頁増加数

1 ページ毎に増加させる数

ただし、「2 頁毎に数字を増加させる」にチェックがある場合には、2 頁毎に増加となります。

5) 桁数

前ゼロありの場合の最小桁数

6) 頁中の次レコードへの増加数

1 頁内で複数レコード使用している場合に、レコード毎に増加させる数

7) ドキュメント毎の増加数

分割ドキュメント時に、ドキュメント毎に増加させる数

②表（単純挿入、ファイル）

挿入開始行番号

1

セルの自動拡張

挿入開始項目番号

1

最大項目数

0

単純挿入の場合の改行文字

|

項目区切り文字
(デフォルト全角スペース)

項目内改行文字

↑

画像ファイル拡張子

データがない場合の処理

何もしない

データ行数が短い場合の処理

何もしない

文字なしセルの斜線

斜線を引かない

斜線の太さ(Pt)

画像の揃え(文字)

テンプレートの設定に従う

画像の揃え(縦)

テンプレートの設定に従う

アセットの揃え(文字)

テンプレートの設定に従う

アセットの揃え(縦)

テンプレートの設定に従う

☐ 数値文字列に位取りカンマ挿入

マイナス表記文字の変更

最終行の上(右)線の太さ(Pt)

テキストフレームに貼り込まれた表にデータを流し込みます。テキストフレームに表は1個のみです。表に挿入するデータは、データ項目1項目に、表の全セルのデータを用意します。

データは、SpicyTagデータとして処理されます。

項目区切りは、デフォルトで全角スペースです。

ファイル挿入の場合には、プレーンなテキストファイルで、CR/LFの行終止のShift-JISファイルです。

表の項目数よりデータの項目数が多い場合、あふれたデータは挿入されません。

表の行数より、データ行が多い場合、あふれたデータは挿入されません。

画像を挿入する場合には、項目データに含まれるファイル拡張子を指定することで、画像ファイルとみなし挿入します。

アセットを挿入する場合には、データ項目の先頭に@ (全角)をつけることにより、その項目にアセットを張り込みます。

線の太さは、指定がない場合、テンプレートの設定値となります。

(例)

画像ファイル: 拡張子 .jpg と指定 (半角「/」で区切って複数の拡張子を指定可能です)

「****.jpg」とデータ項目に在れば、これを読み込み貼り付けます。

アセットの貼り込み:

「@*****」とあれば、*****をアセットとして貼り込みます。

中止

適用

1) 挿入開始行番号

データを挿入を始める、表の行番号、一番上 (右) の行を 1 番とした昇順の番号 (ヘッダー行数を含める)

2) 挿入開始項目番号

データを挿入を始める、表の項目番号、一番左 (上) の項目を 1 番とした昇順の番号

3) 最大項目数

1 行のデータを挿入する最後の項目番号

- この値が、実際の表の項目数より大きい場合には、表の最後の項目までとなります。
- この値が、実際のデータ項目数より大きい場合には、データの最後の項目までとなり、余った表のセルには何も挿入されません。
- この値が、実際のデータが項目数より小さい場合には、残りのデータ項目は挿入されません。

4) 画像ファイル拡張子

画像ファイルとして扱う、ファイルの拡張子で、複数の拡張子を、半角スラッシュ (/) で区切って指定できます。

5) データがない場合の処理

データ項目が未入力の場合の処理で、次の7種より選択。

- ・何もしない → 空白で表が残ります。
- ・表を削除し、テキストフレームを縮小する → テキストフレームは残り、表は削除されます。
- ・表を削除し、テキストフレームを上 (右) 揃え
- ・表を削除し、テキストフレームを中揃え
- ・表を削除し、テキストフレームを下 (左) 揃え
- ・表を削除し、テキストフレームを均等揃え
- ・テキストフレームを削除する → 表のあるテキストフレームごと削除します。

6) データ行数が (表行数より) 短い場合の処理

データ項目が、表の行数より少なく、未挿入の表の行が残る時の処理で、次の6種より選択。

- ・何もしない
- ・残りの行を削除し、テキストフレームを縮小する
- ・残りの行を削除し、表を上 (右) 揃えにする
- ・残りの行を削除し、表を中揃えにする
- ・残りの行を削除し、表を下 (左) 揃えにする
- ・残りの行を削除し、表を均等揃えにする

7) 単純挿入の場合の改行文字

いわゆる段落終始として行を強制改行させます。デフォルトは、半角「|」です。ファイル挿入の場合には、改行コード (0x0D0A) 固定となります。後述の連続表・積み木表では、全角の「↑」がハードリターンを表します。

8) 項目内改行文字

1 段落内のソフトリターンを意味する文字です。後述の連続表・積み木表では、全角の「↓」がソフトリターンを表します。

9) 項目区切り文字

データの項目を区切る文字で、デフォルトで、全角スペース「 」となっています。

単純挿入、ファイル挿入のいずれにも適用されます。

10) 画像揃え (横)

画像を挿入したセルでの文字方向への揃え方。次の5種より選択。

- ・テンプレートの設定に従う
- ・上 (左)
- ・中央
- ・下 (右)
- ・均等

11) 画像揃え (縦)

画像を挿入したセルの上下 (左右) 方向のそろえ方。次の5種より選択。

- ・テンプレートの設定に従う
- ・上 (左)

- ・中央
- ・下（右）
- ・均等

12) アセット揃え（横）

アセットを挿入したセルでの文字方向への揃え方。次の5種より選択。

- ・テンプレートの設定に従う
- ・上（左）
- ・中央
- ・下（右）
- ・均等

13) アセット揃え（縦）

アセットを挿入したセルでの上下（左右）方向への揃え方。次の5種より選択。

- ・テンプレートの設定に従う
- ・上（左）
- ・中央
- ・下（右）
- ・均等

14) セルの自動拡張

データ挿入があるセルの自動拡張の指定です。次の4種より選択。

- ・全ての項目で自動拡張する
- ・画像項目は自動拡張し、文字項目は自動拡張しないであふれ処理を行う
- ・画像項目は自動拡張せず、文字項目は自動拡張しないであふれ処理を行う
- ・画像項目は自動拡張せず、文字項目は自動拡張する

15) 文字なしセルの斜線

データ項目が未入力の場合（1レコード全てではなく）に、当該セルに斜線を引く時の選択。次の4種より選択

- ・斜線を引かない
- ・左上→右下
- ・右上→左下
- ・X点

16) 斜線の太さ（文字なしセル）

文字なしセルに斜線を引くと設定した場合、斜線の太さを Point 値で指定します。指定がない場合、InDesign のデフォルト値となります。

17) 数値文字列に位取りカンマ挿入

文字列で数値のみ（0-9 及び－、小数点（.））のデータ項目に対して、位取りのカンマを挿入する場合には、チェックします。小数点は、そのまま半角のピリオドとなります。

18) マイナス表記文字の変更

数値項目に「位取りのカンマを挿入する」を選択した場合、通常は、マイナスの値は、入力のマイナス記号

(半角 -) をそのまま使用しますが、他の文字記号に変えたい場合に設定します。

たとえば、入力では、- 12345 などとなっているのを ▼ 12,345 のようにしたい場合に指定します。

19) 最終行上(右)罫線の太さ

データ行数が可変の場合、挿入する最終行が表のどの行で終わるか分かりません、従って、最終行の上(右)の線を太くしたい場合にも、テンプレートでは設定できません。

そのため、ここで線の太さを指定することにより、最終行のみの線の太さを変えることが出来ます。

未入力の場合には、テンプレートの値が使用されます。

<<表に対する、テーブルスタイル、セルスタイルの設定方法>>

表に対して、テーブルスタイル、セルスタイルを設定するには、データ中で次のように記述します。

●テーブルスタイル適用

1 行目のデータ先頭に、次の定形でテーブルスタイル名を記述します。

[入力データ形式]

全角%で囲みます。

スタイルパスとシンボルとの間は、半角コロンで区切り、スタイルパスの区切りは、半角スラッシュ「/」で区切ります。

% TS:———— (スタイルパス) ————— % 1 行目データ

●セルスタイル適用

各項目のデータ先頭に、次の定形でセルスタイル名を記述します。

[入力データ形式]

全角%で囲みます。

スタイルパスとシンボルとの間は、半角コロンで区切り、スタイルパスの区切りは、半角スラッシュ「/」で区切ります。

% CS:———— (スタイルパス) ————— % 項目データ

(※1) スタイルパスは、テーブルスタイルもセルスタイルも次の通りです。

スタイルグループ名 / スタイルグループ名 / スタイル名

(※2) 使用できるアセットの形状は、「画像、EPS」のみとなります。PDF、形状、ページ、テキストは対象外となります。

(※3) データのハード・ソフトリターンの記入について。

通常表の場合には、半角「|」がハードリターンを、全角「↑」がソフトリターンを表しますが、連続表・積み木表では、全角の「↑」がハードリターンを、全角の「↓」がソフトリターンを表します。

②1-1 表（連続表頁の通常表）

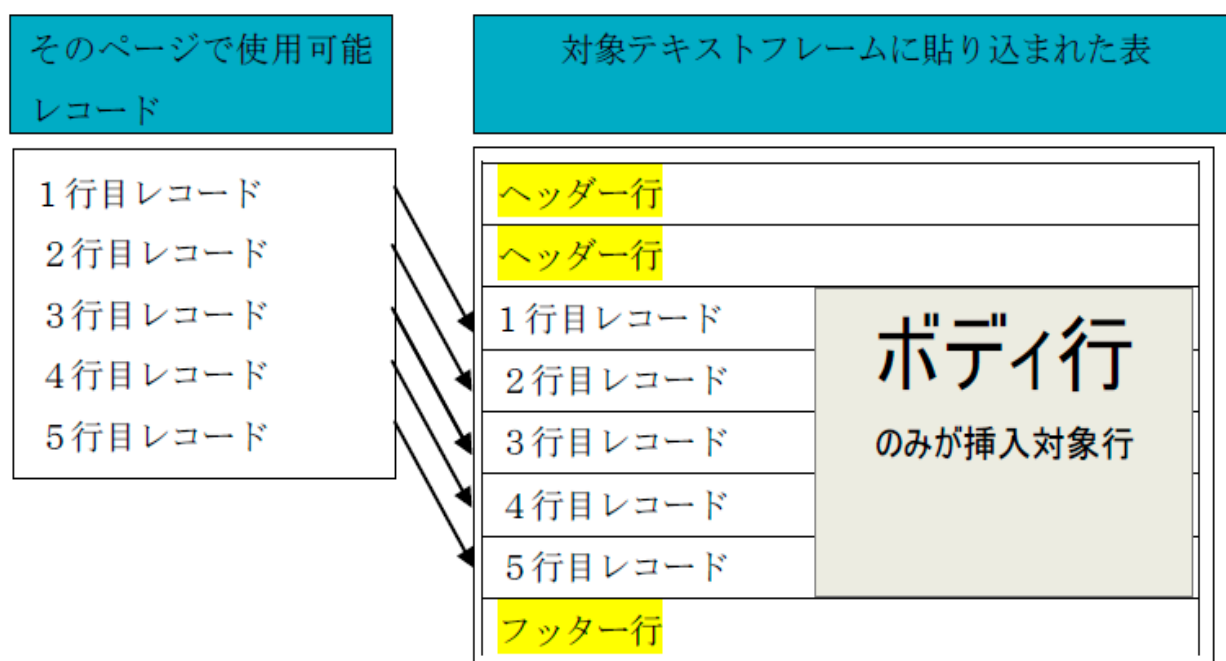
[概要]

インデザインテンプレートファイルのテキストフレームに貼り込まれた表（1 テキストフレームに 1 表でなければなりません。複数の表を扱いたい場合には、テキストフレームを別別に作成する必要があります）に対して、1 ページ分としてプログラムで読み込まれているデータすべての中から必要な行・列を選択し、表のセルにデータを挿入します。

この機能が利用できるのは、枝番号が「1」番のテキストフレームに配置された表だけとなります。複数のフレームセットがある場合でも、この機能は、枝番号が「1」のテキストフレームにのみ利用できます。

（逆に言うと、ページ当たりに処理するレコードが複数あり、フレームセットも、それに見合った数のフレームセットを作成した場合でも、この「連続表頁」を使用するテキストフレームは、枝番号が「1」のフレームセットにあるテキストフレームにおいてしか設定できないため、「1」以外のフレームセットでの「連続表頁」適用のテキストフレームは配置できないということになります。）表は、テキストフレーム 1 個に対して 1 表のみとなります。

[通常表のデータレコードと表との関係]



「通常表」では、挿入する表のボディ行にデータレコードが対応します。従いまして、表には、固定文字列行として、複数行のヘッダー行やフッター行を配することが可能です。ヘッダー行・フッター行は処理行数としてカウントしません。

そのページで利用できるデータレコード数が、表のボディ行より多い行番号のレコードは、無効となります。逆に、少ない場合には、設定に従います。

[設定方法]

①「データ種類」の「表」の処理区分の選択で、「連続表頁」を選択します。

連続表頁には、「通常表」と「マトリックス表」とがあります。ここでは、「通常表」の設定の仕方の説明を行います。

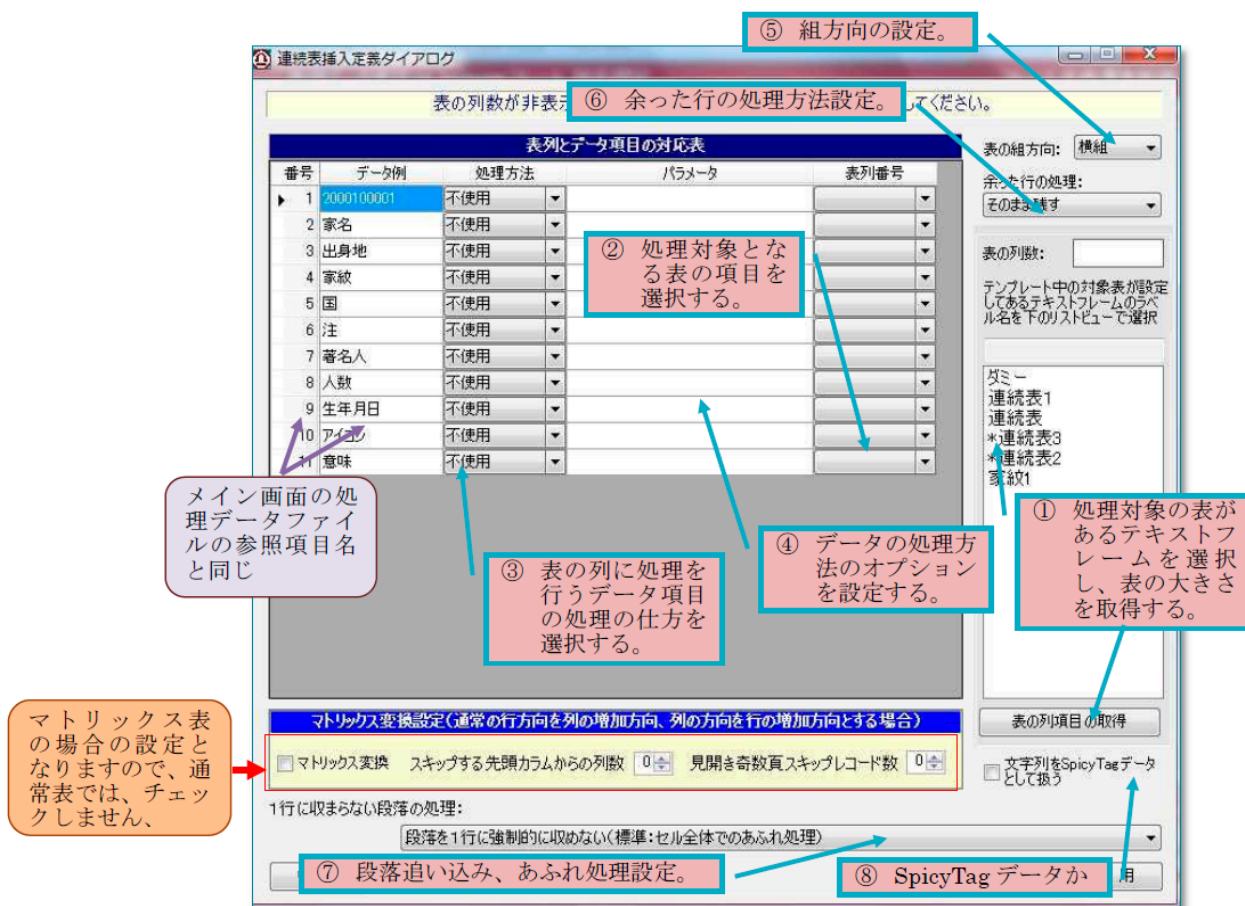
（「通常表」と「マトリックス表」の選択は、パラメータで行います。「通常表」がデータレコード項目の項目数の増加の方向と表中の行の列項目の増加の方向が一致するのに対し、「マトリックス表」では、データレコード

項目の項目数の増加の方向が表中行数の増加の方向に一致するという違いがあります)

不使用・改頁	▼	不使用	▼		
不使用・改頁	▼	不使用	▼		
表	▼	連続表頁	▼	00000,連続表,1,3,1/1/ 0 1	連続表
画像ファイル	▼	フレームにフィット	▼		家紋1
表	▼	連続表頁	▼	0,*連続表2,0,3,6/1//1,7/1/,	*連続表2
表	▼	連続表頁	▼	1,*連続表3,0,2,9/4//1,10/1,	*連続表3
表	▼	連続表頁	▼	1,連続表1,0,2,4/1//1,5/2/3	連続表1
不使用・改頁	▼	単純挿入			
不使用・改頁	▼	ファイル			
不使用・改頁	▼	積み木挿入			
不使用・改頁	▼	連続表頁			
不使用・改頁	▼	不使用	▼		

② 対象となる表が配置されているテキストフレームの名称をドラッグしてフレーム名称設定欄にドロップします。これで、どのテキストフレームに配置された表が対象となるのかが確定することとなります。

③ パラメータの設定を行います。パラメータ項目欄でマウスをダブルクリックし、パラメータ設定ダイアログを表示させます。設定が初めての場合、次図の様な設定ダイアログの初期状態の画面が表示されます。データ例とフレーム名称一覧は、メインのマッピングを行う際に読み込まれているものが受け渡され利用できるようになります。



設定する欄の構成は、SpicyLibra のメインの設定画面と同様の構成となっており、項目欄の左より、「レコード中の項目番号、処理データファイルの 1 行目の項目データ内容、表のセルに挿入する場合のデータの扱い方 (処理方法)、処理方法のオプションパラメータ、表の列番号 (横組表では最も左の列より 1, 2, …、縦組表では、天から 1, 2, …)」となっております。

基本的な設定方法の発想は、左より、データレコードのこの項目は、挿入するときこういう処理方法で (特別な処理方法が選択できれば、その指定した方法で)、指定した表の項目に挿入するという考え方となります。

通常表では、図中の番号①～⑧までの設定を行うことになります。

まず行わなければならないのは、テンプレートのどの表を使うのかが確定しておりませんので、どのテキストフレームに配置された表なのかを設定します (図中の①)。それには、画面右に、使用するインデザインテンプレートに配置されたテキストフレームのフレーム名称一覧リストがありますので、対象となるフレーム名称をマウスで選択します。選択したフレーム名称は、リスト上部にあるテキストボックスに表示されます。次に、そのテキストフレーム名称一覧リストの下にある「表の列項目の選択」ボタンをクリックします。すると、インデザインテンプレートが開かれ、指定された表にアクセスし、対象となる表の列数などを取得し、選択されたフレーム名称表示テキストボックスの上にある表の列数のテキストボックスに、取得した表の列数が表示されます。このインデザインからデータを取得する際には、若干の時間を要する場合があります。

ここまでで、はじめて、対象となる表の列数が確定できましたので、設定欄の「表列番号」のコンボボックスが有効となり、設定可能となります。すなわち、表の列数を取得したことで、実際の表の列数以上の列番号の設定できないようにし、設定の安全性を高めているわけです。たつまり、表列数が「6」列も表では、設定欄の「表列番号」のコンボボックスでは「1～6」までしか選択できないということになるわけです。ここから、図中の②、③、④の設定を行って、データ項目と表列項目との対応とり、データの扱い方を設定することになります。

図中の②では、データを処理する表の列番号を設定します。設定できる列番号は、「1～表列数」の値となります。図中の③では、使用するデータ項目の欄の処理方法コンボボックスをクリックして、データをどう扱うかを、「不使用、文字列、文字列差替、画像、アセット画像」の5種類の中から選択します。

「不使用」は、文字通り、このデータ項目は使用しないことを表します。

「文字列」は、表の列項目に、単純に、文字を挿入します。後述する SpicyTag を使用したデータである場合には、各種の文字属性を付加できますが、通常の文字列の場合には、限られた入力定型により、セルスタイルを変更することができるのみとなります。

「文字列差替」は、テンプレート表の対象セルに配置されているプレースホルダー文字列を、データ項目中の文字列に置換します。最大プレースホルダー数は10個までとなります。この最大プレースホルダー数の中で、使用する最大数を設定します。プレースホルダーは全角%及び全角数字（1～10）で構成され、「%5%」の様に設定されている必要があります。データは、各プレースホルダーと置き換えるデータを半角縦棒「|」で区切って、設定します。例えば、最大3個のプレースホルダーがテンプレート中の表セルに

「%1%は、%2%と%3%しました。」

などとあった場合、データが、「私|桜ドラゴンズ」とあれば、結果は、

「私は、桜ドラゴンズと野球をしました。」

となります。この中で、最後の「野球を」という文字列は、データ中にありませんが、最大3個とありますので、データが不足した場合のデフォルト値（パラメータで設定）が適用されたことになります。

「画像」は、インライン画像として挿入される画像のファイル名となります。拡張子付のファイル名で、設定ファイルにて指定したフォルダーに存在するものとします。従って、フォルダーパスは不要です。

「アセット画像」は、設定ファイルにて指定したアセットライブラリーに登録してあるアセット名となります。

図中の④では、処理種にオプションで処理機能を追加設定できる場合に、より細かな処理方法を指定するために設定します。このオプション設定を行う場合には、該当するパラメータ項目欄をダブルクリックし、パラメータ設定ダイアログを表示させて行います。ただし、オプション処理機能がない場合には、ダイアログは表紙されません。通常表の場合には、「アセット画像」処理を除き、すべてにオプション処理が設定できます。

「文字列」パラメータ

連続表文字列挿入パラメータ

付加項目・文字列

前置文字列:

前置連結項目番号: 前置項目後挿入文字列 ☐ 常時挿入

後置連結項目番号: 後置項目前挿入文字列

後置文字列:

☐ 付加文字列使用禁止の4文字「\」を全角文字「／」で入力し、処理のときに半角に変換する。

前置文字列、後置文字列、前置項目後挿入文字列、前置項目後挿入文字列、前置項目後挿入文字列には、半角|、|、|、|、|は使用できません。

挿入データがない場合には、上記付加文字はいずれも付加されません。

挿入文字列に対する前処理:

☐ 同じく処理(特定の文字1文字の場合に特別な処理をする)

同じく処理を選択した場合、上記の処理は無効となります。

特定文字(斜線用の\、／、×は除く) (デフォルトは、)

☒ センター揃えにする ☐ インデントして配置する(インデント量)

☐ 天地(横組、縦組:左右)をセンター揃えにする

● 前置付加文字列、後置付加文字列

データ文字列の前後に何らかの文字列（¥や円など）を固定的に付加したい時に設定します。ただし、データ文字列が空白の場合には、付加されません。設定の処理方法は通常の文字列挿入設定（P102）と同じです。

● 挿入文字列に対する前処理

表セルに挿入する前に、データ文字列に対して、次の前処理を行う場合に、選択します。次の6種類の方法が

何もしない。
 算用数字、1桁は全角数字に、連数字は半角数字に変換する。
 算用数字、すべて半角数字に変換する。
 算用数字、すべて全角数字に変換する。
 算用数字、すべて全角漢数字に変換する。
 算用数字をすべて半角数字にし、位取りカンマを挿入する。

選択可能です。

● 同じく処理

「〃」など、表では、前の行の項目と同じ場合に、代替文字1文字であらわすことがあり、ここでは、そのような扱いをする文字を設定し、同じく処理の方法を選択します。

同じく処理が選択されていて、対象となる文字が選択されていない場合には、デフォルト文字として「〃」を対象文字とします。

同じく処理としては、

- ・左右方向（横組、縦組：天地方向）の処理としてセンター揃えにするのか、インデント値を指定して頭下がりにするか。
- ・天地方向（横組、縦組：左右方向）の処理として、センター揃えにするか。

を設定します。

ただし、後述する「斜線文字」は除外されます。

「文字列差替」パラメータ

連続表文字差し替えダイアログ

使用する最大プレースホルダー数: 0

プレースホルダー文字列	置換文字列がない場合のデフォルト置換文字列
%1%	
%2%	
%3%	
%4%	
%5%	
%6%	
%7%	
%8%	
%9%	
%10%	

中止 適用

● 使用する最大プレースホルダー数

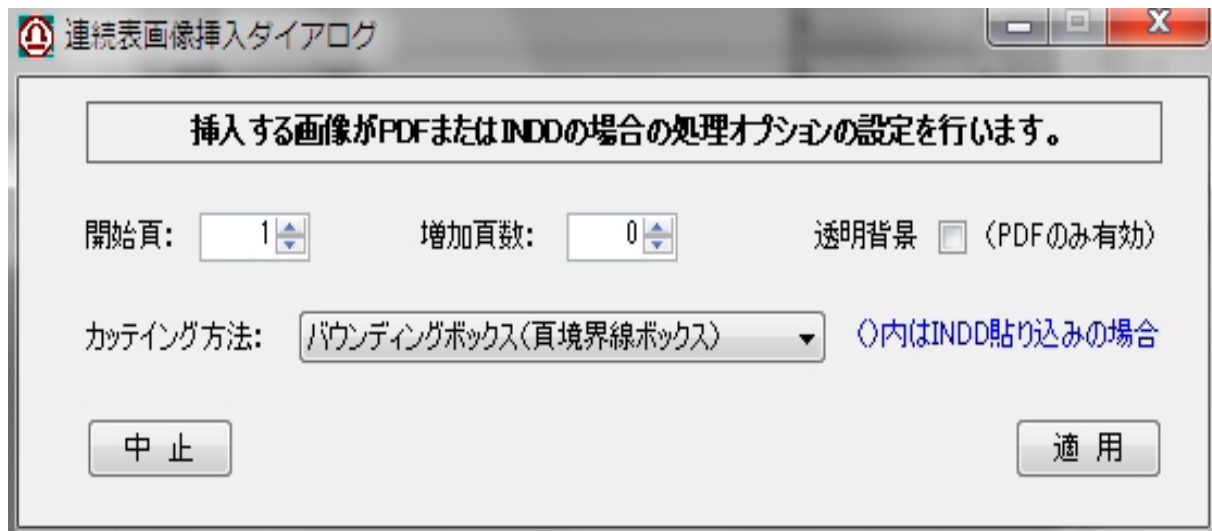
最大 10 個まで使用可能なプレースホルダーの何番まで用いるのかを設定します。この数を越えたプレースホルダーの設定は無効となります。

● 置換文字列がない場合のデフォルト置換文字列

データ中で、例えば、3 個までのプレースホルダー利用の設定がありながら、1 個や 2 個分しかデータがなかった場合、不足分をこのデフォルト文字列で置換します。

ただし、明示的に空文字がデータ中に設定されている場合には、プレースホルダー文字は、削除されます。

「画像」パラメータ



挿入する画像は、インデザインのインライングラフィックとして貼り込まれます。画像が PDF ファイル及びインデザインドキュメントである場合に設定するパラメータです。

● 開始頁

PDF やインデザインドキュメントは連続ページとして利用することがありますので、貼り込む対象となる PDF・インデザインドキュメントの開始頁番号を設定します。

● 増加頁数

1 レコードごとに挿入ページ数を増やしていく場合には、1 レコードごとに何ページ進めるかをさせて資します。「0」とあれば、毎レコード同一頁が挿入されることとなります。

● 透明背景

PDF 画像の場合のみ有効となり、背景を透明扱いにします。

● カッティング方法

バウンディングボックス (頁境界線ボックス)

アート (印刷可能領域境界線ボックス)

トリミング (印刷可能領域境界線ボックス)

トンボ (印刷可能領域境界線ボックス)

裁ち落とし (裁ち落とし境界線ボックス)

メディア (印刷可能領域境界線ボックス)

貼り込む画像のクリッピングエリアの設定となります。

PDF とインデザインドキュメントではカッティング方法が異なりますので、上記中、() 内の処理方法がインデザインドキュメントの場合となります。

インデザインドキュメントのほうが、PDF の場合より種類が少ないため、重複設定となっています。

図中の⑤では、表自体の組方向が横組みか、縦組みかを設定します。

図中の⑥では、表の行数より、実際にその頁に利用できるレコード数が少なかった場合の、データがない行の処理方法を設定します。

そのまま残す
データ行のみを削除する
フッター行を含めて削除する

「そのまま残す」は、削除しないで、そのままにしておきます。

「データ行のみを削除する」は、ボディ行のみを削除します。

「フッター行を含めて削除する」は、ボディ行とフッター行も削除します。

図中の⑦では、あふれ処理と段落追い込みの方法を設定します。

段落を 1 行に強制的に収めない（標準：セル全体でのあふれ処理）
段落を 1 行に強制的に収め、複数段落ある場合には、1 行で収まる段落に対しても、同じ率での扁平処理を行う
段落を 1 行に強制的に収め、複数段落ある場合には、1 行で収まる段落に対しは扁平処理をしない

「段落を 1 行に強制的に収めない」は、通常のアフール処理であり、セル全体の文字列を均一に処理します。

次の 2 つは、段落追い込みでセルをテキストがあふれていなくても実行します。強制的に、1 段落を 1 行とするように、扁平処理して追い込みます。

複数行に自動改行している段落のみで、かつ、複数の該当行がある場合、それぞれの段落を個別に追い込み処理を行うのが、3 番目の方法で、この場合には、各段落で、扁平率が異なる場合があることとなります。

それに対して、2 番目の方法は、いずれか一番長い段落を追い込んだ時の扁平率で、他の段落も扁平をかけるということを行います。従って、もともと 1 段落 1 行で扁平をかけなくてもよい行に対しても、扁平がかけられるという形になります。

図中の⑧では、データを SpicyTag(後述) で記述してあるか否かを設定します。SpicyTag を使用する場合には、「文字列—単純挿入」の SpicyTag の説明の箇所を参照してください。

ここまでの設定を行うと、必要な設定が終わり、次頁のような設定後の画面になります。

<連続表ダイアログ設定結果画面>

連続表挿入定義ダイアログ

表の列数が非表示の場合には、最初に、表の列項目の取得をしてください。

番号	データ例	処理方法	パラメータ	表列番号
1	2000100001	不使用		0
2	家名	文字列	0 1 〃 1 0 1	1
3	出身地	画像		2
4	家紋	画像		3
5	国	不使用		0
6	注	不使用		0
7	著名人	不使用		0
8	人数	不使用		0
9	生年月日	不使用		0
10	アイコン	不使用		0
11	意味	不使用		0

表の組方向: 横組

余った行の処理: データ行のみ削除する

表の列数: 3

テンプレート中の対象表が設定してあるテキストフレームのラベル名を下のリストビューで選択

連続表

- ダミー
- 連続表1
- 連続表
- *連続表3
- *連続表2
- 家紋1

マトリクス変換設定(通常の行方向を列の増加方向、列の方向を行の増加方向とする場合)

☐ マトリクス変換 スキップする先頭カラムからの列数 0 見開き奇数頁スキップレコード数 0

1行に収まらない段落の処理: 段落を1行に強制的に収めない(標準:セル全体でのあふれ処理)

中止 初めての設定の場合には、必ず、マトリクス変換を行うか否かを決めてください。
マトリクス変換を行う場合には、「マトリクス変換」チェックボックスをチェックしたのちに、他の設定に移ってください。

適用

この設定でOKの場合には、「適用」ボタンをクリックして、設定内容をメイン画面のパラメータ欄に反映させます。

[特殊文字・文字列の扱い]

同じく処理では、「〃」など、1文字のデータ項目文字・文字列に関して、特別な処理を行う機能を紹介しましたが、データ中に特定の文字や文字列がある場合、これまでの機能説明によらず、独自の処理を行うものがあります。

このような目的で使用される文字・文字列には、大別して、2つの種類があります。一つは、SpicyTagを使用しないデータを処理する場合に、表スタイル・セルスタイルを適用するための文字列で、従来の表スタイル・セルスタイルの設定の考え方を踏襲するもので、使用法の互換性を持たせたものです（このスタイル設定機能は、SpicyTagを使用する場合には、タグ属性の設定で適用します）。

もう一つは、データがない場合にセルに斜線を引くときに使用する文字となります。

● 表スタイル・セルスタイル

表スタイルは、表に挿入するデータの先頭行の先頭項目のデータが、

「% TS: 表スタイル名パス%」

という文字列で始まっている場合に、この定義された「表スタイル」を表に適用します。ただし、表スタイルは、テンプレートにあらかじめ設定しておかなければなりません。

表スタイルの後ろに続く文字列は、通常の挿入する文字列として扱われます。

スタイル名パスは、グループスタイルを可としておりますので、グループ名を各々、半角スラッシュ「/」で区切って指示します。

たとえば、「グループ 1 / サブグループ 2 / スタイル名」のようになります。

セルスタイルは、各項目の先頭（ただし、表スタイルが設定される場合には、表スタイル設定の直後）のデータが、

「% CS: セルスタイル名パス %」

という文字列で始まっている場合に、テンプレートに手あらかじめ定義されているスタイルを適用します。表スタイル同様に、グループスタイルの場合には、半角「/」でグループ名を区切って指示します。

これらのスタイル設定に用いるシンボルは、

「%」は全角のパーセント記号、

「TS,CS」は、半角欧文大文字、

「:」は、半角のコロンとします。

● 斜線文字

表スタイル設定、セルスタイル設定の文字列部分を除き、データ文字が 1 文字で構成され、以下の文字である場合には、それぞれ対応するインデザインの

斜線をセルに描画します。この場合には、SpicyTag 処理フラグとなっている場合でも、斜線処理のみが有効

入力データが「\」	→	斜線の「\」
入力データが「/」	→	斜線の「/」
入力データが「×」	→	斜線の「×」

となります。

斜線の太さは、0.1 ポイント固定となります。この入力は、画像、文字差し替え、アセット画像の場合も処理方法の種類を問わず、同じ処理となります。

[注意事項]

- ・連続表として使用できるテキストフレームは、枝番号「1」のみです。
- ・セルのマージは、ヘッダーフッター以外はできません。
- ・ヘッダー行、フッター行を除き、ボディ行でのセルマージは扱えません。
- ・あふれ処理はセルごとに行われますので、セルの自動拡張モードがオンになっている場合には、セルのオーバーセットフラグが、自動拡張の最大高さを超えない限り、あふれとなりませんので、注意してください。あふれとならない場合には、当然のことながら、あふれ処理は行いません。

ただし、段落追い込みのモードになっている場合には、セルあふれの状態とは関係なく、1 段落を 1 行に追い込む処理を実行します。

- ・画像挿入・アセット挿入の場合、インライングラフィックとして挿入しますので、画像サイズの調整は行いません。原寸で貼り込まれます。

テンプレート中に設定する表の行の高さと列の幅を十分に確認し、画像がセルを超えないように設計してください。天地方向は、行の自動拡張が設定されていれば拡張されますが、列幅は自動拡張しないので、注意してください。

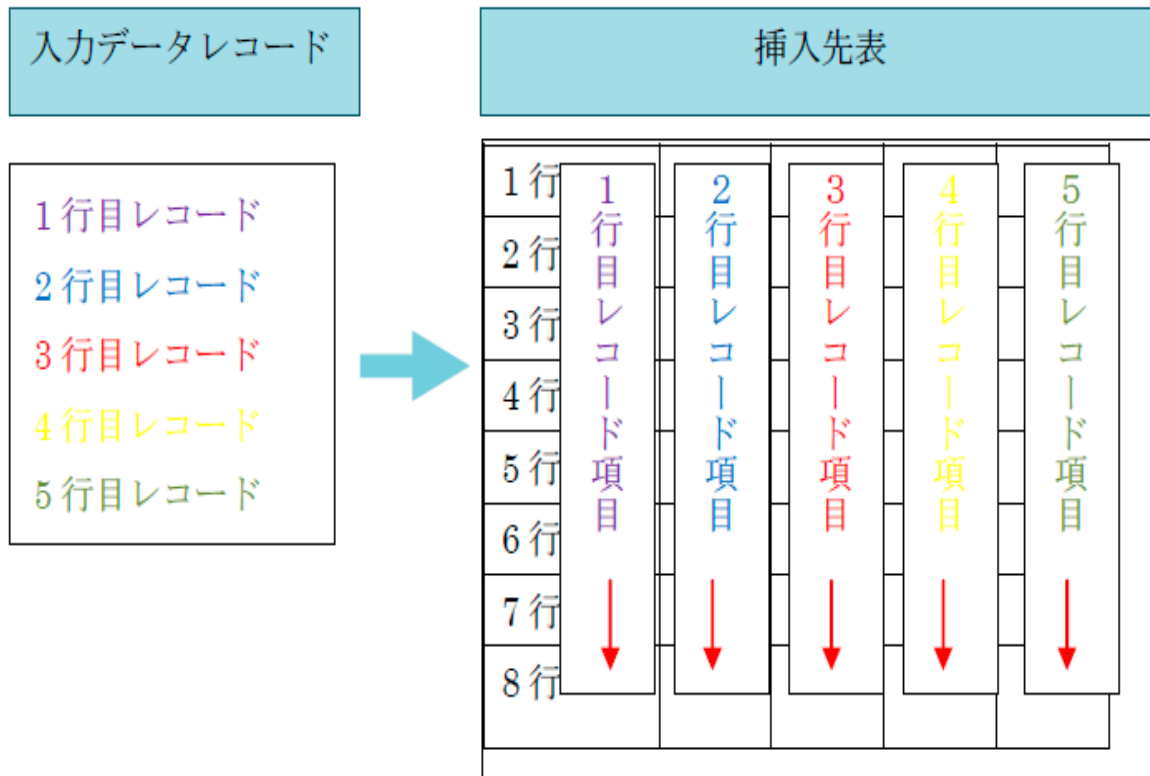
画像挿入のセルに関しては、あふれ処理は行いませんので、テンプレートでの表作成には、十分注意してください。

②1-2 表（連続表頁のマトリックス表）

〔概要〕

「マトリックス表処理」は、連続表頁処理の一種であり、通常の連続表ページ処理とは、データレコードの1行の項目を、通常表処理では、テンプレートに貼り込まれた表の項目に対応させデータを挿入するのに比べ、データレコードの1行の項目をテンプレートに貼り込まれた表の行に対応させるという、挿入するセルへの対応が、いわば行列を90度回転させたような処理を行う点が異なっていますが、その他の点については、通常表の処理と基本的には同じです。従いまして、本項で記述されなかった点に関しましては、「②0-1 表（連続表頁の通常表）」の項を参照してください。

〔データレコード行と挿入先表行・列の関係〕



上図でわかるように、データレコードの1行が、表の1項目に対応するように変換されます。

従って、データレコードの1行N項目の内容は、表のM行1列のセルに挿入されることになります。この、データレコードのN項目と表のN行とを対応させることが重要となります。

〔設定方法〕

連続表の通常表と同じように、メイン画面で連続表のダイアログをメイン画面のパラメータ欄をダブルクリックし表示させます。

- ① 「データ種類」の「表」の処理区分の選択で、「連続表頁」を選択します。
- ② パラメータ欄をダブルクリックし、連続表の設定ダイアログを表示させます。
- ③ この連続表の設定ダイアログは、通常表と同じ画面となっています。しかし、画面下部の設定欄で、マトリックス変換をチェックすると、画面の設定項目のいくつかの表現が「列 → 行」あるいは「行 → 列」に変更されます。

すなわち、データレコードの項目ごとに多雨欧する相手が、表の列から行になったことで、このように、変更されたわけです。

この「マトリックス変換」チェックボックスにチェックをし、通常表と同じようにデータレコード項目と表の行との対応を設定します。

「マトリックス変換」チェックボックスをチェックすると、上の図中



の部分4か所が、通常表の表現から変更となり、「列→行」、「行→列」となります。

- ④ このマトリックス変換設定の画面にした後、通常表と同じように、使用するデータレコード硬膜の、処理方法、パラメータ、挿入先の表があるテキストフレーム名などを設定します。この設定方法などは、通常表とまったく同じのため、通常表の設定方法を参照してください。

注意しなければならないのは、通常表では、例えば、横組みの場合、データ入力項目に対応する表は「列」となるため、意識が右横方向に行きがちですが、マトリックス表では、表の行に対応させますので、意識を下に向けて設定しないといけないという点です。

- ⑤ 「通常表」とは異なる「マトリックス表」固有の設定を行います。

「マトリックス変換関連」と記され、赤枠で囲まれた設定項目のみが、「マトリックス表」固有の属性設定の部分となります。

- 「マトリックス変換」チェックボックス

「通常表」と「マトリックス表」の設定を変えます。このチェックボックスを変更する場合、それまで設定した内容は消去されますので、むやみに変更をしないようにしてください。

- スキップする先頭カラムの行数

表の列を何列飛ばした列からデータレコード行の挿入を開始するかを設定します。これは、表には、行ヘッダーというものがないため、各行の固定的なヘッダー文字列などを挿入させるために、必要な列数をヘッダー項目として利用できるようにしたものです。そのため、この行ヘッダーとして使用した列数部分をスキップさせた列からデータレコードを挿入させるために、スキップする列数を設定します。行ヘッダーの様な固定的な使用がされない場合には、「0」とします。

スキップ可能な列数は、最大3列までです。

卸価格	Data1-1	Data2-2
定 価	Data1-3	Data2-5
粗 利	Data1-8	Data2-5

行ヘッダー

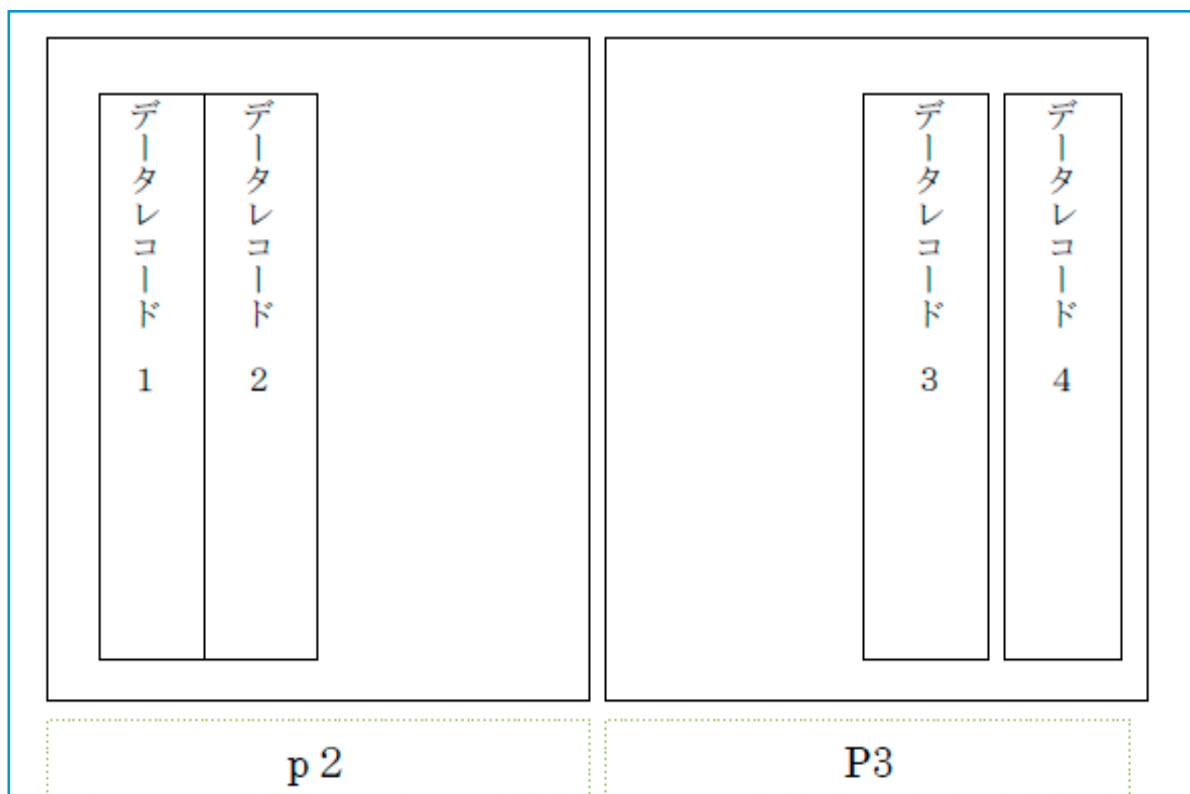
挿入データ

● 見開き奇数頁スキップレコード数

これは、ページ作成方法を「1レコードで2頁」を作成する見開きページモードの場合に有効となる機能です。

このページ作成モードでは、見開き2頁を単位としてインデザインのレイアウトが行われることを前提としておりますので、例えば、連続表で6行のデータレコードが扱えるとした場合、偶数ページでデータレコードの先頭から3レコードを、奇数ページで、データレコードの4レコード目から残りのレコードを扱うといったような分割をさせるような場合に、偶数ページは必ず1レコード目からの処理としないといけないのですが、奇数ページのマトリックス表では、挿入させるデータレコードを、その頁用に取り込んだデータレコードの何レコード目から行うかを設定でき、このスキップレコード数が、その値となります。

[データレコードを見開き両面で分割使用例]



上図の場合、スキップレコード数は、「2」ということになります。

偶数ページは、データレコードの開始レコード番号が1からであり、インデザインテンプレートにて作成された表の列数までのレコードが処理されます。

奇数ページは、スキップしたデータレコードから、処理が開始され、表の列数までのレコードが処理されます。

⑥ 余った列の処理

通常表では、テンプレート中の表の行数よりデータレコードのレコード数が少ない場合に余った行数をどうするかという処理がされましたが、マトリックス表では、行方向にデータレコード項目を設定するため、データレコード数が不足するのは、表の列数に対してということになります。そこで、マトリックス表では、余った列をどう処理するかという設定になります。

そのまま残す
削除する

この2つから選択します。

削除を選択した場合、ヘッダー行、フッター行が設定されている場合には、ヘッダー行・フッター行の該当する列の項目も削除されます。

[特殊文字・文字列の扱い]

「通常表」と同じです。「通常表」の説明を参照してください。

[注意事項]

次に記す「マトリックス表」固有の注意事項以外は、「通常表」と同じため、「通常表」での説明を参照してください。

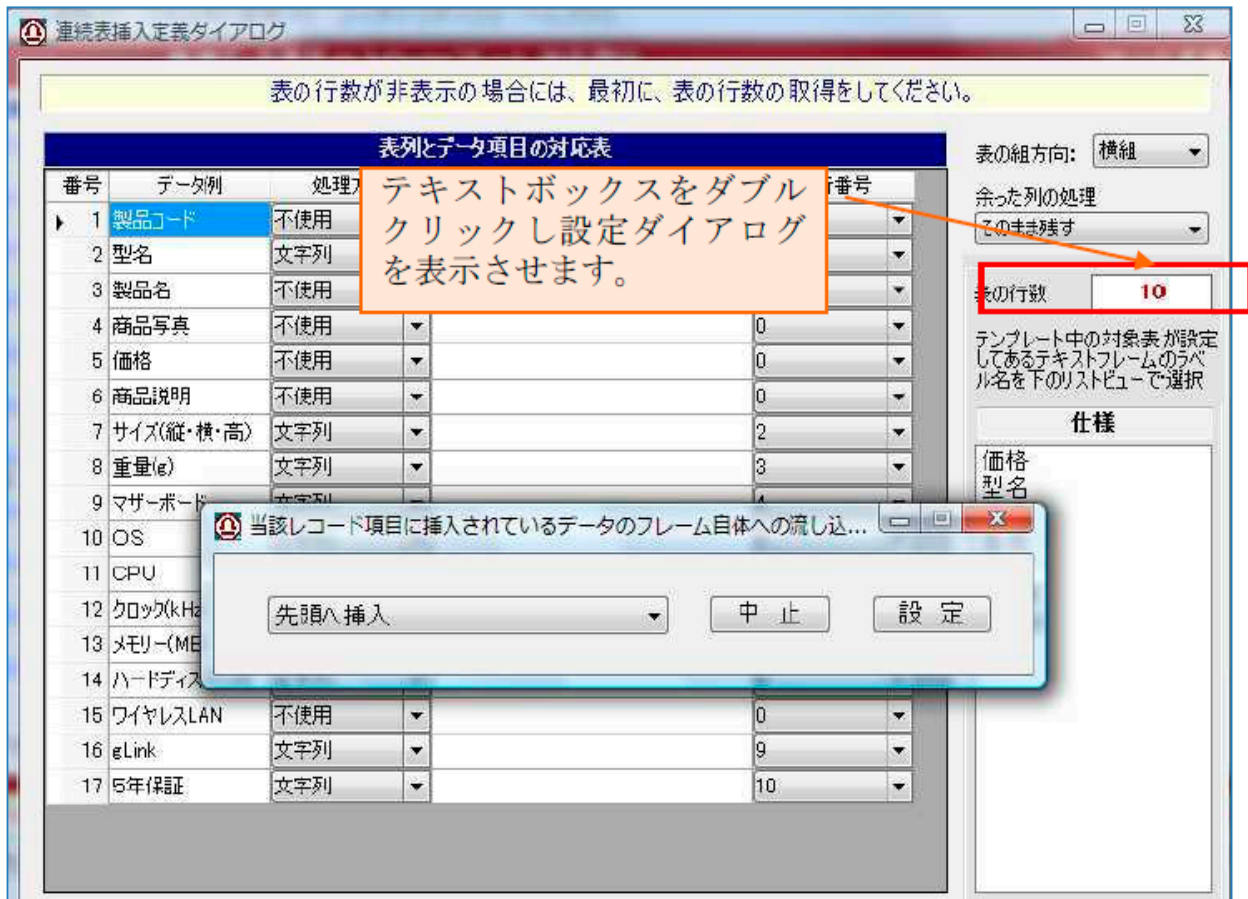
(※) ヘッダー行・フッター行を使用する場合、ヘッダー行・フッター行でもセルのマージはできません。

<<連続表の親フレーム処理>>

連続表（通常表及びマトリックス表）では、主に、親のテキストフレームに配置された表に対する処理がメインとなりますが、親テキストフレームに、データを挿入したい場合（例えば、表ごとに異なる注意書きなど）があります。

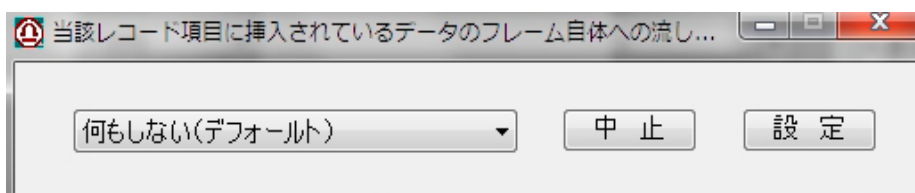
本来ならば、テキストフレームに表と文字列というか天地方向の可変要素が重なるため、親フレームへのテキスト挿入は禁止しております。

しかしながら、上記の例のように、1～2行でよいから、親のテキストフレームへテキストを挿入したいというご要望に答え、親テキストフレームに対するテキスト挿入機能を設けました。



処理場、特異なケースであるため、この処理に関しては、1～2行程度の小行数で、かつテンプレート作成時に、親テキストフレームに入りきる量であることを十分チェックのうえ、ご利用ください。

使用する場合には、連続表のパラメータ設定ダイアログを表示し、「表の行（列）数」が表示されるテキストボックス（読み取り専用）のテキストボックス内でマウスをダブルクリックしてください。



親テキストフレームに対する、その親フレームに対応するデータレコードの項目の文字列をどう処理するかが選択できるようになります。

何もしない（デフォルト）
 先頭へ挿入
 末尾へ挿入
 %1% などプレースホルダーと置き換える

デフォルトは、何もしない、つまり、データを挿入しません。

「先頭へ挿入」は、親テキストフレームの先頭の挿入位置に挿入します。

「末尾へ挿入」は、親テキストフレームの最後の挿入位置に挿入します。

「% 1% などプレースホルダーと置き換える」は、あらかじめ親テキストフレームに挿入されている文字列のプレースホルダー文字列と置き換えます。

プレースホルダー文字列は、すべて全角で、「%数字%」（例えば、% 1 0 %）で指定します。

対応させるデータ項目の文字列は、そのプレースホルダーの数に合わせて、必要分の文字列を全角「|」で区切って設定します。

すなはち、「% 1 %では、% 2 %が行われる。」と親テキストフレームに配置されているとし、データ項目に、「日本|正月」とあれば、

% 1 % → 日本、 % 2 % → 正月

に置き換えられ、

「日本では、正月が行われる」

となります。

この処理方法を選択し、何もしないというデフォルト値以外を選択した場合、連続表パラメータ設定画面の「行数表示」の項目が、次のように変わります。



すなはち、処理方法の「1」番「先頭へ挿入」を選んだことを表しています。

②1-3 表（積み木挿入・ダルマ落とし）

〔概要〕

「データ種」の「表」の処理区分（機能）の一つとして、「**積み木挿入**」の処理機能を追加しました。本機能は、名刺やDMなど、複数の住所行や肩書行などが連続する場合、住所行や肩書行の数が不定になりがちであるという特徴があり、データが挿入されない空白行が発生し、前後行で空白が生じる状態となるといったレイアウト上の不都合が起りがちであることに対応した機能です。

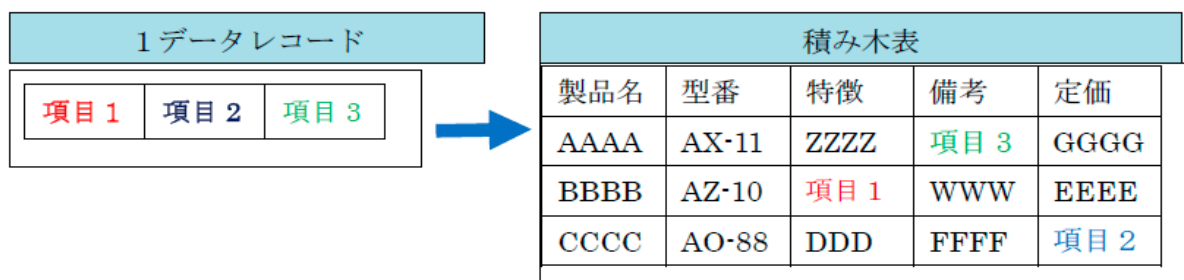
本機能は、このようなデータ未挿入行を削除し、前後行を詰めて空白行をなくした組版をすることを目的としています（積み木挿入機能で作成される「**積み木表**」は、行が下に移動する様子から「**ダルマ落とし**」といわれることもあるようです）。

「連続頁表」がデータレコード行とデータ挿入する表の行（または列）と固定的な関係を持てていましたが、本機能では、データレコード1行に対して全体のセルとの関係となるため、より自由なデータ項目とセルとの関係を構築でき、自由度の高いレイアウトを可能としています。

また、本機能では、「連続頁表」と同様に、処理対象の表が貼り込まれたテキストフレームにて、そのページ処理用に読み込まれたデータレコードのレコード項目のすべてを利用できますが、「連続頁表」が、読み込まれたデータレコードのすべてを利用可能であるのに対し、処理対象となっているテキストフレーム名称の枝番に対応するレコード番号のデータレコードのみが利用できるという違いがあります。

すなはち、「連続頁表」では、「行（または列）」に固着したマッピングしかできませんでしたが、本機能では、表の行・列に固着されることなく、データレコードの項目と自由なセル（行・列の位置）とのマッピングが可能となっていると言えます。

〔積み木挿入のデータレコードと表との関係〕



（AAA などは固定項目）

例えば、上図で、「項目 1」のデータが空行であった場合、右図のように、該当刷る表の行を削除し、行を詰めることが可能となります。空きは、テキストフレームにて吸収します。

製品名	型番	特徴	備考	定価
AAAA	AX-11	ZZZZ	項目 3	GGGG
CCCC	AO-88	DDD	FFFF	項目 2

〔設定方法〕

メイン画面にて、「表」の処理方法で「積み木挿入」を選択します。

不使用・改頁	▼	不使用	▼		
不使用・改頁	▼	不使用	▼		
表	▼	連続表頁	▼	00000,連続表,1,3,1/1/ 0 1 /	連続表
画像ファイル	▼	フレームにフィット	▼		家紋1
表	▼	連続表頁	▼	0,*連続表2,0,3,6/1//1,7/1/,	*連続表2
表	▼	連続表頁	▼	1,*連続表3,0,2,9/4//1,10/1,	*連続表3
表	▼	連続表頁	▼	1,連続表1,0,2,4/1//1,5/2/3	連続表1
不使用・改頁	▼	連続挿入	▼		
不使用・改頁	▼	ファイル	▼		
不使用・改頁	▼	積み木挿入	▼		
不使用・改頁	▼	連続表頁	▼		
不使用・改頁	▼	不使用	▼		

「積み木挿入」の選択をすると数のように、「積み木挿入」のダイアログが表示されますので、データレコードの使用する項目と表セルの対応付けを行います。また、各種の処理パラメータの設定を行います。

[積み木挿入設定ダイアログ初期画面]

- ① データレコードと表のセルとの関連付けを画面左のグリッドビューで行います。

まず、挿入対象となる表のセルを特定する方法として、表のセルの番号を利用します。そのセル番号の指定は、グリッドビューの「表の行番号」と「表の列番号」のコンボボックスで行います。

表のセルの番号に関しては、インデザインテンプレートに貼り込んだ実際の表を参照しながら、セルを特定する行と列の番号を確認し、この2つのコンボボックスで値を設定します。

セルを特定する表の行と列の番号は、「積み木挿入」の表では、列間のマージを許可していますので、単純に、碁盤目の位置のようには確定できません。マージされた列に注意して決めることになります。ただし、行と列のマージはできませんので注意してください。

表のセルを特定する行番号は固定的に決まりますが、列番号はマージされた以降の見た目の番号となります。

[表セル番号の例]

1 行 1 列	1 行 2 列	1 行 3 列	1 行 4 列	1 行 5 列
2 行 1 列			2 行 2 列	2 行 3 列
3 行 1 列	3 行 2 列	3 行 3 列		3 行 4 列
4 行 1 列	4 行 2 列	4 行 3 列	4 行 4 列	4 行 5 列
5 行 1 列	5 行 2 列		5 行 3 列	

データレコード項目を挿入処理する以外の表セルには、固定的に、文字列や画像などをあらかじめテンプレート上で貼り込んでおくことができます。

「積み木挿入」処理として扱うことのできる表は、最大 10 行 * 最大 10 列で、データレコード項目を挿入処理できるセル数の最大は、30 個までとなっています。

- ② 次に、当該セルに挿入するデータレコードの項目の指定を、やはりグリッドビューの「挿入項目番号」のコンボボックスで設定します。挿入するデータレコード項目に関しては、画面中央にて、参照用の「データ項目ヘッダー」として、メイン画面の「データ例」と同じものが表示されますので、その表示を参考にしながら、コン

ボックスの値を設定します。

③ 次に、処理オプションとしての、パラメータ設定を行います。

グリッドビューでは、挿入するデータの処理方法として、「文字」、「画像」、「アセット」のいずれかを設定できますが、「連続表処理」と異なり、セルごとに処理方法を設定で決めるのではなく、データの先頭文字列の特定のフォーマットにより決定します。ただし、アセットについては、パラメータ設定はありません。

そのデータの書き方は、次のようになっています。

① 文字列

全角「@」で始まる文字列で始まらないもの。または、全角「@@」で始まり「@」機能がエスケープされている場合には、文字の「@」として1文字扱いを行います。

② 画像

全角「@」で始まる文字列で、画像ファイルの拡張子が付いており、実際にファイルとして存在する場合。ただし、「@@」で始まる場合には、画像と認識しません。この画像ファイルの指定に続き、半角「|」で区切って、続けて、同一セルに配置する文字列を設定できます。

③ アセット

全角「@」で始まる文字列で、画像ファイルとして認識されないもの。全角「@」で始まり、画像ファイルとしてもアセットとしても認識できなかった場合にはエラーとなります。ただし、「@@」で始まる場合には、アセットと認識しません。このアセットの指定に続き、半角「|」で区切って、続けて、同一セルに配置する文字列を設定できます。

パラメータ項目欄をダブルクリックすると、文字列処理のパラメータなのか画像処理のパラメータなのか、のどちらを設定するか問い合わせのメッセージボックスが表示されます。

設定するパラメータの種類を選択してください

文字列挿入 ▼

中止 実行

設定する処理を選択します。

各々、次のようなダイアログが表示されます。

[文字列挿入] パラメータ

挿入文字列の先頭・末尾に自動的に付加する文字列を設定します。

付加項目・文字列

前置文字列:

前置連結項目番号: 前置項目後挿入文字列 ☐ 常時挿入

後置連結項目番号: 後置項目前挿入文字列 数条挿入

後置文字列:

☐ 付加文字列使用禁止の4文字(〃/〃)を全角文字(〃/〃)で入力し、処理のときに半角に変換する。

前置文字列、後置文字列、前置項目後挿入文字列、後置項目前挿入文字列には、半角「|」、「^」、「/」、「|」は使用できません。

常時挿入とは、連結項目にデータがない場合でも挿入文字列を挿入するという意味です。挿入データ自体がない場合には、挿入しません。

挿入データがない場合には、上記付加項目・文字列はいずれも付加されません。

挿入文字列に対する前処理:

桁取りをおこなう場合には、算用数字(小数点のピリオドはOK)だけの文字列でなければなりません。

1行に収まらない段落の処理:

(注) 連結する順番は、次のようになります。

前置文字列 + (前置連結項目データ + 後挿入文字列) + 本データ + (前挿入文字列 + 後置連結項目データ) + 後置文字列

この文字列処理パラメータ設定の設定項目は、「連続表頁」における文字列処理パラメータの設定項目と同じですので、詳細につきましては、そちらを参照してください。設定できる項目は以下の通りです。

- データの前後に付加する文字列。
- データ挿入前の前処理方法の選択。
- あふれ処理及び段落追い込み処理方法の選択。

[画像] パラメータ

積み木表画像挿入ダイアログ

挿入する画像がPDFまたはINDDの場合の処理オプションの設定を行います。

開始頁: 増加頁数: 透明背景 ☐ (PDFのみ有効)

カッティング方法: [\(内はINDD貼り込みの場合\)](#)

画像処理パラメータは、挿入する画像がPDFあるいはINDDの拡張子をもった複数ページで構成される画像ファイルに対してのパラメータとなります。

この画像処理パラメータの設定に関しても、「連続表頁」における画像処理パラメータと同じとなりますので、詳細につきましては、そちらを参照してください。設定可能な項目は以下の通りです。

- 貼りこみ開始頁
- 貼りこみ頁数の増加頁数
- PDF の場合の背景透明処理
- カッティングの方法

以上の設定終わると、グリッドビューに基本的なデータレコード項目と表セルとの対応付けが完成され、次のような設定後の画面となります。

上図でもお分かり頂けるように、表の行と列の設定に関しては、必ず、「若い行番号+若い列番号」を基準として小さい番号から大きい番号への昇順で設定してください。

なお、グリッドビューにて行を削除する場合には、マウスにて削除する行を選択後、グリッドビュー直下の「行削除」ボタンをクリックしてください。

④ 「表の組方向」

表組みが横組みか縦組みかを選択します。

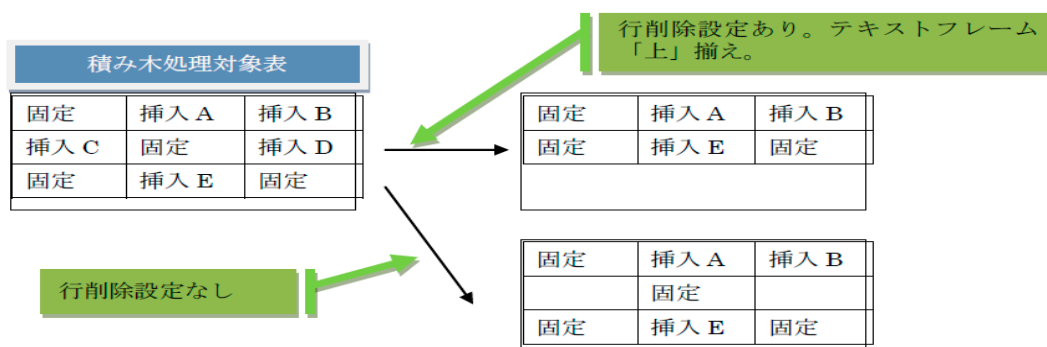
⑤ 「表データがない場合に削除する行番号」

「積み木挿入」処理で扱う表は最大行数が 10 行という制約があります。その各行に対して、その行の挿入データがない場合に削除するか、そのまま残しておくかを、この設定で決めます。

ここで、行番号が設定された行は、当該行のデータ挿入対象セルのすべてに対して、データが未挿入の場合に、削除されます。

削除するか否かは、あくまでも「データを挿入する対象セル」に関して、未挿入で終わったかどうかであり、その行の固定データセルに何らかのオブジェクトが配置されていたとしても、データ挿入が未挿入で削除対象行の設定がされていれば、削除します。

データ未挿入で行が削除された後の、表とコンテナーであるテキストフレームとの間に生まれる空白に関しては、表の前後（縦組：左右）に寄せるなどの処理は、そのテキストフレーム設定でされている揃えに従い処理されます。



- ⑥ SpicyTag として文字列データを扱うか
「文字列—単純挿入」を参照してください。

[[特殊文字の扱い]]

データ種類にかかわらず、データが次の 1 文字で構成されている場合には、インデザイン表の斜線として処理を行います。

全角「\」 → インデザインの左上→右下の斜線。
全角「/」 → インデザインの右上→左下の斜線。
全角「×」 → インデザインの×の斜線。

[注意事項]

- ・表は、テキストフレーム内に一表とします。
- ・連続表頁と異なり、すべてボディ行で作成してください。
- ・セルは、マージすることが可能です（列方向のみ）、が、マージの順番などによって、セルを特定する番号が予期しない値になる場合があります、そのような場合には、うまくいかないことがありますので、あらかじめ、ご承知おきください。
- ・InDesignCS5 以降、「テキストフレームの設定」ダイアログに「列を揃える」チェックボックスが追加されましたが、このチェックボックスにチェックがされていない場合、揃えを「中央」にしている場合、SpicyLibra にて処理した表が、中央に揃わないという場合が発生する現象が報告されました。
「列に揃える」にチェックがある場合には、きちんと揃えが有効となりますが、そうでない場合には、揃えが不定となります。そのため、表にデータを挿入後、強制的に、表を挿入しているテキストフレームの揃えを再設定するようにしています。

【文字差し替え挿入】（SpicyLibraCC2019 より機能追加）

テンプレートの表セルに差し替え文字列用のプレースホルダー文字列が設定されている場合には、当該セルへの処理は、文字差し替えを行うものとし、データ中に記述された各プレースホルダー文字列に対応する文字列に差し替えられます。

(例) テンプレートセル内文字	挿入文字列	結果
① 明日、% 1 %へ% 2 %に行く。	東京 旅行	明日、東京へ旅行に行く
② 明日、% 1 %へ% 2 %に行く	大阪	明日、大阪へに行く
明日、% 1 %へ% 2 %に行く	大阪	明日、大阪へ% 2 %に行く
③ % 1 %、% 2 %、% 3 %	愛知 静岡	愛知、静岡、% 3 %
④ % 1 %、% 2 %、% 3 %	愛知 静岡	愛知、静岡、
⑤ % 1 %、% 2 %	東京 福岡	埼玉 東京、福岡

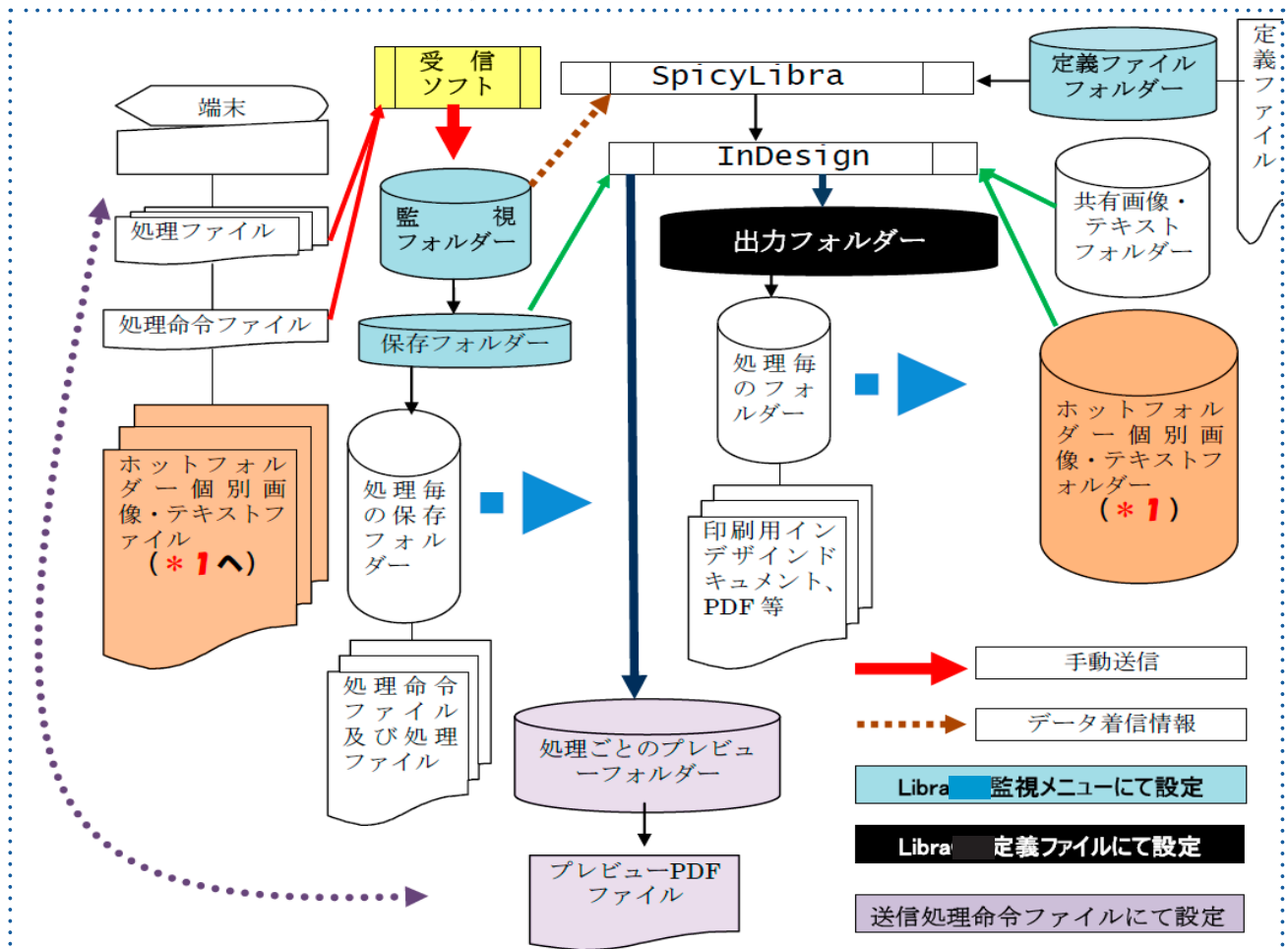
- プレースホルダー文字列は、% 1 %～% 1 0 %までの 1 0 個まで記述可能。全角の%記号に、全角の 1 ～1 0 までの数字を囲み記述します。複数設定する場合には、1 から順番に飛び番が無いようにします。
- 挿入文字列は、各プレースホルダーに差し替える文字列を、半角 |（縦棒）にて区切って挿入します。
複数の交換で、途中にデータ挿入なしの削除のプレースホルダーがある場合にも半角 | を省略しないで記述します。
- ※ 文字差し替えと判断するには、テンプレートに、プレースホルダー文字列がきちんと記述されている事及び挿入文字列が差し替え文字列と半角 | のみで記述されていることが必須条件となります。当然のことながら、当該セルは、文字列挿入セルとして定義される必要があります。
- ※ 文字差し替えの処理の場合は、前置・後置文字列機能や画像、アセット挿入は有効となりません。ただし、あふれ処理の対象にはなりません。

第 10 章 ホットフォルダー機能（フォルダー監視）

ホットフォルダー機能は、指定されたフォルダーを敢為することで、特定ファイルの受信を感知し、それをきっかけとして、SpicyLibraでの自動処理を行うものです。ただし、串刺し面付は除外となります。

ユーザーは、特定のファイル形式の処理内容を記述したxmlファイル(処理命令ファイル)と、実際に処理を行うファイル(処理ファイル)を、[処理ファイルの送信→処理命令ファイルの送信の順番](#)に、SpicyLibra が監視しているフォルダー(ホットフォルダー)に送信することで、処理命令ファイル中に記述された定義ファイルを読み込み、必要な処理環境を構築して実行を行わせることができますので、ワークフローのルート化を図ることが可能となります。

まず、ホットフォルダー機能の全体的な流れを図示します。



送信端末と処理端末が同一である場合、監視フォルダーに直接、処理関連のファイルを送信できますが、そうでない場合には、「受信ソフト・フォルダー」にて一旦受信し、そこからは、手動にて監視フォルダーにコピーすることが求められます。

「受信ソフト・フォルダー」に関しては、ユーザー様により用意をしていただきたいと思います。これは、Adobe 社の InDesign の使用権が、InDesign のドキュメントサーバー的な使い方を認めていないための措置となりますので、一旦外部からのデータファイルを別にストックし、そのフォルダーから手動にて、直接、監視フォルダーに移動・コピーしていただければ自動処理を実行いたします。

ちなみに、InDesign のサーバー版というものも販売されておりますが、通常ご使用になるクライアント版の価格をはるかに超えた高価なものとなっております。ただし、**SpicyLibra** は InDesign サーバー版には対応いたしておりません。サーバー版でのご利用をお考えの方は、別途、有償での移植をお申し出いただければ検討させていただきます。

この章では主に、**処理命令ファイルのフォーマットの説明を中心に話を進めます**ので、監視フォルダーの設定の方法は、後述の「**監視フォルダー機能**」の章を参照してください。

① 必要なファイル

処理に必要なファイルは以下のようになります。

●送信側（いずれも必須）

- ・ 処理ファイル（処理に際し、実際に流し込むデータファイル）
- ・ 処理命令ファイル（処理に際し、必要な事項を記述したもの）

●受信側

- ・ SpicyLibra 定義ファイル（必須）
- ・ InDesign ドキュメントテンプレートファイル（必須）
- ・ 画像ファイル、テキストファイル、各種テーブルファイルなど付随的に必要なファイル。

② 処理命令ファイルの構造

処理命令ファイルは、ファイル形式としては、**Well-Formed** な XML ファイルで、文字エンコーディングは UTF-8 であることが要求されます。

処理命令ファイルに書くべき内容は、

- ・ **実際の処理に使用する処理ファイルのファイル名、**
- ・ **使用する SpicyLibra 定義ファイルパス名、**
- ・ **定義ファイルに記述された内容のうち、その処理（オンデマンド要素）に関してのみ、定義ファイルの内容を変更する値（複数項目）**

となります。

SpicyLibra の基本的なホットフォルダーでの処理の方法の特別性は、

- ・ 処理命令ファイルを読み取り、
- ・ 内容をチェックし、
- ・ 指示された定義ファイルを読み込み、

処理用の環境を構築することにあります。

これは、ローカルで手動で SpicyLibra を使う場合と同じです。しかし、ホットフォルダーでの処理の場合には、送信された処理命令ファイルの内容に基づき、この読み込んだ定義ファイルの内容を上書きします。

例えば、定義ファイルでは処理ファイルが「昨日の真実.csv」であったとし、処理命令ファイルには処理ファイルとして「明日の勇気.csv」と書いてあれば、「昨日の真実.csv」 → 「明日の勇気.csv」へ読み込んだ処理環境属性を書き換えます。

それから、実際の処理を開始します。

つまり、ローカルで SpicyLibra を使って保存しておいた定義ファイルの内容を、メモリー上でオンデマンドに書き換えて、処理を行うということになります。

処理命令ファイルの書式は次のようになります（定義ファイルの項目で変更可能なものもこの範囲となります）。

```
<?XML version="1.0" encoding="utf-8" standalone="yes"?>
<!-- スパイシーソフト バリアブルプリント・リモート処理指示ファイル -->
<指示データ>

  <プレビュー情報>D:\abcd\abcd\Yamada.preview</プレビュー情報>
  <定義フォルダーパス>D:\¥ 名刺定義ストック</定義フォルダーパス>
  <定義ファイル名>10 x 2 横</定義ファイル名>
  <処理ファイル名>山田 2006272.csv</処理ファイル名>
  <出力ファイル名>山田会社山田一郎様</出力ファイル名>
  <画像フォルダーパス>D:\ 画像保存フォルダー</画像フォルダーパス>
  <テキストフォルダーパス>D:\ テキスト保存フォルダー</テキストフォルダーパス>
  <開始マスター名>変更するマスター名</開始マスター名>
  <オフレイヤー名>表示をオフにするレイヤー名</オフレイヤー名>
  <開始番号>2</開始番号>
  <終了番号>126</終了番号>
</指示データ>
```

「XML 宣言」：固定（必須）

<?XML version="1.0" encoding="utf-8" standalone="yes"?>

「コメント」：固定（必須）

<!-- スパシーソフト バリアブルプリント・リモート処理指示ファイル -->

「プレビュー情報」：

通常、InDesign ドキュメントは必ず作成されますが、PDF ドキュメントは、定義ファイルにて作成フラグが設定されていなければ作成されません（プレビュー情報設定がない場合、ここまでのファイルが作成されます）。

また、作成される PDF ファイル名も作成されるフォルダーも定義ファイルに設定されたものになります。

このプレビュー情報に、プレビューとして作成するファイルを**絶対パスで記述**することにより、絶対パスで指定したプレビューファイルを本体のドキュメントファイルなどとは別個に、同時に作成します。。

ただし、ファイル名に付ける拡張子（.preview、.pdf、.jpg）によって、処理方法が異なりますので注意してください。

拡張子を .pdf、.jpg で設定した場合と .preview で設定した場合の具体的な処理の違いは次のようになります。

拡張子が .pdf の場合：

作成する pdf ファイルのフォルダーは、ここで記述された絶対パスでのフォルダーとなります。定義ファイルもしくは処理命令ファイルにて設定された出力フォルダーには、InDesign ドキュメントのみが作成され、pdf ファイルは作成されません。

作成する pdf に使用する pdf プリセットは、定義ファイルに設定されたものとなります。

すなわち、本来ドキュメントと同一フォルダーに通常に作成される PDF ファイルを絶対パスで指定したフォルダーに作成するということになります。

拡張子が .jpg の場合：

pdf プレビューファイルの代わりに、JPEG ファイルを指定したフォルダーに作成します。

書き出す JPEG ファイルが複数ページある場合には、JPEG ファイルは InDesign により、ページごとにファイル分割して作成されます。

例えば、指定したプレビュー情報が、「d:\abcd\test.jpg」とし、3 ページのドキュメントであったとすると、

d:\abcd\test.jp、d:\abcd\test.2jpg、d:\abcd\test3.jpg

の 3 ファイルが作成されということになります。

拡張子が .preview の場合：

ここで設定した絶対パスの .preview を .pdf に変更して、プレビュー用の pdf を作成します。定義ファイルの pdf 作成フラグとは関係なく、つまり pdf 作成フラグが作成になっていなくても、pdf ファイルを必ず作成します。

ただし、適用される pdf プリセットが、定義ファイルで記述されているプリセット名ではなく、

定義ファイルに記述された pdf プリセット名 + _preview

を使用します（preview の前はピリオドではなく、半角アンダースコア）。

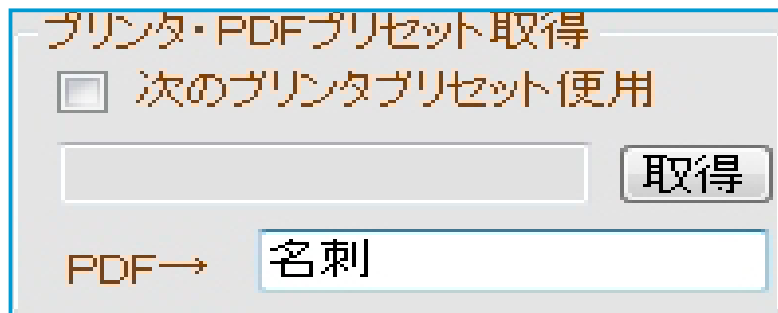
従いまして、InDesign ドキュメントテンプレートでは、本ファイル用の pdf プリセットとプレビュー用の pdf プリセットを用意しておく必要があります。

こうすることで、プレビュー用の pdf に関しては、変更不可・印刷不可などのプレビュー個別の属性を設定することが可能です。

なお、定義ファイルまたは処理命令ファイルにて設定された出力フォルダーには、InDesign ドキュメントは必ず作成されますが、pdf ファイルも、定義ファイルにて、pdf 作成フラグが作成になっていれば、プレビュー用 pdf とは関係なく作成します。

ただし、この場合に使用される pdf プリセットは、定義ファイルに記述されたプリセットとなります。

プレビュー用 PDF プリセットの適用順番は、「名刺」、「名刺_preview」と pdf プリセットがテンプレートに作成されており、定義ファイルにて「名刺」の pdf プリセットが設定されているとすれば、



- ① 個別 JOB 用プリセット（名刺_preview）
- ② 共用プリセット（プレビュー）
- ③ インデザインデフォルト（最小ファイルサイズ）

となります。

プレビュー用 pdf プリセットを使用する場合には、本ファイル用の pdf ファイルを作成しない場合にも、プリセット名の設定は必要となります。ただし、プレビュー用の _preview のつかない方のプリセットを設定してください。上記の適用順序をご覧いただければわかるように、「プレビュー」という名前の pdf プリセットを用意していたくことで、個別の job に関係なく、共通のプレビュー用の pdf プリセットを適用することが可能となっております。この場合には、逆に、個別 job 用の「XXXXXX_preview」は設定しないでください。

「定義フォルダーパス」（必須）

SpicyLibra で使用する、定義ファイルが存在するフォルダーパス。

「定義ファイル名」（必須）

定義ファイル名（拡張子なし）

「処理ファイル名」（必須）

SpicyLibra で処理するファイル名。監視フォルダーに投入する拡張子付きファイル名（abcd.csv など）で、絶対パスではありません。

SpicyTag データを使用する場合には、タグ形式がデータ項目を表す XML タグと区別がつかなくなるため、EXCEL フォーマットや CSV フォーマットなど、XML 形式以外のファイルフォーマットを使用してください。

「出力ファイル名」

InDesign ドキュメント名（拡張子は不要）。

ドキュメント名を省略した場合には、定義ファイルで設定されているドキュメント名となります。

ドキュメント名を絶対パス（D:\aaa\bbb\……）形式で設定した場合、定義ファイルの出力フォルダーではなく、このパスで設定したフォルダーにドキュメントおよび PDF ファイル（PDF 作成の指示があれば）を作成します。

ドキュメント名には、.indd などの拡張子をつけないでください。

絶対パスで別コンピュータへの保存を記述したい場合には、UNC（Universal Naming Convention）表記法に従って記述してください。

UNC 表記では、「\\ コンピューター名 \ 共有フォルダー名 \ ファイルパス」となります。

例えば、ネットわーきに設毒されているコンピュータ YAMADA-PC の共有フォルダー XYZ の直下の test\person.indd に」書き出したい場合には、ファイル拡張子は付けないので、

\\YAMADA-PC\XYZ\test\person

となります。

「画像フォルダーパス」

D:などで始まる、貼り込む画像が保存されているフォルダーの絶対パス。画像ファイル名ではありません。

「テキストフォルダーパス」

D:などで始まる、流し込むテキストファイルが保存されているフォルダーの絶対パス。テキストファイル名ではありません。

「開始マスター名」

改ページ処理を伴う場合、SpicyLibra の定義ファイルにて設定してある、ドキュメント先頭ページへ適用するマスター名を、変更します。

改ページ処理に際し、ドキュメント先頭ページに適用されるマスター名の適用順序は次のようになります。

処理命令ファイルで設定されたマスター > **SpicyLibra メイン画面で設定され定義ファイルに記述されているマスター** > **データ中の対象項目に設定されているマスター**

「オフレイヤー名」

下絵などドキュメント出力時には表示させないレイヤーの名前（ドキュメント全体に適用）

「開始番号」

処理するレコードの開始レコード番号

「終了番号」

処理するレコードの終了レコード番号。

上記処理命令ファイルの項目の説明中、固定とある項目は、記述する内容を説明で記述した文字列に固定とします。なお、必須以外の項目は、処理命令ファイルに書かれていなければ、定義ファイルにて設定した値が有効となります。

「**上記処理命令ファイル例で作成されるドキュメント類の配置**（次ページに、コマンドファイルで設定された出力パスとプレビュー情報とで出力される nDesign ドキュメントファイル及び PDF ファイルの作成フォルダーおよびファイルパスの関係を掲載します）」

■プレビュー PDF

D:\abcd\abcd\Yamada.pdf

■処理ファイル・処理命令ファイルの移動先

[: SpicyLibra 設定保存フォルダー] \ 山田会社山田一郎様 _20101023xxxxx\ 処理ファイル

[: SpicyLibra 設定保存フォルダー] \ 山田会社山田一郎様 _20101023xxxxx\ 処理命令ファイル

■インデザインドキュメントおよび定義ファイルで PDF 作成フラグが設定されている場合

●出力ファイルがドキュメント名の場合

[: SpicyLibra 定義ファイル設定出力フォルダー] \ 山田会社山田一郎様 _20101023xxxxx\ 山田会社山田一郎 .indd

[: SpicyLibra 定義ファイル設定出力フォルダー] \ 山田会社山田一郎様 _20101023xxxxx\ 山田会社山田一郎様 .pdf

●出力ファイルが絶対パスで、「d:\abcd\efg\ 山田会社山田一郎様」の場合

d:\abcd\efg\ 山田会社山田一郎 .indd

d:\abcd\efg\ 山田会社山田一郎様 .pdf

※出力先フォルダーに同一名のドキュメントが存在する場合、SpicyLibra のデフォルトの機能で上書きしないように、出力ドキュメント名は変更されますので注意してください。

spicyLibra ホットフォルダー処理でのコマンドファイル設定と出力ファイルの関係一覧表

		プレビュー指定(絶対パスでのプレビューファイルの拡張子による区分)					
		.preview		.pdf		.jpg	
		定義ファイル PDF 設定	定義ファイル PDF 設定	定義ファイル PDF 設定	定義ファイル PDF 設定	定義ファイル PDF 設定	なし (指定しない)
出力ファイル指定	出力ファイル種 (本体及びプレビュー)	ON	OFF	ON	OFF	ON	OFF
絶対パス指定 (拡張子は付けない)	indd	B	B	B	B	B	B
	pdf	B/A	A	A	-	B	-
	JPEG	-	-	-	A	-	-
ドキュメント名のみ	indd	C	C	C	C	C	C
	pdf	C/A	A	A	-	C	-
	JPEG	-	-	-	A	-	-
指定なし	indd	D	D	D	D	D	D
	pdf	D/A	A	A	-	D	-
	JPEG	-	-	-	A	-	-

① 記号の説明

- A → プレビュー情報で指定した絶対パス (.preview は .pdf に置き換えられる)
プレビュー指定の拡張子に .pdf を設定した場合、PDF はプレビュー用のプリセットではなく本体用。
- B → 出力ファイル指定に記述されたパス (.indd ないしは .pdf が付加される)
- C → 定義ファイル内で設定された出力フォルダーに、出力ファイル名_時間、または、時間フォルダーを作成しその直下を作成
- D → C と同じだが、出力ファイル名が定義ファイルに指定したファイル名となる。

② 処理データの保存

アプリケーションで設定した保存フォルダーに、出力ファイル名_時間、または、時間フォルダーを作成しその直下を作成

プレビューに JPEG 画像を設定した場合、SpicyLibra のメイン画面の出力設定にて JPEG 出力チェックボックスをチェックしていても、プレビュー設定で記述されたパスに JPEG ファイルは作成されます。

また、プレビュー用 JPEG 画像の出力オプションは、出力オプション画面にて設定された解像度などのプロパティが有効となります。

第 11 章 ユーティリティ

SpicyLibra のメイン機能である自動組版の機能以外に、ユーザー様よりご要望の多かった、簡易的な各種のデータ処理機能をユーティリティ機能として実装いたしました。

これらの機能は、データベースソフトやスプレッドシートソフトなどの本格的な高度処理を行うことを想定しておりませんので、本格的なデータ処理を行う必要がある場合には、Access や Excel など、それぞれの専用ソフトをご利用なさってください。

本機能は、あくまでも、簡易的なデータ処理機能となっておりますので、大ファイルや複雑な処理は行いませんので、あらかじめご承知置きください。

[基本的な操作の考え方]

本ユーティリティ機能を使用する場合、SpicyLibra のメインメニューより、「ユーティリティ」を選択し、以下の一欄に示した機能のダイアログを呼び出して実行するものです、

数字・半角カナ揃え
敬称挿入
検索文字列挿入
正規表現文字列挿入・行削除
単純文字列挿入置換
項目処理
行処理
並び替え
通常ファイル処理
PDF ファイル処理
ファイル形式変換
ファイル名処理
PDF ウォーターマーク
PDF 画像処理
外字処理

● 基本的な処理の流れ。

各機能の基本的な操作の流れは、ほとんど同じような形式となっており、また、処理するファイルは、特別なもの（ファイル変換など）を除き、CSV ファイルに対する処理を行います。

次の様なステップで操作を行います。

- ① その処理を行う代表的なファイルを用意し、項目参照用のファイルとして読み込み項目をリスト表示する。
- ② 参照用の項目を土台にし、処理するのが、どの項目なのか、どのような処理をするのかを設定する。
- ③ 処理結果を格納するフォルダーを設定する。処理結果のファイル名は、基本的に、処理するファイル名と同じになりますので、出力フォルダーの設定は必須となります。
- ④ 最後に、実際に処理をするファイルを選択し、実行します。ファイルの選択は、複数のファイル（ただし、同一フォーマットのもの）を選択することが可能です。
- ⑤ この処理で設定した方法を、次回以降も使用する場合には、設定内容をファイルとして保存し、次回の処理時に呼び出すことで、多くの手間を減らすことが可能となっています。

一部の機能を除き、上記①～⑤の流れに沿った操作をすることとなります。

次頁、「数字・半角カナ揃え」にて、上記操作方法の基本となる動きを説明しますので、注意してお読みください。

それ以降の説明に関しましては、重複的な説明は省略させていただきます。

1) 数字・半角カナ揃え

本処理は、「全項目に対して、及び特定の項目【最大同時 5 項目】にたいして、項目内に記述された数字を全角や半角等の数字に揃える機能」、「全項目に対して、及び特定の項目【最大同時 5 項目】にたいして、項目内に記述された半角カナを全角のカナまたはひらがなに変換する機能」、そして、「特定の 1 項目に対して、設定ダイアログで指定された定数値または演算項目とを、やはり指定された演算（四則演算）子で演算処理し、その結果を新規の項目として処理データ項目に付加する機能」の 3 つの大きな処理を行います。

● 全項目に対する数字整合処理及び半角カナ変換処理

● 全項目に対する数字整合処理及び半角カナ変換処理

② データレコードの全項目を対象としているので、「全ての項目」チェックボックスにチェック

③ 処理ファイルの項目のフォーマットを代表する CSV ファイルを、項目参照用として読み取り、上記リストに表示

④ 処理内容を選択

⑤ 漢数字変換の場合のオプション

⑥ 処理項目が SpicyTag のデータか

⑦ 出力フォルダーの選択

⑧ 実行

⑨ 保存、読込

⑩ 閉じる

① 処理ファイルの CSV フォーマットを選択

数字文字列整合あるいは半角カタカナ変換

データレコード項目

番号	データ項目例
1	あいうえお1
2	123-4567
3	123-4567
4	感じ2と234

適用項目設定

☒ 全ての項目

整合方法:

半角カタカナを全角ひらがなに変換する

☐ 選択項目

データ1行目項目取得

参照用に表示されている項目のファイルパス

C:\Users\ozawa\Desktop\元データ.csv

出力フォルダー

C:\Users\ozawa\Desktop\結果

入力ファイル形式: ダブルクォーテーションでエスケープされていない CSV ファイル

戻る

設定保存

設定読込

実行

漢数字変換の場合、住所変換用の変換テーブルを併用して変換する。

変換テーブル

D:\SpicyLibra\CS4チュートリアル\郵便番号テーブル

演算、かな変換を除き、データを SpicyTag 使用データとして扱う。

① 処理ファイル（入力、出力とも同じ CSV フォーマット）の選択をします。

② 「データ 1 行目項目取得」ボタンをクリックし、この処理で対象となるファイルの項目レイアウトを知るため、

C S V ファイルの 1 行目 を読み込んで、上記リストビュー（項目内容を表示するだけ）に表示させます。



で囲まれた部分に、それぞれ、読み込んだファイルの 1 行目の項目の内容と参照用に利用したファイルのパスが表示されます。

- ③ 「全ての項目」が対象なのか、「選択範囲」の項目が対象なのか、処理の種類をラジオボックスで選択します。

- ⑤ 処理方法（整合方法）をコンボボックスより選択します。

「全項目」変換モードでは、演算処理を選択することはできませんが、それ以外は、選択

1 桁は全角算用数字、2 桁以上は半角算用数字に変換する
 算用数字はすべて、半角算用数字に変換する
 算用数字はすべて、全角算用数字に変換する
 算用数字はすべて、全角漢数字に変換する
 半角カタカナを全角カタカナに変換する
 半角カタカナを全角ひらがなに変換する

項目の変換と同じ処理内容（下記参照）を選択することが可能となっています。

- ⑥ 漢数字変換処理を指定した場合に、住所変換テーブルを使用するかを指定します。

- ⑦ 演算とカナ変換以外の場合に、データ中に SpicyTag があるかを指定します。

SpicyTag のデータの場合、タグ中に属性値として数字を使用する場合があるため、タグ中の数字に関しては変換処理を行わないエスケープ処理を行うか指定します。逆に言えば、「演算」項目では、SpicyTag は使用できません。純粋に、数字と小数点、- 記号のみで構成されていなければなりません。「カナ変換」の場合には、属性値として、半角カナを使用しないで頂ければ、SpicyTag を使用していても変換に影響はありません。

- ⑧ 「出力フォルダー」 ボタンをクリックし、変換したデータファイルを保存するフォルダーを選択します。

- ⑨ 以上で、設定が完了しましたので、「実行」 ボタンをクリックし、実行します。

「実行」 ボタンをクリックすると、ファイル選択ダイアログが表示されますので、変換処理を行うファイルを選択します。同時に複数ファイルを選択可能となっています。ただし、これらのファイルのデータフォーマットは、参照用に読み込んだファイルのデータフォーマットと同じでなければなりません。

処理した結果ファイルのファイル名は、処理ファイルと同じ名前となります。

- ⑩ 「保存」 ボタンをクリックし、この処理に用いた設定をファイルに保存し、次に、同じ処理を行う場合、「読取」 ボタンをクリックし保存した設定ファイルを読み取って再利用することができます。

- ⑪ 処理が終わったので、「戻る」 ボタンで画面を閉じます。

● 選択項目に対する数字整合処理及び半角カナ変換処理及び選択 1 項目に対する演算処理

数字・カナ変換に加え、演算処理を選択できます。

「選択項目」のチェックボックスを選択し、特定項目に対する処理を行う場合には、同時に、最大 5 項目に対し、別々の処理を選択して実行することができます。この場合には、項目の指定を行うほかは、「全項目に対する数字整合処理及び半角カナ変換処理」と同じ操作方法となります。

1 桁は全角算用数字、2 桁以上は半角算用数字に変換する

算用数字はすべて、半角算用数字に変換する

算用数字はすべて、全角算用数字に変換する

算用数字はすべて、全角漢数字に変換する

半角カタカナを全角カタカナに変換する

半角カタカナを全角ひらがなに変換する

ただし、前頁の図中、赤枠で示した、第一番目の項目で設定できる処理方法には、「演算」処理が含まれています。「演算」を選択した場合、他の 4 項目が設定されていても、それらは無効となります。

1 桁は全角算用数字、2 桁以上は半角算用数字に変換する

算用数字はすべて、半角算用数字に変換する

算用数字はすべて、全角算用数字に変換する

算用数字はすべて、全角漢数字に変換する

半角カタカナを全角カタカナに変換する

半角カタカナを全角ひらがなに変換する

数値計算（定数との計算）

数値計算（別項目数値との計算）

この処理選択コンボボックスの、最後の 2 つの処理が「演算」に関する処理となっています。それ以外は、通常の数字・カナ変換と同じとなっていますので、ここでは、演算処理の設定に関して説明します。

演算処理の場合、

「選択項目」に対する「演算子」（演算の種類）定数値計算なのか、項目間計算なのか、処理結果に小数点が出る場合の小数点以下桁数の 4 項目を設定します。

すなはち、

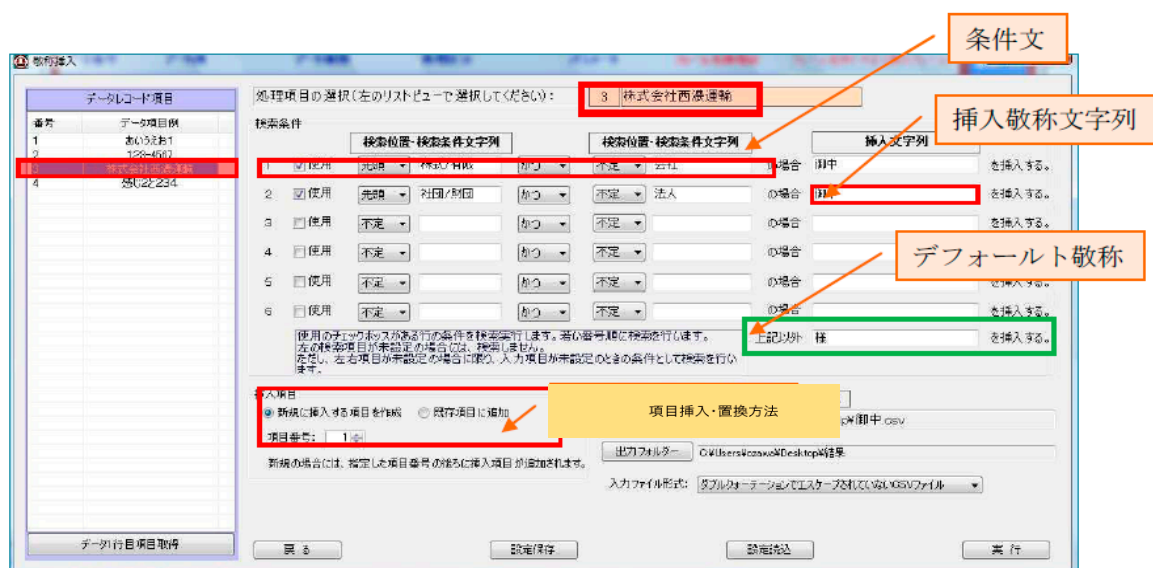
- ① 処理対象の項目番号
- ② 演算子（＋、－、X、÷）
- ③ 定数値もしくは項目番号
- ④ 小数点桁数

を、それぞれ設定します。

「定数値あるいは項目番号」を設定したテキストボックスの値の意味に関しては、処理方法の選択コンボボックスで、「数値計算（定数との計算）」を選択していれば「定数値」として、「数値計算（別項目数値との計算）」を選択していれば「項目番号」として扱います。

数値計算をした結果の項目は、対象項目の直後に、新規の項目列を作成して記入します。その結果、項目数が、処理ファイルに比べて、1項目増加することになります。

2) 敬称挿入



敬称挿入は、SpicyLibra における敬称処理では、指定項目に記述された番号に対して、パラメータ設定で、「殿、様、御中、…」といった文字列に置換しフレームに挿入するというを行っています。

しかしながら、敬称を付ける文字列（人名、社名など）によって、どの敬称をつけるかを判断し、数値を書いていくということは非常に困難な作業であるというご意見をうかがい、敬称を付加する人名・社名などの文字列に含まれる文字列をチェックし、そのチェック内容で、設定された敬称を検索対象項目の内容と置き換え、もしくは新しく作成した項目に挿入し、敬称の自動判別を行うという処理機能を設けました。

画面の参照項目リストビューにて、処理対象項目を選択すると、選択された項目番号などが、 画面右上部に表示されます。

処理対象の項目が設置されたのち、処理内容の設定を行います。

検索処理条件は、6 個の条件文を設定でき、条件文の若い番号から順番に実行され、条件文として利用するチェックボックスにチェックが付いている条件文のなかで、条件に該当したものがあったところで、挿入文字列の欄の文字列が、検索対象項目のデータと置き換わるか、新規、挿入項目番号が指定されている場合には、指定された項目番号の位置に、 敬称の項目を挿入します。

検索項目に対象のいずれの条件文の文字列も見つからなかった場合、

のテキストボックスに設定された値がデフォルト値として使用されます。

なお、検索は、検索対象文字列の「先頭、末尾、どこでも（不定）」の 3 種類から一致する条件を選択できます。また、条件文のテキストボックスのなかでは、半角「/」で区切って、複数の OR 条件文字を設定できます。

また、個々の条件文では、2つのテキストボックスで、AND 条件も設定できるようになっています。

項目が空であるものを検索する場合には、条件文に、チェックをし、条件文記入のテキストボックスの両方を空（何も挿入しない）で指定します。

条件文挿入テキストボックスのうち、先のテキストボックスのみが空文字の場合には、その条件文は無効となり、検索処理を行いません。

画面例で説明すると、

検索項目である「3 番目の項目」で、

先頭文字が「株式」または「有限」で始まり、かつ、「会社」という文字が文字列の中で見つかった場合、「御中」という文字を、処理結果項目に書き出します。

見つからなかった場合、次の条件文に行き、

先頭文字が「社団」または「財団」で始まり、かつ、「法人」という文字が文字列の中で見つかった場合、「御中」という文字を、処理結果項目に書き出します。

それでも発見できなかった場合、この2つの条件のみチェックしているので、最終行のデフォール値、「様」を書き出します。

書き出すのは、新規項目作成のチェックボックスにチェックがされており、挿入番号が「1」となっていますので、既存項目「1」番の次に、新規の敬称項目が追加されることになります。

3) 検索文字列挿入

本機能は、「敬称挿入」が、敬称の種類を特定するために、項目を検索し、検索結果に対応する「敬称」項目を作成することを主眼としているのに対し、より一般的に、検索項目に対する文字列検索で条件が一致した場合に、対応する文字列にて、検索文字列を置換したり、検索項目内の指定位置に挿入したりといった、より一般的な検索置換・挿入機能を提供するものとなっております。

「敬称挿入」と異なるのは、検索条件に「位置指定」がないこと、及び、検索結果での文字列挿入に関して、挿入位置の指定ができることの2点となります。

検索条件に「位置指定」がないことは、「敬称挿入」での検索位置指定で「不定」（文字列のどこでもよい）と同じのため、ここでは、検索結果後の挿入・置換処理について説明します。

まず、検索項目自体に検索結果の処理を行うのか、それとも新規に項目を追加し。その項目に文字を挿入するのを選択します。この点で注意しないといけないのは、既存項目を選んだ場合、「敬称挿入」と異なり、検索項目の指定した位置への挿入や検索文字列自体との置換などができるという点です。「新規項目」を選んだ場合には、指定さ

れた項目番号の位置に、挿入・置換文字列の項目が作成されます。

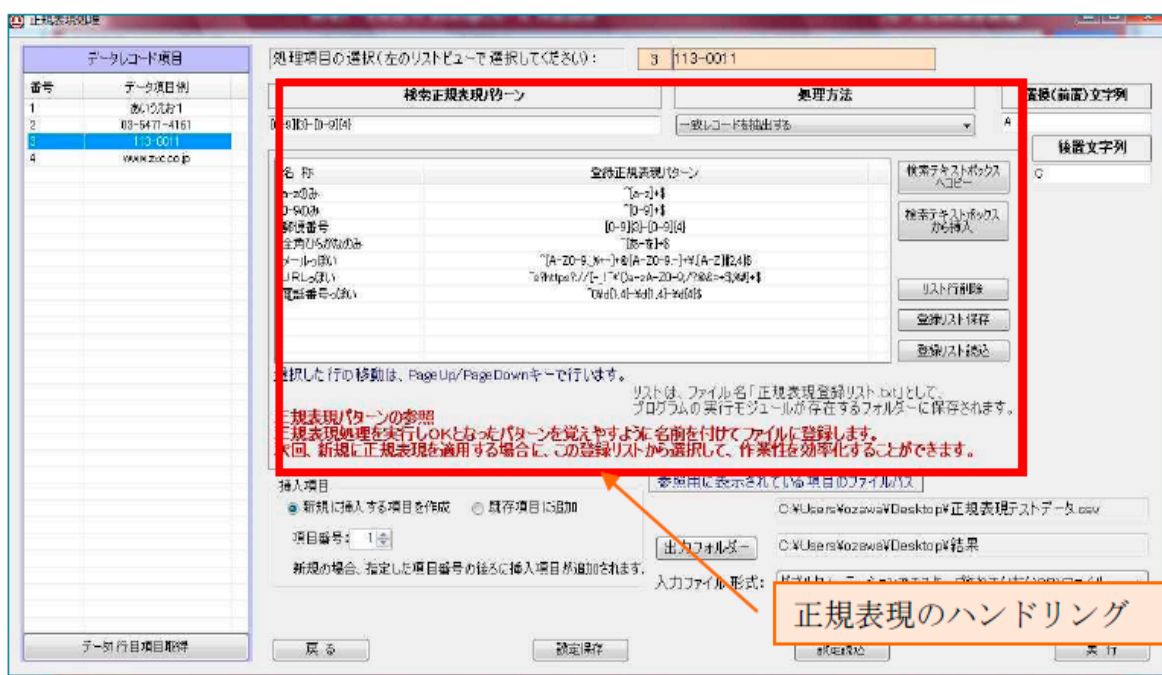
次に、「既存項目」を選んだ場合、挿入・置換文字列として設定されている文字列を、検索項目の文字列に対する挿入・置換方法の設定をしなければなりません。

先頭
中央
末尾
入替
置換
位置指定

このうち、「先頭、中央、末尾」については、それぞれ、検索項目の文字列全体に関して、おのこの位置に挿入することを、「入替」とは、その検索項目文字列全てを、置換・挿入文字列に置換することを、「置換」とは、検索文字列の部分のみを、置換・挿入文字列に置換することを、「位置指定」とは、検索項目にある文字列の何文字目に挿入するかを指定して挿入することを意味します。

4) 正規表現文字列挿入・抽出

本機能は、「敬称挿入」ならびに「検索文字列挿入」において、検索方法である「文字列検索」の方法が、単純な全文字列比較という方法であるのに対し、「正規表現」を利用して検索を行うというところが大きく異なっています。



正規表現は、本プログラムでは、Windows プログラミング言語 C# にてサポートされている正規表現す対となりますので、何らかの正規表現作成・チェックプログラムをご利用される場合には、その点に留意してお使いください。また、ここでは、正規表現自体に関する説明はいたしません。正規表現については、書籍やインターネットの資料などをご利用いただき、ご理解した上で使用されるという前提で、説明させていただきます。

使用する正規表現は、「正規表現パターン」のテキストボックスに記述します。

この正規表現パターンにて検索した結果の処理方法は、次の処理が選択できます。


文字列を置換文字列に置き換える
挿入文字列を検索項目の先頭（及び末尾）に挿入する
不一致レコードを抽出する
一致レコードを抽出する

処理方法での違いで次のような処理を行います。

- ① 「文字列を置換文字列に置き換える」を選択した場合、検索項目の内容が、「置換（前置）文字列」のテキストボックスで設定された文字列に置き換えられます。
- ② 「挿入文字列を検索項目の先頭（及び末尾）に挿入する」を選んだ場合、検索項目の文字列の先頭に「置換（前置）文字列」のテキストボックスで設定された文字列が挿入され、末尾に、「後置文字列」のテキストボックスに設定した文字列が挿入されます。
- ③ 「不一致レコードを抽出する」を選択した場合、検索した結果、不一致となったレコードだけを処理結果ファイルに書き出します。
- ④ 「一致レコードを抽出する」を選択した場合、検索した結果、一致となったレコードだけを処理結果ファイルに書き出します。

以上が、本機能での処理となりますが、正規表現パターンは、パターン作成に熟練を要します。そこで、作成した正規表現パターンに、パターン名を付加し、ファイルに保存し、必要な時に保存ファイルから読み込むことで、何度でも再利用できるようにしました。その機能が、画面中央で囲まれた部分となります。

以下にて、この正規表現パターンの管理部分の説明をします。

検証してOKとなった正規表現パターン  は、「検索テキストボックスから挿入」ボタンをクリックして、リストの「正規表現登録パターン」に取り込みます。その段階では、パターンに名称が付いておりませんので、リストの「名称」欄をマウスでクリックし編集モードにし、適当な名称を入力します。これで、名称で対応付けされた正規表現パターンが登録されたことになります。ただし、この段階では、メモリー上に登録されただけなので、画面を閉じてしまえば消えてしまうため、「登録リスト保存」ボタンをクリックして、ファイルに保存します。

逆に、保存した正規表現パターンを使用する場合には、「登録リスト読込」ボタンをクリックし、保存されている内容をリスト表示させます。表示されたリストの中から使用するパターンの行を選択し、「検索テキストボックスへコピー」ボタンをクリックし、検索テキストボックスへ「登録正規表現パターン」をコピーします。

このようにして、正規表現パターンを再利用することが可能となります。

なお、リストの行削除は「リスト行削除」ボタンで実行します。

登録正規表現パターン自体の修正は、検索テキストボックスにコピーし、検索テキストボックスにて修正し、再度登録しなおす必要があります。

5) 単純文字列挿入置換

(1)～(4)までの挿入置換は、いずれも、対象項目内の文字列の検索を結果に基づいて挿入置換を行ってきましたが、単純に、指定した項目に挿入置換（つまり検索を行わずに）を実行したい場合があります。

「単純文字列挿入置換」では、最大3項目を同時に指定し、それぞれの指定項目に、挿入または置換文字列を適用します。

この部分が、処理方法を設定する部分で、まず、処理方法の選択を行います。

文字列挿入：指定項目の先頭、末尾に文字列を挿入します。

文字列挿入：指定項目の指定した文字数の後ろに文字列を挿入します（半角数字は0.5文字で計算）。

文字列挿入：指定項目の指定した文字数の後ろに文字列を挿入します（全て1文字で計算）。

文字列置換：指定項目内の文字列を置き換えます。

文字列挿入で3種類、文字列置換で1種類のなかから選択します。処理方法は、処理可能最大項目数である3項目を設定した場合も、同一の処理方法となります。

後置文字列テキストボックスに設定した文字列が有効となるのは、文字列挿入の1番目「指定項目の先頭、末尾に文字列を挿入します」を選択した場合のみとなります。

文字列挿入方法の2番目と3番目の違いは、表示タイトルにも書いてありますように、文字挿入位置を取得する際に、項目内文字列の数をカウントする時に、半角数字を1文字として計算するのか、0.5文字として計算するのかの違いとなります。ただし、半角0.5として計算するのは、半角数字のみとなります。

置換は、対象項目内の文字列全てが置換文字列に置き換わります。

6) 項目処理

項目処理は、項目に記述された文字列というよりは、項目自体に対する処理を行うもので、項目の追加、分割、結合、削除、複写の処理機能を選択して実行します。

データロード項目

番号	データ項目例
1	あいづえ81
2	123-4567
3	123-4567
4	感じと204

処理項目の選択(左のリストビューで選択してください): 3 123-4567

処理方法の選択:

項目追加: 新規に項目を追加します。

項目追加: ☒ 指定した項目の前に挿入 **項目分割:** ☐ 分割基準文字を前項目に残す

挿入文字列

☐ 固定 1

☒ 数値 開始番号 2 増加番号 8

☐ 位取カンマ挿入

☒ 桁数固定 1

前置文字列 5 後置文字列 6

項目分割: 分割文字列

① 1 ② 8 ③ 1

項目削除: 同時に削除する項目

0 0 1

項目結合: ☐ 後ろ項目の位置にて結合

結合項目と結合文字列

結合文字列: 8

結合項目番号: 1

項目複写: 複写数: 5

参照用に表示されている項目のファイルパス: C:\Users\Kozawa\Desktop\項目挿入.csv

出力フォルダ選択: C:\Users\Kozawa\Desktop\項目挿入.csv

処理ファイルのCSVフォーマット選択: ダブルクォー

データ項目取得

戻る 保存 読み込み 実行

処理方法を選択し、必要なパラメータを設定する。

これらの処理機能は、それぞれ処理に必要な設定パラメータが異なるため、「処理方法の選択」コンボボックスにて、処理方法の選択が変更された場合、選択されているパラメータ設定部分のタイトルの背景色が青色に変化し、タイトルが白抜き文字となります。

項目追加: 新規に項目を追加します。

項目分割: 指定された文字で項目を分割します。

項目結合: 指定された2つの項目を結合して1つの項目にします。

項目削除: 指定された列の項目を削除します。

項目複写: 指定された列を直後にコピーします。

① 項目追加

● 「指定した項目の前に挿入」にチェックがある場合、指定項目番号の前に、新規項目が追加されます。チェックがない場合には、指定項目番号の後ろに新規項目を追加します。

● 挿入する文字列には、挿入する文字列が全ての行で同じとなる「固定文字列」の挿入と、開始の数値と行ごとの増加数を指定することで、行ごとに可変の数字文字列を挿入する「数値」処理方法とがあります。

さらに、「数値」処理を選択した場合、位取のカンマの挿入を行うか、桁数を固定した数字文字列（桁数に満たない場合には、数字の前に0を挿入）か、を指定できます。また、数字の前後に、前置文字列、後ろに後置文字列を付加できますので、19,800円などといった単位の挿入なども行えるようになっています。

② 項目分割

● 最大3個まで、項目内文字列を分割して項目を悪性し、振りわけることができます。項目を分割する分割基準の文字は、1文字でも文字列でもかまいません。

分割できなかった項目の行には、挿入文字列がないという項目（空項目）ができ、項目数を揃えます。

- 「分割基準文字列を前項目に残す」チェックボックスにチェックがある場合、分割基準の文字（列）は、分割された先頭項目に挿入されて残りますが、チェックがない場合には、どの項目にも残りません。

③ 項目結合

- 対象となる項目に、結合項目番号の内容を結合します。結合項目番号項目は、そのまま残ります。結合する時に、両項目の内容を結び付ける途中に、固定的な文字列を挿入することもできます。結合されると次のようになります。

結合後対象項目内容 = 結合前対象項目内容 + 結合文字列 + 結合項目番号項目内容

- 「後ろ項目の位置にて結合」チェックボックスにチェックがされている場合、結合項目番号で指定された項目に、結合内容が挿入されます。その場合も、結合される文字列の順番は、通常行の場合と変わりありません。

④ 項目削除

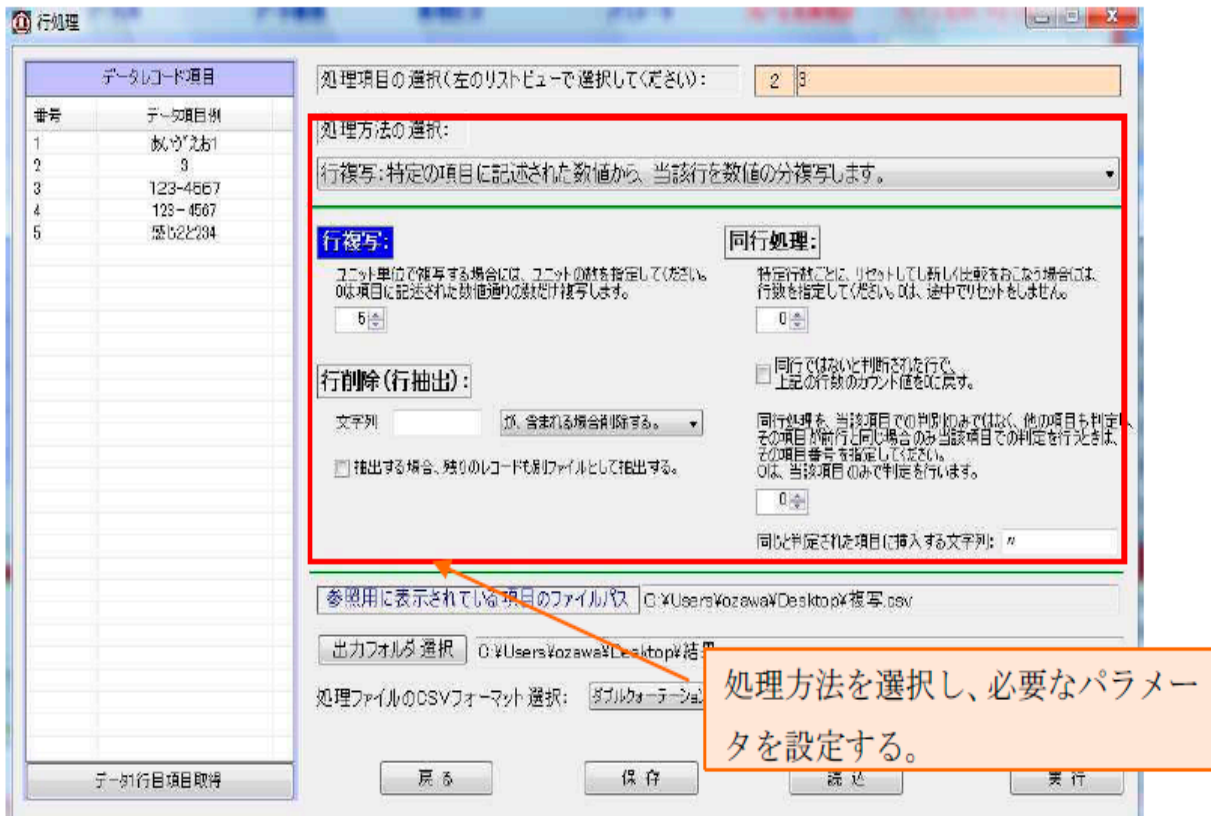
- 指定された項目を削除します
- それ以外に、同時に最大3項目まで、削除することができます。

⑤ 項目複写

- 最大10個まで、指定された項目をコピーします。

7) 行処理

行の複写、削除を行います。処理機能は、3種類ありますので、項目処理同様に、処理方法を選択すると、その処理に必要なパラメータ設定の部分のタイトルの背景色が青に変わり、タイトル文字は白抜き文字となります。



処理は、次の3種類から選択します。

行複写：特定の項目に記述された数値から、当該行を数値の分複写します。

同行処理：特定の項目が前行の項目と同じ内容であった場合の処理をします。

行削除（行抽出）：指定項目に特定文字列が存在する（しない）場合に、削除・抽出します。

① 行複写

- 行複写は、指定された項目に記述された数値を、その行をコピーする数として捉え、その行をコピーします。コピー行数には、当該行自体も含まれます。
- 「ユニット単位」のチェックボックスにチェックがされている場合、データ中に記述された数字以上で、もっともその数字に近く、「ユニット単位」で設定された数字で割り切れる数の分だけコピーを行います。
例えば、データ中に7行コピーの値が書いてあっても、「ユニット単位」が「5」に設定してあれば、「7」以上で「7」に最も近くて、「5」で割り切れる数である「10」行、コピーするということになります。

② 同行処理

- 「同行処理」とは、指定された項目の内容を、前の行と比較し、同じ内容（文字列として）であれば、項目内容の文字列を、いわゆる「ジッド」といわれる記号（通常は「//」）に置換することを機能としています。
例えば、家族の住所を表す場合、同居する家族の最初の人の住所は通常通り表示するが、それ以外の人の住所は、「//」で表示するなどといった場合に使用します。
- 「特定行数ごとに、リセットして新しく比較をおこなう場合には、行数を指定してください。0は、途中でリセットをしません」のチェックボックスは、前行との比較をリセットする行数を設定します。例えば、名簿などでは、頁先頭行の住所が、前頁最終行の人の住所と同じであっても、頁先頭行では省略しないのが普通と考えられます。このようなときに、この値を頁に表示する行数、20行なら「20」と設定しておけば、

2 1 行目は、前の行との比較を行わず、その行から、新たに「同行処理」を開始することになります。

さらに、「同行ではないと判断された行で、上記の行数のカウント値を 0 に戻す」にチェックが入っている場合、行数のカウントもリセットして、その行から再カウントを行います。

- 同行であるとして置き換えられる文字は、デフォルトで「/」となっていますが、任意の文字（列）を指定することも可能です。

③ 行削除

- 指定された項目に、対象となる文字列が含まれているかを調べ、その結果で行削除や抽出処理を行います。処理種類の指定は、次のコンボボックスで行います。

指定文字列が、含まれる場合削除する。
指定文字列が、含まれる場合抽出する。
指定文字列が、含まれない場合削除する。
指定文字列が、含まれない場合抽出する。

処理種を見ていただければお分かりのように、文字列があった場合と、なかった場合、それぞれで、行削除ないしは行の抽出を行うこととなります。

- 「抽出する場合、残りのレコードも別ファイルとして抽出する。」チェックボックスがチェックされている場合、抽出した行と非抽出の行との 2 つのファイルを作成します。この場合には、処理種の 2 つの抽出方法は、同一の結果となります。

8) 並び替え

番号	データ項目例
1	1234
2	山田太郎
3	00234
4	東京都品川区代官山
5	やまだたろう

最大 3 項目まで比較して、データレコードの並び替え（ソート）を行います。

比較する方法は、項目内の文字列を数値（decimal）に変換する）としてみるか、文字列としてみるかを選択します。

並び替えの方法は、「昇順、降順」のいずれかを選択します。

次に、通常の並び替えの法帆とはことなる「**串刺し並び替え**」について説明します。

「**串刺し並び替え**」は、検索方法で、「**串刺（数値）**」を選択して実行します。ただし、この並び替え方法を指定できるのは、1 項目のみで、複数項目の並び替え指示設定があっても、「**串刺**」が設定されている場合には、「**串刺**」以外の項目での設定は無効となります。

串刺し設定をする場合には、3 行ある項目設定のうち最上位の行で設定を行います。

- ・まず並び替え対象となる数値が入力されている項目の番号を指示します。

- ・次に、比較方法の項目で、「串刺（数値）」を選択します。
- ・次に、串刺グループ数の項目で、グループとして扱う数字の範囲を設定します。
最小 100 から最大 100000 まで 100 ステップ毎に設定することができます。
- ・次に、串在のレコード番号の数え方を設定します。選択できるのは、「0,1,2,...9」と「0」を最小として数える方法と、「1,2,3,...,0」と「0」を最大として数える方法のいずれかとなります。
- ・最後に、並び替えの方向を指示します。

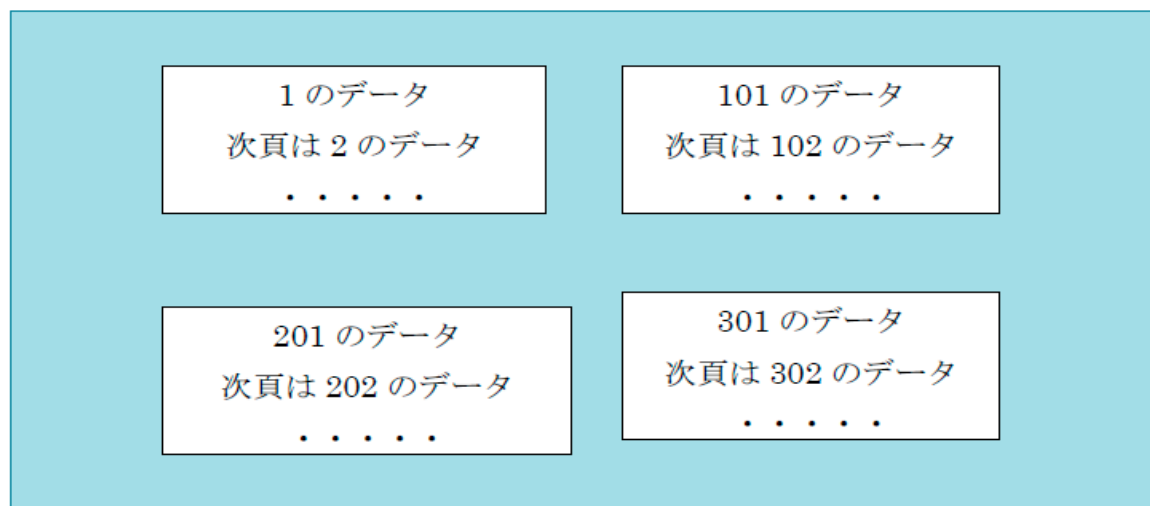
具体的な例で説明すると次のようになります。

[入力データ例]

1,1234,山田太郎,00234,東京都品川区代官山,やまだたろう
 2,2234,秋山信二,00134,東京都品川区足別町,あきやましんじ
 101,34,川辺大三,00211,山梨県葦原郡榑1丁目,かわべだいぞう
 102,123,浜口好機,00234,神奈川県藤沢市大石,はまぐちこうき
 201,174,神田仙吉,30234,静岡県清水市中山5 5 5,かんだせんきち
 202,-784,上原きょうこ,00454,北海道旭川市大前,うえはらきょうこ
 301,123,エドモンド・テリー,01134,鹿児島県与野市外郷,えどもんどてりー
 302,284.34,和田銀,00986,福岡県田川市簿他山,わだぎん
 3,12454,Albert Syouiti,34134,青森県津軽市大外,あるべるとしょういち
 103,-2239,矢田スミレ,01134,山形県山形市相生町,やたすみれ
 203,123,駒野昭雄,01134,東京都大原区田園調布,こまのあきお
 303,555,込んだ近,012987,滋賀県立冬群栗東町,こまのこま

入力データの先頭項目が並び替えのためのレコード番号となっています。

ここでは、1 頁 4 面付けを行うということを前提にしています。



すなはち、1 ページ目は。レコード番号の最小桁数が1のものをあつめ、2 ページ目には、2のものの、3 ページ目には、3のものを集めて処理したいということになります。

こうすることで、串刺し的にデータを処理することが可能となるわけです。

このような前提で、パラメータ設定を行うと、次のようになります。

- ・串刺しレコード番号は先頭なので、「項目番号」は「1」。

- ・「比較方法」は、「串刺（数値）」。
- ・串刺グループ数は、100 レコード単位で面付けを替えるということなので、[100]。
- ・「串刺数の数え方」は、「1—100」という具合に、各グループ「1」から開始するので、「1,2,3,,,,,0」を選択。
- ・「並替方法」は、「昇順」。

このパラメータ設定で処理を行うと次のような結果となります。

[処理結果]

```
1,1234,山田太郎,00234,東京都品川区代官山,やまだたろう
101,34,川辺大三,00211,山梨県葦原郡榑1丁目,かわべだいぞう
201,174,神田仙吉,30234,静岡県清水市中山5 5 5,かんだせんきち
301,123,エドモンド・テリー,01134,鹿児島県与野市外郷,えどもんどてりー
2,2234,秋山信二,00134,東京都品川区足別町,あきやましんじ
102,123,浜口好機,00234,神奈川県藤沢市大石,はまぐちこうき
202,-784,上原きょうこ,00454,北海道旭川市大前,うえはらきょうこ
302,284.34,和田銀,00986,福岡県田川市簿他山,わだぎん
3,12454,Albert Syouiti,34134,青森県津軽市大外,あるべるとしょういち
103,-2239,矢田スミレ,01134,山形県山形市相生町,やたすみれ
203,123,駒野昭雄,01134,東京都大原区田園調布,こまのあきお
303,555,込んだ近,012987,滋賀県立冬群栗東町,こまのこま
```

結果図の各レコードの先頭項目をみると、各グループの最小桁数の部分が同じレコードを順番に並び替えているのがわかります。

上記のような串刺しで4面付けのはがきを処理したい場合を考えると、グループというのは、各面毎のレコードの集まりをさしていることになります。

従って、4面付け、8面付けなど、その処理に合わせてグループ数を設定することで、1ページの処理に必要な各面ごとのデータの集まりを頁順に並び替えることができるということになります。

ただし、各グループに収められているレコード数が同じでない倍には、ある頁用のデータレコードが不足する場合などが考えられ、そうした場合には、組版処理で思った順番にならないので注意が必要です。

つまり、各グループのレコード数は同じでない場合には、本機能の並び替えでは問題が出ませんが、実際の組版処理では、データレコードがずれるため、印字がおかしくなりますので、データ数には注意が必要ということになります。

9) 通常ファイル処理

CSV ファイルを結合あるいは分割処理を行います。次の5種類から選択します。

- 右側ファイルの項目番号をキーとして左側のファイルから一致するレコードと内部結合する（右側のキーは一意）
- 右側ファイルの項目番号をキーとして左側のファイルから一致するレコードを抽出する（右側のキーは一意）
- 左側ファイルを指定した項目の前後で2ファイルに分割する（右側ファイルは不要）
- ファイルをファイル末尾に結合する（結合するファイルのレコード項目数は同数、左・右ファイル選択は不要）
- 1レコードの項目を等分割して複数レコードに分ける（左ファイル選択で処理ファイルを選択。右ファイルは選択は不要）

本処理は、設定した内容を保存しませんので、その都度、必要なパラメータを設定します。

の部分が主要な設定個目で、まず、前ページで示した処理種類のコンボボックスから、事項する処理種類を選択します。

次に、処理種類に応じて、ファイルを読み込みます。ただし、2 ファイルのデータファイルが必要な場合、両方の CSV ファイルのフォーマットは同じでなければなりません。

ファイルを読み込み、項目が表示された左側のリストビューにおいて、対象となる項目を選択し実行します。

以下、処理毎の説明をします。

- ① 「右側ファイルの項目番号をキーとして左側のファイルから一致するレコードと内部結合する（右側のキーは一意）」が選択された場合、データベースソフトでの、内部結合処理同様に、2つのファイルの結合を行います。

すなはち、右リストビューの選択された項目にある数値は（ユニークな数値）、左側のリストビューに表示されたフィルの指定項目の数値（数値の重複可）と比較し、同じであれば、その一致した項目の代わりに、右リストの一致した数値が含まれる行を挿入します。

AAA	1 2 3	BBB
CCC	4 5 6	DDD
EEE	4 6 7	FFF

左側ファイル 2 項目目が対象項目

GGG	7 8 9	HHH
III	4 5 6	JJJ
KKK	XXX	LLL

右側ファイル 2 項目目がユニークな数値

前頁の 2 つのファイルを、おのおの 2 項目目を処理項目として指定したとすると、の
数値部分が合致するので、

CCC	III	III	DDD
-----	-----	-----	-----

のように、合致した行のみで、右ファイルの合致した数値が含まれる行の、指定項目以外の項目を、左ファイルの合致した数値項目に挿入し値を入れ替えます。

- ② 「右側ファイルの項目番号をキーとして左側のファイルから一致するレコードを抽出する（右側のキーは一意）」を選択した場合、①と同じように検索しますが、ファイルを結合するのではなく、左側ファイルの合致したレコードを抽出します。

CCC	4 5 6	DDD
-----	-------	-----

というレコードが、左側ファイルより抽出されるということになります。

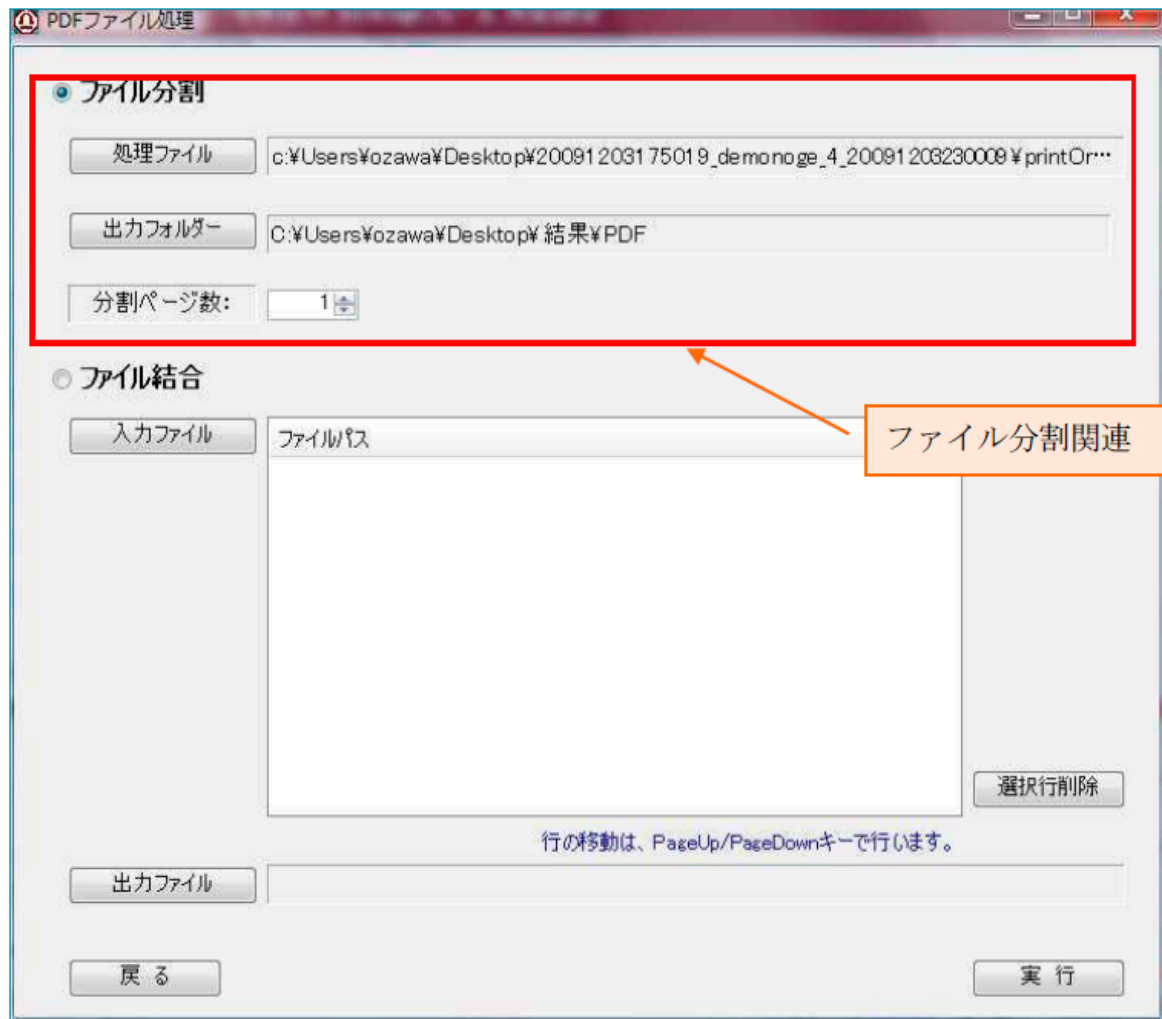
- ③ 「左側ファイルを指定した項目の前後で 2 ファイルに分割する（右側ファイルは不要）」を選択した場合、上記と異なり、指定した項目を境にして、項目番号が小さい項目のファイルと大きい項目のファイルとに分割します。

10) PDF ファイル処理

本処理では、PDF ファイルのファイル分割とファイル結合を行います。この PDF ファイルの処理には、オープンソースである iTextSharp を使用しております。従いまして、処理できる機能範囲などは、iTextDharp の機能に限定されます。

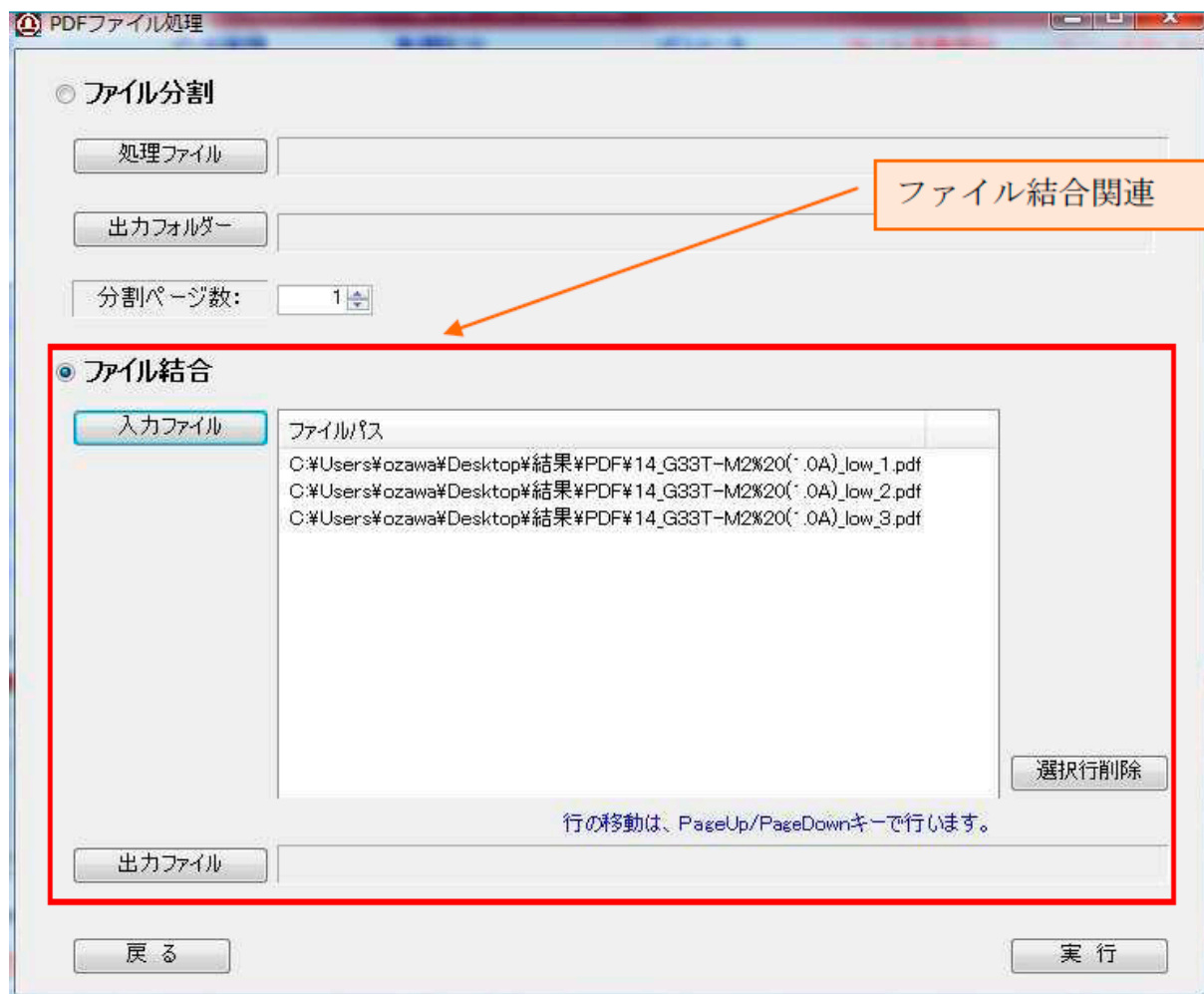
さて、2つの機能は、ラジオボックスの選択を切り替えることで行います。

- ① ファイル分割では、設定された頁数ごとにファイルを分割して、出力フォルダーに作成します。各々のファイルには、処理ファイル名に「_分割番号」(_1, _2, ……) を付加したファイル名がつけられます。



- ② ファイル結合では、「入力ファイル」ボタンをクリックして複数の PDF ファイルを選択します。選択したファイルパスが、ファイルパス一覧リストビューに表示されますので、結合する順番に並び替えたのち、実行ボタンをクリックすると、1 ファイルに結合された PDF ファイルを得ることができます。出力ファイル名は、「出力ファイル」ボタンをクリックして指定します。ファイルパスリストにおいて、不要なパスは、削除する行を選択し、「選択行削除」ボタンをクリックします。

ファイルパスのリストビュー内では、選択行を上にあげるには、「PageUp」キーを、下に下げるには「PageDown」キーを使用して移動させます。



(※) PDF ファイルによっては、ページ番号の情報が付加されていない場合があり、そのような PDF ファイルは、本処理が頁情報に基づいて処理を行っているため、分離結合ができません。

11) ファイル形式変換

本処理は、SpicyLibraにて扱うことのできるファイルをCSVファイルに、また、CSVファイルをEXCEL(XML形式)に、変換する処理を行います。

変換元ファイル形式コンボボックスにて、次の4種類から変換元のファイル形式を選択します。

EXCEL (XLS など) → CSV
データベースファイル (ACCDB など) → CSV
XML (レコード形式) → CSV
CSV → EXCEL (XML 形式)

変換元のファイル形式は、SpicyLibraが処理ファイルとして認識可能なファイルを、すべて指定することができます。

出力ファイルフォーマットは、変換元ファイル形式がリストの上3番目までは、

ダブルクォーテーションでエスケープされていないCSVファイル
ダブルクォーテーションでエスケープされたCSVファイル

ということで、これも、SpicyLibraが扱うことのできる2つのCSVファイルに限定されます。

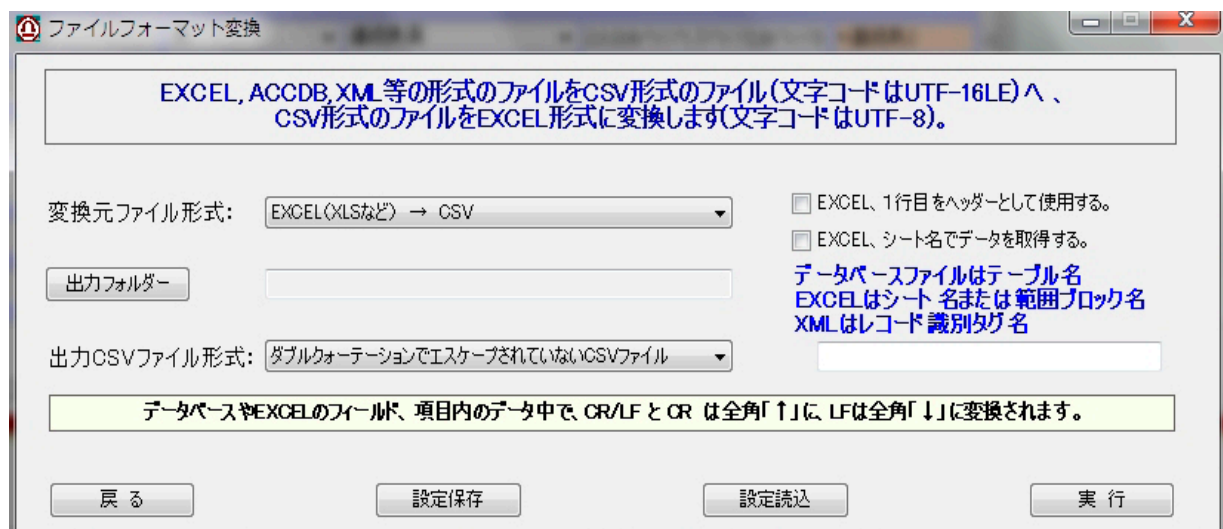
また、変換元ファイル形式が、4番目のCSVファイル形式からEXCELファイルへの変換の場合、

Excel 2007におけるXMLファイル

となります。

この、EXCELフォーマットへの変換には、SpicyLibra2020より、Excelを利用した変換方法からOpenXML対応モジュールのClosedXMLを使用し変換方法縫い変更しました。

また、mdb.accdbデータベースファイルを扱うには、AccessDatabaseEnginがインストールされていなければなりません。



なお、変換元ファイルにて、データベースを扱う場合には、テーブル名を、Excelデータを扱う場合には「シート名」または「範囲ブロック名」を、XMLファイルを扱うには、レコード識別「タグ名」をそれぞれ、設定しなければなりません。

12) ファイル名処理

ファイルを扱うプログラムを使用する場合、ファイル名の付け方が決まっていたり。あるいは、フォルダーに存在するファイル名の一覧をリスト形式で与えたりしないといけない場合があります（例えば、画像ファイルを一つにした EPUB 形式のドキュメントを作成するフリーのプログラム ChainLP のようなものでは、この固定形式の番号が連続するファイル名が要求されます）。

このように、ファイル名自体に処理を実施する機能をまとめています。



ファイル名処理は特定のフォルダーに存在するファイル群に対して処理を行いますので、当該フォルダーには処理の対象となるファイル以外は保存しないようにしてください。

まず、「フォルダー選択」ボタンをクリックし、処理するフォルダーを選択します。

次に、処理方法を「ファイル名に含まれる連続番号の桁揃え」、「フォルダーにあるファイル名のリストを取得して書き出す」の2つからラジオボタンをクリックして選択します。

①ファイル名に含まれる連続番号の桁揃え

ここで扱うファイル名は、「ファイル基本名+番号」という形式を有するものとします。ファイル拡張子には依存しません。必ずこの形式のファイル名になっていることが条件となります。

(例) ABCD1.csv,ABCD2.csv,ABCD3.csv・・・のようなものです。

●基本名では、桁数を揃える場合の数字以外の部分をテキストボックスに設定します。

●桁数にて、揃える番号部分の桁数を設定します。

この設定した桁数よりも、すでにファイル名に振られている数字の桁数のほうが大きい場合には、そのファイル名はそのままとなります。

例えば、桁数を3ケタに揃えると指定した場合、上記の例のファイル名は、

ABCD001.csv,ABCD002.csv,ABCD003.csv,・・・

のようになります。

②フォルダーにあるファイル名のリストを取得して書き出す

特定のフォルダーに存在するファイルのファイル名を取得しリストとしてファイルに書き出します。

●出力ファイルでは、取得したリストを書き出すファイル名を設定します。書き出すファイルは、Unicode 形式の CSV または TXT ファイルとなります。

●リスト形式では、書き出すリストの形式を次の 9 つの方法から選択します。

- ・ファイル名をカンマ区切りの 1 行で出力 (*.csv)
- ・ファイル名をタブ区切りの 1 行で出力 (*.txt)
- ・ファイル名を 1 ファイル 1 行の複数行で出力 (*.txt)
- ・拡張子を省略したファイル名をカンマ区切りの 1 行で出力 (*.csv)
- ・拡張子を省略したファイル名をタブ区切りの 1 行で出力 (*.txt)
- ・拡張子を省略したファイル名を 1 ファイル 1 行の複数行で出力 (*.txt)
- ・ファイルフルパスをカンマ区切りの 1 行で出力 (*.csv)
- ・ファイルフルパスをタブ区切りの 1 行で出力 (*.txt)
- ・ファイルフルパスを 1 ファイル 1 行の複数行で出力 (*.txt)

これらのリスト形式の違いは以下になります。

■ 1 行にまとめる場合

区切りを半角カンマにする→「ABCD001.csv、ABCD002.csv、ABCD003.csv、・・・」

区切りをタブにする→「ABCD001.csv ABCD002.csv ABCD003.csv ・・・」

■ 行を分けて書き出す場合

ABCD001.csv

ABCD002.csv

ABCD003.csv

・・・

そして、このファイル名の部分が、拡張子を含めたファイル名（ABCD001.csv）なのか、拡張子を除いたファイル名（ABCD002）なのか、あるいはファイルの絶対パス名（D:\HARDDISKA\TEST\ABCD003.csv）なのかの違いがあるということになります。

13) PDF ウォーターマーク

PDF ウォーターマークでは、既存の PDF ファイルを複数コピーして配布したりする場合に、簡易的な DRM(Digital Right Management) として、コピーした PDF ファイルのそれぞれ一つずつに異なった ID 番号などを WaterMark (透かし) として挿入したり、あるいは異なるパスワードを付加したいという要求にこたえるものです。

これまで、このようなことを行うには、必要部数の PDF をコピーし、一つずつの PDF ファイルにアクセスし、WaterMark を入れたり、パスワードを設定しなければなりません。本機能を使用することにより、挿入する WaterMark やパスワードを CSV ファイルで用意するだけで、一括して個別の WaterMark, パスワード付加が行えることとなります。

挿入できる WaterMark は「テキスト」、「画像」、「PDF」の 3 種類の中からひとつを選択します。パスワードに関しては、これらの WaterMark の処理と同時に付加することが可能です。

また、これらの WaterMark やパスワードは、バリアブルの値として与えることも、固定の値として与えることも、どちらも可能となっています。

バリアブルで WaterMark やパスワードを与える場合には、付加する WaterMark やパスワードの一覧を CSV 形式のファイルとして用意しておく必要があります。固定の場合には、この設定画面で指示します。

このバリアブルデータ CSV ファイルには、使用する値以外の項目が含まれていてもかまいません。項目番号で処理に必要な項目を指定するからです。バリアブルデータ CSV ファイルは、

「WaterMark テキスト ,WaterMark 画像ファイルパス ,パスワードテキスト ,」

と必要な項目が含まれているもので、画像ファイルパスは、格納フォルダーを設定画面で指示しますので絶対パスではなく、ファイル名のみの記入とします。

例えば、

```
ID01002,ABCD1.jpg,X1E3TRf, . . . . .
ID01004,BCFGS.jpg,9Hj5r, . . . . .
ID01006,FGGGE.jpg,gfre43s, . . . . .
ID01009,SERACH2.jpg,Ku2Ft66d, . . . . .
. . . . .
```

のようなファイルということになります。当然、上記の例のように、WaterMark テキスト ,WaterMark 画像ファイルパス ,パスワードテキストすべてが記入されている必要はなく、挿入するタイプの WaterMark リソースの項目だけでよいことになります。

バリエーションデータ CSV ファイルを使用することで、PDF 配布先と ID 番号、パスワードなどの管理が融合でき、秘密文書や特定グループ向けの PDF の管理がスムーズに処理できることとなります。

なお、PDF ファイルを WaterMark として挿入する場合には、ひとつの挿入用 PDF ファイルを準備し、可変のオブジェクトとして挿入するのは、その中の連続したページデータとなりますので、このバリエーションデータ CSV ファイルで設定するのではなく、画面にて設定します。

①テキスト WaterMark

- ・「設定項目」でテキストのラジオボタンを選択します。

- ・次に、可変データとしてテキストを扱う場合には、「可変項目番号」の数値コントロールに 1 から始まる項目番号で該当する CSV データの項目番号を設定します。可変データ中のテキストデータは、改行を半角縦棒「|」で入力することで、複数行の表示が可能です。

固定データとして、画面より固定テキストを設定する場合には、この数値コントロールの値を 0 にします。

- ・固定データの場合には、「固定データ」のテキストボックスに挿入するテキストを入力します。複数行のテキストを入力することが可能となっています。可変データの場合には、何も記入しません。

- ・「挿入 XY 座標」で挿入するテキストブロックの原点をポイント値で設定します。この原点は、行揃えによって変わり、行揃えが左揃えの場合には、テキストブロックの左上隅をさし、センター揃えの場合には、テキストブロックのセンター上を、模擬揃えの場合には、テキストブロックの右上をさします。

また、PDF ページの原点は、左上を原点とし、右方向 (X)、下方向 (Y) を正とした座標空間とします。

- ・「オプション」で、挿入するテキストの属性を設定します。設定できるのは、角度、透明度、文字サイズ。フォント、文字色、行揃えの属性となります。

注意するのは、フォントと文字色が限られているという点です。

フォントは、「MS ゴシック」、「MS P ゴシック」、「MS UI ゴシック」、「平成角ゴシック (W5)」、「MS 明朝」、「MS P 明朝」、「平成明朝 (W3)」、「小塚明朝レギュラー」の 8 フォントに限られ、文字色は、「白」、「薄灰色」、「灰色」、「暗灰色」、「黒」、「赤」、「ピンク」、「オレンジ」、「黄」、「緑」、「マゼンタ」、「シアン」、「青」の 13 色に限られます。

②画像 WaterMark

画像ファイル（JPEG など）を WaterMark として挿入します。テキスト同様に、1 ファイルを固定画像として、すべてのコピー PDF に挿入する方法と、異なった画像ファイルをそれぞれに挿入する方法とが選択できます。

- ・「設定項目」の画像ラジオボタンを選択します。
- ・「可変項目番号」を固定画像を挿入する場合には「0」を。可変データとして挿入する場合には、ファイル名を記述した項目の番号を「1」から始まる項目番号で設定します。
- ・「画像フォルダー取得」で、可変画像ファイル挿入を行う場合の画像ファイルが存在するフォルダーを取得し設定します。この場合、下の「画像ファイル取得」を行う必要はありません。また、可変画像のデータファイルには、ファイル名のみが記述されていればよいことになります。
- ・「固定データ」の項目で、「画像ファイル取得」では、固定の画像ファイルを挿入する場合に、挿入する画像ファイルを取得し設定します。固定の画像ファイルを挿入する場合には、上の「画像フォルダー取得」を行う必要はありません。
- ・「挿入位置 XY」で、画像を表示する位置を画像の左上の座標で設定します。
- ・「オプション」で、画像の属性を設定します。設定できるのは、角度、透明度、画像の幅と高さ（幅・高さともポイント）となります。

③画像 PDFWaterMark

PDF ファイルの特定のページを WaterMark として挿入します。テキストや画像同様に、すべてのコピー PDF に同じ挿入 PDF のページを挿入することも、挿入する PDF のページを切り替えて可変ページとして挿入することも可能です。

- ・「設定項目」の PDF ラジオボタンを選択します。
- ・「可変項目番号」で固定ページを使用する場合には、「固定ページ」チェックボックスにチェックを入れます。可変ページを挿入する場合には、チェックを入れません。
- ・「開始頁」で、固定の場合には挿入する PDF のページ番号を、可変の場合には、開始する PDF のページ番号を設定します。
可変ページを選択した場合、この開始ページから始まり、1 ずつカウントアップしたページが、コピー PDF に挿入されていきます。
- ・「固定データ」項目の「PDF ファイル取得」では、挿入する PDF ファイルを取得し設定します。
- ・「挿入位置 XY」で、PDF ページを表示する位置を画像の左上の座標で設定します。
- ・「オプション」で、PDF ページの属性を設定します。設定できるのは、PDF ページの幅と高さのスケールとなります。スケール値は、1.0 が原寸で、最大 2.0 までの値を設定できます。指定方法が画像の場合と異なるので注意してください。
また、**透明度設定ができません**ので、濃度が問題の場合には、予め、挿入する PDF の方で調整しておくこと

が必要となります。

④パスワード

パスワードはパスワード単体では設定できませんので、必ず、①～③のいずれかの WaterMark 挿入と同時に行ってください。

どうしてもパスワードのみを付ける場合には、テキスト WaterMark を選択し、固定文字列としてスペースを設定することで可能となります。

パスワードも、WaterMark 同様に、固定のパスワードを設定することも可変のパスワードを設定することも可能です。

またパスワードには、PDF ファイルオープン時にパスワードを聞いてくるユーザーパスワードとデータを暗号化するためのオーナーパスワードが設定できますが、可変データで設定できるのは、ユーザーパスワードのみとなり、オーナーパスワードは必ず固定の値を設定します。

- ・「設定項目」のパスワードチェックボックスにチェックをします。
- ・「可変項目番号」で、ユーザーパスワードの値を可変とする場合には、「0」以外の項目番号を。固定の場合には「0」を設定します。
- ・「固定データ」項目の「ユーザーパスワード」のテキストボックスには、固定パスワードを設定する場合のパスワードを記入します。「オーナーパスワード」には、ユーザーパスワードの固定 / 可変を問わず、暗号化が必要な場合には記入しておきます。不要の場合には未入力のままとしておきます。ただし、オーナーパスワードだけの設定はできません。
- ・「オプション」では、その他の PDF のセキュリティ属性変更として、印刷許可、コピー許可を設定できます。このチェックボックスにチェックがない場合には、コピーされた PDF は、印刷・コピー属性は不可となっています。

【その他共通事項】

ダイアログ画面の下部は、すべての WaterMark 処理の共通事項設定事項となっています。

●コピー部数

作成する PDF のコピー部数を設定します。1 部から 10,000 部までの部数が設定可能です。

●前面に表示

このチェックボタンをチェックすると、挿入する WaterMark はページオブジェクトの前面に挿入されます。ただし、前面、背面の意味合いは、使用している iTextSharp ライブラリーの実装する処理方法となります。

●可変データファイル

WaterMark, パスワードを可変データとして挿入する場合の値の設定してある CSV ファイルを取得し設定します。

●コピー元 PDF ファイル

コピーをする PDF ファイルを取得し設定します。コピーする PDF ファイルはセキュリティがかかっておらず、通常に読めるものとしします。パスワードなどのかけられているものは扱えません。

●出力フォルダー

コピーした PDF を保存するフォルダーを取得し設定します。

●可変出力ファイル名

「可変出力ファイル名」チェックボックスにチェックがある場合には、出力するファイル名もユーザーが指定する CSV ファイルにひとつずつ書かれているファイル名でコピー PDF ファイルを作成します。

この場合には、そのファイル名が書かれている項目番号を指定します。これは、コピー出力するファイル名を、次で述べるような機械的な命名ではなく、独自のファイル名で指定したいような場合に利用します。

●出力ファイル基本名

可変出力ファイル名ではない通常の出力ファイルは、「基本ファイル名 + 接続文字 + 枝版」(デフォルト)または、「枝番 + 接続文字 + 基本ファイル名」のどちらかの形式で作成された名前のファイル名となります。

出力ファイル基本名は、この出力ファイルの固定部分のファイル名「基本ファイル名」を設定します。

●基本名枝番接続文字

基本ファイル名と枝番をつなげる文字を設定します。

●出力ファイル枝番開始番号

コピー PDF ファイルにつけられる枝番のスタート番号を設定します。

●出力ファイル枝番桁数

枝番を固定桁数で付ける場合に、桁数を指定します。「0」の場合は有効数字の桁数をそのまま使用しますので、桁数は固定とはなりません。

●枝番先頭

「枝番先頭」チェックボックスにチェックがあると、出力ファイル名の基本名と枝番部分の順番をデフォルトから変更し、「枝番 + 接続文字 + 基本ファイル名」として作成します。

【設定保存簿ボタン】

この画面で設定した内容をファイルとして保存します。

【設定読み取りボタン】

保存した設定ファイルを読み取り、画面に表示します。

14) PDF 画像変換

電子書籍など 1 頁毎に画像化したものを集積して作成するという方法も考えられ、その場合、PDF ファイルをページごとに分割し、連続番号を付した画像ファイルに変換したデータを必要とします。

ここでは、この変換を簡便に実行することを目的として、以下の画像形式の連続ファイルの生成を行います。

【変換先画像ファイル形式】

- ・ SVG
- ・ JPEG
- ・ Photoshop
- ・ PNG

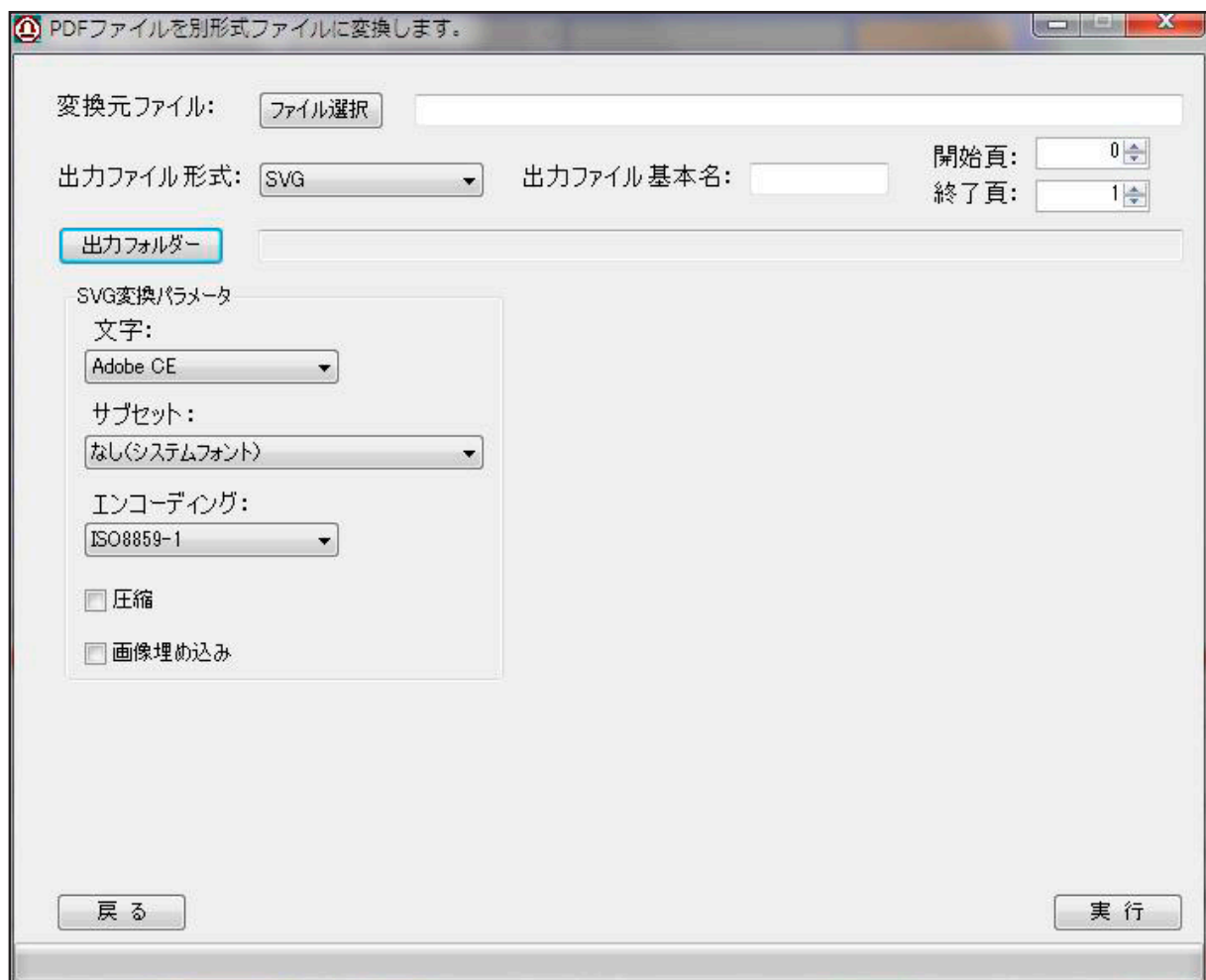
- GIF
- EPS

① SVG 変換

「メニュー → ユーティリティ → PDF 画像変換」を選択すると、SVG 変換のダイアログ画面が表示されます。

ダイアログは、画面上部のすべての画像変換に共通の部分と画面下部の個別画像変換で異なる設定部分とに分かれます。

個別画像変換固有の設定部分は、変換固有のパラメータを設定するもので、この部分の切り替えは、共通部分の「出力ファイル形式」コンボボックスにて変換先画像指定を切り替えるごとに、変換先画像処理に適した設定画面に切り替わります。



【共通部分】

変換元ファイル: ファイル選択ボタンをクリックし、変換ソース PDF ファイルを選択します。

出力ファイル形式: 変換先画像ファイル形式を選択します。

出力ファイル基本名: 変換された画像ファイルは 1 頁毎にファイル化されますが、そのファイルの基本名部分を設定します。実際のファイル名は、この基本名に連続番号が付加されたユニーク名となります。

開始頁: 画像処理を行う PDF の開始頁

終了ページ: 画像処理を行う PDF の終了頁

出力フォルダー: 変換した画像ファイルを保存するフォルダー。

「戻る」ボタン → ダイアログを閉じます。

「実行」ボタン → 変換処理を開始します。

【個別部分】

個別部分の設定は変換する画像フォーマット固有の処理パラメータで、パラメータ自体の詳細な意味に関しては、Illustrator のマニュアルを参照してください。

文字：フォントの書き出し方法を「Adobe CEF/SVG/ アウトラインに変換」から選択指定します。

サブセット：書き出す SVG ファイルに埋め込む文字（特定のフォントの文字）を指定します。

「なし（システムフォント）/ 使用される文字のみ / 英数字 / 英数字と使用される文字 / 英数字と欧文特殊文字 / 英数字、欧文特殊文字と使用される文字 / すべての文字」から選択します。

エンコーディング：SVG ファイルで文字をエンコードする方法を「ISO8859-1/UTF-8/UTF-16」から選択指定します。

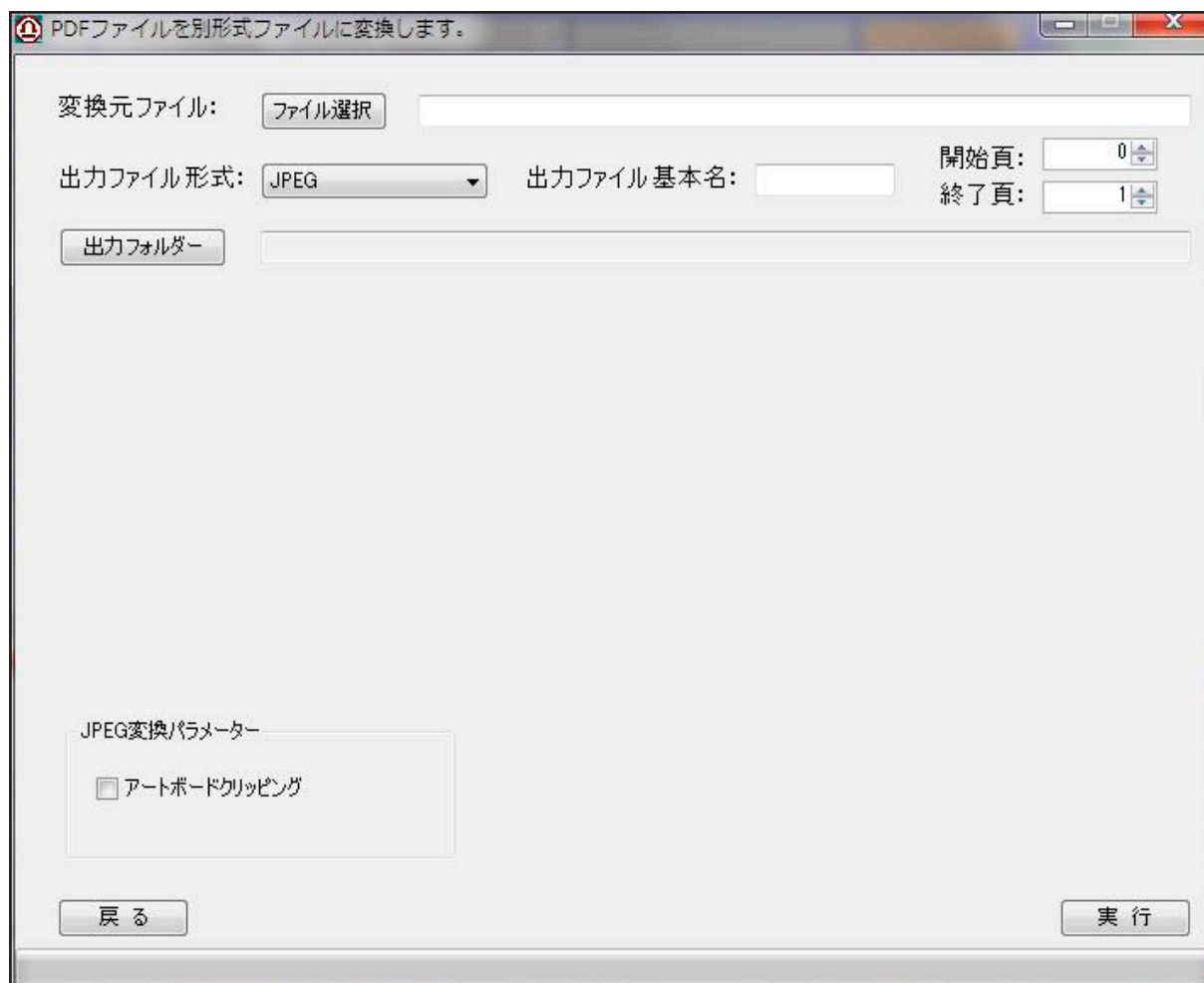
圧縮：圧縮フォーマットにするか。

画像埋め込み：ラスタライズされた画像をファイルに直接埋め込むかどうか。

② JPEG 変換

JPEG ファイルに変換します。

なお、これ以降、個別設定項目のみを説明します。



アートボードクリッピング：アートボードをクリッピングします。

③ Photoshop 変換

Photoshop 形式に変換します。



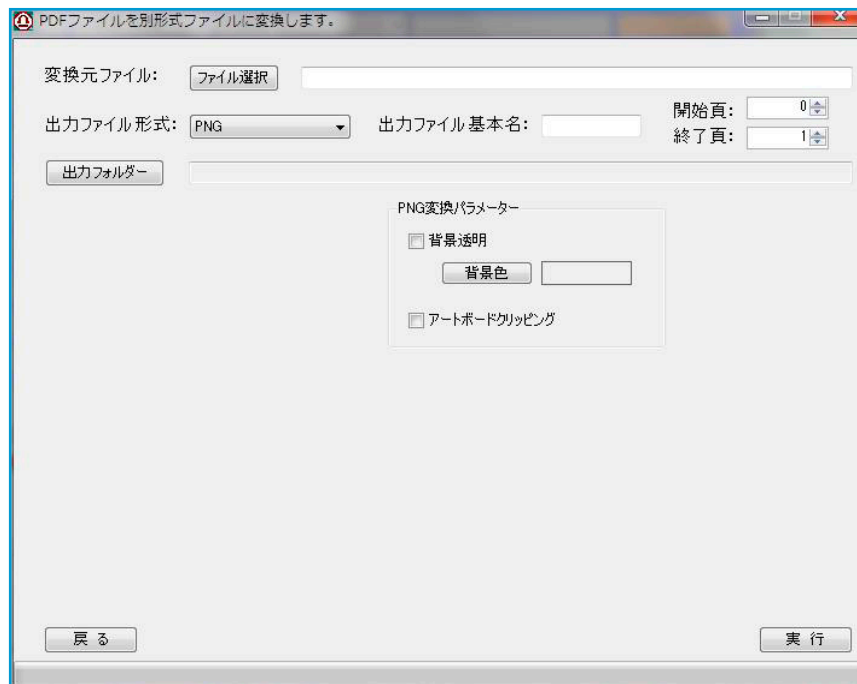
解像度：書き出すファイルの解像度を指定します（72 ～ 2400ppi）。

カラースペース：「RGB/CMYK/ グレースケール」から選択します。

ICC プロファイルを埋め込む：カラーマネジメントされたドキュメントを作成します。

④ PNG 変換

PNG 形式に変換します。



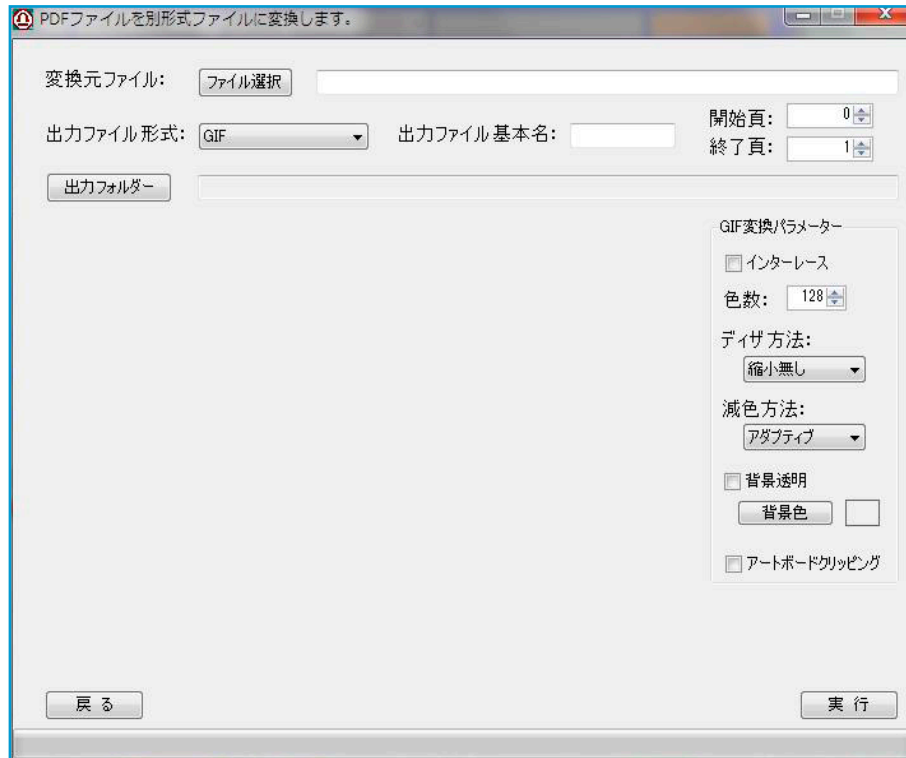
背景透明：背景を透明にします。

背景色：背景色をカラーピッカーにて選択します。

アートボードクリッピング：アートボードクリッピングを行います。

⑤ GIF 変換

GIF 形式に変換します。



インターレース：インターレース変換します。

色数：色数を 256 色の中から指定します。

ディザ方法：「縮小なし / ノイズ / パターンディザ / デヒュージョン」の中から選択します。

減色方法：「アダプティブ / パーセプチュアル / 選択 / Web」の中から選択します。

背景透明：背景を透明にします。

背景色：背景色をカラーピッカーにて選択します。

アートボードクリッピング：アートボードクリッピングを行います。

⑥ EPS 変換

EPS 形式に変換します。

個別のパラメータ設定はありません。

⑥外字処理

レガシーなデータ及びリンク形式外字フォントをクライアントから供給される仕事を行う場合、リンク外字フォントは、InDesign の取り扱えないフォント形式であるため、TTEdit などのフォント作成ツールにて、外字フォントを 1 フォント形式のフォントに変換して使用する必要が生じます。

外字フォントをリンク形式でないフォントとしたため、外字フォントは独立した単独のフォントとなることになります。

通常、データには、外字フォントが単純に文字コードとして羅列されているだけというのが通常です。

そのため、データの外字に該当する文字を識別するデータを（すなはちフォント切り替えの記号）をデータ中に埋め込まないといけない、それも InDesign が識別できる記号を挿入しなければならないという困った問題が発生します。

プログラムを組める方が社内存在し、個別に対応できる環境にあればよいのですが、そうでない場合には、いかんともしがたい状況になってしまいます。

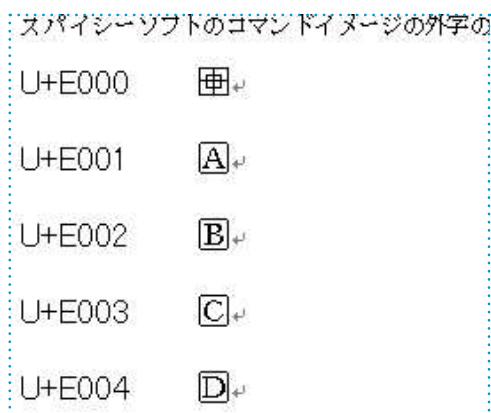
SpicyLibra では、この問題の解決策として、外字の使用頻度の高い人名の処理に関しては、標準・カスタム人名字取処理及び SpicyTag での人名処理においては、自動フォント変換機能にて対応可能となっております。

しかしながら、それ以外の文字列単純挿入などでは、この機能が有効ではありません。そこで、外字処理ユーティリティでは、処理データに対して、事前に外字文字のチェックを行い、書体設定並びに文字スタイル設定といった SpicyTag にて当該文字列を囲み、外字フォントの書体変更処理を SpicyTag を利用したデータとして対応できるようになっております。

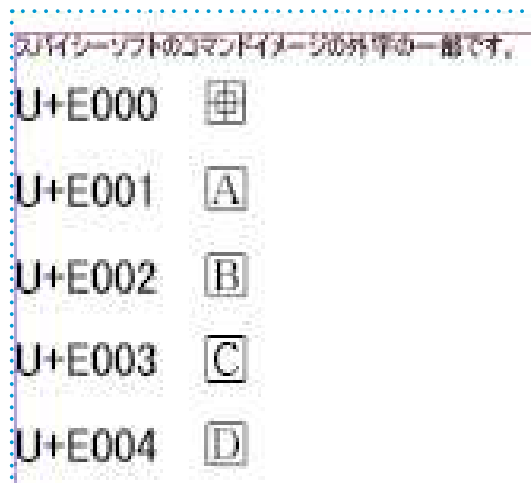
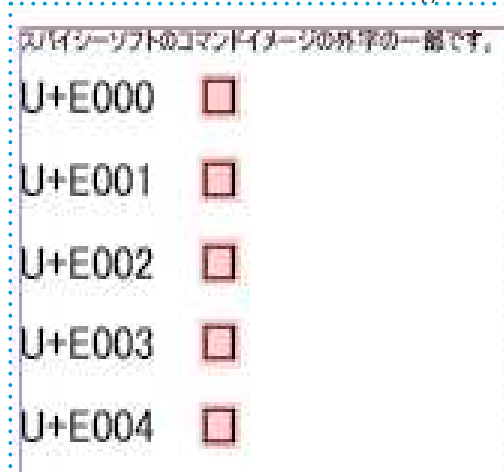
また、すでに外字文字を使用して InDesign のドキュメントになり、外字部に適切なフォントが適用されていないために文字化けを起こしているような場合に対応できるように、InDesign ドキュメント内の外字文字を検索し、外字フォントを適用する処理も用意しております。

さらに、SpicyLibra の処理中に行える UNICODE 変換テーブルを利用した、処理データの UNICODE 変換処理機能をユーティリティとして、単独でできるようになっています。

次図は、リンク形式の外字フォントを利用して MicroSoft Office でサンプルを表示したものです。



次図左は、リンク形式の外字フォントを利用して InDesign でサンプルを表示したもので、右は、1 フォント形式の外字フォントにし、InDesign でサンプルを表示したものです。



● SpicyTag 挿入

処理する CSV またはタブ区切りファイル中の UNICODE の私用領域文字 (U+E000 ~ U+F8FF) 範囲内の「適用文字範囲」にて設定された文字コードの範囲を検索し、検索された文字列を設定された SpicyTag で囲んで出力します。

私用領域の文字列が、項目区切りを挟んで連続する場合、一旦、項目区切り文字の前で、SpicyTag を閉じ、次の項目データの先頭に、開始の SpicyTag を挿入します。

挿入する SpicyTag は「開始タグ」と「終了タグ」のテキストボックスに設定します。
項目ごとに、設定した SpicyTag 内の属性値を固定で挿入したい場合には、データの全項目が対象となります。
例えば、開始タグとして <cstyle name=" 外字 ">、終了タグとして </cstyle> を設定している場合、

あいうえお <cstyle name=" 外字 "> ㊦ </cstyle>,<cstyle name=" 外字 "> ㊧ </cstyle>

のように、単純に、検索された私用領域文字列に対して、設定した SpicyTag を文字列の前後で囲んで出力します。

これに対して、適用項目を指定したり、SpicyTag 内の一部を可変にしたい場合には、設定する SpicyTag 内の可変項目を #1 から、#2,#3,... という具合に増加させたプレースホルダーの字列を挿入して指定します。

例えば、SpicyTag で書体切り替えを 1 項目目と 3 項目目にしたい場合を考えます。

開始タグは、、終了タグは、 になります。

そして、検索対象の項目番号と、#1,#2 のプレースホルダーに挿入する値は、「項目ごとにプレースホルダー文字 (#) を変える」チェックボックスにチェックを入れ、その下のテキストボックスにて、指定する値を設定します。

1, MS 明朝 / 標準 ;3, 小塚ゴシック Pro/R

のように、

項目番号 + 半角「,」 + #1 置換文字列 + 半角「/」 + #2 置換文字列 + 半角「;」 + 項目番号 + 半角「,」 + #1 置換文字列 + 半角「/」 + #2 置換文字列

の形式で記述します。

処理するデータの文字エンコード及び処理したデータの出力エンコードを、それぞれ入力文字エンコード・出力文字エンコードのコンボボックスにて選択します。選択可能なエンコードは、Utf-16(LE) 及び Shift-JIS です。Shift-JIS に出力する場合には、対応する Shift-JIS の範囲内か注意してください。

また、本処理では私用領域内の範囲も適用文字コード範囲で設定することが可能です。

なお、データ項目の欄は、処理ファイルを選択したときに、選択されたファイルの 1 レコード目の項目を参考にするために表示します（具体的な処理とは関係ありません）。

面最下部の 4 つのボタンは、外字処理コントロール各画面で共通となり、「戻る」ボタンは、ユーティリティ画面を閉じ、SpicyLibra のメイン画面に戻ります。

「設定保存」ボタンは、画面にて設定した値をファイルに保存します。
 「設定読込」ボタンは、保存した設定ファイルから値を読みだして画面に表示させます・
 「実行」ボタンは、処理を実行します。

● UNICODE 変換

UNICODE 変換は、SpicyLibra の UNICODE 変換テーブルを使用して、あらかじめ、処理データに対して変換テーブルを使用した返還を施したデータファイルを作成します。

従いまして、SpicyLibra のテーブルメニューから、UNICODE 変換テーブルを事前に作成しておく必要があります。

「変換テーブル」ボタンにて、変換に使用する UNICODE テーブルファイルを選択します。選択されたテーブルの内容は、画面左のグリッドテーブルに表示されます。このグリッドテーブルは表示のみで、編集などはできません。

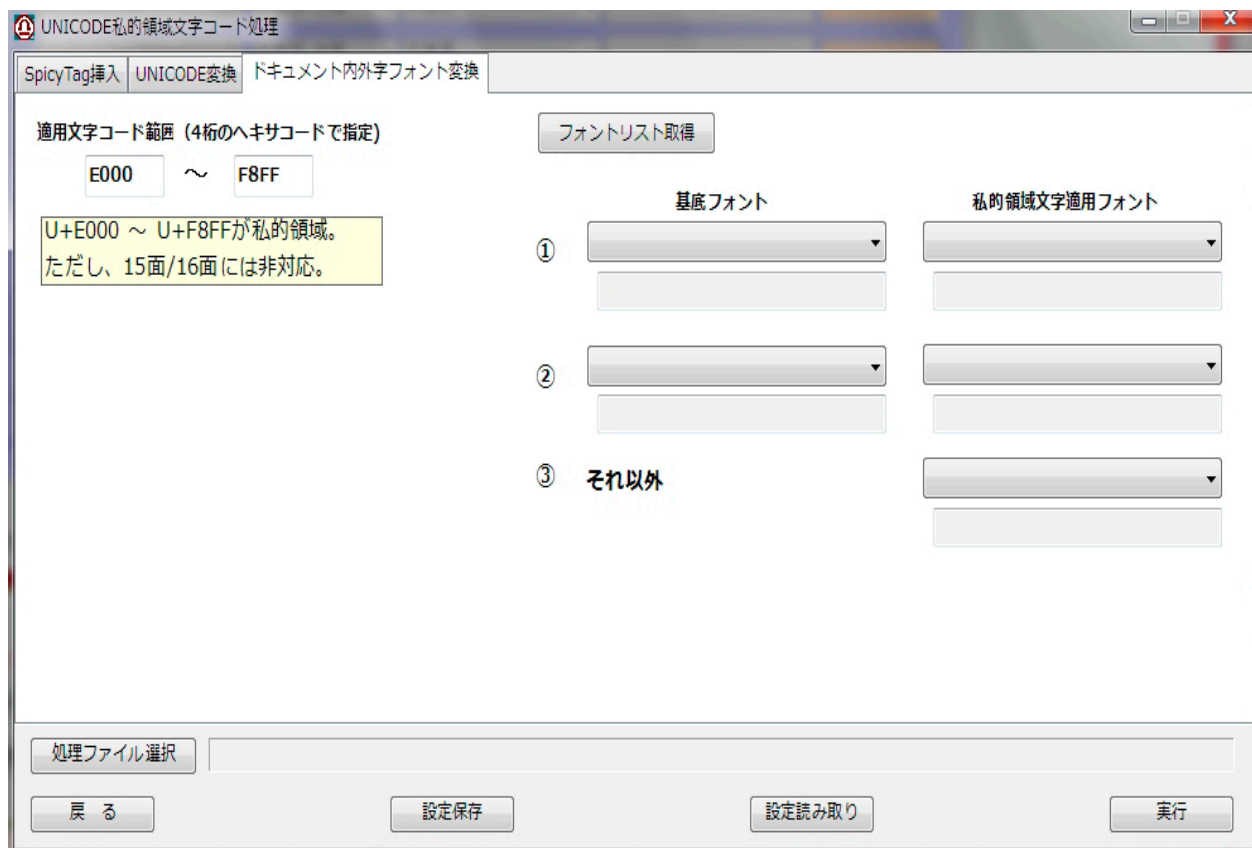
入力文字エンコード及び出力文字エンコードのコンボボックスにて、入出力ファイルの、それぞれの文字エンコードを指定します。

設定できるエンコードは、Utf-16(LE) 及び Shift-JIS の 2 種類となります。

処理ファイルを選択し、「実行」ボタンをクリックして処理を実行します。

その他のボタンは、上記項目で説明したとおりです。

●ドキュメント内の私用領域文字フォント変換



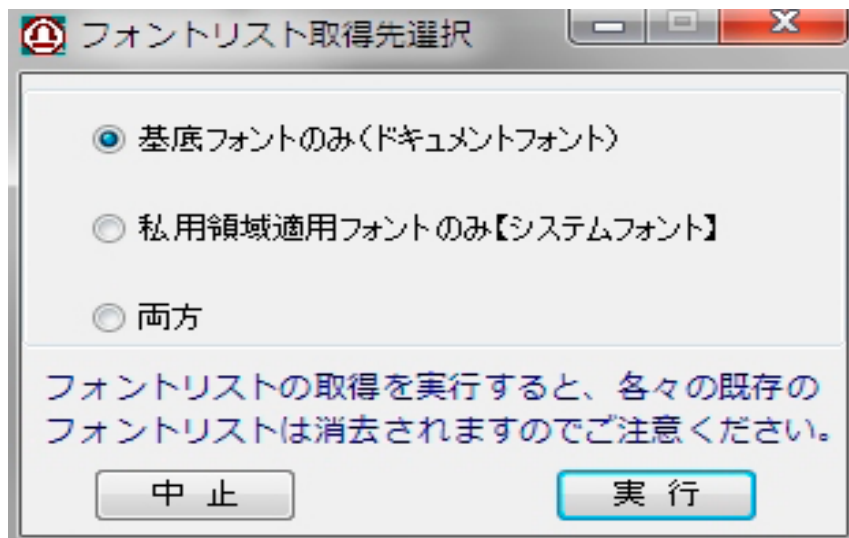
この処理は、上記項目のいずれの処理も、SpicyLibra の処理を行う前の処理ファイルに対するものであったの
と異なり、すでに、何らかの方法で InDesign ドキュメントになったドキュメントファイルに対して、その中に
含まれる UNICODE 私用領域に該当する文字を検索し、書体変更を行うものです。

まず、適用文字コード範囲を UNICODE の私用領域範囲の中で設定します。

次に、適用するフォントを設定します。InDesign よりフォントリストを取得していない場合には、フォント
リストを「フォントリスト取得」ボタンをクリックして取得しておきます。

ひょじゅん・カスタム人名字取処理におけるパラメータ設定でのフォントリスト取得処理と一部異なり、基底
フォントは、ドキュメントフォントをリストアップします。

従って、「フォントリスト取得」ボタンをクリックすると、次のフォントリスト取得先を指定するダイアログ
画面が表示されます。



「基底フォントのみ」を選択実行すると、私用領域適用フォントに関するコンボボックスやテキスト簿KK巢には影響しませんが、基底フォントに関するコンボボックスやテキストボックスの値は、消去されます。

逆に、「私用領域適用フォントのみ」を選択実行すると、基底フォントに関するコンボボックスやテキスト簿KK巢には影響しませんが、私用領域適用フォントに関するコンボボックスやテキストボックスの値は、消去されます。

「両方」を選択実行した場合には、基底フォント及び私用領域適用フォントをに関するコンボボックスとテキストボックスのすべての値が、消去されます。

基底フォント欄では、該当する私用領域文字が適用されているフォントをコンボボックスにて設定します。

この基底フォントが適用されている私用領域文字に対して、あらたに適用するフォントを私用領域適用文字の欄にて設定します。

基底フォントおよびそれに対応した私用領域適用フォントは2組まで設定できます。

また、基底フォントの欄にて設定されていないフォントに私用領域文字があった場合にも、適用フォントを変更する場合には、「それ以外」の行にある私用領域文字適用のフォント選択コンボボックスにて、適用するフォントを選択しておきます。

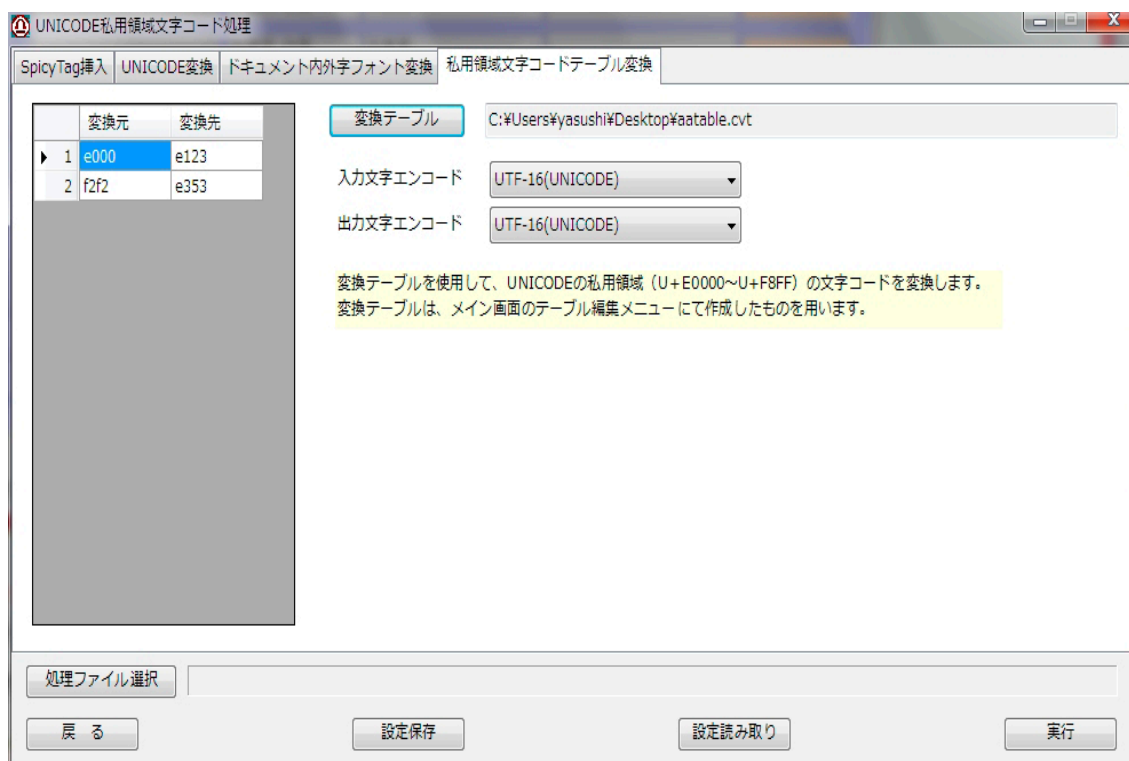
その他のボタンの機能は、上記項目で説明したとおりです。

※基底フォントのコンボボックスに設定されたフォントリストは、設定の保存で保存されますので、設定の読み取りで、保存した値がコンボボックスに設定されます。ただし、基底フォントは、処理するドキュメント固有のフォントリストになりますので、処理を実行するドキュメントが異なる場合には、都度、ドキュメントのフォントリストを取得する必要があります。

私用領域適用フォントのコンボボックスに設定されたフォントリストは、システムのフォントリストとなりますので、ひとたび、フォントリストを取得しておけば、ファイルに保存されますので、本処理用のタブ画面を選択表示することで、この保存されたフォントリストファイルから、自動的に読み込まれますので、システムのフォントに変更がない限り、フォントリストの取得を行う必要はありません。

※なお、本処理は、ドキュメントの Story で管理されるすべての文字を読み取りチェックしますので、時間がかかる処理となりますので注意してください。

●私用領域文字テーブルコード変換



メインメニューの「テーブル編集」－「私用領域コード変換テーブル」で作成した変換テーブルを用い、Unicode エンコーディングデータの私用領域（U+E000 ～ U+F8FF）にある文字コードデータを、私用領域コード範囲で文字コードの変換を行うものです。

これは、Unicode 私用領域のキャラクターマッピングが異なる外字を用いるデータを扱うときに、コード変換を行って統一された外字コードマッピングデータに変換することで、外字フォントの統一的な使用を図ることを目的としています。

1) 「変換テーブル」選択ボタンで、使用する変換テーブルを開きます。

ファイルが開くと、変換テーブルの内容がグリッドビューに表示されます（表示のみで編集はできません）。

2) 入力文字エンコーディング

変換元ファイルの文字エンコーディングを選択します。

変換対象となるのは、Unicode(UTF-16) か SHIFT-JIS エンコーディングとなります。

3) 出力文字エンコーディング

変換先ファイルの文字エンコーディングを選択します。

選択できるのは、Unicode(UTF-16) か SHIFT-JIS エンコーディングとなります。

4) 処理ファイル選択

「処理ファイル選択」ボタンをクリックし、変換元のファイルを選択します。

5) 実行

「実行」ボタンをクリックすると、出力ファイル設定ダイアログが表示されますので、出力ファイルを設定すると変換処理が開始されます。

6) 戻る

「戻る」ボタンをクリックし、メイン画面に戻ります。

※なお、画面で設定した内容は、「設定保存」ボタンをクリックし、保存先ファイル（*.prv）を指定することで保存可能です。保存された設定ファイルを開くには、「設定読み取り」ボタンをクリックし、保存ファイルを選択します。ただし、出力ファイルパスは保存されません。

第 12 章 ツール

1. 個別郵便番号テーブル作成

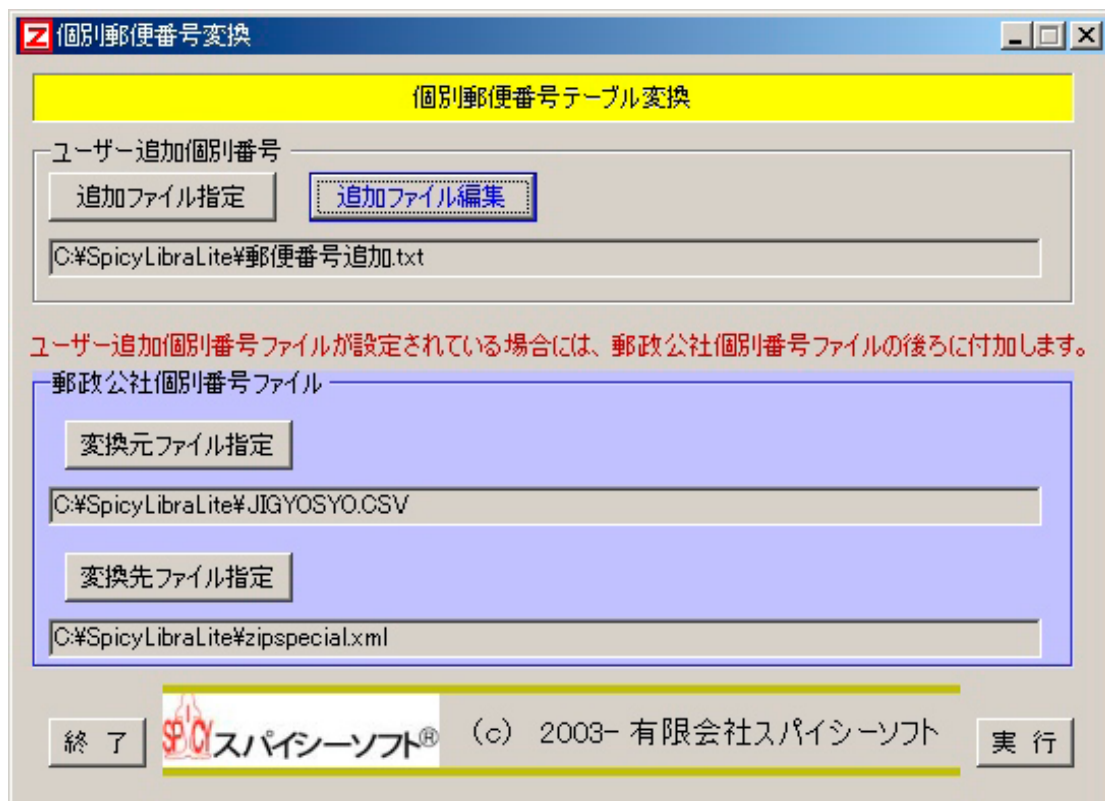
大口事業者などは、個別に郵便番号を取得している場合があります。この個別番号は郵政公社により、データファイル（JIGYOSYO.CSV）として公開されています。

ツールフォルダにある「SpecialBarZip.exe」プログラムは、この郵政公社により公開されている個別郵便番号ファイルを利用して、SpicyLibra の「個別郵便番号テーブル」ファイルを作成します。

まず、最新の個別郵便番号ファイルを郵政公社のホームページよりダウンロードしてください。この時、従来の個別郵便番号ファイルに対する差分のデータファイルと完全な全てのデータが記載されているデータファイルがありますが、差分ファイルには対応しておりませんので、必ず、完全データファイルをダウンロードしてください。

郵政公社が公開している個別郵便番号ファイルのデータには、公開を拒否している事業者のデータは入っておりませんが、「SpecialBarZip.exe」では、この非公開の個別番号にも対応できるようになっています。

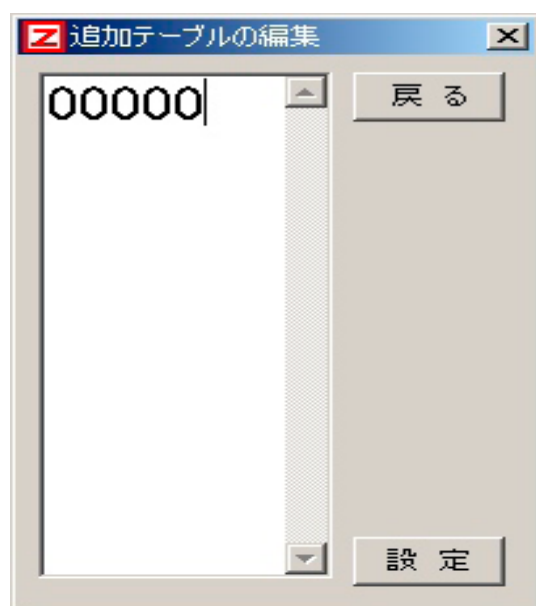
① 非公開個別郵便番号ファイルの設定



「SpecialBarZip.exe」を起動し、ユーザー個別番号データ入力を画面上部の「ユーザー追加個別番号」枠の処理部分で入力・編集します。

新規の場合は、まず「追加ファイル指定」を選択し、適宜なファイル名を付け新しいデータファイルを作成します。次に「追加ファイル編集」を選択し、新しいデータを入力してください。また、追加・修正の場合は、「追加ファイル指定」から対象となるファイルを指定してください。

② SpicyLibra 用個別郵便番号ファイルの作成



画面下部より、「変換元ファイル指定」にて郵政公社よりダウンロードしたデータファイルを選択し、「変換先ファイル指定」にて変換後のファイル名を指定します。通常は、変換前と同じファイル名「zipspecial.xml」を指定します。

次に、「実行」ボタンをクリックして、個別郵便番号ファイルを作成します。

なお、①の「追加ファイル指定」でユーザー個別番号ファイルが選択してある場合には、郵政公社のデータを変換した最後に、ユーザー個別番号を変換したデータを付加します。

2. フォルダー監視設定および実行

ホットフォルダー機能を使用するための監視フォルダーの設定方法と監視の実行に関して説明します。

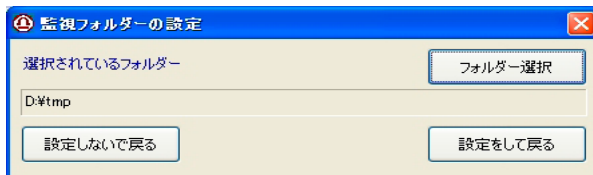
ホットフォルダー機能自体の説明は、「[ホットフォルダー機能](#)」を参照してください。

「MakeCommandFile.exe」で作成した「自動処理コマンドファイル」、あるいは、これと同じような処理命令ファイルを作成するお客様が作成したアプリケーションプログラムと、「SpicyLibra」の「フォルダー監視設定」の各設定を組み合わせ使用します。

ただし、「PDF 面付け」はこの自動処理の対象とはなりません。

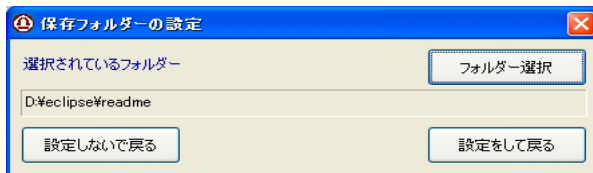
① 監視フォルダー

監視するフォルダーを選択します。FTP サーバーを使用の場合には、FTP サーバーの該当フォルダを選択します。



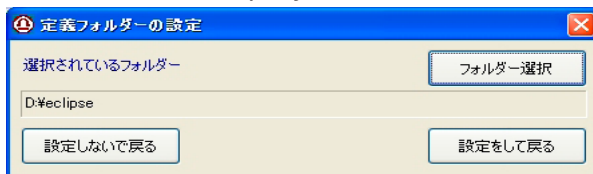
② 保存フォルダー

自動処理のために投入された、処理命令ファイルと処理ファイルを保存しておくフォルダーを選択します。



③ 処理定義ファイルフォルダー

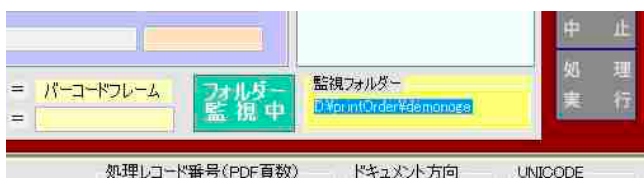
自動処理に使用する SpicyLibra 定義ファイル (*****.sld) が存在するフォルダーを選択します。



④ 監視実行

監視モードでない場合には、実際の監視モードに入ります。

監視モードの場合には、監視モードを抜けます。



※自動処理のフォルダーに関して

自動処理を行う場合、同一ファイル名でのバッティングを避けるため、出力フォルダー、保存フォルダーのどちらにも、一つ一つの処理単位で、そのフォルダーの中に処理した日付・時間を元に作成した名前のフォルダーを作成し、ファイルを作成します。

詳細は、「[ホットフォルダー機能](#)」を参照してください。

⑤ 「自動処理コマンドファイル作成 (MakeCommandFile.exe)」

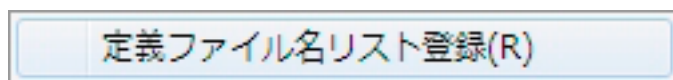
本プログラム (MakeCommandFile.exe) と次に述べる(a)で作成した定義ファイル一覧ファイル (DefineFile.txt) を、コンピュータにコピーし、本プログラムを起動します。

本プログラムで作成した、定義ファイル選択用の DefineFile.txt と本プログラムを処理用のデータを送信するために、ネットワークに接続されたコンピュータやローカルなコンピュータに配布することができます。

ただし、本プログラムは、あくまでもユーザーが独自のファイル送信プログラムを作成するためのサンプルであり、必要最低限の機能しかありません。

本プログラムを参考にして、リッチなファイル送信プログラムを作成してください。ただし、InDesign をドキュメントサーバーのように利用することは Adobe 社のクライアント版 InDesign では認められておりませんので、注意してください。

- (a) メインメニューの「ツール」を選択し、初めて定義ファイル一覧を登録するとき、および、定義ファイル一覧が更新されることに実行します。



このメニューで選択するフォルダーには、定義ファイル一覧に登録するすべての定義ファイルを一つのフォルダーに集めておき (実際の、さまざまな定義ファイルをコピーしておきます)、そのフォルダーを選択します。

プログラムは、指定されたフォルダーから、そのフォルダーに保存されている定義ファイルのリストを作成し、DefineFile.txt を作成します。

次回以降は、この作成された DefineFile.txt を読み込み使用しますので、変更がない限り、このメニュー操作は必要ありません。

- (b) 定義ファイル名

(a)で指定したフォルダに含まれる「定義ファイル (*.sld)」の一覧表示されますので、必要な定義ファイルを選択してください。

(c) 処理ファイル名

「処理ファイル名」と表示されている囲み枠の中をクリックすると、自動処理する対象となるデータファイルを選択できる画面に移りますので、必要なファイル種とファイル名を選択してください。



(d) 出力ファイル名、プレビュー情報

「定義ファイル (*.sld)」で設定した出力ファイル名と異なるファイル名を付けたい場合は、この欄にそのファイル名を入力してください。未入力の場合は、「定義ファイル (*.sld)」で設定した出力ファイル名が付けられます。出力ファイル名は、作成するインデザインのドキュメント名となります。indd の拡張子は付けずに、ドキュメント名のみか、絶対パスにて「d:\abc\ドキュメント名」のように記述してください。

逆に、プレビューを設定する際には、拡張子 (.preview、.pdf) 付きの絶対パスで記述してください。

(e) 開始番号・終了番号・マスター名・画像フォルダーパス・テキストフォルダーパス

「定義ファイル (*.sld)」で設定した「開始」と「終了」のレコード番号、あるいはマスター名を変更したい場合は、各欄にその番号や名前を入力してください。

画像フォルダーパスとテキストフォルダーパスを、それぞれ定義ファイルの設定フォルダーと変更する場合に、設定してください。

(f) 開く・保存

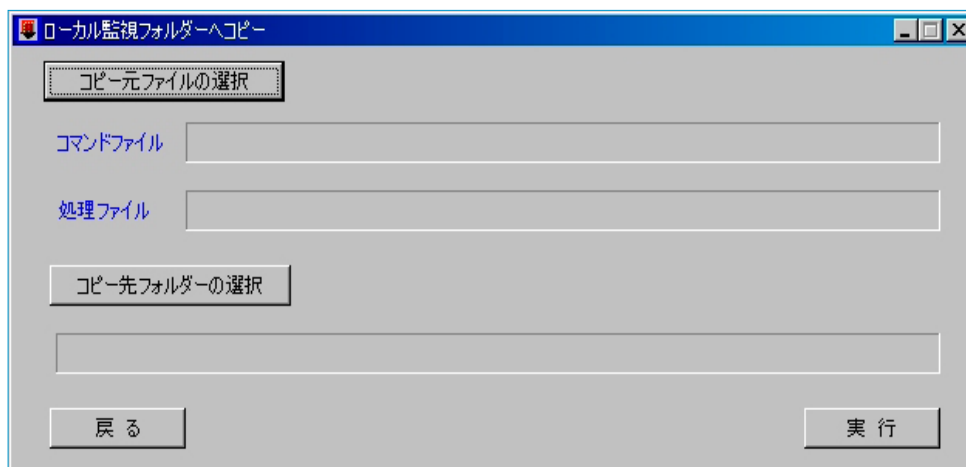
各設定を「自動処理コマンドファイル」として、保存・呼び出しを行います。

(g) 処理命令ファイルの詳細

この処理命令ファイルは、以下のような XML ファイルとなっていますので、この XML ファイルにならってユーザーで、Visual Basic や Visual C++、C#、Java などを用いて、送信プログラムを独自に作成し利用することができます。

(h) ローカルコピー

同じコンピュータに監視フォルダーがあり、そこに配信する場合は、ファイルメニューの「ローカルコピー」を選択します。



作成した処理命令ファイルと処理ファイルをそれぞれ選択します。処理命令ファイルを選択することによって、両方が表示されます。

次に、監視フォルダーに設定されているフォルダーを選択して、「実行」ボタンをクリックしてください。

(i) FTP 送信



別のコンピュータに FTP サーバーの監視フォルダーがあり、そこに配信する場合は、ファイルメニューの「FTP 送信」を選択します。

ローカルコピーの場合と同様に、送信するファイルを選択します。

「FTP サーバーアドレス、ログオンユーザー名、パスワード」を入力した後、「送信」ボタンをクリックします。

FTP サーバーのアドレスなどは、「設定の保存」をチェックしておくと、次回からは入力が必要となります。

※ FTP 送信など自動処理を行う場合、InDesign のサーバー的使用方法は、Adobe 社によって認められておりませんので、ネットワーク環境での使用の場合には、充分注意をしてください。弊社では、ユーザー様の使用法につきましては一切の責任を負いません。

3. TEX エディタ (SpicyEPSEdit.exe) の使い方

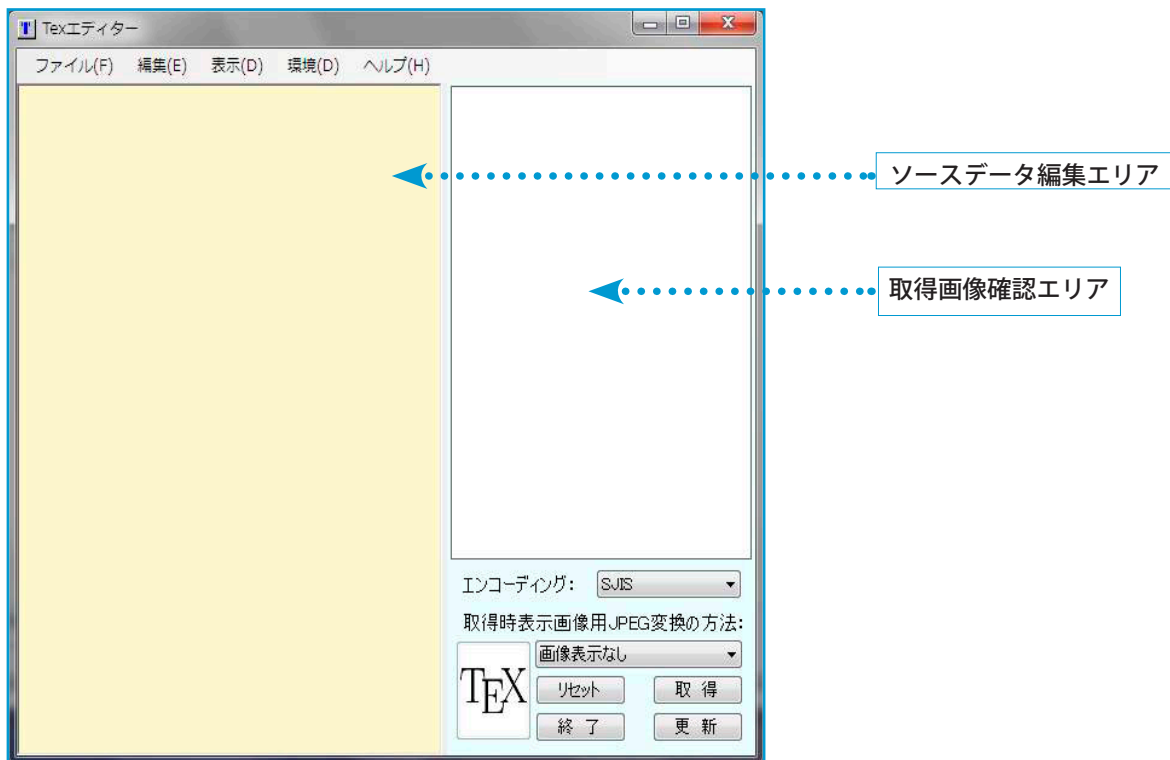
TEX エディタ (SpicyEPSEdit) は、SpicyLibra によって InDesign ドキュメントに貼り込まれた TEX データ変換の EPS 画像を修正する必要がある場合に、当該 EPS 画像の貼り込み時に同時に埋め込まれた非表示の TEX ソースデータを取得し、再編集したのち再度 TEX 変換プログラムを使用し EPS 画像に変換し、貼り込まれた EPS 画像の代わりに貼り込みを行うものです。

本プログラム (SpicyEPSEdit) は、SpicyLibra によって貼り込まれた EPS 画像のみが処理対象となります。これは、処理に埋め込まれた EPS 画像の元 TEX データを利用するためです。

なお、SpicyEPSEdit.exe プログラムは、SpicyLibra をインストールしたフォルダーにできる「ツール」フォルダーに保存されています。

①起動

SpicyEPSEdit.exe をダブルクリックし起動します。次のメイン画面が表示されます。



以下に、画面の説明を行います。

●メニュー

・【ファイル】

- 「保存 / 別名で保存」：現在バージョンでは同一の機能で、編集データを TEX データとして保存します。
- 「印刷設定」：編集エリアの TEX テキストを印刷するための印刷設定を行います。
- 「プレビュー」：印刷プレビューを行います。
- 「印刷」：編集エリアの TEX テキストを印刷します
- 「終了」：プログラムを終了します。

・【編集】

- 「取り消し」：直前の修正を取り消します。
- 「やり直し」：「取り消し」した修正を再実行します。
- 「検索」：編集テキスト内の文字 (列) を検索します。
- 「置換」：編集テキスト内の文字 (列) を指定した文字 (列) に置換します。
- 「切り取り」：選択した文字 (列) をカットします。
- 「コピー」：選択した文字 (列) をコピーします。
- 「貼り付け」：「コピー」した文字 (列) をペーストします。
- 「削除」：選択した文字 (列) を削除します。

「すべて選択」：編集エリア内の文字（列）をすべて選択します。

・【表示】

「フォント」：選択したテキストの表示フォントを設定します。

「フォントカラー」：選択したテキストフォントの色を設定します。

「背景色」：編集エリアの背景色を設定します。

「折り返し」：ワードラップの設定 / 非設定を行います。

「前面に固定」：本プログラムをパソコン画面の最上位ウインドウに固定します。

・【環境】

「TEX 環境」：取得画像表示エリアへの TEX データ→ JPEG 画像変換などを行うプログラムの設定などを行います。選択すると次の画面が表示されます。

Tex環境設定

プログラムフォルダー: D:\w32tex\bin64

ワークフォルダー: D:\temp\texwork

プリアンブル

```
%documentclass[12]{article}
%pagestyle{empty}
%begin{document}
```

ポストスクリプト

```
%end{document}
```

実行プログラム設定

プログラム名	パラメータ	作成ファイル名
platex.exe	%1.tex	%1.dvi
dvips.exe	-D 1200 %1.dvi -o %1.ps	%1.ps
gswin64c.exe	-dSAFER -q -dBATCHE -dNOPAUSE -sDEVICE=eps2write -dEPSCrop -r9600 -sOutputFile=%1...	%1.eps

行削除 プログラムパス取得 設定プログラムの存在確認

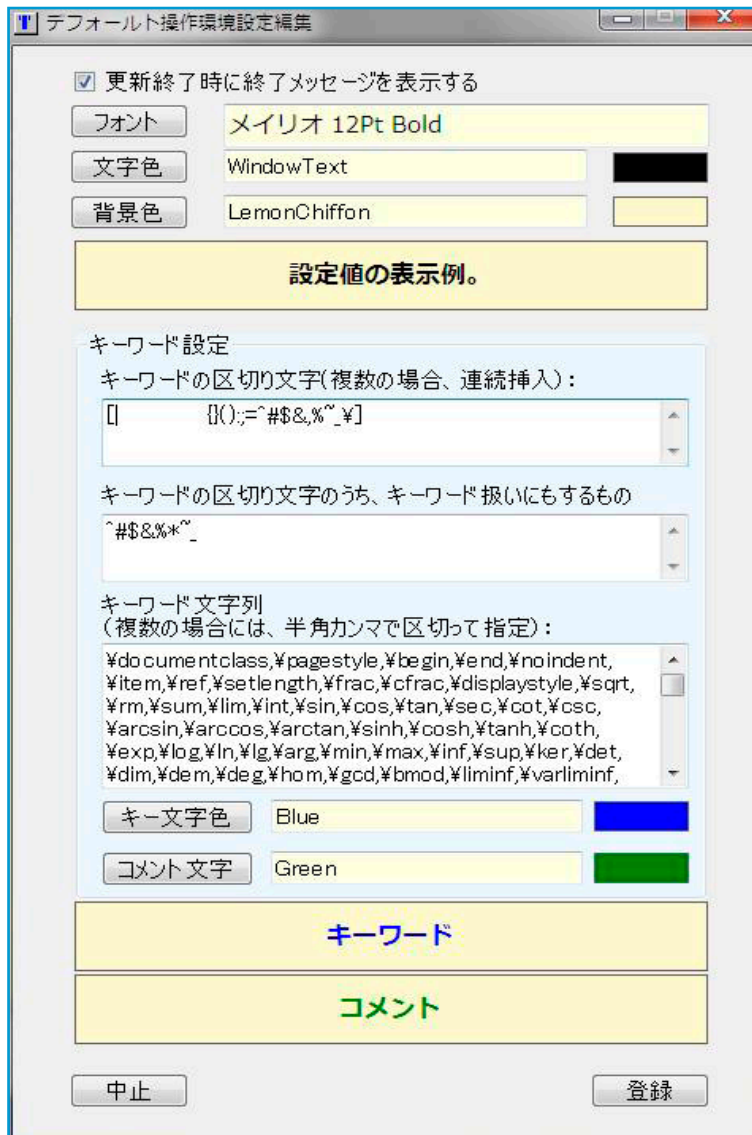
プログラム設定のプログラム名を「プログラムパス取得」で取得した結果、上記テキストボックスに表示されたパスをコピーしプログラム名の欄にペーストします。

プログラムフォルダー:「実行プログラム設定」で設定するTex関連の実行プログラムのあるフォルダー
 ワークフォルダー:実行で作成されるファイルを一時的に保存するシステム領域ではない作業用のフォルダー
 プリアンブル:TEXの「documentclassからbegin{document}」までの本文前の序文(データに含まれる場合には不要)
 ポストスクリプト:プリアンブルに対応する「end{document}」のような本文後の終了文(データに含まれる場合には不要)
 実行プログラム設定:インデザインに貼込む画像を得るまでの加工に使用するプログラムを処理する順番に設定します。SpicyLibrCSから「%1.tex」のファイル名で渡しますので、パラメータ中では、拡張子を除いたファイル名の基本部分を「%1」として書いてください。作成ファイル名は、指定されたプログラムが成功した場合に作成されるファイルを記入します。

中止 適用

- プログラムフォルダーボタン → TEX データを変種したのち、編集したデータから InDesign に貼り込む EPS 画像を作成するのに必要なプログラムの保存フォルダーを設定します。
- ワークフォルダーボタン → 上記処理を実行する場合に作成した中間ファイルなどを保存するのに使用するフォルダーを設定します。
- TEX 参考 URL ボタン → ヘルプメニューで「TEX 参考サイトを表示する」を選択したときに表示させる TEX コマンドの説明サイトなど、TEX データ編集に参考となるサイトの URL を設定します。
- 実行プログラム設定 → TEX データから JEPS 画像を作成するまでのプログラムと与えるパラメータ、作成されるファイル名を 1 行として、処理順番に記述します。プログラムファイル名は拡張子も記入します。なお、プログラム欄には、通常プログラム名だけを記入しますが、「プログラムフォルダー」にないものに関しては、絶対パスを記入します。ファイル名に関しては、基本名を「%1」として、すべてのプログラムで利用できるように設定します。
- 行削除ボタン → 実行プログラム設定表での行削除を行う場合に、削除候補行をマウスで選択し。この行削除ボタンをクリックします。
- 設定参考地の読み込みボタン → 実行プログラム設定に参考となる例示記入例を表示させます。
- 中止ボタン → 設定した値を登録せずに呼び出し画面に戻ります。
- 適用ボタン → 設定した値を登録し呼び出し画面に戻ります。

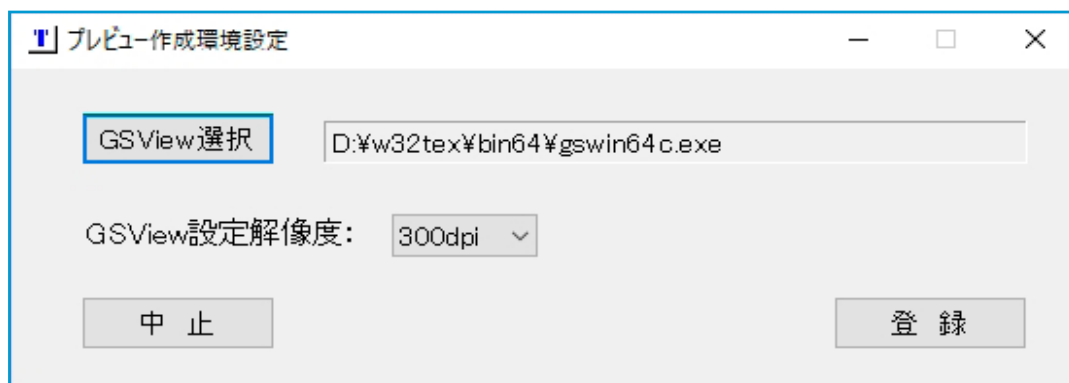
「操作環境」：エディタに表示されるテキストなどのデフォルトのフォントや色などを設定します。



- 「更新終了時に終了メッセージを表示する」チェックボックス → InDesign への編集済み EPS 画像をの再貼り込みが完了した時点で、終了メッセージを表示するか否かを設定します。
- フォントボタン → TEX テキスト編集エリアのテキスト表示に使用するフォントを選択します。
- 文字色ボタン → カラーピッカーよりフォントに適用するカラーを選択します。
- 背景色ボタン → カラーピッカーより編集エリアの背景色を選択します。
- キーワード設定 →
 - ＜キーワードの区切り文字テキストボックス＞：TEX コマンドと通常文字との区切りとなる文字を連続して記入設定します。
 - ＜キーワード区切り文字のうち、キーワード扱いするもの＞：上記キーワード区切り文字のうち、自分自身もコマンド文字にせっていされる文字を連続で設定します。
 - ＜キーワード文字列＞：キーワードとして表示を扱う文字列を、半角カンマで区切って設定します。
- キー文字色ボタン → キーとして表示する文字列に適用する色をカラーピッカーで選択設定します。
- コメント文字色ボタン → コメントとして表示する文字列に適用する色をカラーピッカーで選択表示します。
- 中止ボタン → 設定を適用せずに呼び出し画面に戻ります。
- 登録ボタン → 設定を登録して呼び出し画面に戻ります。設定した内容は、直ちに現在表示されている編集画面に反映されます。

※キーワードとして設定するコマンドや区切り文字などを新たに追加設定した場合、うまくキーワードとして認識されずに、キーワード表示に設定したフォントカラーにならない場合がありますことを予めご了承ください。

「プレビュー環境」：InDesign ドキュメントより貼り込まれた修正対象の TEX-EPS 画像から TEX データを取得する際に、確認用の JPEG 画像を表示させる時、TEX データから JPEG 画像を作成するのに使用する gswin64c.exe のパスなどを設定します。



- GSView 選択ボタン → gswin64c.exe の絶対パスを設定します。
- GSView 設定解像度コンボボックス → 変換する JPEG 画像の解像度を 72/300/600dpi の中から選択します。
- 中止ボタン → 設定を登録せずに呼び出し画面に戻ります。
- 登録ボタン → 設定を登録して呼び出し画面に戻ります。

・【ヘルプ】

「TEX 参考サイトを表示する」：TEX データを修正するときなど、「TEX 環境」で設定した URL のサイトを表示し参考にします。

「TEX エディタについて」：本プログラムのバージョン表示を行います。

●画面内ボタン

・【エンコーディング】

TEX データの文字エンコーディングを「SJIS/UTF-8/UTF16」から選択設定します。

・【取得時表示画像用 JPEG 変換方法】

確認 JPEG 画像作成方法を「画像表示なし /Adobe Illustrator で変換 /ghostscript で変換」から選択設定します。

・【リセット】

編集エリア、確認画像表示エリア、エンコーディング等を初期化します。

・【取得】

InDesign に貼り込まれた TEX-EPS 画像から TEX ソースデータを収録します。

・【更新】

編集した TEX データを EPS 画像に変換し、選択されている InDesign のフレームに貼り込みます。

・【終了】

プログラムを終了します。

●ソースデータ編集エリア

取得した TEX ソースデータを表示し、編集するエリアです。

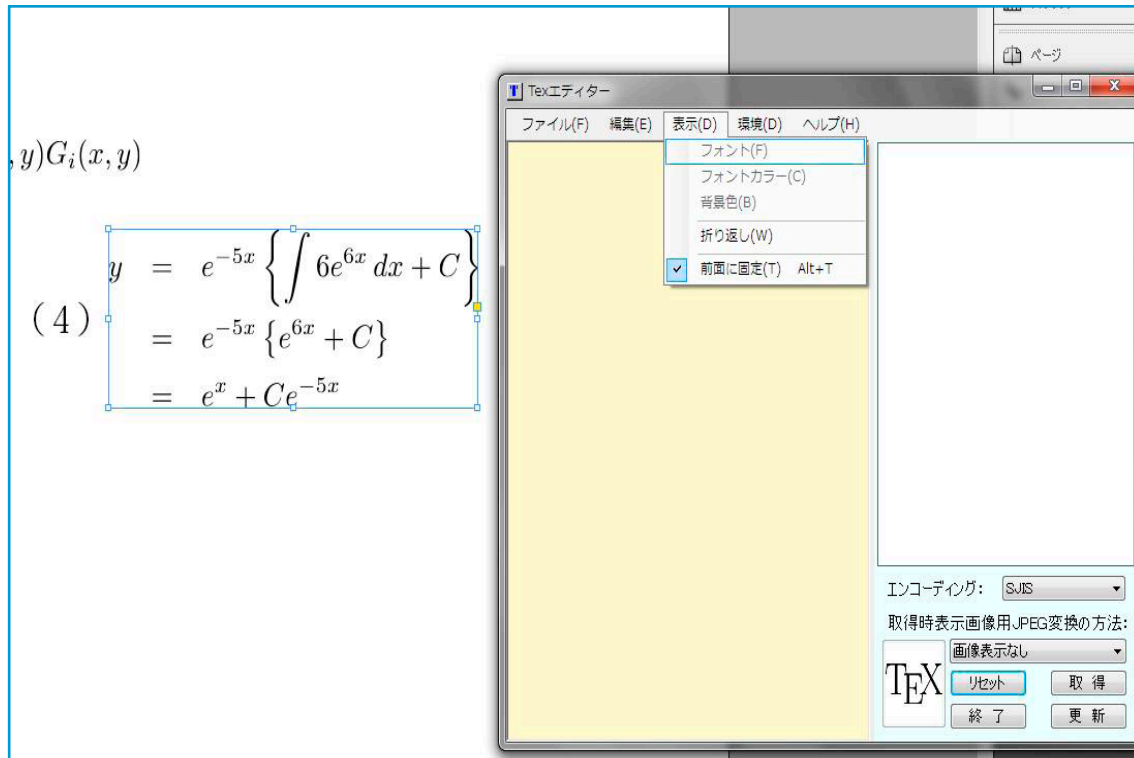
●取得画像確認エリア

取得した TEX-EPS 画像の画像を確認表示するエリアです。ただし、「画像表示なし」が選択されている場合には、表示されません。

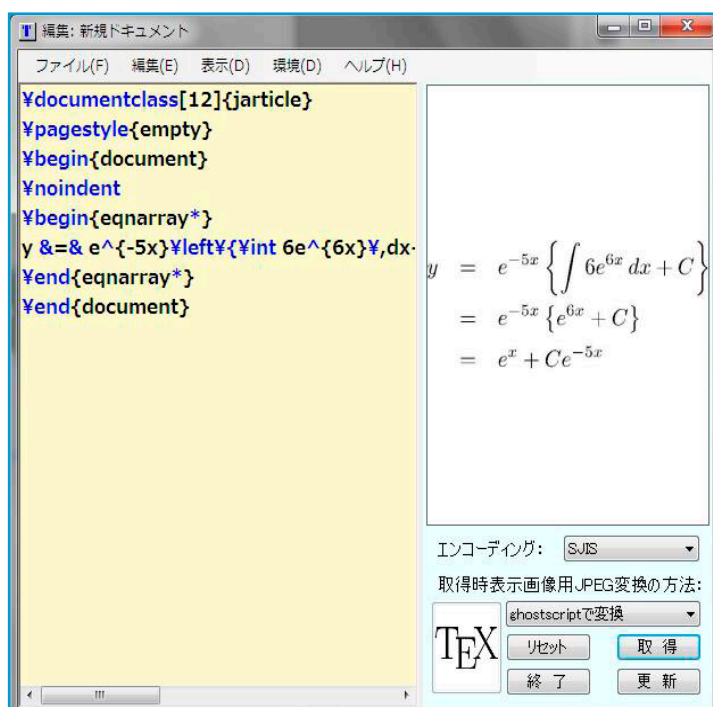
※ ghostscript を起動するフロントエンドには、gsview,gswin などがありますが、本バージョンでは、gswin64c.exe を利用した稼働テストを行っておりますので、ボタン表示などは gsview の名称となっておりますが、実際のプログラムは、gswin64c.exe の使用を前提とした説明となっております。

②操作方法

- 位置で説明した環境設定を行います。特に、TEX 環境は必須となります。他は、とりあえずデフォルトのままで、必要に応じて設定値を変えることで構いません。なお、複数の画像を連続して修正を行う場合、本プログラム画面と InDesign 画面との間で、マウス操作での画面切り替え動作が頻繁に起こるため、本プログラムの画面表示順序を最上位にしておき、連続画面切り替えでも、常に本プログラムを最上位に表示させておくことも可能です。ただし、その場合、エラー表示や処理終了メッセージダイアログは表示されません。
- InDesign のドキュメントをオープンし、修正対象の TEX-EPS 画像を選択します。



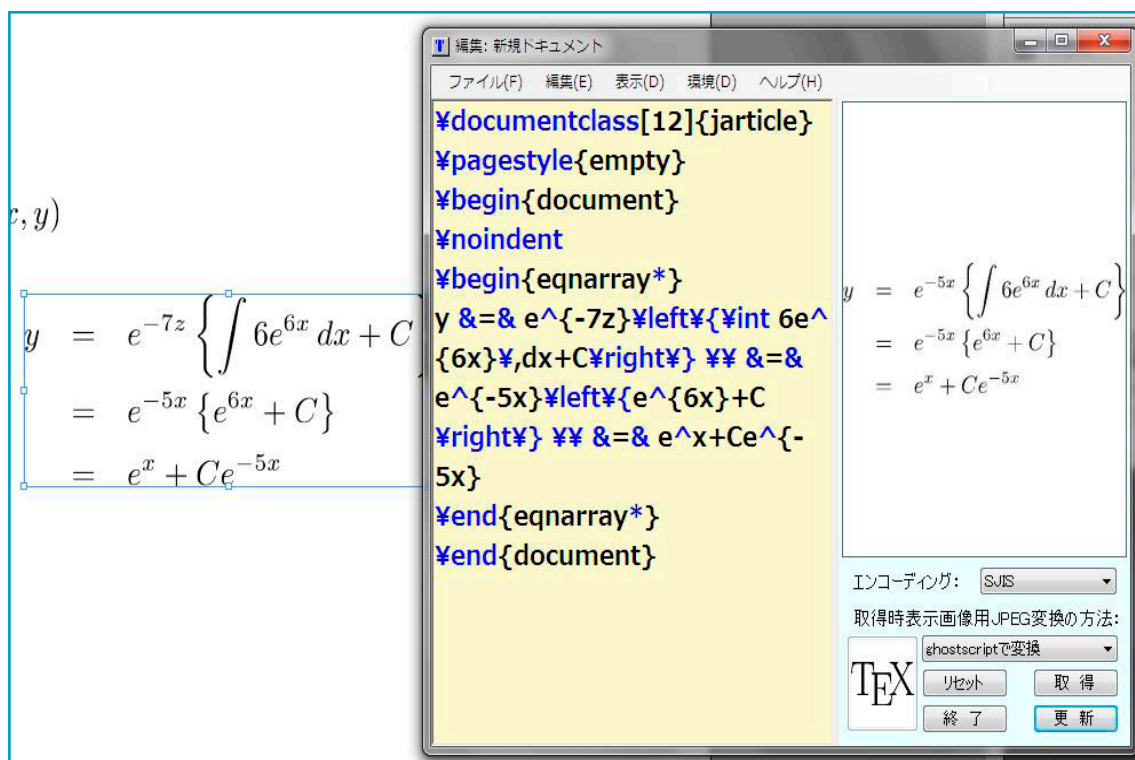
- 「取得」ボタンをクリックし選択されている TEX データを取得し、編集エリアに取り込みます。この時、ghostscript を使用して確認画像作成の設定をしておくと、画像表示エリアに選択した画像が表示されますので、現在修正しているのが、間違いなく対象の画像であることを確認できます。



- 編集エリアにて必要な修正を行います。
ここでは、先頭の e の -5x 乗を -7z 乗に変更してみます。

```
¥begin{eqnarray*}
y &=& e^{-7z}¥left¥{¥int 6e^{
{6x}¥,dx+C¥right¥} ¥¥ &=&
e^{-5x}¥left¥{e^{6x}+C
¥right¥} ¥¥ &=& e^x+Ce^{-
5x}
¥end{eqnarray*}
```

- 「更新ボタン」をクリックします。InDesign の該当する EPS 画像が修正された画像に置き換わります。



InDesign に貼り込まれた EPS 画像が修正後のものになっているのが確認されます。ただし、本プログラムの取得時の確認画像は変更されませんので注意してください。


付 録

この章では、知っておくと役に立つ SpicyLibra の TIPS を紹介します。

1) インデザインリカバリーデータの削除

SpicyLibra 2024 Ver12.0.9461

Copyright © 2004 - 2025 Spicy Soft Inc. All right reserved.



開発・販売 有限会社スパイスソフト®

〒143-0011 東京都大田区大森本町1-8-12-S104

URL: <https://www.spicy-inc.jp>

Mail: info@spicy-inc.jp

↓ダブルクリックで画面をクローズします。クリックでスクロールの停止と開始ができます。

本プログラムの著作権は、有限会社スパイスソフトにあります。

本プログラムに関するすべてのドキュメントの無断でのコピー、本プログラムの賃貸・転売、逆アセンブル、リバースエンジニアリング等によるプログラムの解析・改ざんを禁止します。

本ソフトは、1台のコンピュータにインストールし使用することを許されたもので、

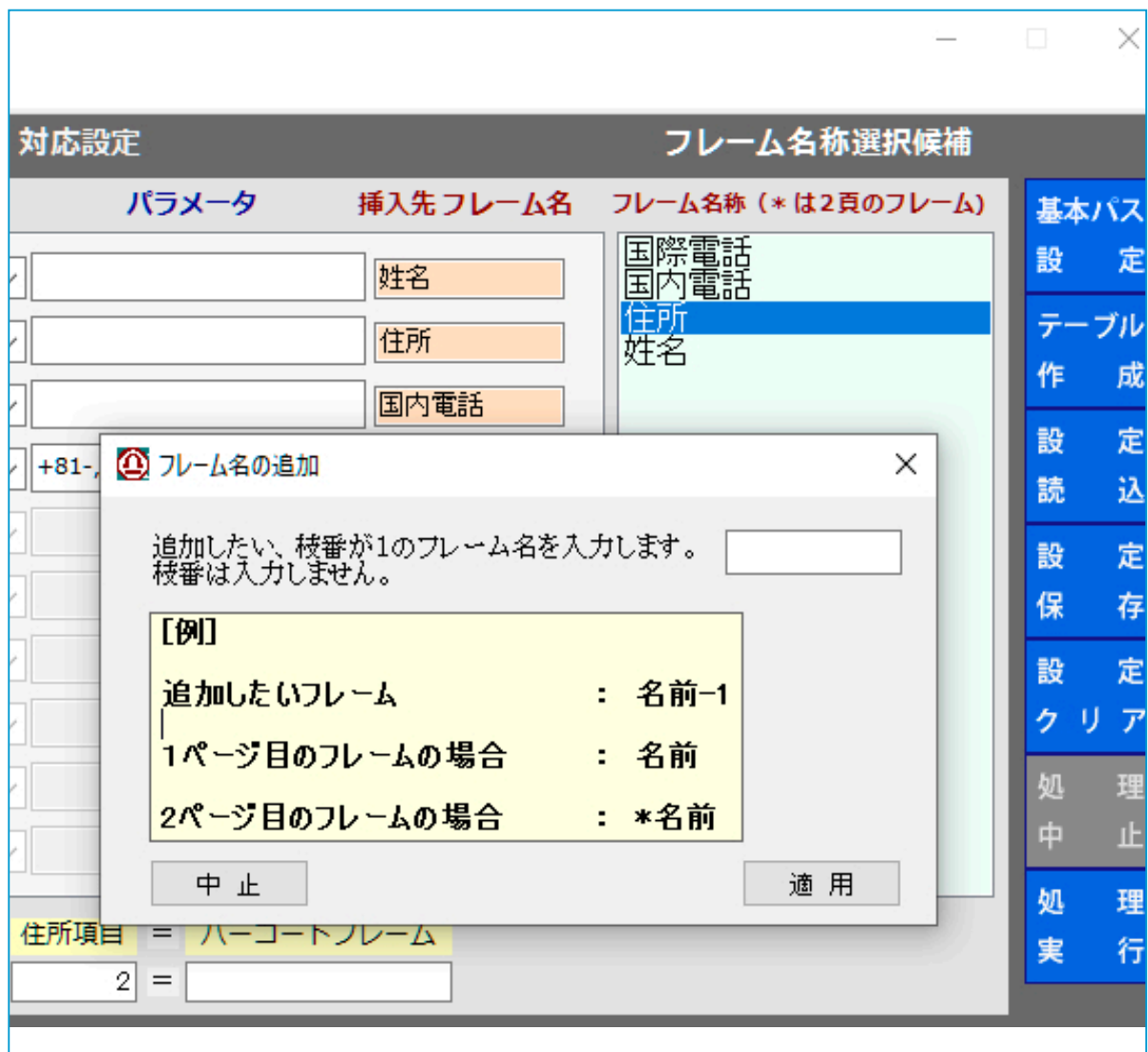
複製、改変、譲渡、貸与、リース、転売、転貸、複製、改変、譲渡、貸与、リース、転売、転貸、複製、改変、譲渡、貸与、リース、転売、転貸

ヘルプメニューの弊社ロゴマークをダブルクリックすると、リカバリーデータを削除許可のメッセージが表示され、OKをクリックすると、インデザインのリカバリーデータなどを削除します。

インデザインを起動する際に、「Ctrl + Shift + Alt」キーを押しながら起動するのと同じように、異常終了などで保存されたリカバリーデータを削除します。

リカバリーデータがどのフォルダーにあるかは、OSによって異なるため、本機能がうまく動作しない場合もあります。なお、何のファイル、フォルダーにアクセスしたかは、実行後のメッセージボックスに表示されますので、お使いのインデザインの環境とは異なる場合には、ご使用されないようにお願いします。

2) フレーム名称の挿入および削除



フレーム名称とデータ項目とのマッピングを行う場合、既存のインデザインテンプレートに、フレームを追加したり、削除したりした場合、再度マッピングを行おうとすると、これまでは、また、新規扱いで作成しなければなりませんでした。

ほとんど作り替えとなり、1, 2 個のフレームの場合、きわめて無駄な作業を行わないといけなかったということが言えます。

そこで、フレーム名称リストビュー内にて、マウスを右クリックし、挿入・削除のダイアログを表示させ、新規のフレーム名称を挿入したり、不要になったフレーム名称を削除したりすることができるようになりました。

ただし、このリストビューのところでフレーム名称の挿入・削除を実行してしまうと、本当にテンプレートに該当するフレームがあるのかといったことやデータマッピングの設定項目の中に、削除してはいけないフレーム名称が設置されているのではないかということなどがチェックでいないまま、定義データが書き換えられてしまいますので、処理に支障が出る可能性があります。

ご使用に際しては、この点を十分ご配慮のうえお使いください。

3) 排他制御

弊社製品では、ホットフォルダーを使用したインデザインの自動処理機能を **SpicyLibra** 以外でも実装しているものがあります。そのようなプログラムを1つのコンピュータで動かす場合、インデザインは、シングルインスタンスであるため、同時に自動処理で利用することができません。

SpicyLibra を起動する場合に、コマンドラインのパラメータとして文字列「排他制御」を指定することで、他のプログラムがインデザインの使用を終了するのを待ち、終了後に、処理を開始するということを実現しました。

ただし、あくまでも弊社製品で、同一の排他制御機能を設けているプログラムとの関係にのみ有効です。他社製品及び弊社製品でも排他制御機能を実装していないものとは排他制御でのインデザイン利用の制御はできません。

なお、コマンドラインから「排他制御」の文字列を与えるには、**SpicyLibra.exe** のショートカットを作成し、プロパティでパラメータ文字列を設定します。

また、**SpicyLibra** 自体もシングルインスタンスであり、多重起動はできませんので、排他制御機能が実装されても、同一製品を、同じコンピュータで複数起動することはできません。

SpicyLibra® の秘密 . . . ?

教えてください。

それはフレームセットにあります。

1. まず何をしたいのか。

名刺、宛名、住所録、PoP、・・・・・・・・。

そうだ、簡単な名刺を作ろう。

2. レイアウトより、まずデータ。

次のようなデータを例にとります。

1, 秋山 一郎, 1430016, 東京都大田区大森北 1-1050-3,, 案内 02.txt, 春の新作がそろいました, 靴 01.jpg,
2, 横田 佐知子, 1620823, 東京都新宿区神楽河岸 105-2-3, 神楽レジデンス 603, 案内 01.txt, ご結婚記念日おめでとうございます, 女性 03.jpg
3, 長谷川 豊, 1210836, 東京都足立区入谷 555-85,, 案内 03.txt, お子様とご一緒にどうぞ, 置物 01.jpg
4, 富岡 祐美, 2470056, 神奈川県鎌倉市大船 698-3,, 案内 04.txt, プレゼントを用意しております, スーツ 01.jpg
5, 笹本 祥子, 2521121, 神奈川県綾瀬市小園 3-987-56, 綾瀬ハイツ 203, 案内 05.txt, 良品を取り揃えております, 女性 02.jpg

どの項目を印刷しようか。

よし、2 項目目の「名前」と 4 項目目の「住所」と 7 項目目の「画像」にしよう。

3. 項目に合わせた数のインデザインのフレームを作成。

3 項目のデータを使うので、3 つのフレームが必要ですね。

4. これだけでは、どのフレームにどの項目が適用されるのか 分かりませんので、フレームに名前を付けます。

わかりやすく一番左を「名前」、真ん中を「住所」、一番右を「画像」としよう。

SpicyLibra のフレーム名称設定ダイアログを表示させ、各々のフレームに、この名前を付けます。

名前

住所

画像

ここからが、重要な考え方になります。

5. 一体、1 頁にいくつ、名刺を入れるの？

よーし、3 個にしよう。

3 個にするということは、1 頁に 3 レコードを必要とすることです。

6. SpicyLibra の基本的な処理方法を理解しましょう。

SpicyLibra では、処理するページごとに、前もって、必要なレコードをメモリーに読み込んでおきます。

この例ですと、3 レコード / ページなので、データ例の 1 - 3 までを読み込みます。

そして、順番にそのページ内だけのレコード番号を、1、2、3 と振ります。

さて、1 頁に 3 個の名刺なので、先ほどのフレームは、1 レコード分ということになりますね。

SpicyLibra では、この 1 レコード分のフレームの集まりを「**フレームセット**」と呼びます。

そうすると、3 個の名刺を作るのには、1 フレームセットしかないのでは、足りませんね。

そこで、残り 2 フレームセットを追加して、3 レコード分のフレームセットを作らないといけないわけで、先ほど作ったフレームセットをコピーします。

名前	住所	画像
名前	住所	画像
名前	住所	画像

さて、こうすると、データ項目 3 項目 X 3 レコード = 9 フレーム (3 フレームセット) の計算通りに、データを挿入するのに必要なフレームの数を揃えることができました。

でも、待ってください、同じフレーム名のフレームが 3 個ずつあって、データレコードのどのレコードの項目がどれに対応するのかわからないのに挿入できるんですか？

そうです。
ここで、フレームの枝番号の考えが出てくるわけです。

SpicyLibra では、この問題を解決するために、読み込んできたレコードと同じ番号、つまり枝番をフレームセットにつけて区別することにした。

ですから、読み込んできた3レコードのページ内での順番（ページごとに、そのページに必要なレコードが読み込まれ、番号は、1,2,3,・・・と付けられます）に対応するフレームセットに、そのレコード番号を付ける作業を行う必要があるわけです。

<div></div> 名前-1	<div></div> 住所-1	<div></div> 画像-1
<div></div> 名前-2	<div></div> 住所-2	<div></div> 画像-2
<div></div> 名前-3	<div></div> 住所-3	<div></div> 画像-3

こういう風に、枝番を振ることで、読み込んできたレコードが、どのフレームセットに、対応するのかが決まりました。

でも、フレームセットとレコードの関係は決まりましたが、フレームセットの中の各々のフレームは、勝手に名前を付けただけで、レコードのどの項目かは、わからないのでは？

そうです、まだ、データ項目とフレームとの関係が決まっていませんね。

それを、SpicyLibra のメイン画面の設定で行うわけです。

項目番号	データ例	データ種類	処理区分	パラメータ	フレーム名称指定
1	人間失格	文字列	単純挿入		タイトル
2	太宰 治	文字列	人名5字取り1	3,0,1	作家名
3	ださい おさむ	不使用・改頁	不使用		
4	人間失格	文字列	単純挿入C	内容
5	bookreview1.jpg	画像ファイル	比例縮小後センター		画像
6		不使用・改頁	不使用		
7		不使用・改頁	不使用		
8		不使用・改頁	不使用		
9		不使用・改頁	不使用		
10		不使用・改頁	不使用		

一番左の項目番号と一番右のフレーム名を関連づけることで、ようやく、データ中の項目が、ある特定の1つのフレームに対応するということが確立したことになります。

あとは、テンプレートのフレームの位置、形や属性を決めたり、SpicyLibraCS 画面で、データをどういう加工しながらフレームに適用するのかを決めていくということになります。

7. 結論

ですから、フレームにつける名前と枝番はいい加減につけられたものではなく、

「フレーム名-番号」というフレームの名称付けは、

項目番号 - ページ内でのレコード番号

という、自分のフレームに適用するデータを特定する ID 番号なのです。

SpicyLibra を初めてお使いの方が、「テーブル作成」でエラーに陥る多くが、このことをご理解していただく前に、フレーム名と番号を付けたり、付けなかったりすることに起因することが多いといえます。

以上から注意することは、

- ①. 枝番が「1」で始まらない「フレーム名」は。あってはならない(1 ページ 1 レコードでも枝番の「1」は付ける)。
- ②. 「フレーム名」と「枝番」を繋ぐマイナス記号や数値は半角記号・数字であり、その他のスペースなどが入ってはいけない(枝番の設定には、ダイアログの「枝番付加」ボタンを使用し、テキストボックスの直接入力することは、なるべくひかえる)。
- ③. 同一のフレームセット内では、枝番は変化しない。変化するのは、フレームセットすなはち、レコード番号が変わる時だけ。

ということです。

よくある勘違いが、データレコードの先頭を項目名を記述するようになっている場合、名前、住所 1、住所 2、住所 3、・・・・・・

のように記述されていて、住所の「フレーム名」を次のように付けてしまうことがあります。

住所 1-1

住所2-2

住所 3-3

一見すると正しいように見えますが、一つのフレームセットの中で、枝番が「1」、「2」、「3」と増加しています。こういうことはありません。

これでは、「住所2」や「住所3」のフレーム名の枝番「1」がないため、エラーとなってしまいます。

8. 応用

「**テーブル作成**」がいったん終了すると、基本的なレコード内の項目とフレームとの対応関係の情報が SpicyLibr 内に構築できたので、この後に、テンプレート中のフレームを削除したりしても一向にかまいません。プログラムは、テンプレートからフレーム名のリストを作り、該当するデータレコード項目を取得し、フレームに適用するだけですので、実際の処理時にフレームとして存在しないものには、何も処理を行いません。

9. 最後に

以上で、説明を終了しますが、碁盤の目に並べた行と列のデータ項目を、やはり碁盤の目のように並べたインデザインのフレームに、対応させる（写像）というイメージでお考えいただければ、一つ一つの項目とフレームを特定するための仕掛けである、「**フレーム名**」と「**枝番**」の関係をご理解いただけるものと思います。

なお、「**くし刺し面付**」の場合には、番号をプログラムで自動発生し、入力データファイルの代わりとしますので、メイン画面の「ページ作成方法」を正しく「くし刺し面付」にし、「パス設定」画面に移行したのち、**入力ファイルの設定をする必要はありません**。

また、「**簡易 PDF 面付**」の場合には、入力ファイルは、SpicyLibra のメニュー「**面付け基本データ作成**」にて作成したファイルを入力ファイルとして指定しなければなりませんので、注意してください。

ライセンス

SpicyLibra は、ご使用に際し、動作させるコンピュータ 1 台に対し、1 ライセンスが必要となります。

ここでは、ライセンスの取得に関する手順を記述いたします。

ライセンスは、Ver3.0 以前は、弊社の発行するライセンスキーファイルを使用したソフトウェア方式としてきましたが、Ver4.0 より、USB フラッシュメモリーを使用したハードウェアライセンスキー方式に変更いたしました。

①ハードウェアライセンス方式

USB 固有の番号を利用したライセンス方式で、SpicyLibra を起動するたびに、USB フラッシュメモリーにアクセスし、ライセンスをチェックします。

ソフトウェアライセンス形式と異なり、USB メモリーキーさえあれば、コンピュータは（稼働条件さえ適合すれば）特定いたしませんので、日常的には、デスクトップパソコンで使用し、デモなど顧客への訪問時にはノートパソコンで使用するということも可能です。

ただし、いずれのコンピュータにも、InDesign をはじめとするソフトウェア環境がなければなりません。

また、USB2.0 仕様の USB フラッシュメモリーが、お使いのコンピューターで使用できなければなりません。

② USB メモリーキーの取得

ご購入いただきましたお客様には、弊社より USB メモリーキーを送付いたします。

USB メモリーキーを紛失なされた場合、有償での再発行となりますので、紛失されませんよう、十分お気を付けください。

③ USB メモリーキーの使用

SpicyLibra が起動されていない時に、弊社より送付しました USB メモリーキーを、ご使用されるコンピュータのいずれかの USB ポートに差し込みます。

SpicyLibra が起動している時に、USB メモリーキーを挿しても、即座にライセンスは有効になりません。起動時にチェックにいきますので、起動する前に挿入されている必要があります。

④ライセンスの確認

お客様が、現在使用しているライセンスキーコードを知る場合には、

メニューで、「ヘルプ」－「ライセンス」－「ライセンス確認」を選択し、ライセンスの状態を確認することが可能です。

⑤オープンソースソフトウェア

本製品は、ライブラリーとして、オープンソースソフトウェアである iTextSharp 及び ZintNet を、それぞれ GNU GPL のライセンスの下に使用しております。

これらのライブラリーをリンク使用している関係上、本プログラムの使用は、日本国内のみとさせていただきます。

SpicyLibra 使用許諾契約書

本使用許諾契約書は、お客様と有限会社スパイシーソフト（以下「スパイシーソフト」といいます）との間に締結される法的な契約書です。

SpicyLibra 及びマニュアル（以下「プログラム等」といいます）を、インストール、アクセス、ダウンロード、複製、または使用することによって、お客様は、本契約の各条項に拘束されることに同意したものといたします。

本契約書は、SpicyLibra の評価版・製品版を問わず、適用されるものです。

1. 許諾される権利について

スパイシーソフトは、本契約に基づき、以下の非独占的かつ譲渡不可能な使用权をお客様に許諾します。

- (1) プログラム等のコピー 1 部を、1 台のコンピュータにインストールし、使用する権利。

当該コンピュータが複数のコンピュータに接続され、複数のコンピュータから、プログラム等を利用する場合
には、複数台での使用ライセンスを必要とします。

- (2) 保存のみを目的とした、プログラム等のバックアップコピーをする権利。

2. 著作権等

- (1) プログラム等及びプログラム等に付属する、すべてのデータ、商標、著作、ノウハウ及びすべての知的財産権は、スパイシーソフトまたは著作権者に帰属します。これらのいかなる権利も、お客様に譲渡し帰属させるものではありません。

- (2) お客様は本製品をリバースエンジニアリング、逆コンパイル、または逆アセンブルすることはできません。

- (3) お客様は、プログラム等およびプログラム等に付属する一切のデータを、スパイシーソフトならびに各著作権者の承諾なしに、第三者へ、賃貸、貸与、販売、または譲渡することはできません。

- (4) お客様において、プログラム等に基づいて作成されたデータについては、本契約書の各条項は、適用されません。

3. 保証の限定、損害に関する免責

- (1) プログラム等を収録した媒体に瑕疵があり、インストールできない場合には、スパイシーソフトは当該メディアを無償交換いたします。ただし、原則として、交換できるのは、ご購入いただいてから 30 日以内に瑕疵が発見され、申し出があった場合とします。期間経過後は、有償での交換となります。

- (2) 本製品が、ハードウェアキーを使用したプロテクションを施したものである場合、ハードウェアキーに瑕疵があり、プログラム等が使用できない場合、ご購入から 30 日以内は、初期不良として無償で交換させていただきます。期間経過後は、有償での交換とさせていただきます。

- (3) 本製品が、ソフトウェアキーを使用したプロテクションを施したものである場合、プログラム等をインストールしたお客様のコンピュータに不具合が生じ、プログラム等を使用できなくなったときに、別コンピュータに再インストールするには、新たなソフトウェアキーが必要となります。新たなソフトウェアキーの発行は有償となります。また、使用が不可能になったコンピュータの廃棄証明書など、すでに使用しないことが証明できる書類を添付していただく必要があります。

- (4) 前項以外の場合を除いては、スパイシーソフトおよび著作権者は、プログラム等およびプログラム等に付随するデータに関して生じたいかなる損害についても保証いたしません。

- (5) **無償保証期間経過後、ハードウェアキーの再発行を希望される場合、交換を希望されるハードウェアキーがある場合には、再発行手数料 5,000 円にて交換させていただきます。**交換されるハードウェアキーを紛失された場合には、製品定価の半額を申し受けますので、くれぐれも紛失なさらないように注意してください。

ハードウェアキーではなく、ソフトウェアキーの場合、使用していたコンピュータの廃棄証明証などがある場合には、再発行手数料 3,000 円にて、また、廃棄証明賞等がない場合には、製品定価の半額にて再発行させていただきます。

4. 契約の解除

- (1) お客様が、本契約に違反した場合、スパイシーソフトは本契約を解除することができます。その場合、プログラム等及びプログラム等の付随するデータの一切、及びそれらを複製したものの一切を使用することができません。この場合、お客様は、プログラム等およびプログラム等に付随するデータの一切を遅滞なくスパイシーソフトに返還し、プログラム等およびプログラム等に付随するデータの複製物は破棄する義務を負うものとします。

(2) 前項の場合、スパイシーソフトは、本契約の下で支払われた対価を返還いたしません。

5. 製品内容の変更

スパイシーソフトは、本製品改良のため、お客様に対して何らの予告なしにプログラム等およびプログラムなどに付随するデータの仕様を変更することがあります。

6. その他

- (1) 本契約に起因する紛争が生じた場合は、東京簡易裁判所または東京地方裁判所のみをもって、第一審の管轄裁判所とします。
- (2) お客様は、事前の承諾なくプログラム等およびプログラム等に付随するデータを国外に持ち出すことはできません。

2025 年 11 月 30 日

有限会社スパイシーソフト

〒143-0011 東京都大田区大森本町1-8-12-S104

URL: <https://www.spicy-inc.jp>

Mail: info@spicy-inc.jp

TEL: 03-6450-0834

FAX: 03-6450-0834

1. 管理・基本機能

- JOB (プロジェクト) フォルダ作成
- 処理関連ファイルパス設定
- データ項目・テンプレートフレームマッピング
- JOB 定義ファイル保存・読み込み
- ホットフォルダ (フォルダ監視)
- InDesign プラグインによるフレーム名設定

2. 入力

- CSV ファイル ● TAB 区切りファイル
- XML ファイル (表互換形式の Well-Formed XML)
- EXCEL97 ~ 2010 データ (xls, xlsx, xlsb, xslm)
- ACCESS2000 ~ 2010 テーブルデータ (mdb, accdb)
- 最大 5 項目複製

文字エンコードは Shift-JIS、UNICODE (BOM 付)。

3. 出力

- InDesign ドキュメント (Indd)
- PDF・インタラクティブ PDF ファイル
(PDF のドキュメントとは別のフォルダへの出力可能)
- EPS/JPEG 画像 (真分割) ● HTML/EPUB ファイル
- Watermark 設定 ● プリントアウト (ページ毎、全頁一括)
同時出力指定可 (一部は不可の組み合わせがあります)。

4. 処理制限

- 処理データ項目: 最大 100 項目
- 項目複製: 最大 5 項目
- 定義可能テンプレート頁数: 2 頁
- マスター頁数: InDesign の許可する最大数
- 頁あたりフレームセット数: 99 フレームセット

5. 真処理

- 出力ドキュメントの頁分割 (分割ページ数指定)
- 開始ノンブル指定 ● 単頁・見開き (2 頁) 処理
- 強制改頁、マスター切替え ● ブック作成

6. 強制改頁

- 文字列不一致 (前レコード同一項目・特定文字列比較)
 - 数字桁不一致 (数字列の特定桁を前レコードと比較)
- 強制改頁以降に適用するマスターを設定可能。

7. 文字列挿入

- 単純挿入
 - ・ ブレーン文字列挿入 (パラメータの設定で段落・文字スタイルの指定などが可能)
 - ・ SpicyTag 文字列挿入 (InDesign の組版機能の多くをタグにて指定可能)
 - ・ 固定データ付加 (前置、後置、別項目付加)、常時記入、Eメール挿入 (データ中に @ がない場合に文字列付加)
 - ・ データ先頭文字列削除
- 人名字取
 - ・ 標準 (5・7 字取、字間固定。モノ・グルーブルビ可能)
 - ・ カスタム (5~9 字取、字間はユーザー定義にて可変。モノ・グルーブルビ、CID 入力・異体字の設定可能)
- 数字桁どり (算用数字、漢数字)
- 数字フラグ (数値により、挿入文字列・アセットの選択候補から条件に合致するものを挿入します。オブジェクトスタイルの選択適用も可能)。フラグで指定された番号の別

項目挿入

- 柱 (先頭、末尾、先頭一末尾、全件)
- 住所漢数字変換 ● 漢数字変換
- 郵便枠 (盾組・横組、数字分割)
- 数値発生 (ナンバリング) ● 日付発生
- NW7/Code39/ITF バーコード (フォントにて表示)
- 郵便カスタムバーコード (個別番号、特別代表番号対応)

8. 外字・サロゲートベア文字対応

- カスタム・標準人名字取において、外字 (UNICODE 私用領域文字) のフォントを指定の外字フォントに自動変換
- UNICODE 変換テーブルにて、2 バイトの UTF-16 に加え、4 バイトのサロゲートベア文字への変換に対応

9. テキストファイル流し込み

- ブレーンテキストファイル
 - InDesignTAG ファイル
- グリッドフォーマットの適用・不適用選択可能。

10. 文字差込

- テンプレートファイル中に貼り込まれたテキストのブレースホルダー文字列を置換。
 - テキストファイルを流し込む際に、ファイル中に記述されたブレースホルダー文字列を置換
 - バステキスト中のブレースホルダー文字列を置換。
- バステキストは 1 個、その他は 30 個のブレースホルダーが設定可能。

11. 表

- 通常表: 表セルに 1 項目中に記述されたデータを区切り文字で分割し、順番に文字列、画像、アセットを挿入
- 積み木表: 表セルとデータ項目をマッピングして文字列、画像を挿入。未挿入の削除指定が可能。テンプレート中に設定されているブレースホルダー文字列の置換。前置・後置文字列付加 (常時挿入、Eメール挿入)
- 連続表: 1 頁用データレコードすべてを 1 つのフレーム内の表にマッピングして挿入。入力データの行列変換が可能

12. 画像挿入

- 単純画像挿入。画像フィット (比例縮小、センター、均等、内容にフィット、フレームにフィット、比例縮小後センター) の指定が可能
- dxf ファイル挿入 (Illustrator を使用し、dxf ファイルを JPEG に変換しての貼込み)
- 2次元バーコード: QR/MicroQR コード
- 1次元バーコード: JAN8/13、NW7、CODE39、CODE128(A/B/C)、コンビニ料金収納代行 (EAN-128)、GS1-128、GS1 DataBar (Standard/Truncated/Limited/Stacked/Stacked Omnidirectional)、ISBN 書籍 / 定期刊行物バーコード
- イメージバリアブル (Illustrator・Photoshop にて入力文字列を画像に埋め込み加工し、フレームに貼込み)
- グラフ (Illustrator にてグラフを作成し貼込み)
- TeX (数式・化学式など TeX テキストを EPS 画像に変換し貼込み)

13. テキスト・画像同時挿入

- 画像フレーム内に画像を挿入し、同時に画像フレームのバスにテキストを挿入

14. オブジェクトの変形制御

- テンプレートに貼り込み済みのテキスト・画像フレームあるいはバリアブル挿入画像を変形 (回転、削除) 制御

15. くし刺面付け

- 複数のテキストフレームに対して、異形式のくし刺しナンバリング

16. PDF 面付け

- 平閉じ 4, 8, 16, 32, 64 面
- 1 つの PDF ファイル内の連続ページを面付け
- EPS/JPEG 画像 (1 頁 1 ファイル) を指定頁分面付け

17. あふれ・アンダーフロー処理

- あふれ処理①: 30%まで最小1%刻みで、扁平をかけて追込む (ステップは 1 ~ 10%の間)。その後、あふれている場合には、文字サイズ、行間を縮小しての追込む
- あふれ処理②: 段落を 1 行に収める段落追込み
- あふれ処理③: 次ページの同一フレームに追い出す
- アンダーフロー処理: テキストフレームを内容に合わせ縮小 (1 段組み)

18. 各種テーブル編集

- 個別郵便番号、UNICODE 変換、住所や縦組文字変換、属性変更、カスタム人名字取、段落スタイル、実体参照テーブルの作成・編集
- PDF 面付け基本テーブルの作成・編集
- TeX データ処理環境設定 (TeX データをフレームに埋め込むので、付属の TeX エディタにて編集することが可能)

19. ユーティリティ

- 数字半角・カナ揃え ● 敬称挿入
- 検索文字列挿入 (検索文字に一致した場合に指定の文字列を挿入)
- 正規表現文字列挿入・抽出 (正規表現にて置換等実行)
- 単純文字列挿入置換
- 項目処理 (項目の追加、削除、分割、結合、複写)
- 行処理 (行削除、行抽出、行複写、同業処理)
- 並び替え (最大 3 項目までを対象に、昇順・降順にてレコードの並び替え)
- 通常ファイル処理 (CSV ファイルの結合・分割)
- PDF ファイル処理 (PDF ファイルのページ分割と結合)
- ファイル形式変換 (EXCEL->CSV などファイル形式の変換)
- PDF ウォーターマーク (PDF ファイルに、テキストあるいは画像をウォーターマークとして挿入し、同時にファイルに対するバースワードの設定も可能)
- PDF 画像変換 (Illustrator を利用し、PDF ファイルから SVG/Photoshop/EPS/JPEG に変換)
- 外字処理 (データ中の外字文字を SpicyTag で囲む、私用領域変換テーブルを利用したコード変換、等)

動作環境

O S : Windows 10/11(.NET4.8以上、64ビット)
C P U : Intel i5/i7/i9 同等以上推奨
メモリー : 2G 以上推奨
H D : 60G 以上空き容量
D T P : Adobe InDesign2024(64ビット)

選 択 : Access DataBase Engine 2010、Adobe
Illustrator2024、Photoshop2022
TeX 環境 (latex, dvipout など)

SpicyTag とは

InDesign の有する各種スタイル設定や、ルビ、上・下付き、割注、アンカーオブジェクト (画像、テキスト)、下線、分禁、フォント (書体、文字サイズ、文字色)、異体字・CID コード指定などの文字組指定や、囲み罫、文字合成などといった InDesign にはない組版機能を XML ライクなタグを使用し、豊かな文字修飾を可能とするものです。

SpicyLibra 操作マニュアル

再訂第 19 版 2025 年 11 月 30 日 発行
有限会社スパイシーソフト

〒143-0011 東京都大田区大森本町 1-8-12-S104

HP: <https://www.spicy-inc.jp>

MAIL: info@spicy-inc.jp

TEL&FAX: 03-6450-0834

本マニュアルの著作権は有限会社スパイシーソフトにあります。無断での複製・引用を禁止します。